
緋色の絆

彩世 幻夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の絆

【Nコード】

N7211F

【作者名】

彩世 幻夜

【あらすじ】

ある日出会ったのは訳アリの吸血鬼の少年。はた迷惑な天使を倒すべく、一人の少女が吸血鬼と共に立ち向かう！

月夜の出来事（前書き）

※この作品は、吸血鬼モノであり、また神や天使なども登場人物として出てきます。

※吸血シーンや宗教的表現、また、バトルシーンにおける多少の残虐表現が含まれます。

※恋愛を描いています。18禁表現はありませんが、軽めの性的描写があります。

※苦手な方はご遠慮下さい。

◆ただ今、小説ランキングに参加しています！お気に召しましたら、ランキングへのリンクをぽちっ、と……お願いします！

◆評価、感想など頂けましたら嬉しいです。

月夜の出来事

透き通る様な、白い肌。その白さと対極にある漆黒の、艶やかな髪。彫りの深い、完璧に整った顔立ち。切れ長の目に埋め込まれた瞳の色は、紅く、まるで大粒のルビーの様に輝いていて……。

「おい、起きろ。」

ハリウッドの売れっ子イケメン俳優も、スタイル抜群のトップモデルも裸足で逃げ出しそうな、人間離れした感のある美を備えたその少年の口から、ドスを利かせた台詞が吐き出された。とろける様な、美声なのに。よくよく見てみれば、眉間にシワまで寄せていて、せつかくの美貌を台無しにしていた。

「おい、いい加減目を覚ましやがれ。」

不機嫌そうな声で、彼は言った。その瞳は、やはり不機嫌を声色以上に物語っていて。思い切り、睨み付けられた。

うすぼんやりしていた思考が次第にハッキリしてくる。ふと気付くと、全身に体温を感じる。……状況から考えて、体温の主はこの男だろう。どつかとあぐらをかいたその足の上に乗せられて、片腕一本で肩を抱かれ、もう一方の手が、ぺちぺちと頬をはたいている。

「……痛い。」

「目は覚めたか？」

少年は、つかまれた己の腕と、開かれた目蓋の下から現れた瞳とを交互に眺めやり、ニヤリと笑った。

その目は、据わっていた。それはもう、この年頃の少女にしては似つかわしくない程に。異端の瞳を真正面から睨み付ける彼女の落ち着き方は、今この状況下ではむしろ異常である。

「……アイツは？」

少女は、少年の腕をつかんだまま、尋ねた。

「ああ、アイツなら……、ホラ、そこ。」

少女の問いに、少年は顎をしゃくってみせた。彼の示した先で、

かの人物は、怒り狂っていた。机と椅子が整然と並ぶだけの、そう
広くもないこの場所で、彼は手当たり次第に机や椅子をひっくり返
し、また破壊しながら、何かを探していた。物凄い形相で。

「うわ、なんてはた迷惑な事をつ、あのバカ天使っ。誰が怒られる
と思ってるのよ。」

と、それを見た少女は憤る。

「やっぱりお前、あれが視えてるんだ？」

「それはもう、嫌になるぐらい。」

「ふうん。お前、何者だ？」

「……何って、この学園の中等部の生徒だけど？」

「そんな事は、お前のその制服を見れば分かる。だけどな、学園の
関係者の誰一人、アレが視える奴はいないんだぞ。ましてや、俺の
封印を解き放った上に、アイツの攻撃から逃れるなんて芸当ができ
る人間、めったにいるもんじゃないから、聞いてるんだ。」

背後から飛んで来る、怒れる天使によって破壊された木製の机の
破片を、ヒョイとよけながら、再び彼は尋ねた。

彼がかわした破片が、ステンドグラスを割り、がしゃあんと派
手な音がして、ガラス片が飛び散った。薄暗い部屋の中、それは月
明りを浴びてきらきら輝きながら降り注ぐ。冬の、冷たい夜風がび
ゅうと吹き込み、少年が身にまとう時代錯誤なマントが風にあおら
れひるがえる。無意識に、思わずぶるりと身震いしながら、少女は
答えた。

「私は、巫女だから。」

「……巫女？」

降り注ぐ、幾多の凶器から少女を庇いながら、少年は訝しげにそ
の言の葉を口の中で転がした。――その意味を、味わうかの様に。
しかし、少女は答えの意味を飲み込めていない少年の疑問符には
答えぬまま、今一番にどうにかしなければならぬ事柄に話題を移
した。

「どうするの、アレ。」

月明り以外光源のない部屋の中、十字架に磔はりつけにされたイエス・キリストの像の前で、光り輝く天使が一人。今にも火がついて燃え上がりそうな怒りのオーラをまとい、破壊活動が続けている。

「今はまだ、さっき張った結界があるからアイツの目に私達は映らないけど、もう、限界。じきに結界は解けてしまおう。そうなったらあつという間に見つかっちゃう。」

「それは困る。今見つかったら俺もアウトだ。もう一回、新しく張り直せないのか、その『ケツカイ』とかいうやつ。」

「無理。さっきので力を使い果たしちゃったから。」

「何だよ、使えねえなあ。」

ぼやいた少年に、少女は無言のまま、彼の鳩尾みぞおちに己の肘ひじを見舞った。抗議の視線を向ける彼に、少女は、

「使えないとは何よ、失礼な。仕方ないでしょう、私は、この国の神に仕える巫女なんだから。相性が悪いのよ、アイツや、この場所とは。」

気に食わないと言わんばかりの視線を、彼の背後に投げかけた。

「つまりは、この場合は俺が何とかするしかない、と。そういう事かな？」

少年が首だけ捻って己の背後を見やると、

「どうにかできるの？」

少女は期待を込めて尋ねた。

「まあ、ね。君の協力が、得られればの話だけど。」

「協力って、何。さっきも言ったけど、今日は私、もう力は使えないからね。」

「君の力なんか、必要ないさ。俺の力さえ戻れば、ここからトンスラする位、訳無いし。」

「貴方の、……力？」

「あれ、言っただけだったっけ。俺、吸血鬼なんだよね、一応。」

少年はにっこりと微笑んで言った。それはもう、満面の笑みを、その美しく整った顔に貼り付けて。

しかも、まるでタイミングを図っていたかの様に雲間に隠れていた月が姿を現し、割れたガラスの隙間からその月光が、スポットライトの様に彼の顔面を照らし出す。

世間の女性達が揃って腰砕けになりそうな、その甘い笑みに、少女は動揺すら見せぬまま、彼の言葉の意味をじつくりと噛み締めていた。

「私を、殺すの？」

その瞳に、恐怖の色は見えない。

「殺しはしないさ。ちよつと血を貰うだけだよ。」

そう言って、つかまれたままの腕を動かし、ブラウスのボタンを一つ、二つと外していき、肩に回した手でうなじにかかる長い黒髪を掻き分け、首筋を露にする。闇の中、怪しげな光を放つ紅い瞳を見上げながら、

「それで、本当に逃げられるの？」

そう問いかける少女に、少年は牙を覗かせながらニヤリと笑って見せた。その笑みを、肯定と受け取った彼女は、

「……分かった。他に手はないし、時間も無い。ここから、……アイツから逃げられるなら、……私は、貴方に協力する。」

と、吸血鬼だと言ったその少年に告げた。覚悟を決め、目を閉じた少女に、少年は、

「ホント、面白いな。お前、名前は？」

尋ねながらさりげく唇を喉元に寄せる。

「神崎^{かんざき}、竜姫^{たつぎ}。ところで、人に名を尋ねるならまず自分から名乗るのが礼儀じゃない？」

一度は閉じた目を開け、間近に迫った彼の瞳を軽く睨みながら、竜姫は言った。少年は、楽しげな目で彼女を見下ろし、耳元で囁く様に告げた。

「――ルードヴィヒ・アンセルム。昔、まだ人間だった頃の俺の名だ。」

吐息を肌を感じながら、竜姫は彼の皮肉を含んだ声音とその言い

回しに怪訝な顔をする。その意味を、尋ねようと開いた口から言葉が発せられるその前に、吸血鬼の牙が、肌へと食い込み、鋭い痛みと共に穿たれた傷口へと深く埋め込まれた。

食い破られた血管からこんこんとあふれ出す温かな血液を、じゅるじゅると耳障りな音を立てて吸い上げては喉を鳴らして飲み込み胃へと送り込んでいく。

血液が、奪われていく。それに伴い体温までもが奪われていく様な感覚。急激な冷えを全身に感じる。さらに引きずられる様に、意識までもが遠のき始めた。グニヤリと視界が歪み、暗転する。竜姫は、吸血鬼の腕の中で、再び意識を手放した。

血で汚れた口元を、袖口で拭いながら、狂喜の笑みを彼が浮かべて見せたのは、それからすぐの事だった。竜姫を腕に抱いたままのっそりと立ち上がり、まだ暴れている天使を振り返ると、フツ、と笑って見せたが、天使は気付かない。

「今度は、お前が堕ちる番だ。」

吸血鬼は、天使に向けてそう、呟いたが、天使はやはり気付かない。

少年は、天使に背を向け、破壊され台無しにされたステンドグラスの割れた隙間から見える月を見上げて、軽く跳躍した。天井まで届くかの様なそれに穿たれた、やっと一人通り抜けられる位のその隙間を、ぽおんといとも容易く潜り抜け、ふわりと軽やかに着地して見せた少年は、竜姫を抱えたまま、うっそうと生い茂る木々の枝が迫る礼拝堂の裏手の林へと姿を消した。静まり返ったその場所には、朝日が昇るまで延々と、破壊音だけが響いていた。

悪夢

ざあざあと、雨音が、聞こえる。ズキン、と頭が痛み、あの日の記憶が蘇ってくる。

これは、夢なのだと、分かっているのに。聞こえてくる声に、たまらず泣きたくなる。必死に自分の名前を呼び、逃げろと叫ぶ、両親の声。襲い来る魔物達の咆哮^{ほうこう}。充滿する血の匂いにむせ返りそうになる。

ごうごうと風が周囲の木々を大きく揺さぶり、横殴りの雨が容赦無く叩きつけられ、ずぶ濡れになった身体から、体温が奪われていく。多量の水を吸い込んでぐしゃぐしゃになった土が、足にまとわりつき、思う様に走れない。疲れきって、冷えた身体から、体力が失われ、足が、どうしようもなく重くなって、動けなくなつて。そして、気を失った。

「――竜姫、起きて。竜姫。」

そう、呼ぶ声に気付いて目を覚ました竜姫の目に映ったのは、白一色の壁紙が貼られた天井で。視界の隅に映った窓の外では、ざあざあと、音を立てて大粒の雨が降り注ぎ、時折吹き付ける風が、雨粒を窓ガラスに叩きつけていた。

「竜姫、大丈夫？ また、あの夢を見ていたの？」

そう、心配そうに覗き込む、金の瞳。とがった鼻先で竜姫の頬をつつくその生き物に、竜姫はホッとした様に微笑んだ。すべらかな金色の毛皮の背の部分を軽く撫でてやりながら、竜姫はベッドから身を起こし、窓の外を眺めやる。

「すごい雨。まるで、あの時みたいなの……。」

ズキズキと鈍い痛みを頭に感じる。あの日から、雨の日はいつも頭痛に襲われる様になった。今日の様な土砂降りの日等は痛み止めの薬無しには何も出来ない程の痛みに苛まれるのだ。

「久遠^{くおん}、机の引き出しに入ってる薬、取ってくれない？」

竜姫の頼みに、金色の獣は、ふさふさした九本の尾を揺らめかせながら、ぴよいつ、とベッドから飛び降りると、前足で器用に引き出しをあけ、中から薬箱を咥え上げて竜姫の元へ運び、彼女の膝の上へ置いた。

薬箱の留め金を外し、中から鎮痛剤を選んで取り出す彼女に、久遠は机の上に出しっ放しにしてあった水の入ったペットボトルを咥えて渡すと、

「急がないと。朝食に間に合わないよ?」

ベッドの脇に作りつけられた古めかしい木製の学習机の上に置かれたデジタル製の目覚まし時計を鼻で指し示した。時計は、すでに六時半を指していた。この寮では朝食は六時から七時と決まっており、一分でも遅れれば、食いっぱぐれてしまう。慌てて着替えようとパジャマのボタンへ手を伸ばしかけて、はたと気付いた。

「あれ、これ、制服……。え、何で?」

自分の格好を見下ろしながら、戸惑いの声を漏らす。

「制服のまま、寝てたんだよ、竜姫。」

「え、だって昨日は……確か、クラスに絡まれて、それで……。それから、どうしたんだっけ?」

昨夜の出来事を思い出そうと記憶を辿る竜姫に、久遠は、

「そう、あのバカ天使のせいで竜姫は古い礼拝堂の掃除をさせられる事になって……。」

記憶を手繰り出そうと昨日あった事を順を追って語り出した。

昨日は、散々だったのだ。昨日は日曜日で、カトリック系のキリスト教団体を母体とした全寮制のこの学園では、朝早くから礼拝が行われていた。整然と並べられた机と椅子。そこにズラリと並んで座る生徒達の列の中に、竜姫もいた。壇上に立ち、聖書の一説を読み上げ、説教を行う神父の長ったらしい話を、大部分の生徒は半分夢心地で聞いていた。しかし、竜姫は夢心地どころか、背後に立ち、殺気を放つクラスを警戒するのに忙しくて、説教の内容など、右から左へ抜けて行った。

天使は、基本的に霊体の姿で現世に降りて来る。したがって、常人には姿を視るどころか、声すら聞こえない。この広い礼拝堂の中、誰一人、クラウドに気付かない。あの壇上で偉そうに神を語る神父も、この天使の存在にまるで気付いていない。

そんな状況の中、あろう事かクラウドは腰にさげた神剣を抜き放ち切りかかってきたのだ。これにはたまらず机を乗り越え慌てて避けた竜姫の目の前で、長机に剣が突き刺さり、机はパキリと真つ二つに割れた。

クラウドも、神剣も視えていない常人の目には、竜姫が素手で机を叩き割った様に見えたらしく、散々説教を食らった上、罰として旧礼拝堂の掃除を命じられたのだった。

……これだけで、充分災難だったのだが、この日の災厄はそれだけでは済まなかった。

もう長いこと誰も使っていない、埃だらけの床をモップで水拭きし、タイル状に敷き詰められた木製の床板を丁寧に磨き上げていた竜姫は、神父が説教するために一段高く作りつけられた壇上の床板が一枚、剥れかけているのを見つけてしまったのだ。

気にせず放っておけば良かったものを、何故かどうしても気になったので、その剥れかけた床板を完全に剥してしまったのだ。

どうせ、コンクリで固められた床面が現れるだけだと思っていたのに、剥した床板の下は、ちょうど段差の分だけ空洞になっていた、しかもあろう事かそこには棺が納められていたのだ。それも、日本の葬儀で使われる様な物ではなく、西洋風の黒塗りの棺桶で、頭の部分には銀で十字架が描かれていた。

「な、何、これ……。」

竜姫は、怖いもの見たさに、恐る恐る棺の蓋に手を掛け、開けてみようとしたその時、物凄い形相で、クラウドが叫びながら飛び込んで来たのだ。

「お、お前っ、そいつの封印を解きやがったな!？」

——封印で、何だ。一体何を封印していたのか。

竜姫がそう問うだけの暇もなく、天使は怒りの雷を放ち、竜姫は咄嗟に久遠の力を借り、結界を張って身を守ったのだが、術に力を使い過ぎて、そのまま気を失ってしまったのだ。

「結界に力を使ったせいで、ボクも眠っちゃったから……。その後
の事は覚えてないんだよね……。」

そう言う久遠の言葉に、ちらりと竜姫の脳裏に紅い瞳が浮かんた。
「――あれ……は、……夢？」

まさか、と思いながら首筋を手でなぞってみる。しかし、そこにはそれらしい痕跡は何も残っておらず。

「やっぱり……夢、か。」

それにしても、リアルな夢だった。牙の感触がまるで現実にあった事のように首筋に残っている気がする。

「竜姫、どうしたの？」

執拗に首筋をなぞる竜姫を不思議そうに見上げる久遠を見て、ふと我に返った竜姫は、時計を見て仰天した。

「やだっ、もう四十五分!？」

全ての思考を頭の隅へと追いやる。身支度を整え、マグカップと箸を引っ掴むと慌てて部屋を飛び出した。久遠はそれを追う様に彼女の後について廊下を駆け抜ける。

廊下には、既に食事を終えて友人と談笑しながら部屋へと戻って来る女の子達の集団で溢れかえっていた。その隙間と隙間を縫う様に、竜姫は早足に食堂へと向かう。

礼拝堂で派手に机を叩き割った例の転校生を見付けた少女達は揃ってヒソヒソと噂話に花を咲かせたが、しかし、その後ろをぽてぽてと歩く異形の狐の姿を見咎める者は誰一人いなかった。

夢から醒めて

ギリギリ、滑り込みセーフで朝食の乗った盆を受け取った竜姫は、ちようど空いたばかりの窓際の席に座り、テーブルに置かれたポットから自分のコップに茶をなみなみ注ぎ淹れ、クロワッサンにベーコンエッグを無理やり挟んでぎゅうぎゅうと口へと押し込んだ。

「竜姫、行儀悪いよ?」

呆れた様に、久遠が一応諫めるが、

「時間が無いの。人目を気にしてる余裕なんかないよ。」

と、竜姫が言った。……いや、正確には言おうとしたけれど、まるでハムスターの様に頬をパンパンに膨らませ、口一杯に詰め込まれたパンに邪魔されてモゴモゴと意味不明な音しか出せなかったため、お茶で口の中の物を胃へと流し込みながら、久遠の脳に直接語りかけたのだが……。

「やあ、おはよう、神崎竜姫。」

はあ、と諦めた様にため息をついた久遠が座る、竜姫の正面の席の右隣りの椅子に、さりげなく腰掛けた男子生徒が、ごく自然に声を掛けた。人に声を掛けながら、他に連れがいるわけでもないのに、わざわざ真正面の席を避けて座る少年に違和感を覚え、久遠はその少年に視線を向けた。久遠の投げかけた視線は、じっとこちらを眺めていたらしい少年の視線とぶつかった。

「へえ、随分珍しいペットを飼ってるんだな。」

朝日を背に、逆光の中、ニヤリと笑って、少年はとんでもない台詞を口にした。

「た、竜姫っ、」

久遠はざっと顔色を青くしながら竜姫に注意を促した。が、その竜姫はいえ、ようやく空になった口をぽかんと開けたまま、心ここにあらずといった様子で少年を凝視している。彼女の反応に満足したのか、少年は竜姫の皿からリングを摘んで口に放り込み、に

こやかな笑みを浮かべた。

「あ……あなた、どうして……？」

幾つもの疑問が、浮かんではシャボン玉の様にパチンとはじけて、言葉としてまとまらないまま、頭の中をぐるぐると巡り続ける。

白い、肌。黒い、髪。彫りの深い、整った綺麗な顔。それらには見覚えが、あった。ただ、あの印象的な紅い瞳だけが、何故か今は黒色になっていたが、それでも、この目の前の、学園の高等部の制服に身を包んだ少年が、それなのだと、竜姫は確信していた。

七時の鐘が鳴り響き、僅かに残っていた生徒達は慌てて食堂を出て行く。あと三十分後には各教室で朝のホームルームが始まる。それまでに教室へ入れなかった者は遅刻とみなされ、遅刻に正当な理由の無い者には罰として膨大な量の反省文と課題が待っているのだ。しかし、竜姫はそこから動けなかった。少年の瞳に魅入られた様に、彼の視線に囚われていた。まるで、そこだけ時間を切り取った様に周りの喧騒が一切遮断され、しんと静まり返り、ピンと張り詰めた空気が二人と一匹を取り巻いていて。グルル、と、久遠は低く唸り、少年を威嚇する。その、緊張した雰囲気の中、少年は、

「今日の放課後、昨日の礼拝堂へ来い。」

そう、尊大に言い放つと、あっさり席を立ち、食堂を後にした。

一方、後に残された竜姫は、今更ながらに心臓がバクバクと異常な拍動を刻んでいる事に気付いた。こんな風に、動揺するなんて、ここしばらく無かったのに。

「竜姫、……今の奴、知ってるの？」

久遠が、不安げな瞳を竜姫に向けた。

「あいつから、竜姫の血の匂いがしたよ。昨夕、何があったの？」
重ねて問いかける久遠に答えぬまま、竜姫は無言で席を立った。

「竜姫？」

困惑する久遠に、声を掛けてやる余裕は今の竜姫にはなく、半分以上残ったままの朝食を、半ば機械的に流しへと運び、残飯用のゴミ箱に捨てる。食器の汚れを軽く洗い流し、食器の返却口へ片付け

てしまうと、早足に部屋へと向かう。本当は駆け出したいのを必死で堪えながら竜姫は、ついさっき、夢だと片付けた昨日の出来事を思い返していた。

自分に与えられた三階の個室まで、階段を上がり、息を切らしながら廊下を歩く。部屋へと戻った竜姫はその瞬間、崩れ落ちた。

「竜姫っ！」

慌てて駆け寄る久遠をぎゅっと抱き締め、竜姫は呟いた。

「久遠、ごめん。」

「え？」

竜姫の、謝罪の理由が分からず、久遠が聞き返す。

「厄介ごとが、また一つ、増えちゃったかもしれない……。」

珍しく、弱りきった声を出す竜姫に、久遠は、

「行くの、礼拝堂に。」

気遣う様に尋ねる。

「うん。行く。アイツには、聞きたい事が山程あるから。」

それに、あれを何とかしないと、クラウドがまた暴れるだろう。

行かない訳にはいかなかった。

始業十分前の鐘の音が鳴るのを、どこか他人事の様に聞き流しながら、竜姫はため息をついた。

紅い静寂

そして、その日の午後。午前に四時間、昼休憩を挟んで午後三時間の授業を終えた、各教室に掛けられた時計は一樣に四時を指していた。冬至も近いこの季節、外は既に日が傾き、西の空が赤く染まり始めている。

グラウンドでは、日が沈むまでの僅かな時間を惜しむ運動部の生徒達が部活前の走り込みを始めており、その掛け声が周囲の山々に反響され、校舎の裏手にある林にまで響いてくる。校舎の四階にある第一音楽室では吹奏楽部が、学園で盛大に催されるクリスマスパーティーで演奏する曲を練習しているようだ。漏れ聞こえてくるあの曲は、アメージング・グレース。さらにその隣りの第二音楽室からは、合唱部の歌う、クリスマス用にセレクトされた賛美歌が数曲、聞こえてくる。

あと、二週間とちょっと。もうじき始まる学期末テストが終わればクリスマスだ。厳格なカトリック系のこの学園では、普段から色々と厳しい決まりがある。

まあ、男女交際の禁止だとか、髪の色、髪留めのゴムの色からスカート丈等服装に関する規則、遅刻、欠席、早退や授業中の態度の様な風紀的なもの、他にも礼儀作法や寮での生活の細かいところまで張り巡らされた校則は、数多くの学校の類に漏れず、多くの教師陣から支持され、また多くの生徒達から敬遠されていた。

幼い頃から色々と規制のかかる規律の厳しい環境で育った竜姫にとって、それは本来、それほど苦痛に感じるものではなかった。身だしなみについては今ある校則より余程厳しく躰られたし、修行や稽古をサボろうものなら鉄拳制裁が飛んできた。けれど、礼儀作法や生活様式の違いが、竜姫の悩みの種だった。

その日、一日だけは特別に規則の幾つかが撤廃され、締め付けが多少弱くなるクリスマスを、学園の生徒は皆、心待ちにしていたが、

竜姫にとつてはむしろ苦痛にすら思えた。

今日はもう、数十回目となる盛大なため息をつきながら、竜姫は林の中を歩いていた。

針葉樹林ばかりが植えられた林は、この季節でも葉が落ちる事も無くうつそうと生い茂って太陽の恵みの大部分を遮ってしまっており、暗く、寒々しい雰囲気を醸し出していた。

その中に、他のどの建物からも離れたそこに、忘れ去られた様ぽつんと佇む、小さな教会風の建物はあった。外見、昨日と何一つ変わらないその佇まいに、嵐の前の静けさの様な嫌な感じがするのは、果たして本当に気のせいだろうか。

クラウスの所業に腹を立て、怒りに任せて乱暴に鍵をこじ開けた昨日は、特に何も考えずとも簡単にくぐれた扉は、昨日と同じようにそこにあるのに、まるで昨日とは別物に思えた。中は、どうなっているのだろうか。……昨日の惨状が目には浮かんでくる。それにいつは……、もう来ているのだろうか。そして、もう一つ。あの、バカ天使は――？

扉に取り付けられた、大きく古めかしい錠にかけられた鍵穴に、仰々しく飾り立てられた、サイズの割にやたらと重たい小さなキーを差し込み、軽く捻ると、鍵はガチャリと音を立ててあっさりと外れた。

金メッキの剥がれかけた円柱状の鉄の棒。扉の取っ手であるそれを、必要以上の力を込めて握り締め、竜姫は意を決し、扉を押し開けた。

キィ、と、扉の蝶番が軋んだ音を立てた。そのかすかな音は、エコーの利いた室内にやたらと響いて聞こえた。

薄暗い室内には、幾つもの机と椅子が、左から右へ等間隔に整然と並んでいて。一段高く作りつけられた壇上の背後には天井まで届くステンドグラスが天窓から差し込む西日を正面から浴びて眩しいくらいの赤に染まっていた。

壇上の人物から見た正面には、祈りを捧げる信者達を後ろから見

守るかのように掲げられたイエス・キリストの十字架像が、昨夜のアレはやっぱり夢だったのでは、と思いたくなる程昨日と何一つ変わらない光景が、そこにはあった。

防音設備の整った礼拝堂は、開けた扉を閉めた途端、外の喧騒が遮られ、シン、と逆にうるさい程の静寂に包まれた。その、静けさは、今朝的一幕を思わせる。

西日に染まるステンドグラスを背に、それより尚も紅い瞳をした吸血鬼は、壇上にどっかと腰を下ろしていた。白、黒、赤のコントラストが、ギラギラと照りつける夕焼け色に支配されたその中で、その存在を一段と際立たせている。

今朝方着ていた高等部の制服ではなく、昨夜と同じ、全体的に黒っぽい服を身に着け、マントを羽織ったその少年を前に、竜姫の表情が歳相応のそれから、場慣れした巫女のそれへとスッと切り替わる。

静かな室内に、ローファーを履いた竜姫の足音が響く。頭の後ろで一つにまとめられた、腰まで届く長い黒髪が、竜姫の動きに合わせて揺らめく。ぴんと背筋を伸ばし、スッ、スッ、と静かに歩くその姿は美しく、どこか威厳すら漂う。

「よう、あの変わったペットはどうした？」

一段低い場所で凜と佇む少女を、少年は腰を下ろしたまま見上げる。

「我が豊生神宮の祭神を、愚弄しないで。」

誇り高き巫女は、少年を鋭く睨み付けた。

「久遠は、私が仕えるべき神。私にとっては幼馴染みみたいな、大切な存在。それを汚すなら、私は巫女として、それ相応の対処をとらせてもらう。」

ピリピリと静かな怒りを瞳に浮かべ、失礼な言葉を吐いた吸血鬼に今にも殴りかかりそうな程の殺気を放ち威圧する。

怒気をあらわにする竜姫に、少年は、降参だというように両手を上に挙げ、肩をすくめて見せた。ご機嫌伺いをするかのように上目

遣いに竜姫をちらりと見、ニツといたずらっぽく牙を見せて笑う。

「まあ、待て。俺は、こんな所でお前と揉め事起こす気はねえんだ。俺が、今必要としているのはパートナーだ。そして、俺がパートナーに求めるのは――、」

少年は、挙げた両腕を降ろし、自分の膝に肘を乗せ、まるで祈りを捧げるかのように組んだ両手に顎を乗せた。紅い瞳が目蓋の下へと消える。そして、

「お前だ。」

と、軽薄な笑みを消し、再び開いた瞳が、真剣な眼差しで竜姫を射抜いた。

「けどな、俺は力づくで無理強いするのは趣味じゃないんだ。だから、お前の同意が無い限りは俺はお前に何もしない。」

少年はヒョイと壇上から飛び降りるように立ち上がると、コツン、コツンと靴音を響かせながら、竜姫の背後へと移動すると、並ぶ机の一つに体重を半分預け、寄り掛かった。

「でも、お互い、事情も何も分からないまままで同意もクソもないだろう?」

そう、首を傾げる仕草をしながら、問いかけるように、吸血鬼は言った。

「ちょっと、昔話をしてやるよ。気になってるんだろう、俺が、実際何者なのか。なんでこんな所で封印されていたのか、とか。」

につこりと、営業スマイルを浮かべてみせる少年に、竜姫は警戒心たっぷりの視線を投げかける。

「確かに、聞きたい事は山程あるんだけどね。でも、話を聞いたら最後、同意しなかったら殺す、とかいう展開にならない保証はあるの?」

「それは大丈夫。絶対ない。だって、君が同意してくれるまでしつこく説得するつもりだから、ね。ほら、死なれちゃったらパートナーになって貰えなくなっちゃうじゃないか。」

無邪気な笑顔を浮かべる少年の、その表情の裏に潜む、邪気の気

配。

竜姫は反射的に、ゴクリと唾液を飲み込んだ。グツと拳を握り締め、腹筋に力を込める。人外存在を相手に、気持ちで負けてはならない。幼い頃から叩き込まれてきた心得。そして何より物心ついてから日々積み重ねてきた経験が、竜姫の盾となり鎧となつて、ともすると暴走しそうになる心臓の拍動をギリギリのところで抑え込む。

「随分一方的な要求ね。私には拒否権が無いなんて。」

刻一刻と、天窓の外の茜色の空から投げかけられる明かりが、その存在感を薄れさせていく中、精一杯の余裕の笑みを作り、必死に平静を装う。

「悪いようにはしないぜ。」

そう言う少年の紅い瞳が、時を経るごとに次第に爛々とその輝きが増し、瞳に宿る妖しげな光が強くなっている様に見えるのは、気のせいだろうか？

「あんたの言う、パートナーって、何なの？」

ざわわ、と木々が一際強い風に煽られ、葉に残る朝の雨の名残を建物の壁へ叩き付ける。

「文字通りの意味さ。」

天窓から、瞬間的に矢のように降り注ぐ強力なオレンジ色の光線が、ステンドグラスを射抜き、マリアの肖像を描いたそれは、眩い程に真白く輝いた。

「俺の相方として、力を貸して貰う。」

その、目に突き刺さるかの様な強い光にも、怯む事無く、竜姫の瞳をひたと見据えて少年は言った。

「言ったはずよ。私はこの国の神に仕える巫女。異国の神の力が支配するこの場所は、私とは相性が悪いんだって。私はこの学園内では満足に力を使えない。貴方の相方を務めるには、今の私では役不足だと思うけど？」

少年の答えに反論の切り口を見つけ、すかさず切り返す竜姫に、少

年はしかし、

「役不足どころか、最高の掘り出し物だ。」

と、太鼓判を押した。その、次の瞬間には、白い光が急速に輝きを失い、天窓から差し込む日の光が完全に消え失せ、礼拝堂は闇一色に染まる。暗闇の中、急に暗転した視界に慣れぬ竜姫の瞳に映るのは、煌々と輝く、一対の紅い瞳だけ。

夜は魔物の時間である。夜闇の中で力を増す魔物は数多い。力を充分発揮できない今、力を制限されるこの場で、この紅い瞳と相対するには、分が悪すぎた。

竜姫には、守るべきものがあつた。命を賭けてでも、守らなければならぬもの。久遠と、そして稲穂^{いなほ}と交わした誓い。亡き両親の願い。巫女としての使命が、竜姫にはあつた。その為に、決して失ってはならないものがあつた。

それは、己の命。殺さない、と、吸血鬼は言った。昨夜も、血を吸い尽くそうとすれば出来たはずのところを、彼はそうしなかった。竜姫は悟ったようにため息をつく。半ば、諦めたように竜姫は口を開いた。

「本当は、もうこれ以上の厄介ごとはお断りなんだけど。仕方ないから話だけは聞いてあげる。……言っておくけど、聞くだけだからね。」

勝った、とばかりにほくそ笑む少年の表情は、暗闇の中、竜姫の目に映ることはなく、

「小難しい類いの話じゃないが、すぐ済む類いの話でもないからな。座れよ。立ったままじゃ、疲れるだろう。」

再び段の前へと移動し、段に腰掛けると、竜姫に隣りに座るように言った。

昨日、掃除をしたはずなのに、その苦労が跡形も無く埃に埋もれた床に、竜姫は顔をしかめたが、今ここで、下手に逆らって、機嫌を損ねられても困る。しかし、制服を埃まみれにしたくない竜姫は、片手で印を結び、神言を唱えた。風と水を操る呪文が、壇上の埃を

残らず滅殺する。

「へえ、便利なもんだな。」

「確かに便利な術だけど、ここでは単に疲れるだけの技よ。普通に掃除する方が、よっぽど楽なんだけど、今はそんな暇ないし。」
事実、埃は消えたものの、床はまだとうてい綺麗とはいえない状態にあった。

「それに、下手に力を使うと、来るのよアイツが。」

苦々しく言い捨て、徐々に闇に慣れ始めた目に映るキリスト像に冷たい視線を浴びせる。

「目下、最大の厄介事よ、アイツは。アレさえいなければ、いくらここが異国の神を祀っている場所だからって、ここまで力が抑えこまれるなんて事にはならないはずなのに。」

ぶちぶちと隣りで呟く竜姫に、吸血鬼は、

「なあ、何でアイツはここにいるんだと思う？」

と、何か含んだような笑みを浮かべる。

「お前の言う通り、ここに祀られている神は、この土地では異国の神だ。しかも、この国では一部の民を除いて長く敬遠されてきた歴史がある。その数少ない一部の者との縁が深い訳でもない、こんな山奥の土地に、何故天使がいる？」

その問いは、竜姫がこの学園へ来て、クラウドと初めて遭遇した瞬間から胸に抱いていた疑問だった。

「特に力のある人間がいる訳でもない、ただの学校に、何故大天使アーケエンジェルがいる？」

その問いの答えに、竜姫は思い当たるものがあつた。

「貴方が、何か関係してるのね。」

「ご明察。」

パンパンと、わざとらしい拍手をしながら、少年は言った。

「面白い話を聞かせてやるよ。昔話を、な。」

緋色の軌跡 [1]

暗闇の中、低く通る甘い声音が、静かな礼拝堂に響く。

「ルードヴィヒ・アンセルム。それが、フランス人の父と、ドイツ人——当時はローマ帝国といったんだが——の母との間に生まれた、子供の名前だった。」

ゴソゴソと、マントの中で何やら探りながら、少年は切り出した。「アンセルムの家は、ドイツ国境に程近いフランス領の、葡萄農家が集まる集落で、ワイン用の葡萄の栽培を生業としていた。」

一体、何処で買って来たのか、懐から缶ジュースを二本取り出し、一本を竜姫に勧めながら、少年はさらに続ける。

「当時の貴族達からも圧倒的な支持を得ていた老舗のワイン倉が所有する土地を借りて、農業を営んでいた。作った葡萄は全て土地の所有者であるワイン倉のお偉いさんに納めて、その賃金として金を貰う。いわば小作人だな。」

少年は、プシュ、と小気味良い音を立てて缶を開けた。

「その頃の一般農民の生活は、ひどく貧しいものだった。収入のあらかたは税として貴族の懐に収まって、残った僅かな財で、苦しい生活を強いられていた。アンセルム家も、最悪とまではいかないものの、豊かとは言い難い生活を送っていた。」

缶を傾け、口内を潤し、

「それでも、家の仕事を手伝いながら、生まれた子供、ルードヴィヒは、両親や、友人達と共に、そこそこ幸せに暮らしていた。」

『ルードヴィヒ』、と、昨夜竜姫に名乗った少年は、話の中で、まるで他人の事の様にその名を語る。

「だが、ルードヴィヒが十六になった年の夏、その幸せだった生活の全てを、失った。」

それまで、淡々と語り続けた少年が、不意に険しい表情を見せた。「ルードヴィヒは、恋をしていた。小作人達をまとめる、この国で

言う庄屋の立場にいた家の一人娘が相手だった。アンセルムや他の農民達より上の立場で、彼らより豊かな暮らしをしていた彼女は、けれどそれを盾にする様な人じゃなかった。他の皆と一緒にになって畑で泥だらけになって働いて、一緒に泣いて、一緒に笑って……。そんな彼女に、ルードヴィヒは、恋心を抱いた。」

口元に、自嘲するような笑みを浮かべながらも、愛しいものを見る様な、暖かな瞳で、遠くを見つめる。竜姫は、今まで見た事の無いその眼差しに、心の奥底で複雑な想いが燦っているのを感じ、己の感情に戸惑いながらも、貰った缶ジュースに口をつける。口内に、甘いミルクティーの味が広がった。

「けれど、所詮は身分違いの恋だった。ある時、彼女に結婚話が舞い込んできた。相手は二つ向こうの集落の庄屋の息子。ルードヴィヒは、自分の想いを伝える事すら出来ないまま、失恋した。」

缶の中身を一気に飲み干し、少年はため息をついた。

「で、失恋して落ち込んで、心の弱った隙をつかれて、悪魔に取り憑かれたんだ。」

その言葉に、口に含んだ紅茶を、危うく吹き出しそうになるのを必死に堪えながら、竜姫は鋭い目線を少年に向ける。

「その悪魔は傷付いていてね。どうも、とある天使と戦って傷を負ったらしい。その傷を癒し、力を回復する為に、人間の生気が必要だったんだ。」

天使、という単語に、竜姫は瞳を鋭くきらめかせた。

「悪魔は、傷付き弱っていた。それに、農家の仕事は体力勝負だからな。取り憑かれても、最初のうちは普段と変わらず生活していたルードヴィヒだけど、日ごと、ごっそり体力と精神力、生命力を奪われて、次第にベッドから離れられなくなっていった。」

手に持った空き缶を、カラン、と静かな室内に小さな音を響かせながら脇に置き、空いた手を膝の上で組み、少年は紅い瞳を閉じた。

「本当なら、ルードヴィヒは、悪魔に取り憑かれたまま生気を根こそぎ吸い尽くされて死んでいくはずだった。けれど、実際はそうは

ならなかった。村を、一匹の吸血鬼が通り掛かった事で、事態は思わぬ方向へ転がっていった。」

半分以上残ったままの紅茶を、ギュッと握り締めたまま、竜姫は少年の語る話に聞き入っていた。

「見た目、病に倒れ弱って動けないルードヴィヒを、その吸血鬼は獲物に選んだ。ルードヴィヒに取り憑いていた悪魔は、回復の為に眠っていて、しかもその気配を天使に気付かれまいと極力抑えていたから、吸血鬼はそれと気付かないまま、牙を立てた。」

うつすらと目蓋を持ち上げ、紅い瞳を僅かにのぞかせた少年は、尚も静かな口調で語り続ける。竜姫は、少年をじっと見つめたまま、静かに耳を傾けていた。

「吸血鬼は、ルードヴィヒの血を根こそぎ吸い尽くそうとした。吸われた血の量が、致死量を越えた時、吸血鬼の呪いが失われた血液の代わりに体内を巡り始めた。呪いは、ルードヴィヒの身体を人間のそれからヴァンパイアのそれへと変えていった。けれど、ルードヴィヒの中に眠っていた悪魔がそれを黙って見過ごす訳は無い。」

組んだ両手に、力がこもる。

「悪魔はつまりは堕天使だから、天使と同じく霊体で、その姿を視る事のできる者は滅多にいない。悪魔が視える人間ならば彼らと契約を交わす事もできるが、そうでない大多数の人間は単に取り憑かれて一方的に生気を吸い取られるだけ。ルードヴィヒは、その大多数側の人間だった。だから、悪魔は適当に生気を奪って適度に回復して、宿体が死んだらその身体を捨てて、新たな獲物を探すつもりでいたんだ。」

そのあんまりな台詞に、竜姫はいたたまれなくなって、それをごまかすようにチビチビと紅茶の缶に口をつける。

「けれど、ルードヴィヒが吸血鬼に咬まれた事で、事情が変わってしまった。ただの人間だったルードヴィヒの身体ならば、取り憑くも捨てるも悪魔の思いのままだった。が、その宿体を巡る吸血鬼の呪いは、悪魔にも牙を剥いた。ルードヴィヒの意識だけでなく、悪

魔の自我まで呑み込もうとする呪いに、悪魔は必死の抵抗を試みた。ただの人間にしかすぎなかったルードヴィヒの中で、悪魔と、吸血鬼の力が互いを呑み込もうとぶつかり合う、そんな只中で、ただの人間だったルードヴィヒの意識が、悪魔や吸血鬼の力に呑み込まれずにあったのは、弱った悪魔の体内に埋め込まれた神剣のカケラのおかげだった。」

その、神剣の持ち主に、なんとなく心当たりがあるような気のする竜姫は、渋い顔をする。

「ルードヴィヒの体内で、三つの意識がせめぎあう中、さらなる不幸が、ルードヴィヒと、その村を襲った。ルードヴィヒの中で、吸血鬼に抗おうと目覚めた悪魔の気配を嗅ぎ付けた天使が、村を襲ったんだ。」

その、天使が誰だか、物凄く知っている気が、竜姫はしていた。

「その天使の標的が何なのか、すぐに悟ったルードヴィヒは、村に迷惑をかけまいと、まともに動けない身体で、這うように家から外へ出て、そのまま村外れの森の中へと逃げ込んだ。当然、天使は自分を追って真っ直ぐこちらへすっ飛んで来るものだと思っていたルードヴィヒは、後ろを振り返って呆然とした。ルードヴィヒの目に映ったのは、雷を放ち、村を火の海へと沈める、天使の姿だった。悪魔に取り憑かれ、吸血鬼に咬まれた自分を滅するというなら分かる。でもそうじゃない、何の罪も無い両親や親族、友人、知人、それら全てをあの天使は焼き滅ぼした。そのあまりの光景に、ルードヴィヒは、ショックのあまり己の意識を手放してしまった。」

竜姫の背筋を、氷塊が滑り落ちていった。脳裏に、あの日の記憶の一幕が蘇る。あの悲劇を思う度、痛む頭が、冷たく凍り付く様な感覚が襲う。

「意識を完全に失うまでのほんの僅かな間に、ルードヴィヒは天使への憎しみの感情を抱き、その魂を黒く染めた。それを取り込み力を増した悪魔は、ヴァンパイアの狂気を押さえ込む事に成功したが、その時既にルードヴィヒの身体は吸血鬼になってしまっていて、悪

魔は宿体に縛られ、その身体から抜け出す事ができなくなってしまった。」

凄惨な内容の話を、少年はそれでも淡々と語り続ける。

「魂を喰われた人間としてのルドヴィヒの意識は消失したが、最期の瞬間の感情が常軌を逸脱するほど強力なものだったせいかな、魂を取り込んだ悪魔の意識と同化してしまった。こうして、吸血鬼の身体に人としての記憶と意識を宿した悪魔という、前代未聞の魔物が出来上がった。けれど、悪魔と同化した意識が持つ強い憎しみと、ヴァンパイアの狂気を内包する、その精神はひどく不安定なものだった。ともすれば暴走し、近隣の村を襲い、幾千もの命をその手にかけた。」

伏せられた瞳から、一筋の涙が零れ落ちるのを、竜姫は見た。

「やがて、その恐るべき魔物を退治るべく、天から討伐軍が派遣された。ドミニオンズ主天使、ヴァーチユス力天使、パワーズ能天使。普段は絶対人界には降りて来ない中級クラスの天使達を相手に、魔物は為す術も無く封じ込められた。そして、全ての原因を作った大天使は、その咎で封印された魔物の守役に任命され、この異国の地へと左遷された。奴は初め、九州に礼拝堂を建て、そこへ魔物を封印した棺を封じた。しかし、時代の流れと共にキリスト教は時の政府に弾圧される様になった。己の信じる神を軽んじられ、怒った天使は民衆をそそのかして時の権力者に反旗を翻させた。」

……九州のキリスト教信者の反乱といえば、何やら、そんな話を日本史の授業で聞いた様な覚えがある。まさか、と思いながらも否定しきれないものがある。

「しかし、その無謀な計画は失敗に終わり、結果的に多くの信者が命を落とした。その咎を受け、墮天の烙印をを押される事を恐れた奴は、山奥へ逃れ、シールドを張って閉じこもった。それからさらに数百年の時間が流れたが、天は奴の罪を取り沙汰す事はなかった。その頃にはキリスト教を嫌った当時の政府は倒れ、締め付けも大分緩くなっていた。時の流れと共に、礼拝堂にも人が集まる様になり、

新たに教会が造られ、やがて学校が建てられ、今に至る訳だが。」

そう、語る少年の瞳に、もう涙はその名残すらなく。

「その間、俺はずっと封じられたままだった訳だが、あくまで封じられただけで、死んでた訳じゃない。棺の中で、三つの意識が互いの存在を呑み込もうとしていた。自分が一体何者なのか。人の感覚からすれば、長い、永い時の中。けれど吸血鬼や悪魔の感覚からすれば、ほんの僅かな時間でしかない、数百年という年月の中で、俺は幾度も見失いそうになった。」

竜姫は、とうに空になった缶を、強く、強く握り締めた。

「永遠に近い時の中、遅かれ早かれ、いずれは狂うんだと思っていた。だけど、俺は今、封じを解かれ、こうして目覚めてここにいる。吸血鬼の身体と、悪魔の知識と力を、人であった頃の記憶と意識が主導権を握る『俺』として。」

緋色の軌跡 [2]

力強い瞳で見つめられ、竜姫は心臓が高鳴るのを感じた。それは決して先程の様に不快なものではなく。

「今、俺の精神は安定している。かつて、無かった程に。全ての力が完全に戻っているにも関わらず、な。だから、今こうしてお前の前でこんなにも穏やかな話し合いができています。もし、この安定が崩れる事があれば、俺は狂気に吞まれて暴走するだろう。そうなれば、考えたくもないような事態を招いてしまう。俺はそんなのは望まないが、俺の意思など関係無く、俺は多くの人間を手にかけるだろう。」

少年は、辛そうに瞳を揺らめかせる。

「今、俺がこうして落ち着いていられるのは、昨日俺が吸ったお前の血の効力なんだ。」

少年は立上がり、竜姫の前に立った。

「お前は、この国の神に仕える巫女だと言った。その、魔とは対極にある力が、俺の中の狂気を鎮め、闇に染まった魂を清め、かつて人であった俺の意識に力を与えてくれている。その効力が途切れれば、俺はまた狂気に堕ちる。」

ギツと、硬く握り締めた拳から、血が滴った。強く握り過ぎた手の、指先の爪が手の平に食い込んでいるのだ。

「俺がこうして蘇った以上、あの天使も黙ってはいないだろう。俺はむやみに人間に危害を与えたいとは思っていないが、アイツだけは別だ。アイツは、罪も無い人達を大勢死に追いやった。直接、間接問わず、あれだけ多くの命を奪っておいて、大した咎めも受けずにいる。あの天使を、俺は殺したいと思っている。」

いつしか涙に濡れた竜姫の顔を見下ろしながら、少年は言った。

「封じを解かれ、力を取り戻した今の俺ならば、あの天使をどうにかする事はそう難しい事じゃない。狂気に堕ちようと、この身に刻

まれた憎しみは消えない。俺は、アイツを殺すだろう。でも、狂気に堕ちれば見境無く周りの人間まで殺してしまう。狂気に堕ちるのを防ぐ手立てはただ一つだけ。その為には、お前の血が必要なんだ。」

と、終始淡々と語り続けた少年が、スッ、とその場に跪き、頭を下げた。あれだけ、偉そうな態度を取り続けていた少年が。これまで度々余裕の笑みを見せていた吸血鬼が。

「あの天使を倒したら、後は封じるなり滅するなり、お前の好きにしてくれていい。だから、それまで俺のパートナーとして、俺に協力して欲しい。俺に、お前の血を、分けて欲しい。」

そう言って、竜姫より一段低い場所で、まるで姫にかしづく騎士の様に、床に膝をついているのだ。

竜姫は、言葉に詰まった。話を聞いた以上、できる限りは協力してあげたいと、そう思うのだが、すぐに『うん』と返事をするには、重過ぎる内容だった。あまりに壮絶で、凄惨な、途方もない話に、理解はしたものの、頭の回転が追いつかない。

「……あの、考える時間を貰ってもいいかな。」

竜姫は、すまなそうに少年に告げる。

「血をあげるだけなら構わないんだけど、天使をどうこうするって話になると、いまここですぐに答えを出す事は出来ないから。」

ブレザーの袖口で、涙で濡れた顔を乱暴に拭い、竜姫は、埃だらけの床で、黒い服を白く汚した少年に、手を差し出した。

「私個人としては協力してあげたいと思うんだけど、私にも色々事情があってね。私一人の意思だけでは、貴方がしたいと思っている事に協力はできないの。だけど、貴方が狂気に堕ちるのを黙って見ている事も、狂気に堕ちた貴方が一般人に危害を加えるのを見過ごす事も、私には出来ないから。」

竜姫は清めの神呪で少年の服の汚れを払い清め、さらに言葉を続けた。

「私が仕える神は、久遠だけじゃないの。他に、稲穂いなほと多喜たきという

名の神様がいて、彼らの許しが無い限り、私は貴方のしようとしている事に協力出来ない。でも巫女として、……そして貴方の封印を解いてしまった者として、貴方をこのまま放っておく事も出来ないから。」

少年の紅い瞳の前で、竜姫はブラウスのボタンを外し、首筋を無防備にさらけ出し、頭を下げたまま動こうとしない少年の前にしゃがみ込み、間近にその瞳と目を合わせた。床に貼りつけたままの手を取り、自分の両の手で、少年の左手を包み込む様に握り締める。少年の手は、とても暖かった。掌の傷は、既に傷跡すら残さず綺麗に完治していたが、鋭く尖った爪の先は、流した血で紅く染まったままだった。

「もう少しで、冬休みになる。そうしたら、一時帰省が出来るから、一緒に来て欲しいの。そこで、皆のお許しが出たら、その場ですぐに返事をする。それまでの間、血はあげるから、少しだけ待って。」

「……分かった。血さえ貰えれば、他はそう急ぐ事でもないからな。待たせてもらうよ、お前が答えを出すまで。」

手に感じる、人肌の温もりに、少年はじんわりと懐かしさを覚えながら、そう言った。

「ところで、話は変わるけど、貴方、人の事お前お前言うの、やめてくれない？」

「あ？」

「何だか偉ぶられてるみたいでカンジ悪いじゃない。」

「そう言うお前だって俺の事『貴方』とか言ってるじゃないか。性に合わない過ぎて鳥肌が立ちそうになるんだが？」

「だってそれは、貴方が名前を言わないからでしょう？」

「教えただろう、昔の名前を。」

「だから、その『昔の』ってどういうこと？」

「……昔の俺、人間ルードヴィヒは、悪魔に喰われて死んだんだ。今の俺は、ルードヴィヒに取り憑いたサハリエルという名の悪魔と同化した存在であり、血に飢えた名も無き獣を内に宿した魔物なん

だよ。……今の俺に、これと決まった名前はない。だが、呼び名が無いのは色々不便だから、ルードヴィヒの名を使っているだけだ。」と、竜姫の問いに、吸血鬼の少年は言った。

「ルードヴィヒの名が長くて呼びにくいのなら、ルードと、略称で呼べ。」

「……じゃあ、ルードも名前で呼びなさいよ、私の事。」

さり気なく視線を逸らしたルードの頬を軽くつねり、竜姫はにっこり微笑んでみせる。有無を言わせぬその表情は、先刻自分が浮かべたものに酷似している気がして。

「……分かった、呼ぶ。名前で呼ぶから。」

白旗を掲げたルードの頭をガシガシと乱暴に撫で回し、竜姫は満足げだ。ルードはがっくりうなだれ、肩を落とした。

「正真正銘の変わり者だな、竜姫は……。」

話を聞いて尚、畏れる事無く紅い瞳を正面から受け止め笑う表情も、血塗れた手を包んだ温もりも、それは確かにそこにあった。

遠くでチャイムの音がする。ピクリと、その音に竜姫が反応する。

ポケットから携帯を取り出し、時間を確認した彼女は、

「うわっ、もう七時？」

と、にわかに慌てだした。寮の門限は九時だが、夕食は夜八時までと決まっている。朝はあの通りだったし、昼も食欲がわかず、まとも食べていないのだ。ここで夕飯まで食いつぶされる様な事になれば、今夜は空腹で眠れなくなる。

「……私、もう行かないと……」

ルードの前で、竜姫は慌ててブレザーを脱ぎ捨て、ブラウスの襟元を開いた。

「ルード、血が要るなら、早くしてっ、」

無防備にさらけ出された首筋。それを目にしたルードの紅い瞳に、ゆらりと妖光がきらめいた。

彼の目は闇を見通し、肌の下を流れる温かな血潮の香りに、吸血鬼の本能が刺激される。

口内に溢れてくる唾液を飲み込み、ルードは竜姫の肩に手を添え、彼女の首筋に口付けを落とした。つつうーっ、と、舌先で肌をなぞる、その仕草が妙に色っぽい。耳元にかかる吐息に、背筋がゾクゾクする。

クラウスから逃れる為に必死だった昨夜はそんな事など気にはならなかったのに。

恐怖とは違う感情に高鳴る心臓の鼓動がルードにまで伝わってしまいそうな気がする。

肌に唇が触れ、ルードはそのままためらう事無く牙を埋め込み、二口か三口程、にじみ出て来た血を舐める様に味わう。

ほんの僅かな量を摂取しただけで、ルードはあっさり竜姫を解放した。ガリッと牙で自分の指の腹を傷付け、プツクリと溢れてきた血液を、軟膏でもすり込む様に竜姫の首に残る二本の牙の跡に塗り付ける。すると、たちまちのうちに血は止まり、傷跡すら残さずあっという間に完治してしまった。

「竜姫、これを。」

ルードは、懷からピルケースを取り出し、竜姫に手渡しながら言った。ケースのなかには赤いカプセルが数粒入っていた。

「今、クラウスに見つかれば、非常にまずい展開になるのは間違いない。けれど、この学園で生活する限り、奴と遭遇せずにいるのはまず不可能だ。だから、一日三回、食後に必ずこの薬を飲んで欲しい。目くらましのまじないを封じた薬だ。飲むだけで俺の魔術が効いて、奴の目に竜姫の姿が映らなくなる。」

竜姫はパッと顔を輝かせて薬を受け取り、

「それ、ホントに？」

と、まるで欲しかったおもちゃをプレゼントされた子供の様な目でルードを見る。

「そんな便利なモノ、……いいの？　タダで貰っちゃって。」

どうやら本気で感激しているらしい彼女に、ルードは、同情の眼差しを向ける。

「……相当苦労してたんだな、竜姫も……。」

「うん、この学園に来てからずっと、アイツには目の敵にされてて……。何度も殺されかけたんだから、私も久遠も。何かといえばすぐ神剣振り回して暴れるんだから、迷惑としか言い様がないというか。……アイツに見つからずに済むなら、ありがたく飲ませてもらいよ、この薬。早速今晚からね。」

乱れた着衣を整え、ブレザーのポケットにケースを滑り込ませて、竜姫は立ち上がった。

「時間だから、もう行くね。ルードはどうする？」

「俺は当分の間、この礼拝堂で寝泊まりするつもりだ。ここなら奴の目を欺きやすい条件が揃っているからな。」

ルードがそう言うので、竜姫は礼拝堂に彼を残したまま、一人寮へと駆け戻って行った。

ルードは戸口でそれを見送り、夜空を見上げた。街灯も数少ない山中で、所狭しと散らばる星屑がチカチカと瞬き、赤みがかった大きな月が山の向こうから姿を現す。

切る様な冷たい夜風が辺りの木々を唸らせる中、ルードは屋根の上へ跳んで上がった。生い茂る木々より高い位置からぐりと辺りを見回せば、林の向こうに煌々と明かりの点る六階建ての建物が二棟、二階建ての共同棟を挟んで並んでいる。

ルードは感覚を研ぎ澄まし、建物の内部を探ってみた。雑多な人間の気配の中から、異質な存在を嗅ぎ分ける。集中力を限界まで高め、ルードは目的の気配を察知した。大丈夫、今は男子寮をうろついているらしい。大方、今朝方制服を拝借した男子生徒に僅かに残った気配でもつけ回しているのだろう。記憶は消したし、まあ問題はないだろう。……彼には少々気の毒だが……。これなら薬を服用する前に竜姫がクラウドに見つかってしまような事態にはならないだろう。

ほっと、安心したようにため息をつき、ルードは屋根から飛び降りた。散歩でもして久々に外の世界を満喫したかったが、今はまずい。

舌に残る久々に味わった新鮮な血液の味を堪能しながら、ルードは
礼拝堂の中へと姿を消した。

昼下がりのティータイム

「ルード、いる？」

空は前日の悪天候が嘘の様にカラリと晴れ渡っている。そよそよと吹く乾いた風に乗って、カラスが一羽、太陽の光を全身に浴びながら、空の高い所を飛んで行くのを横目に見ながら、竜姫は薄暗い礼拝堂へと一人入っていった。

「おはよう」

「……もう昼だろうが。」

「あ、良かった。起きてた。」

「今、起きたんだよ。せっかく気持ち良く眠っていたのに……。」「空調設備はおろか、ストーブや暖炉といった類いの物が一切無い室内は、外とまるで大差無い程に冷えきっていた。制服の上にコートを着込んでいても、まだ寒い気がするのに、ルードといえば、黒いズボンと黒いワイシャツの上から薄っぺらなマントを羽織っているだけで。」

埃だらけの段上で、その白くなったマントに包まって寝ていたらしい彼は、竜姫の声に目を眩しげに細め、寝返りを打った。

眠たそうに大あくびをする。大きく開けた口を手で隠すこともせず、上顎からのぞく二本の鋭い牙が鈍く光る。

「……昨日も思ったんだけど、お日様の光を浴びても灰にはならないんだ？」

「まあ、フツの吸血鬼だったらアウトだったな。」

気怠そうに横たわったまま、ルードは答えた。

「朝日を浴びて灰になる吸血鬼の話は有名でも、日光浴びたからって消滅する悪魔の話なんぞ聞いた事あるか？」

……とは言うものの、なるほど死にはしない様だが、やはり調子はあまり良くないらしい。

「お昼ご飯買って来たんだけど、食べる？」

白いレジ袋を見せて尋ねる。

「購買のサンドイッチ。タマゴとハムと……フルーツサンドとジャムサンド。どれがいい？」

机に袋の中身を読み上げながら並べて行く。

「んじゃ、そのイチゴのやつとジャムサンド……。」

のっそりと起き上がり、ルードはそれを指差した。サンドイッチの包装をペリペリと器用に剥いて、さっそく頬張るルードの頬が一瞬うつすらと紅らんだ。

「あつ、……美味しい。結構イケるな、コレ。」

喜ぶルードに、

「お茶もあるよ。」

と、紅茶の缶を渡す。

「お、サンキュー！」

缶を開け、一口啜った所で彼の表情が僅かに曇った。

「……どうかした？」

彼の傍らにハンカチを敷いてその上に座り、残ったサンドイッチを口へと運びながら竜姫が尋ねる。

「……いや、コレ……、ストレート……？」

「？ え、何かまずかった？ でも、昨日は飲んだよね、ミルクティー……。」

「……。」

バツが悪そうに押し黙るルード。

竜姫は彼の手に握られた、食べかけのサンドイッチと、缶とを交互に見やり、

「……ルードって、もしかして……、」

「あ、甘いのが、好きなんだよ……。昔は滅多に手に入らなかったからな……。」

悪いか、と、決まり悪そうにそっぽを向くルードに、思わず吹き出しそうになるのを必死に堪える。

竜姫は、話題を変えようと、

「……ところで、明日からテスト週間なんだけど……、」
と切り出した。

学園では定期試験中と試験前一週間、寮の門限が大幅に早まり、門限後の外出は厳禁となる。

「……という訳で、放課後出歩くのが難しくなるのよ。でも、だからってルードを放っておく訳にもいかないし……。」

試験の日程表と睨み合いながら、竜姫は、

「試験さえ終わればクリスマスだし、聖夜祭が終われば冬休みなんだけど……。」

と、忌々しげに言う。

「……分かった、俺が行く。」

ルードはため息をつきながら言った。

「俺が、竜姫の部屋まで行く。……竜姫、部屋はどこだ？」

「え、女子寮三階の一番端——この礼拝堂側から見て一番左の部屋だけど——でも、大丈夫なの？」

「……まあ、何とかするさ。竜姫に無茶させて、何かあっても困るし。それに、血が飲めなくて困るのは俺だからな。」

ルードはチラリと竜姫のうなじのあたりをまるで盗み見るかの様に視線を向けた。

「……一回にある程度量を飲めば、二、三日はもつんだが、それだと竜姫の側の負担が大きくなるからな……。実際、気を失ったものな、最初の時。」

「……あ、あれは元々結界張るのに力を使って体力がもたなかっただけっ！」

言われて、竜姫は、つい思い出して顔を紅く火照らせながら反論する。

「これでも色々昔から鍛えてたんだから、普段なら絶対気なんか失わないわよ！」

——全くもって不覚であった。

……いくらアイツの件で致し方ない状況だったとはいえ、得体の知

れない奴に、あんな風に抱かれたまま、気を失うなんて。それも真夜中、魔物の力が増す時間に。

ルードでなかったらどうなっていた事か……。

「……そういえば、あの後、結局どうしたの？」

ルードに吸血を許した後から、翌朝久遠に起こされるまでの間の記憶は無い。

「……竜姫をほっぽり出す訳にもいかなかったからな。でも部屋がどこだか知らないし……、仕方ないから女子寮の寮監にお前を預けた後で、そいつの記憶を少しばかりいじくらせて貰ったよ。んで、クラウスの野郎の癪癪がおさまるまでの間、学園関係者の何人かの記憶を覗かせてもらった。……封印されてた間に何があったのか、近況を把握しておきたかったんでね。」

「……なる程、どおりで江戸時代の争いごとの事なんかを知っていた訳だ。」

「朝になってもまだ暴れてやがったから、仕方なく学校をうろついていた。……このカッコじゃ目立つから、ちょっと制服を丁重に拝借して、な。」

「……だからあの時、高等部の制服なんか着てたのか。」

「日も高くなって、いい加減キツくなってきたから、借りた服にわざと俺の気配を残して持ち主に返しておいた。……案の定、奴は昨日一日、ずっとそいつをつけ回してた。」

彼のセリフに、その誰とも知れない高等部の先輩に、深く同情してしまう。

「……で、戻って来てみれば、えらい惨状だったんでな、とてもじゃないが寝れたもんじゃない。仕方なく、元に戻すのに力を使った。……俺も魔物だから……、こんな場所で余計な力は使いたくなかったんだが……やむを得なかったからな……。どうせだからと思って力の使いついでに目眩ましの呪い^{まじな}をここに施した。ここには俺を封じていた呪いの余波がまだ残ってる。ついでに俺の気配もな。……それはちよūd良い隠れ蓑になる。」

ニヤリ、と笑いながら、

「でも、何より効果的なのは、やっぱり血だな。」

スッと腕を伸ばし、手の甲で竜姫の頬をなぞった。

「俺が俺でいられるのは、竜姫の血が俺の魔性を抑えているからだ。

……おかげで気配で奴に気付かれる事はない。」

彼は目を細め、竜姫の瞳をじっと見つめる。

「どうする？」

彼は尋ねた。

「？ どうするって……え、何？」

また、無駄に色っぽく、首筋にかかる髪をよける仕草に竜姫の心臓が鼓動を速める。

なんでこのヒトはこうなんだろう。普通にしていればただの美形で片付けられるのに、どうしてこう、いちいち無駄に色気を振り撒くのだろう。

……日々修行に明け暮れ、同年代の男の子とは取っ組み合いのケンカをするような付き合いしかした事のない竜姫にとって、ルードは彼女のキャパシティなど簡単にパンクさせてしまう、厄介な相手。なのに、この動悸が不快でないのは一体何故？

「言っただろう、量さえ貰えば二、三日はもつって。だから、どうするかって訊いているんだ。俺はどっちでも構わない。お前が選べ。」

心に咲いた紅い華

「……明日の夜、ルードがここに来るから。」

部屋へ戻って来るなりそれだけ告げて、ベッドへ横たわり、布団を頭から被ったまま動かなくなった竜姫に、

「竜姫い、どうしたのさぁ……。」

声を掛ける久遠の顔には困惑が浮かんでいた。

ルードの封印を解いてしまったせいで、クラウスはさらに厄介な相手となってしまった。遭遇してしまった際の危険度も増している。ルードに貰った薬で、竜姫自身は安全でいられるが、その効果は久遠にまでは及ばない。

余計な諍いを起こさぬよう、部屋に簡易結界を張り、一日中部屋に籠ったままだった久遠は、事情も良く分からないまま、かれこれもう二時間近くもこうしているのだ。

「……もしかして、アイツと何かあった？」

その言葉に反応する様に、ピクリと布団が動き、

「！　な、何にもないよ？　……だって、ただ血をあげに行っただけなんだから……」

と、中からくぐもった声が答えた。しかし、

「？　……ルード？　クラウスじゃなくて？」

予想外の答えに、久遠は怪訝な顔をする。

「え、く、クラウス？　……クラウスなら、廊下でうろついてた横をすり抜けて来たけど……、何もなかったよ？」

布団の端をほんの少しだけ持ち上げた隙間から僅かに顔を覗かせ、

「……薬の効果は思った以上……みたい……だよ？」

ゴニョゴニョと何かを誤魔化しているのが丸分かりの答えを口にする。

「……何も、」

布団の中で小さく丸まって、彼女は呟いた。

「何も、ないから……」

——お前が選べ。

ルードに問われ、即答できなかった。

……ルードが学園内を不用意に歩き回ったりして何かあったら困るから。

……気は失わずに済んだとしても、この時期に頻繁に貧血に悩まされるのはキツイから。

どちらの答えにも、即答できなかった理由を探せばいくらでもあげることができる。

……結局、貧血で試験勉強が疎かにして、赤点を取っては冬休みに補習で学園に残らなくてはなくなるから——と、適当な理由をつけて、毎日来て貰うことにしたのだが……。

「オーケー、分かったよ。明日の夜、窓の鍵は開けといてくれよな。」

ワザとなのか、無自覚なのか。……耳元で、そう囁き、ニツと牙を覗かせ笑う。

「それと……、今日の分、貰うぜ。」

ガリッ、と肌に牙で傷をつけ、滲んできた紅い液体を、子猫がミルクを舐める様に舌を突き出し、執拗に肌の上を滑らせる。

傷口をいじられ、ピリピリと痛む反面、くすぐったさに加え、何だかよく分からない感覚が背筋を伝う。——ぞくぞくする……、でも、不快じゃない。どこるかむしろ……、

「……にしても、夜中に女の部屋に忍んで行くなんて、なんか夜這いかけてるみたいで……なんかワクワクするよなー。」

ルードは傷口に血止めを施しながら、楽しそうに言った。

ハッと、我に返った竜姫はその言葉について過剰反応し、

「なっ!?! ちょっと!?! 何言ってるのよ!?!」
と叫んだ。

顔を真っ赤にして慌てる竜姫に、

「……おい、冗談だつて。そんなムキになるなよ。……もしかしてお前、こういう類いの話に免疫ないの？」

と弁解しながら、

「ガッコーの中とはいええ、一つ屋根の下みたいな場所にあれだけオトコがいるのに？」

おいおい、マジかよ？ ……と呆れた様子で呟いた。

凶星を突かれて返す言葉を失った竜姫は、

「……知らないっ、」

……と、自分でも「いくつの子供だよ、」と突っ込みたくなるような言葉だけを残して、早くも日が傾き始めた礼拝堂の外へ逃げ出した。

——そう、何も。何もなかったんだから……。

むしろ何かあったのはルードではなく自分の方だ。

……もてあました感情をどうにもできないまま、竜姫は心配する久遠に答えた。

「大丈夫、大丈夫だから……。」

「竜姫、そろそろ行かないと、夕飯間に合わなくなるよ？……たとえちよつとずつだとしても、血を吸われてるんだ。ちゃんと栄養補給しないと、身体がもたないよ？」

「……そうだね——、」

竜姫はのそりと起き上がり、机の上の時計を見た。

「……じゃあ、行って来るね……？」

コップと箸とを持って、竜姫はいつもにない程疲れた様子で部屋を後にした——。

従兄弟は生徒会長。

食堂は、生徒達であふれていた。

そのほとんどの生徒が友人同士、四、五人固まって座っている中、竜姫は一人、隅の方の席を選んで座る。

コップにお茶を注ぐと、ポットを探すが見当たらない。良く見れば一つ空席を挟んで座る十人程の女の子達が食後の空の皿の前で暗記カードを手に互いに問題を出し合いながら、お茶を啜っている。ポットは、その一番遠いところに置かれ、竜姫がお茶を淹れようと思えば一度席を立たねばならなかった。

それが、なんとなく面倒臭くて、空のコップをそのままに、スープの皿を手にとった。

口の中にトマトの酸味がたくさんの野菜のカケラと一緒に広がる。……トマト自体は嫌いじゃないけれど、トマト味の液体というのはどうしても好きになれない。

微妙に顔を歪めながら、竜姫は口直しのつもりでポークソテーを口へと運び、一口噛み締めた途端、更なる渋面を浮かべた。

豚肉にかかったソースにパイナップルの味が混ざっている。

微妙に甘いその味が苦手な彼女は、僅かに目を潤ませながら、白飯をかき込んだ。

先日の朝、かなりの量の朝食を残してしまった以上、今日は残すに残せない。学園の校則で、週ごとにある一定量以上食べ残しをした生徒には、三日間の外出禁止というペナルティが課せられる事になっている。

気分的に更に落ち込みそうになりながら、重たい箸を、機械的に皿と口とを往復させる。

「ところでさあ、聞いたー？」

ポットに、潤んだ瞳で熱い視線を送る彼女の隣りで、一人の女子が言った。

「白崎しろさきが昨日の夜中に寝ぼけて騒いだって話。」

「あ……、幽霊がどうか言ってたっていう、アレ？」

「そうそう。聞いた話じゃさー、なんかその日は朝からおかしかったらしいよ？」

「……おかしいって？」

「朝のHRサボった挙句、制服を誰かに盗られたって言い訳したって。トイレで気を失ってる間に服は戻って来たらしいけど、犯人の顔も覚えてないって言うの。ちょっとありえないくない？」

「……えー、白崎君が生徒会長でしょう？」

「だけどさー、それだけじゃないらしいんだよね、白崎の奇行。」

「授業中にいきなり叫びだしたり、体育のバスケットで際どいフール連発したり、……クラブ棟の階段から落ちたって話も聞いたんだけど……」

「で、極め付けが生徒会室の窓ガラス破壊事件でしょう？」

「普段そんな事するような人じゃないからさ、……先生達の信頼度も高かったし……、何かストレスでも抱えてるんじゃないかって、爺さんたちが必死にフォローしようとやっきになってるって……。」

耳を傾けるうち、竜姫の顔色はどんどん青くなっていった。

彼の「ストレス」の原因。前半はルードの仕業、後半についてはほぼ間違いなくクラウスの仕業であろう。

「……あつ、噂をすれば……」

揃って食堂の入口に目を向ける彼女達の視線の先に、彼はいた。

「誠人君まこと！」

精魂尽き果てたようにふらふら歩く彼に、

「大丈夫？」

と、声を掛けた。

……大丈夫でないことは一目瞭然なのだが、彼は、

「……やあ、竜姫ちゃん、どう？もう学校には慣れた？」

……と、空ろな瞳に取ってつけたような笑みを貼り付けて、竜姫の向かいに腰を下ろした。

「冬休みはどうするんだい？ ……母さんは、年末年始は家に来い
って言ってるけど……。」

キョロキョロと、何かを探すように目を泳がせたが、すぐ隣りで白
い目で眺める視線に気付くと、彼は何も言わずに箸を取った。

「……あー、その事なんだけど……。」

気まずい雰囲気の中、言い辛そうに切り出す。

「……お正月もあるし、私、神社の方に帰るよ……、伯母さんには
悪いけど……やっぱり巫女としての仕事を放り出す事は出来ないか
ら……。」

「……誰もいない、あの場所で、君は一体何をする気なんだい？

……たった一人で。」

彼は言った。

「……一人じゃないよ。」

だって、久遠がいる。稲穂だって。……それに今回はもう一人――。

「また、カミサマ……かい？ 実際になんかものがあるのかどう
か――なんて事を言い争うつもりはないけどさ、今、現実にはない
ものに振り回されるなんて不毛じゃないか。……竜姫ちゃんももう
中学生なんだから、夢みたいな事ばかり言っていないで、きちんと
現実を見た方がいい。田舎の寂れた神社を継ぐなんて馬鹿な事を言
うのはやめて、うちに来た方がいい……。」

……寂れた神社。夢みたいな事……。

彼らを視る事の出来ない常人である彼からすれば、真っ当な意見。
しかし、竜姫の心にそれは深く突き刺さった。

「……いるよ。神様はいる。神様だけじゃなく、魔物の類いもね。
……それに関しては、誠人くんもおく思知ったんじゃないの、
昨日？」

わざと意地悪く言う。

「……っ、あ、あれは――、」

怯えたように辺りを見回し、

「……やっぱり何か憑いてるのか、僕に？」

箸を持つ手を、見ている憐れな程にがたがた震わせる。

「き……昨日一日、朝からずっとおかしい事が続いて……。朝起きて、教室へ向かう途中トイレに寄ったら突然個室に引っ張り込まれて……。何がなんだか分からないうちに気を失って……。気がついた時には下着を残して制服一式無くなってる……。あんな格好じゃ出るに出来なくて困っていたんだが……。いつの間にか元通りに服を着ていて……。どうもその間の記憶が曖昧で……。」

……その犯人、間違はなくルードね……。あの時着ていた制服が誠人くんの物だったなんて……。

弱り切った様子で語る彼を前に、竜姫は複雑な顔をした。

「その後も……。授業中にいきなり頭を思い切り殴り飛ばされたり、……。なんだか身体を操られたみたい……。こう、自分の身体なのに、自分の思う通りに動かせないっていうか……。他にも、階段から突き落とされたり……。他に誰もいなかったのに……。終いには剣を振り回して暴れる男の幻覚まで……。」

「……それ、幻覚じゃないから。」

……全く、あのクラウドを相手によく無事でいられたものだ。

「その、剣を振り回して暴れたっていう男が、貴方を殴ったり、操ったり、その他諸々をやらかした犯人よ。」

……まあ、正確には約一件はまた別の者の仕業なのだが……、

「え……。まさか……？」

信じていない様子の彼に、竜姫は畳み掛けるように、

「その幻覚の男って、金髪じゃなかった？　それも、地面にまで届く様な長髪。日本人にしちゃ白っぽすぎる肌……。天使みたいに翼や輪っかをつけて、古代ローマ人みたいな服装で。振り回した剣にはキリストの神の御印がついていなかった？」

「……え、あ、ああ……。そう言われてみれば……。確かに……。でも、どうしてそんなに詳しく……？」

「——知っているのかって？　……。だってそこにいるんだもの……。」

クラウドは、残飯が入れられたゴミ箱の前に、けしからんとうそぶいている。

「ええ!？」

「……大丈夫よ。貴方が関係ないと悟ったなら、いくらアイツでも一般人相手にいつまでも無駄な事はしないから。」

……誠人は常人だが、神崎の血を引いている。一瞬でもクラウドの姿が視えたのは、命の危機に、彼の中の神崎の血が反応したからだろう。

……しかし彼は、家族揃っての敬虔なキリスト教信者だ。

教師陣の信頼も厚く、教会関係者にも受けの良い彼だ。こうして同じ空間にいるというのにまるで反応を見せないクラウドの様子を見れば、彼の疑いが晴れた事は確かであろう。

カプセルを口に含み、飲み下しながら、

「……それでも心配なら、この札を部屋の扉に貼りなさい。少なくとも貴方の部屋に、霊的な者が出入りするのを防いでくれるから……」

と、パーカーのポケットから短冊サイズの半紙と筆ペンを取り出し、さらさらと神言を記して彼に渡した。

「略式だけど、二、三日はもつから。」

「……なんか怪しいツボとか売り付ける、悪徳商法みたいだな……。」

顔をしかめる誠人。しかし、術の気配を敏感に感じ取り、ピクリと眉をはねあげたクラウドに、竜姫は慌てて席を立つ。

「……じゃあ、また。後で伯母さんには連絡入れるけど、誠人くんからも言っておいてね。」

……用心深く、クラウドから一番遠い流し台を選んで、食器を洗い、いそいそと早足に部屋へと戻った。

紅い棘（トゲ）。

「……では、今日はここまで。今年最後の授業だ。今日やった所は試験に出すからな、ちゃんと復習しておけよ。」

七時間目の終業の鐘が鳴り響く中、頭の禿げかけた自称日系二世のアメリカ人だという英語教師が、ざわつき始めた教室で、声を張り上げた。

黒板いっぱいに書かれた小さく読みにくい、雑然とした板書を、それでも必死に書き写す生徒の前で、無情にも黒板消しを手に取り、無数のチョークの軌跡を無に帰し始めた。途端、教室中から悲鳴に似た叫び声があがる。

しかし、自称アメリカ人の中年男性教師は非難の声を物ともせず、綺麗になった黒板を背に、今日の日直に終業の挨拶のための号令を促した。

ノートにかじり付くかのような必死の形相で板書を書き写していた男子生徒は、えらく迷惑そうな顔をしながら、渋々立ち上がり、

「きりいーつ、れーい、ありがとうございますー、」

と、やる気の無い号令を発し、

「ありがとーござーしたー、」

と、これまた適当な挨拶が、教室中から返った。

が、それには頓着せず、もぐもぐと、あまり見栄えの良くない口髭を動かしながら、うんうんと頷き、教師は教室を後にした。

ガタガタと、イスの足が床面をこする音があちこちから発せられ、写し切れなかったノートをお互い補い合うべく、数人ずつ固まって互いのノートを見せ合う。

「……問いの二十八の答えはー？」

「ここの慣用句、何て意味だっけー？」

「問い三十の英単語の意味はー？」

試験も間近に迫ったこの時期、誰の顔にも切羽詰まった表情が浮か

ぶ。

そんな中、英語教師と入れ替わる様に入ってきた、年老いた定年
間近の担任は、

「ホームルームを始めるぞ。」

手にした大量の印刷物で教壇を叩き、わいわいがやがや賑やかな教
室を鎮めにかかる。

「……あー、皆も重々承知しているだろうが、来週水曜日から学期
末試験が始まる。よって今日から試験週間に入る。いつもの通り、
職員室は立ち入り禁止、各教科の指導準備室も同様だ。午後五時以
降の外出は、学内の図書館以外は禁止。夜九時以降の寮内の行き来
も禁止だ。違反があった場合、冬休みの帰省が制限される事になる。
また、赤点を取った者は、冬休み中の補講へ強制参加になるからな
ー、ちゃんと試験勉強するんだぞー？」

言いながら、試験週間の期間中特有の校則についての注意事項が
ムダにつらつら書き綴られたプリントを配付する。

「……まあ、皆も時間は惜しいだろう、今日のホームルームはこれ
までにしてやるから、全員直ちに寮へ戻るんだぞ！」

「起立、礼。」

担任の言葉に、日直が号令をかける。

皆、静かに黙礼を返し、それぞれ友人とかたまりながら教室を出
て行く。

「あー……そうだ、おーい、神崎。神崎いるかー？」

そそくさと、足早に教室を後にしようとしていた竜姫は、担任に
呼ばれ、何用かと出口へ向いていた足を教壇に向けた。

「神崎、高等部の生徒会顧問の先生がお呼びだ。帰る前に、高等部
の生徒指導室へ寄って行ってくれ。」

「……あ、はい、分かりました。」

呼び出しとは何事だ、私、何かやったかしらん、と、一瞬訳が分
からず戸惑ったものの、

「……ああ、もしかして誠人くんの事かな？」

……そういえば、彼の奇行に頭を悩ます面々がいるという噂を昨夜聞いたばかりだ。

昨日のあの様子からすれば、今日はもう何事も無く、平和に時を過ごせただろうと思っていたのだが……。

「もしかして、また何かあったのかな……。」

昨日は、彼の言い様に腹を立て、意地の悪い事をしてしまったが、元々、面倒に巻き込んだのはこちらである。責任を感じない訳にはいかない。

「すみません、神崎です。失礼してもよろしいですか？」

軽く、部屋の扉をノックし、中の応答を待つ。……が、何の返事も無い。首を傾げながらも、もう一度、今度は少し強めに叩いてみる。……が、やはり応答は無い。

……と、

「……君が神崎くんかね？彼の従妹だとかいう？」

Ｌ字型をした校舎の、中等部と高等部の境である角の部屋。その、高等部へと続く廊下の曲がり角から出て来たのは、竜姫を呼び付けた張本人だった。

「……はい、担任の笹木先生から、天宮先生が呼びだとは伺ったのですが……。」

軽く、礼をして、竜姫は言った。

「……取りあえず入りなさい。」

でっぴり太った巨体から生えた太い腕の先についたタラコのように太く赤い指に、小さな鍵をつまんで、ドアノブの鍵穴に差し込み、右に回してロックを解除し、扉を押し開け、

「そこに座りなさい。」

と、指差した。

部屋には、折り畳み式の長机が四つ、くっつけて置かれ、上に白いテーブルクロスがかけられており、周りを囲むようにパイプイスが六つ並んでいた。

彼は、その一番下座の席に座るよう、竜姫を促し、彼自身は上座に、

彼の体のサイズには小さすぎるパイプイスをどけて、オフィスの重役のイスを持って来た上で、それに腰掛けた。

「……あー、それで、君はご両親を亡くして、君の母親の姉であった白崎君のお母上に引き取られた、と聞いたが？」

「？ ……え、あ、はい……。そうですけど……？」

今まで全校集会の壇上でしか見た事のない人。事実上、初対面の相手に対し、いきなりプライベートな身の上に関する話題に踏み込んで来た。

「……どうも、白崎君がねえ、君の事で悩みを抱えているらしい。」
「……は、はあ、」

予想通り誠人の名が出て来た事に関しては、やっぱりな……、とも思ったが、その話に絡めて自分の名前が出て来た事に、心当たりの無い竜姫は取りあえずの相づちを打つ。

「……君の実家の家業は神社だとも聞いたが、事実か？」

「はい、間違いありません。」

彼の、問いの意図をつかめぬままに答える。

「……ちなみに、君のご両親の亡くなった訳は？」

対して興味もなさそうに、彼は尋ねた。

両親の、死因。竜姫が、一番触れて欲しくない話題。今も、あの日の様な雨の日には夢にうなされ、頭痛に苦しめられる、忘れたくても忘れられない記憶。

心の中の、一番傷つきやすいデリケートな部分にズカズカと、土足で踏み荒らす様な、心無い質問に、息の詰まる思いで、

「……事故死です。」

と、事実とは違う、建て前上の理由を述べる。

「……それなのに、君は彼のご両親の厚意を無下にしてまで、家業を継ぐつもりだというのかね？」

「……は——？」

一瞬、何を言われたのか、分からなかった。

「おおいなる方の御心に背いて邪教などを信仰するから、そんな死

に方をするんだ。君は白崎君のご両親の計らいで、おおいなる方の教えに触れる機会を得たにも関わらず、家業を継ぐと言い張っているそうだな？」

はあ、と。蔑む様な目で竜姫を見下す態度を隠す事もせず、ため息をついた。

「……君が学園に来た時分から、白崎君に良く相談を持ち掛けられていたんだよ。彼は君の事を随分心配していたよ。このまま、ありもしない幻想に囚われ、君の愚かな二親の二の舞いに、君がなってしまう事にね……。」

違う、と。何もかもをここでぶちまけて、今すぐ全てを否定してやりたかった。だけど……。

「すいません、白崎です。失礼してもよろしいですか？」

「おお、白崎君か。ちょうどいい。入りなさい。」

打って変わって、歓迎ムードに笑みを浮かべて彼を迎え入れる。

「今丁度、彼女と話をしていたところだ。……全く、君が心配するのも無理はないよ。まだまだ子供で、一人では何もできないくせに……、おおいなる方に背いて邪教の道を歩もう等、何と罪深い行いか……。」

その、言葉は、竜姫の一番痛い場所を突いていた。込み上げる、感情——怒り、悲しみ、悔しさ、憤り、痛み——。溢れる程の負の感情を、必死に堪えていたものが、目頭を熱くする。もう、一瞬だって耐えていられなかった。

「バカッ、最低!!」

竜姫は、誠人の左頬を力一杯平手打ち、部屋を飛び出した。悔しくて、悔しくて、そして痛くて。こぼれ落ちそうになる涙を堪えながら、竜姫は走った。

……巫女で、あり続けるために——。

紅き救世主

「ねえ、竜姫い、今度は一体どうしたのさあ……、」

昨日に続き、またもベッドに潜り込んで動かなくなってしまった竜姫に、やはり訳の分からぬまま、久遠は困り果てていた。

ただ、昨日と今日では明らかに竜姫の様子が異なっている。

昨日は昨日で何か悩んでいる——というよりは戸惑っている——といった感じで、深刻さは感じられなかった。

だが、今日は——。

ひどく思い詰めた顔をしていた。今にも泣き出してしまいそうなのを、必死に堪えていた。

……昨日、夕食から戻って来た後にも、悲しげな顔をしていた。

「……竜姫、何か辛い事があったんだね……？」

もどかしさと悔しさで、久遠はうつむき、グッと奥歯を噛み締めた。

「おい、お前ら。何辛気臭い顔してるんだ？」

ガラリと、鍵のかかっているガラス窓を引き開けて、彼は部屋の中をグルリと見回しながら、部屋へと降り立った。

「……試験期間中だと言って言うから来てやったのに、勉強もしねえでこんな早い時間からベッドの中でお休みとはどういう事だ？」

つかつかと、ベッドへ歩み寄り、力任せに布団をひっぺがす。

「ちよ、ちよっと、いきなり何するのよ！」

奪われた布団を取り返そうととっさに手を伸ばすが届かない。

蛍光灯の明かりが、布団の中の暗闇に馴れた目には眩しくて、反射的に目を覆う。

「あー……、」

しかし、目尻に残るものを隠すには、一瞬遅かった様だ。

ルードは、

「……えーと、お前。……確か久遠、だったか？」

彼の後ろで声もなく口をパクパクさせている狐に声をかけ、

「……もしかして、昨日からこんな調子か？」

と尋ねた。

「……。」

久遠はその問いには答えを返さなかったが、その沈黙を肯定ととらえたルードは、

「……ゆ、夕べの事は……わ、悪かった……から謝る……。別にナニしようってワケじゃないから、気にするな。」

「……ん、吸血鬼。お前、竜姫に何かしたのか？」

殺気を帯びた声で、久遠がルードに問う。

「いや、実際には特に何もしてないぜ？ ……というか、俺としちゃあからかうつもりもなかったんだが……、まあ竜姫にとっちゃ、ちよっと冗談の過ぎる話だったらしくてな……。」

ぽりぽり頭をかきながら、吸血鬼は困った様に言った。

「……まさか、こんな泣く程過剰反応されるとは思ってなかったんだよ……。」

「なっ、これはちがつ、」

ガバツと起き上がり、竜姫は彼の言葉を慌てて否定した。

「こ、これは……別にルードのせいじゃ……。」

……完全に、彼のせいでないとも言いきれないのだが、しかしあくまで事の原因は別のところにある。今回の事はきっかけに過ぎない。

「……視えないものが視えるって、色々大変なのよ……。」

寂しげに、竜姫は言った。

「キリストの『神』——『創造主』。——“大いなる御方”と呼ばれる存在や、その教えを、否定する気はないし、そのつもりもない……。だけど、やっぱり私は好きになれないし、その教えに従う事はできない……。」

一度治まった目頭の熱が、再燃するのを堪えながら、

「……でも、子供の私にできる事は限られて……。死んだ父さんと母さんを侮辱されても、反論することもできない……。久遠や稲

穂を悪者みたいに言われても、何もできない……。」「
声を震わせる。

「……誰かに、何か言われたんだね……？ ……、悔しいな。いつもなら、ボクが一番竜姫の近くににいるのに……、竜姫を傷つける様な事を言う奴にはそれなりの天罰を下してやるのに……。」「
ギリッ、と床板に爪を立て悔しがる久遠。

「……子供だから、ねえ。まあ、確かに地位も権力も無いままに、金も力も持った者に立ち向かうのは困難だ。そんなのは何百年も前から決まってる。だが、お前はそれを分かった上でこういう道を選んだんだろう、竜姫。」「

ルードは、しかし冷ややかに言った。

「まあ、どんな事情があったかなんて、俺の知るところじゃないが、お前には力がある。相性が悪いと言っていたこの土地で、あの強力な俺の封印を解き、一時的なものだったとはいえ、奴の目を誤魔化す程の障壁を張れるだけの力がな。」「

「……っ、でも、視えない常人にとってはあってもなくても分からない。……どころか、ここでは邪教呼ばわりされるのよ。」「
自ら卑下する様な竜姫の言葉にルードは、

「……何だ、お前もしかして、その力、いららないとか思ってる？」「
と、軽く尋ねた。

「！ そんな訳ないじゃない、この力が無かったら私、巫女の資格を失っちゃう！」「

それを、ムキになって否定する彼女に、

「……巫女を辞めれば、辛い事も無くなるかもしれないぜ？」「
ニヤリ、と笑みを浮かべたその顔は、気の弱い人間が見たなら気絶したかもしれない程凄絶なものだった。

「っ、ダメ！ 辞められないわ！」「

しかし、竜姫は絞り出す様に言った。そんな彼女にルードは、

「……だろうな。お前、二度目に会った時俺に言ったもんなあ。『我が祭神を愚弄しないで』……あん時の自信を何処へ忘れて来た？」

……力の及ばない事なんて、この世には幾らでもあるんだ。いつまでもグジグジ悩むくらいならいっそこで豪快にブチまけちまえよ。スッキリするぜ？」

と、先程とは口調までガラリと変えて、彼女をいたわる様に言った。

「……私は、巫女だもの。そんな事、できないよ……、」

だが、竜姫は彼の提案を否定した。

「は？ どうして……。」

その、否定の理由が理解できずにルードが聞き返す。

「……巫女の力は、すなわち霊力。持って生まれたその力を、長年の修行で育て上げて来た……。心を強くする修行……。精神を磨く修行……。心を負の感情に支配されれば力は邪気に染まり、巫女でいられなくなってしまう……。こんなグチャグチャな心の中をぶちまけたりなんかすれば、霊力の塊である久遠にだって影響が……っ、」

視界が歪む程の涙を抱えたまま、それを決してこぼすまいと上を向き、竜姫は答えた。

「邪気……。ねエ……。」

ルードは、右手の親指と人差し指とで竜姫のあごを捕らえ、上を向き過ぎたそれを、ナナメ四十五度の角度に固定する。

「……俺が、喰ってやろうか？」

紅い瞳が、にじむ視界の中、やけに鮮やかに映る。

「く、喰うって……。どうやって……。」

その視線に、心の中まで見通されていそうな気さえする、強い視線。ルードは、楽しそうに笑い、

「……知りたい？」

そう言って、顔を近付け……。そっと、乾いた唇に口付けを落とす。

「……ん、んんっ、」

驚く竜姫が抵抗するも、続けて何度も角度を変え、落とされる口付けに、心の奥に咲いた華が、彼を拒む事をためらわせる。

「あっ、お前っ、竜姫に何をするっ！」

……竜姫本人より驚いた様子の久遠が、二人の間に割って入ろうと立上がり、……立ち上がろうとして固まった。

——……！ 動けない！？ ……コイツ、まさか？

ルードは、歯がみする久遠を尻目に、竜姫の唇を舌でなぞり、刺激に反応して僅かに開いた隙間に舌を潜り込ませた。暖かく、潤った口内で舌と舌とを絡ませて、弄ぶ。次から次へと枯れる事なく湧いて来る潤いを、ついばみ、吸い上げて、ルードはそれを味わうかの様に口内を侵略していく。

「ふっ、……んっ、」

初めてのキス。触れた唇の暖かさに、我が物顔で口内をはい回るルードの舌の感触に、驚きこそしたが、恐怖や嫌悪といった感情が、一切湧いて来ない。

……どころか、されるがままに弄ばれているこの状況が、何故だか何か大きなものに包み込まれているようで、安心感すら感じる。

心に生まれた余裕が、今まで幅を利かせていた暗い気持ちを押し退け、居場所を失った感情が、すうっ、と吸い取られていく。

「……どうだ？ これで少しは楽になったんじゃないか？」

唾液に濡れた舌を引っ込め、湿った唇をペロリと舐めながら、ルードは言った。

「……っ、」

……反論しようにも、実際にこうも確かに軽くなって浮上した気持ちちは誤魔化せない。しかも途中から抵抗する気も失せたとなつては、彼を責める余地などあるはずもない。

「……ふ、ファーストキスだったのに……」

と、呟くくらいしか、彼女にできる事は無かった。

……一方的なキスに対する竜姫の反応に、久遠は口をぱかっと開けたまま、九本の尾を凍らせた。

「……あんまり我慢し過ぎるのもどうかと思うぜ？ 感情をコントロールするたって、人間である以上、どんなに修行を積んだところで完璧なんてあり得ないんだ。コントロールしきれない感情は、

心を弱らせる。……弱った心は魔を引き寄せる。そんな事になる前に、さっさと吐き出しちまう方が得策だと、俺は思うがね。」

その言葉に、竜姫はハツとする。

「ルード……、」

「そ、いい例がここにいるだろ？ ……ま、俺の場合は他にも色々特殊な事情が重なっちゃったが……。」

ぽんぽん竜姫の頭をはたきながら、

「さて、そろそろ血をくれないか？ ……でないとそろそろヤバそうだ……。」

よくよく見てみれば、ルードの額に脂汗が光っている。

「！ ルード、どうかしたの？」

荒い息をし始めたルードに、竜姫は慌てて尋ねる。

「……ここへ来るのに力を……目眩ましの術を使った……。その上で邪気を喰ったからな……。俺の中でヴァンパイアと悪魔が邪氣の力を欲して暴れてやがる……。」

「え……、そ、それって……、」

「……別にお前のせいじゃない。この程度で精神のバランスを崩す不安定な俺の意識の問題だ……。大丈夫だ、この位なら血を飲めばすぐに治まる。」

そう、竜姫に告げるルードの中に感じるとてつもない力の気配。

その、凄まじい邪氣の気配が、それまでわいせつ行為を働いた吸血鬼に対して、まるで怒りもしない竜姫にショックを隠せなかった久遠から、キスの事実など砂粒のカケラも残さない強風が、彼の思考を吹き飛ばした。苦しげにうずくまるルードの前にひざまずき、自ら襟元を開放し、首筋をさらして彼に寄り添う竜姫を見ながら、久遠の意識はルードに向けられていた。

日焼けの取れた白い柔肌に牙が刺さり、ルードが竜姫の首へと食いつくのを見ながら、久遠はその気配に圧倒され、何を思う事すらできなかった。

……それほど強烈な邪氣が、次の瞬間には嘘の様になりを潜めた。

ルードが、ほんの一、二回喉を鳴らす間に、邪気は跡形もなく消えて去っていた。

……いや、違う。消えたわけじゃない。おそらく、この吸血鬼の中に封じ込まれただけだろう。……竜姫の、血の力で。

「……大丈夫？」

「ああ、もう問題ない。……それよりお前、ちゃんと勉強しろよ？ 赤点なんか取って補習になったとか言ったらホントに夜這いに来るからな？」

白い目で見えるルードに、竜姫は顔を真っ赤にして枕を投げ付け、「じゃ、俺はもう退散するから。……ベンキョーしとけよー！」それをやすやすとよけて、ルードは窓から飛び降りていった。

後を追う様に窓にかじりつき、竜姫が下を見ると、ルードはひらひらと手を振りながら、のんびりとした足取りで、旧礼拝堂のある林へと歩いて行く。

「……なんだかもう、昨日からルードに振り回されっ放しだわ……私……。」

へなへなど、その場に崩れ落ち、竜姫は呟いた。

「……竜姫……。」

久遠は、そんな彼女に複雑な想いを抱いていた――。

あかいきずあと。

「……話がある。」

夜も更け、草木も眠る丑三つ時。真っ暗な礼拝堂を訪れた彼は、屋根の上に寝転がる人物に声を掛けた。

「……おう、こんな時間に何の用だ？」

手振りで登って来る様促し、ルードは面倒臭そうに起き上がった。

「いいのか？ 外を出歩いて。アイツに見つかっちまうかも知れないってのに。」

ピョンピョンと、体重を感じさせない身軽な動作で木々の枝を伝い、屋根へと上がった久遠は、

「……その危険をおかしてでも、お前に確認しておきたい事があった。」

闇の中、紅と金に光る瞳が交差する。

「……あー、もしかして、竜姫にした事怒ってんのか？ ……心配

すんな、他意はねーから。あれは単に邪気を喰った、それだけの意味しかねーよ。」

慌てて弁解するルードに、

「……もちろん、その件についても色々言いたい事はあるが……、今回はそれとは別件だ。」

と、顔には今にも張り倒してやりたいと書かれた文字を貼り付けながらも、声だけは平静を装う久遠が言った。

「？ じゃあ一体何の用だ？」

尋ねるルードに、

「お前が竜姫に望んだ契約の、詳細を確認しに来たんだ。」

久遠は、

「お前はクラウドを……あの天使を倒すのだと言ったな？」
と、逆に問い返した。

「お前の言う『倒す』は、『殺す』と同意儀だろうか？ ……奴を殺

した後はどうなる？」

尖った耳を絶えず動かし、辺りの気配に細心の注意を払いながら、久遠は重ねて問い掛ける。

「お前の事情は聞いている。ボクとしても、奴は色々厄介な相手だ。どうにかできるなら、どうにかしたいというのが本音だ。……だが、奴を殺して、目的を遂げた後、お前はもうするつもりなんだ？」

「？　どうするも何も……、竜姫に任せるつもりなんだが？　……殺すも封印するも好きにしろ、ってな。」

ぽりぽりと頭をかきながら、軽く流すルードに、

「……危ういな。」

久遠は冷たく言った。

「さっき、お前から感じた邪気は、そこらをうろつく有象無象の妖怪や怨霊を束にしてもまだ足りない程だった。それだけの邪気を制しているのは脆弱なお前の意識だけなのだろう？」

久遠の言葉に、

「脆弱って……、まあ否定はできねーけど……、」

ルードは悔しげに呟く。

「……そうである以上、お前、クラウドを殺した後で、自分を失くしてしまいかねないぞ？」

久遠の指摘に、ルードは眉間にシワを寄せる。

「……そもそも、その意識、一度悪魔に魂ごと喰われているんだろう？　……ならば、その意識を保つ強い想いを失ったが最後、お前の意識は飲み込まれるぞ。」

ルードは、こちらを見つめる金の瞳から、フィツと目を逸らし、拳を握り締めた。

「……そうなれば、あれだけの邪気が制御もされないまま暴れ回る事になる。言っておくが、あんな邪気、ボク達の手にも負えるものじゃない。」

久遠は、突き放す様に、とどめの一言を放つ。

「お前の今後の身の振り方が定まらぬ限り、ボクも姐さんも、あの

契約に頷く事は無いぞ。」

「……ついこないだまで、それと、後はいつ狂うかしか考える事になかった俺には、難しい要求だな……」

皮肉な笑みを浮かべながらも、ルードは頭を抱える。

「……時間はまだある。良く考えるといい。」

久遠は、空を見上げて言う。

「相談には乗ってやる。助けが必要なら手を貸してやる。」

言葉を発する度、息が白く夜空に消えて行く。

「……そりゃ、どうも。しかし、どういう風の吹き回しだい？ ……てつきりあいつに近付くな——とでも言いに来たんだと思っただのに……。」

皮肉を多分に含んだセリフ。

久遠は久遠で、牙を見せて妖しい笑みを返す。

「……お前に竜姫の血が必要な様に、今の竜姫にはお前の存在が必要な様だからな。」

けっ、と、行儀悪く吐き捨てる。

「……は？ どういう事だ、それは？」

面食らうルードに、

「ふん、それ位自分で考えろっ、何でそんな事をお前に懇切丁寧に説明してやらなきゃならない？ ……このボクがっ！」

すねた子供の様に噛み付き、

「竜姫が小さい頃からずっと、……ずっと一緒にいたのはボク。遊びの相手も修行の練習相手も、ボクだったんだ……。竜姫の両親が他界した今、彼女の事を一番分かっているのもボク……。だと、思っていたんだけど……。」

久遠は、少し寂しそうに呟いた。

「今回の事に関しては怒ってもいるが、……感謝もしている。しゃくではあるが、お前のおかげで助かった。」

「……俺も、ある意味似た様な立場にいるから……な……、」

ルードは、気怠そうな様子で、大の字に寝転がり、目の前に広がる

広大な夜空に浮かぶ、たくさんの星に手を伸ばした。

「俺は、悪魔の記憶を持っている。創世の歴史だとか、この世の理なんかも、この頭の中を探せば出て来る。」

掌の指と指の間から、星空を透かして見ながら、彼は、

「……だがそれは、元常人の俺にとっては手に余るモノだ。……この世の全てが分かるなんて、あまり愉快なもんじゃない。……正直、気が狂いそうになる。」

遙か彼方に浮かぶ、ちっぽけな星々。澄んだ空気の中、つかめそうな星屑を、ルードは両手を空に掲げ、いっぱいに広げた掌を力一杯握り締めた。

「……魔物の力は、常人だった俺には手に余るものだった。当然、制御どころの話じゃない。結果として俺は、多くの命を手にかけた。後悔を抱えたまま封印され、俺は、力に飲み込まれまいと、狂うまいと踏み止どまるのが精一杯だった……。」

空をつかんだだけの拳を静かに降ろし、目蓋を閉じる。

「狂いそうになる中、たった一人。孤独の中、苦しみをぶちまける相手もいなくて……。それが、延々と続くんだぜ？ そりゃあ辛いなんで生易しいもんじゃない。……まあ、俺に殺された人達の気持ちを想えば、当然の罰なのかも知れないが……。」

ルードは、自嘲する様に笑い、

「……あんな想いを、俺はあいつにさせたくなかった。……ただ、それだけの話だ。」

そう、話を締め括った。

「……さあ、そろそろ戻れよ。……クラウドは今、新しい方の礼拝堂で居眠り中だ。今なら奴に見つからずに帰れるぜ？」

……どうやら、話過ぎたと思ったらしい。追い払うかの様に、久遠に告げる。

「……一つ、礼代わりに忠告してやるよ。この世の神は、何も聖人ばかりじゃない。同時に、この世の魔物も、悪党ばかりじゃない。——それだけは忘れるな。」

久遠は、揺れる紅い瞳に振り向き、それだけ言い残すと、あっさり屋根から飛び下り、木々の茂みに光る金の毛皮を隠して林の中へとあっという間に姿を消した。

「……そういや、アイツ……見るからに妖怪……なんだよな……」

……何で神なんかやってるんだ？」

ふと浮かんだ疑問を呟き、ルードは一人考え込む。――木々も凍る寒空の下、夜が明けるまで、ずっと……。

揺れる心は、

「……あー、久しぶりに頭使ったら腹減ったな……。」

東の空が、太陽の気配に白々明けて来るまでずっと、礼拝堂の屋根に掲げられた十字架の下に寝転がり、夜空を見上げたまま過ごしたルードは、朝日から逃れる様に室内へと場所を移して、この数日間ですっかり定位置と化した壇上で大の字になった。

——夕べ、あの狐に言われた事。……今後の身の振り方について考えろ、と。

彼の意見は確かに的を射たものだった。今、ルードの意識が消えずにあるのは強い憎しみのせい。……ならば、その憎しみを晴らし、唯一の執着が無くなればどうなるのか——。

考えるまでもないだろう。……恐らく過日の惨劇を繰り返す——いや、目的を失った分、無分別さが更に増し、より多くの悲劇を呼ぶだろう。

「……竜姫に血を貰い続ける事が出来れば……少しはマシになるかも——……だけど、それだって俺の意識が消えずにあればの話だもんな……。」

竜姫の血は力の暴走を抑制してくれるが、それとて、常識や道徳心といった人間らしい心が持つ制御装置が無くなってしまえば、いくら力を抑えても無意味だ。

「この俺が、この世に生きる意味なんてのを真剣に考える日が来るなんて、思いもしなかったな……。」

まだ、人間だった頃ですら、日々考える事といえば、明日を生きるための食べ物と金の事ばかり。せいぜいが、恋や友情についての、今となっては馬鹿らしい程のちっぽけな悩みごとを考えている程度で。

「……ここしばらく……奴を殺して、俺も死のうとか考えるのに忙しかった俺が……っ、ははっ、笑っちゃもうよな……。」

だが、少なくとも今は生きている。……その証拠に、

「あー……ヤベー、マジ腹減った……。……でも昼日中に外出歩くのも……かったるいなー、……。さて、どうしたもんか……。」

まだ、日は昇ったばかり。時間的にもさっき始業の鐘が鳴ったばかりだ。当然、日が落ちるまでにはだいぶ時間がある。

「……仕方ない、何か適当に見繕って来るか……。」

連日の晴天に、ルードは恨めしげに空に浮かぶ太陽を見上げ――すぐに痛そうにしかめた顔を、視線ごと逸らした。

ザクザクと、地面に降りた霜が、足を踏み出す度に楽しげな音を出す。

冬の弱々しい日差しの中でも、日だまりの中にある霜は既にかたが溶けて消え、代わりに水気を含んぬかるんだ地面が小さな水溜まりを抱え、水浴びに来る鳥達を迎え入れる。

しかし、日光を避けてルードが選んだ林の道は、まだ溶けないままの霜柱が、光の届かない暗い道を白く染め上げて、一層の寒々しさを演出している。

「……さて、どうしたもんかね……。」

旧礼拝堂を囲む林を抜け、目の前に建つ寮を見上げて、ルードは呟いた。

こちら側から見て、T字の形の建物。Tの縦棒部分が共同棟になっており、その一階に食堂がある事を、あの日竜姫を礼拝堂へ呼び出しに行った時に知ったのだが、生徒達が皆、登校してしまった後では、食べ物等残っているはずもない。

共同棟を挟んで左が女子寮なのだが、竜姫に食料をたかろうにも、この時間では彼女も寮にはいないだろう。

……男子寮に忍び込んで、生徒達の手持ちの菓子類を漁ろうかとも考えたが、クラウスの気配を感じて断念した。

ルードは仕方なく、寮の建物を迂回して通り過ぎ、校舎へと足を進める。

L字型をしたこちら側は高等部、角を挟んだ向こう側が中等部に

なっている。

そして、高等部のすぐ隣りに建つ、三階建ての縦長の建物はクラブ棟になっていて、中には学食やカフェテリア、購買も入っている。そう、この学園の建物を上からみると、ちょうど「片」の文字に見えるのだ。

……ちなみに、片桐学園と言う名にちなんでこんな配置になったらしい……、というのはこの学園の都市伝説の一つ……だったりするのだが……。

そんなものなど知るはずもないルードは、当然のように、購買を目指して歩き出した。

まだ、一時間目の授業中なのだろう。校舎はしんと静まり返っている。

ただ、校舎の向こう側にあるグラウンドからは、威勢の良い掛け声と、ボールを蹴る音が聞こえて来る。

恐らく体育の授業中なのだろうが、辺りに反射して響く野太い男の声に、ルードは、うんざりといった表情を見せる。

が、雑音だと聞き流した声の中に、聞き覚えのある声が混じった気がして、ルードは不意に顔を上げた。

「……昨日、彼を殴った事は謝ります。ですが、この件はあくまで神崎家と白崎家の問題です。天宮先生のお手を煩わせる事は何もありません。」

……耳を澄ませてみれば、やはり竜姫の声。

「何を言うか。私は彼に相談を受けているんだ。模範生である彼の悩みを聞き、助力するのは教師として当然の行為だろう。」

その、彼女の声と重なる様に聞こえてきた男の声。

「……彼や彼のご両親との話し合いが足りていなかった事は事実です。……私の両親が亡くなってまだ半年です。それから色々バタバタしていましたから、……将来の話については後回しにしてみました。……そのせいで彼に――白崎先輩にご心配をお掛けしたのなら、それについても後で謝ります。」

その、男のセリフに抗う様に、必死に訴える声。

……どうやら校舎とクラブ棟との間の狭い通路の方から聞こえて来る。ルードは、足音を忍ばせ、声のする方へ近付いて行く。

「事が落ち着いたら、改めてお話するつもりでいました。白崎先輩にも、彼のご両親にも……。」

「……話をしたとて、何が変わる？　なるほど、日本の法律には宗教の自由が謳われているが、ではなぜ君はこの学園へ来た？　君の信じる邪教の神ではなく、我らの大いなる神を讃えるこの学園に？」

「……っ、そ、それは……、」

竜姫が言葉に詰まったのを見て、男は、畳み掛ける様に言った。

「君がこの学園に来たのは、白崎君のご両親のご意向だろう。違うか？」

校舎と校舎に挟まれて、ちょうど陰になったこの場所は、隠れるにはもってこいだった。ルードは手近な茂みに身を潜め、彼らの会話を耳を傾けた。

「……そうです。」

竜姫が悔しそうに答える。

角度的に、相手の男の顔は見えないが、竜姫の表情はとてよく見える。

「では、君が彼らの提案を断らなかった理由は何だ？」

意地悪く尋ねる男の手には、やたらと高そうな葉巻が握られている。

「……それはっ、……その……、」

言い辛そうに口ごもる竜姫に、男はわざとらしく煙を吹き掛け、

「まあ、自分で稼げないお前が、世話になっている身でアレコレ言えないよなあ？」

肩を震わせた。

「何せ未成年なんだ。社会的責任を何一つ果たしていないお前に、何かを選ぶ権利なんか無いんだよ。」

「……確かに、今はそうかもしれませんが。でも、中学さえ卒業すれば、働ける様になります。……働けば収入を得られる。アルバイト

でも、私一人食べていけるだけ稼げれば、家や土地はありますから、何とかやっていけます。」

……未来を語るには似合わない、悲壮な表情で、竜姫は言い返した。
「……ふん、なぜそこまで寂れた神社等にこだわる？ 得体の知れないものを祭る化け物社を？」

ルードは、その言葉にピクリと眉をひそめた。

……九本の尾を持つ狐は、確かに妖怪なのだが、化け物と言うのは違う気がしたのだ。

「……先生がどう思おうと構いませんが、私にとっては大切な存在なんです。それに、私が神社を継ぐ事は、死んだ両親の願いでしたから。」

それは、あの日と同じ、自信を秘めた言霊。……しかし、彼女の瞳には悲しげな色が見え隠れしている。

「ふん、神をも恐れぬ物言いとはまさにこの事だな。神のお慈悲を蹴って、悪魔の誘いにのるなど、言語道断。お前、両親同様、まともな死に方はできないぞ。」

そんな竜姫に、尚も心無い言葉を吐く男。

ルードは、気付けば茂みから飛び出し、男の頭をぶん殴っていた。
……顔を上げれば、そこには、驚いて目を丸くした竜姫がこちらを指差したまま固まっている。

……さすがにマズいと、そそくさ退散を決め込もうとしたルードの背後で、竜姫は、その場にうずくまって笑い出した。

「……っ、ははっ、」

しかし、よく見れば目尻には涙が浮かんでいて――。ルードは、そんな彼女の視線に捕らわれ、動けなくなった。

気絶して倒れた教師を一人、間に置いたまま数刻。二人はお互いの瞳を見つめ合ったまま、しばらくの時を止めた――。

紅く染まり……。

ぷーぷーと、太り過ぎで狭くなった鼻が、妙な呼吸音を奏で、せっかくのシチュエーションを盛り下げ中、ルードの腹が奏でた虫の音が、固まった時間に亀裂を走らせた。

「……ルード……、こんな時間にこんな所で何してるのかと思えば……、」

一度治まった笑いを、苦笑に変え、竜姫は全身を震わせた。

「……し、仕方ねーだろ、昨日は飯を食いっぱぐれちまったんだから！ ……昨日、竜姫の部屋から帰る途中で、寮の食堂から何か適当にかっぱらって来るつもりだったんだが、奴があのだうろついて、断念せざるを得なかったんだから……。」

恨めしげに男子寮をチラリと横目に見ながら、ルードは言った。

「か、かっぱらうって……、」

「だって俺、金なんか持ってねーもん。ま、竜姫に会いに行った日に借りた制服のポケットに入ってた小銭を何枚か拝借したんだが、

……喉が渴いたんで、飲み物売ってる箱に全部使っちゃったからな。」

途中までは、軽く話すルードの言葉を、竜姫も何となく聞き流していたが、

「……ルード、あんたが『借りた』その制服、私の従兄の誠人君の物だったのよ……。」

制服、の言葉に思わず指摘を入れた。

「あんたが制服を『借りた』後、誠人君、随分こっぴどくクラス被害にあったらしくてね……。でも、クラス存在を知らない先生達は、誠人君が何かとんでもないストレスを溜め込んでいるんじゃないかって考えたの。……で、この先生は、そのストレスの原因が私だって言うのよ。」

竜姫はゆっくりと立ち上がりながら言った。

「……もしかしくなくても、竜姫が昨日からへこんでた理由はコレか？ ……え、何、じゃあここ何日かお前が悩んでた事の原因で、全部俺のせい？」

にわかに慌てだすルードに竜姫は、

「別にルードだけのせいじゃないよ。あれはあくまできっかけ。問題自体は元々私と彼の家との間にあったものだから……。……。でも、こんな風に他人に色々ほじくり返されるのは、あんまり良い気分じゃないわね……。」

と、フオローを入れつつも、やはり辛そうな顔をして言う。

「……神社を継ぐ事、反対されてるのか？」

気を遣っているのだろう、少し遠慮がちにルードが尋ねる。

「……まあね。この話、話せば長くなるけどいい？」

しかし竜姫はあっさり聞き返した。

「……腹ごしらえが済んだ後なら。」

悲鳴を上げる腹を抱えて、ルードは言った。

「……そうね。ここじゃ寒いし、場所を変えましょ。でも、その前にコレを何とかしなきゃ……。」

足下に転がる人物を見下ろし、困った顔をする。

「……このまま放っておく訳にもいかないし……。どうしよう？」

「何だ、それくらい。気絶する直前の記憶を弄って、忘れて貰えばいいんだろ？ ……まあ、いつまでもこんな所で倒れてられるのも面倒だし、軽く暗示もかけて、適当にどっか行つて貰おう。」

ルードは、整髪剤でテカテカ光る前髪を一房つかんで、男の顔を持ち上げながら、余裕の笑みを浮かべる。

閉じたままのたるんだ目蓋を指で持ち上げ、濁った眼球に浮いた黒い瞳に、自分の紅い瞳を写り込ませる。

ルードの瞳が、ゆらりと妖光を湛え、紅い瞳が更なる紅へと染まり、捕らえられた黒い瞳は、その持ち主の身体ごと硬直した。

パクパクと、口だけをだらしなく動かし、口の端からよだれを零し、男はこわ張る身体を小刻みに震わせた。

「ほら、これでもう大丈夫だ。」

ルードは、その紅い瞳を目蓋の下へと納め、握った髪を放して言った。

紅い瞳が、目の前から消えた瞬間、がっくりと力尽きた様に伏した顔を地面に押しつけた男。

「……とても大丈夫な様には見えないんだけど？」

ルードの、紅すぎる紅に染まった瞳を傍で見ながら、彼が邪眼を使うのを黙って見過ごした竜姫は、少し不安げに言った。

「まあ、見てなって。」

そう、ルードが言うのを、合図にしたかの様に、男はむくりと起き上がり、空ろな瞳を開けた。

のっそりと立ち上がり、ふらふらとおぼつかない足取りでその場を立ち去ろうとする、彼の背を見送りながら、

「本当に大丈夫なの……？」

と、竜姫は重ねて尋ねた。

「大丈夫、大丈夫。もうあと五分もすれば、正気に戻るよ。……それより竜姫、場所を移す前に、血をくれないか？」

……さすがに昼日中に術を使ったのは堪えたのだろう、少し青ざめた顔で、ルードは竜姫を振り返る。

ついさっきまで強気な表情で、術の行使をしていた彼が、世にも情けない、弱った表情を見せるのが何だかおかしくて、思わず失笑しながら、竜姫はブラウスのボタンに手を掛ける。

自分より若干ながら背も高く、美形だけど見た目はしっかり男の子の彼を見て、『かわいい』と思うのは何故なんだろう？

「……助かる。」

ルードの頼みに、嫌な顔もせず、制服の襟元を開放した竜姫に、感謝の笑みと言葉を贈った。思わず赤面する竜姫に、ルードは浮かべた笑みを更に深めながら、彼女の首筋に牙を立てた。

肌に触れる、ルードの唇の感触に、竜姫は心臓の鼓動が早まるのを耳の奥で聴いた。

（……私、もしかして――？）

浮かんできた答に、ようやく自分の想いを自覚した竜姫は、赤らんだ顔を更に赤くそめ、高鳴る心臓を胸に、戸惑う心に咲いた華はようやく小さな実をつけた。

巫女の宿命「1」

「私の両親はね、魔物に殺されたの。」

竜姫が購買で買って来たアンパンを頬張りながら、ルードは静かに彼女の言葉に耳を傾ける。

「前にも言った通り、豊生神宮には御神体が祀られている。うちは、豊穰の神様を祀る神社でね、久遠はその中でも土壌の恵みを司る役目を負っているの。同じように風の恵みを司るのは稲穂。そして豊穰に一番大切な水を司るのはうちの本社に祀られた主神、水輝。一時間目の終業の鐘を遠くに聞きながら、天窓から差し込む日差しを避けるようにキリスト像の下に座り、ルードは、

「……待て、久遠はいい、稲穂ってのも何度か聞いた。だが、水輝ってのは初耳だぞ？ ……お前がこないだ許可がいると言った時に挙げた名は確か、多喜じゃなかったか？」

もぐもぐ口を動かす。

「……そう。半年前に代替わりをしたの。」

「……さっき、両親が死んだのも半年前だって言ってたよな？」

「そう。全ては半年前のあの日が原因だったの……。」

暖かなココアが入った缶を傾けるルードの横で、竜姫は額に手を当て、苦い記憶を語り始めた。

「うちの主神は、あの日まで、多喜という名の龍神様だったの。元は、神社近くを流れる川の中腹に住むはぐれ龍でね。気が向けば豪雨を降らせて川を溢れさせては困り果てる人間達を見て喜ぶ、困りものの妖^{あやかし}だった。」

視線の先で輝くマリアのステンドグラスを見ながら、竜姫の目は過去へと向けられていく。

「彼女はね、中国で生まれた神龍の末裔だったの。その昔、中国の力ある僧侶に請われて守護につき、その僧侶について日本に渡って来たけれど、……人間である僧侶は多喜を置いて、先に逝ってしま

った。……一人残された彼女は、もう故郷の仲間の元に戻る事を許されなかった。……当時の大陸では、日本は未開の野蛮な国だと思われていて、神龍である多喜がその国へ降りれば穢れると、一族に反対されたのを押し切って、この国に来たから……。」「
相変わらず埃っぽい礼拝堂。静かな空間に、二時間目の始業のチャイムの音が届く。

「帰れない多喜は、この土地で暮らさざるを得なかった。でも、土地の妖と馴染めなくて、……彼女と契約できる程の術者とも出会えずに一人、異国の地で長いこと暮らして……。きつとグレちゃったのね、って、多喜は笑ってたけど……。」「

竜姫は胸に手を当て、目を閉じる。

「そんな彼女を鎮めたのが神崎家の初代。……度々洪水を起こしては、農作物をダメにしたって農民達が怒り、結果的に税収が減った城の殿様が兵を差し向け、討伐に乗り出した。……多喜は力ある妖だけど、所詮多勢に無勢。何人もの術者に囲まれて……。もう駄目だっと思ってた時、彼女を救いだし、その代わりに土地を守る様、契約を交わしたのが、初代、豊生様。……それから数百年、ずっと多喜は代々の神崎の巫女と共に、土地の豊穰を守り続けて来た。」「
心から誇らしく思っている事が、一目で分かる顔。

「実は稲穂もね、昔は畑を荒らし人を襲う、猿の妖怪の女頭だったのを、うちのご先祖様が改心させて、うちの神様として働いてくれるようになった。」「

竜姫は閉じた目を開け、慈しむような笑みを浮かべる。

「……そして、久遠をうちの社の神様にしたのは、この私。」「

「！、」

柔らかく、暖かく、微笑む竜姫の言葉に、ルードはピクリと両耳をそれまで以上に熱心に傾ける。

「久遠は、生まれたすぐ後に親兄弟を他の魔物に殺されたの。そして、一人生き抜くために、食べていくために、人里まで降りてきては悪さをしていた。私がまだ小さい頃、里山で遊んでいた時に初め

て久遠と会った。……九尾の狐——妖としてはかなりの妖力を持つ一族だけど——彼はまだ幼すぎて、山に棲む妖怪達に追われて……その時の久遠は傷だらけで死にかけていた……。それでも牙をむく久遠の姿が痛々しくて……。私は習ったばかりの治癒術で必死に治療を試みたけれど、所詮未熟な子供の未完成な術。応急処置が精一杯だった……。ホント、代々伝わる先代の武勇伝とは比べるのも恥ずかしいくらいにね。……だけど、久遠はあれからずっと、いつも私の側にいてくれる……。一緒に遊んで笑って、悪戯して怒られて。神様一年生の久遠は多喜を師に、巫女見習いの私は母を師に、二人で一緒に修行して……。」

ルードは、竜姫の話に、昨夜の久遠の残したセリフの意味にようやく納得がいった。

「……神崎の家の女は巫女として代々強い霊能力持って生まれて来た——神龍・多喜の加護のもとに——。けれど、神龍の寿命はおよそ千年……。多喜の寿命が尽きかけ、力ある巫女が生まれにくくなった。事実、母には多喜や稲穂の姿を視るのに神具の補助を要したし、母の姉である伯母にはまるで霊視の能力が継がれなかった。……ここ数代はそれ位が普通で、私だけが例外的に飛び抜けた能力を持って生まれて来たの……。」

一つ、ため息に似た吐息を吐き出し、竜姫は天井を仰ぎ見た。

「寿命尽きかけた多喜は、次代の神を生んだ……。千年の時は時代を移ろわせ、中国から神龍の一族も頻繁に日本を訪れるようになってから……。帰ろうと思えば帰れるのに、多喜はあの土地のために、新たな命を残す道を選んで……。そして、半年前のあの日、水輝は生まれた……。」

静かに。静かに、彼女は言った。

「……だいぶ前から弱っていた多喜だけど、その日は、大半の生命力を我が子に——水輝に——注いであってひどく弱体化していたわ……。当然、稲穂も久遠も、多喜の護衛として動いていたけれど……。」

強く。強く、手を握り締めて。竜姫は続ける。

「父は入り婿で……霊能力に関しては皆無だったし……、母も、簡単な厄除け程度の術しか扱えなかった……。久遠はまだ子狐で、大きな力は扱えない。……実質まともに戦えるのは私と稲穂だけだった……。その稲穂だって、豊穰の神よ……戦いに適した能力なんか持っていない……。腕っぷしは強いけど……。でも、あの数を相手にしては……。なす術もなかった……。」

力のこもる手が小刻みに震える。

「大挙して押し寄せた妖怪や怨霊達。彼らの目的はただ一つ。新たに生まれた神龍の子供の魂を喰らう事。力の塊でありながら、無力な赤子であった水輝は、力を求める連中にとっては単なる獲物に過ぎなかったから。……皆、必死に戦ったわ……。だけど、最初に無力な父が妖に魂を喰らわれて死んだ……。それを庇おうとした母も一緒に……。私も、二人を助けに駆け付けたけれど……。所詮多勢に無勢。『来るな』、『逃げろ』……。叫びながら、両親が血まみれになって地面に倒れる姿を目の前で見ながら……。私は動けなかった……。あの日は朝からひどい土砂降りの雨が降っていて……。地面はグシャグシャにぬかるんで……。足を取られて……。雨に打たれて身体は凍える寸前……。久遠も稲穂も、自分の目の前の敵の相手得手一杯で……。結局、その場を治めたのは多喜だったの。……。最期の力をふり絞って多喜は、その場の妖を神気で灼き尽くしたわ……。その命と引き換えに……。」

手だけでなく、全身を震わせる。……。声が、震える。

「……久遠も稲穂も傷を負っていたけれど、無事だったわ……。……だけど、両親はもう……。命も魂すらも失われてしまった……。多喜は、後に残される水輝のために、社全体に結界を張った……。……生まれたばかりの神龍はとも無防備な存在だから、邪気の中に長くおけば、邪龍として覚醒してしまう恐れがあるの。……。どうしても、清浄な場所に安置しなければならなかったから……。」

ルードのココアを、一言断って口にする竜姫。……。もう冷たくなり

かけたそれで、喉を潤し、缶をルードに返しつつ、体重を彼に預ける様に肩へ寄り掛かった。

「多喜は、自らの意識を鏡に封じた。水輝が一人前になるまで、親として指導するために、……水輝が豊生神宮の主神としての役割をまっとうできる様になるまでの代理を勤めるために……。だけど、残ったのはあくまで意識だけ。身体も命も力も失ってしまった……。そんな場所に水輝をおけば、また妖怪達が襲って来る。けれど、外界に連れ出せば、僅かな邪気も水輝に悪影響を及ぼす毒となる……。……だから、」

竜姫はルードの手を取り、自分の胸に重ね、心臓の鼓動に触れさせる。

「邪気に触れない清浄な場所に水輝をおいたまま、社を離れる手段として、水輝の魂を、私の魂と同化させたの……。」

……ルードは彼女の言葉に固まった。

魂の同化――あまりに聞き覚えのありすぎる、そのキーワードに、ルードは、手に触れる竜姫の胸の感触や、自分にしなだれかかる彼女の一昨日とはまるで違う態度に気付く事すら忘れたまま、目の前の少女の姿を改めて上から下まで眺めて、

「……そ……、それはどういう事だ？」

そう、尋ねた。

巫女の宿命「2」

「……生まれたばかりの神龍は、無垢な存在——というか、自我すらまだ存在しない、本当にただの力の塊でしかないの。……だから、多喜の判断で、私の魂を水輝の魂と同化させた。……巫女である私の中ならば、私自身が邪心に囚われさえしなければ、その魂は清浄に保たれるから……。」

ドクドクと、激しく脈打つ心臓。その鼓動の速さとは対称的に、手から伝わる竜姫の鼓動は穏やかに脈を刻んでいる。

「……だが、神とはいえ、そんなものと魂を同化させて、……竜姫自身の魂は——、」

竜姫の鼓動を伝える右手。ルードは左手で、自分の心臓あたりを掻きむしる様に、服を握り締める。

「魂を同化させた以上、今私の魂は水輝のものよ。……だけど、水輝にまだ自我生まれてなかったから、意識は完全に私のもの。私が肉体を持ち、魂を保護している間は——私が死ぬまでは——私は人として、巫女として、生きられる……。」「

……生きている間は人でいられる——。……では、その命尽きた後は……？

ざわりと、体内の血が騒ぎ出す。

ルードの瞳に写る疑問に、竜姫は答える。

「……私が死んで、魂だけの存在となったとき、この魂は初めて神として覚醒するの……私の——人の記憶を有したまま——龍神として目覚め、千年の時を豊穡の神として土地を守り生きる……。それまで、私はこの魂が邪気で汚れぬよう守り抜くのが、私の巫女としての役目であり、神の魂を抱く者としての宿命。」「

ずりりと握ったルードの手を放し、預けていた体重を自らで支える。暖かだったルードの右肩から体温が遠のく。少し涼しくなった右半身に、僅かながらに寂しさを感じる。

「……それは……人の意識を保ったまま……千年もの長い時を神として過ごす……、そういうこと、か……？」

「……そうだけど、これは多喜と稲穂と久遠しか知らない事。身内に彼らを見る事のできる者は私と母しかいなかったから……。不自然な死に方をした両親を、事故死したように偽装したのは私。伯母は、『神』の存在を信じない人だったし……。」

竜姫は語りながら、驚いていた。雨の降る日はいつも、ひどく動揺して、あの日の悪夢に苛まれるのに……。今、竜姫の心は静かなままに、あの日を振り返る。

「父は一人っ子で、私を引き取る親戚はいなかったから、母方の伯母が私を引き取る事になった……。伯母は、敬虔なキリスト教信者の伯父と結婚して、自分も熱心な信者になっていたわ……。伯母は、田舎の神社を継ぐのを嫌がって家を出た人だから……。私が神社を継ぐのも反対している……。この学園に放り込んだのも、私を改心させるためよ。」

深く、深く、ため息をつく。

「でも、最初は私もこれ幸いだと思ったの……。しばらくは社を離れる必要があったから。私は久遠を護衛に連れて、……多喜の護衛に稲穂を残して、学園へやって来て……。そして、アイツに——クラウスに——出会った。」

その瞬間を思い出してしまったのだろう、竜姫は眉間にシワを寄せ、腕を組む。

「キリストの『神』は、己以外を『神』だとは認めない。元妖怪の久遠なんかはもちろん、れっきとした神龍である水輝だって、ここでは魔の象徴ともされるドラゴンとして認識されてしまう。当然、クラウスは私達を悪魔だと言って切りかかって来たわ……。顔を合わせる度にね……。」

真剣に疲れ切った表情に怒りを重ねて、竜姫は頭上のキリスト像を睨み付ける。

「私は巫女で、水輝は神龍。稲穂も久遠も、うちの大事な御神体よ。」

……だからこそ、私はキリストの教えに頷く訳にはいかない。……
だけど、神の力を振るうには人間の肉体や心は弱過ぎる。まだまだ
修行は必要だけど、それも、私たちの存在を否定する力が強くある
この場では、現状を維持するのが精一杯。……でも、アイツさえい
なくなればその力も大半は消えてなくなる。あと二年、ここで修行
して、力をつければ……、多喜の元へ戻り、稲穂や久遠と力を合わ
せて、何とかやっていけるから……。」

それまで静かに聞いていたルードは複雑な表情で竜姫を見た。

「……。」

紅く光る導火線

「……くそっ、あいつら一体どこへ行った！」

あの日、あの神に背く魔物を連れた魔女の小娘が、封印していた恐るべき魔物を開放してしまっただけというもの、何故か両者共々姿が見えず、……どころか気配すらないというのはどういうことなのかと、クラウドは苛々と男子寮の廊下を右往左往していた。

一度見つけた気配を追ったが、どうやらまやかしだったらしい。一日中、その気配のする男子学生を見張り、しっぽを出させようと色々画策したにもかかわらず、彼は思わしい反応を見せなかったのだ。

いや、しかし、怪しい事には違いないのだ。何しろ、あの学生、彼の部屋を搜索すべく侵入したら、常人には見えないはずの自分の気配に気付いて飛び起き、なんとこちらを見て叫び出したのだから……そのせいで騒ぎになってしまい、さすがに大衆の前で斬り殺す訳にはいかず、その時は一度断念した。

しかし、食堂で見掛けた際には邪悪な魔導の術が発動する気配があった。……現場を押さえられさえすれば、その場で成敗してくれるものを、あの一瞬の後には魔導の気配は消えてしまい、追跡も不可能になってしまった。

だが、それ以来、彼の部屋への侵入がかなわなくなった。

日々の所業や生活態度を見れば、素晴らしい優等生のものなのだから、あの気配はまやかしだとも考えたが、しかし、怪しい点が少し多過ぎる。

クラウドは、あきらめる事なく、男子寮の搜索を続けていた。

と、誰とも知れない人間の部屋を飽きもせずにつせと搜索していたクラウドは、窓の外に一人の男を見つけた。

まだ二時間目が始まったばかりのこの時間、高等部の昇降口の前をフラフラと足元のおぼつかない男性教師が一人、当てもなく歩い

て行くのが見える。

……どうも様子がおかしい。そう感じたクラウドは、するりと壁をすり抜けて男の前に降り立った。

……しかし、常人の彼は、目の前に降りて来た存在に気付く事なく、空ろな目をしたまま歩き続ける。

「……これは邪眼にやられたか……、愚か者めが……。」

クラウドは、冷ややかに彼を見下した。

「悪魔の使う邪眼……これは、あの魔物の仕業だな。全く、常人とはいえ、神に背く魔物の邪な術にたやすくはまるなど、情けない……。邪眼など、強く心を持てば簡単に跳ね返せる術。愚かな……。」
汚い物でも触るかのように渋い顔で、乱れた髪ごと頭を片手で掴む。ボールでも、掴み上げるように驚掴みにする。

「ぐうつ、」

力加減のなされない圧力に、彼は痛みของあまり呻き声をあげ、口の端から一度乾いたよだれが再びおちる。

クラウドの、五本の指からバチバチと静電気のように雷が放たれ、男の脳を灼く。

「ぐ、ぐわあああ!!」

男は唾を泡にして吹き出しながら、凄まじい悲鳴をあげる。聞くに耐えないと、しかめた顔を、ピクリと歪ませたクラウドは突然、男の頭を投げ捨てた。

「……そうか……あの男……、魔女の小娘の血縁だったのか……、しかもあの小娘、あいつと結んでいたとは……。という事は目眩ましの術で惑わされていたのか、私も……。！ とすれば奴の潜伏先は……!!」

プスプスと、頭から白い煙が上がる男を放っぽりだしたまま、白い翼を広げて舞い上がった。

寮舎を飛び越え、眼下に広がるのは緑の林。

T字の寮舎の向こうにポツンと佇む建物が一つ。頭に十字架を掲げるその屋根の下。

「……ようやく見つけた。灯台下暗しとはまさにこのこと。私とした事が……だが、今度こそ仕留めてやる……。」

ニヤリと、天使らしくない凶悪な笑みを浮かべ、クラウドは静かに降りて行った――。

アカのキズナ。

辛くはないのか？

……そんな事は聞かなくて分かってる。

当たり前だ。辛いに決まっている。いや、辛いと言うよりは先の分からない不安と恐怖に苛まれるのだろう。

そして。昨日、感情の吐露をあれだけ恐れた訳。

それに対して、強引な口付けに怒りながらも“感謝する”と言った、久遠の言葉の意味。

「……重いな。背負っているものが俺なんかよりよっぽど……。」

ルードは下を向き、ポツリと呟くのを聞いて、竜姫は、

「そうかな？」

と、軽く突き放す。

「確かにね、私もルードの昔の話を聞いた時、自分の過去と重ねた。身近な人を目の前で殺されて、人外存在と魂を同化させた……。

でも、私は両親を失っただけだもの。村一つ一度に失くしたルードと比べるには適さないでしょう？ ……魂の同化にしたって、私の

場合、今の時点で困る事は特にないけど、ルードはずっと苦しんで来たんでしょ？」

劣る様な竜姫の言葉に、ルードも瞳を和らげる。

「だいたい、似ているのは境遇だけ。そもそも状況が違い過ぎるもの。どっちが大変かなんて分かるもんじゃないわよ。」

やけにさっぱりと言いつち、竜姫は立ち上がる。

「ルードの話に同情しなかった、って言えば嘘になるけどさ。私、傷の舐め合いだとか、泣き言言って暗くなるだけとか、嫌いなんだよね。」

強気な笑みを浮かべ、竜姫は言う。

「……そうだな。ぐだぐだ文句ばっか言ってみたところで何が変わる訳でもないし。俺も、考えなきゃ……。」

腹も膨れ、心もスッキリ晴れた。

ぐうつ、と腕を上げ、背を反らせて伸びをする。

一晩中ごろごろしていた身体に、心地良い刺激が優しく広がっていく。

「……ところで、今更なんだが、竜姫、お前授業はいいのか？」

「……朝のHRで、さっきルードがのしたあの先生に呼び出し食らったのよ。……無視する訳にもいかないから一応出向いて行っただと……ルードが出て来るまで延々とつまらないお説教ばかり。もしルードがいなかったから、きつとまだあそこで怒られてたんじゃないかな、私。……だからさ、二時間目が終わった頃に、タイミング見計らった上で教室へ戻るよ。」

「……そうか。なら良いが、もしサボったとか言われて困る様なら送って行くぞ？」

「大丈夫だよ、どうせ二時間目は自習だから。いつもなら神学の時間だけど、試験週間中は自習時間になるんだってさ。だから、大丈夫。心配してくれてありがとね？ ……それに昨日の事も……。」

最後、礼を言いながら、微妙に視線を泳がせた竜姫は、ふとある一点を見つめたまま固まった。紅くなるでもなく、不自然に固まった彼女の様子を不審に思い、ルードも視線の先を追って見る。

その視線の先にあるのは、天井にはまった天窓。何の変哲もない天窓のその先に、青く広がる空。雲一つない、青く澄んだ空に浮かぶ、一つの白い点。

「!! しまった! 見つけたか!? だが、何故!？」

立ち上がり、ガキツ、と牙を鳴らして、ルードが吠える。

「理由なんか今はどうでもいいわ! それよりルード、今、戦える?」

「……正直、厳しいな、」

さんさんと照り付ける陽光を浴び顔で睨み付け、彼は言う。その手は不安げに胸に添えられている。

「……血が要るなら、奴が突っ込んで来る前に、早く飲んで!!」

叫ぶ一方で、神言を唱える竜姫を見ながら、ルードは一瞬、ためらい、迷いの瞳を彼女に向けた。

ふっと、竜姫の前に突如久遠が現れた。

「久遠……？」

一瞬前まで何も無かった空間に突然出現した彼に驚くルード。

「……非常事態だから、召喚術で久遠を喚んだの。でもルード、言ったでしょう？　ここでは私達の力は制限される上、私達の力は戦闘向きじゃないの。今、本気で頼れるのはあんたの力だけ。……その力を振るうのに必要なら、遠慮なんか要らない。今なら久遠も居るから、もし私が気絶しても、何とかしてくれるわ。」

刻一刻と、点から丸へ、丸から影へと大きくなる窓の外の白を睨みながら、竜姫は促す。「……分かった——。」

真っ直ぐ、恐れのない瞳を向ける彼女の強い視線の矢に迷う心を射抜かれて、ルードはそう答えるしかなかった。

竜姫の甘い血の味は、吸血鬼の本能に深く刻まれ、内に宿した獣は常にその味を欲して飢えている。

だが、欲望のままに血を啜れば、彼女の命に関わる。

獣は、そんな事は気にしてなどくれないが、自制せねば困った事になるのだからと加減してきたが、それでも。

……毎日、血を吸っているのだ。僅かずつとはいえ、彼女の身体には十分負担になっているはずだ。

そして、今日の分の吸血はついさつき済ませたばかりだ。

……この上、量を吸えばどうなるか。竜姫自身が一番良く分かっているはずなのに。それでも彼女は言うのだ。

「ルード、早く！」

早く、血を吸えと。この、不安定極まりない魔物に向かって叫ぶのだ。

あの日もそうだった。初めて出会った日。あの時も、得体の知れない自分に言ったのだ。

——協力する、と。

何故だろう。この緊迫した状況の中で、自然と笑みがこぼれるのは……。

どうしてだろう。こんな真っ昼間、お日様元気な晴れの日、礼拝堂の中でという最悪なシチュエーションで、こうも負ける気がしないのは……。

命の居場所がある事が、こんなにも世界を変えてしまうとは。

……体の奥底から湧き上がって来る喜びが、ルードの身体を奮わせる。

竜姫は、これまでに見た事のない、紅の輝きに魅せられ、眼中からクラウスが消えていくのにも気付けない程、彼の瞳を見つめる。生気に満ち溢れ、キラキラ輝く瞳は、この世のどんな宝石も敵わない程に美しく、キュツと絞まった暗い瞳孔が、鋭い視線を彼女の視線に重ね、互いの意思を確かめ合う。

一步、ルードが竜姫へ歩み寄り、重ねた視線を首筋へと落とす。もう、のんびりしている暇は無い。ルードはためらう事なく、牙を埋める。

そっと目を閉じ、ルードに身を任せる。人肌の暖かさに包まれるこの瞬間が、実は嫌いじゃない事は、もうしばらくは内緒だ。

二人の繋がりを、不快な破壊音が遮るその瞬間まで、ほんの僅かな時間。緋色の絆が、――その、最初の一本が――二人の間で確かに結ばれた。

互いに支え合うための、大切な繋がりが――。

希望×（絆十時間）Ⅱ運命

瓦礫から舞う粉塵を頭から被って、見事な金髪を残念な白色に染め、きめ細やかな生糸のごとき髪を般若の様に振り乱し、ハアハアと肩で荒い息を吐くその姿は、誰がどう見ても鬼婆にしか見えない。かろうじて、背負った翼と頭に乗せた光の輪が、彼の出自を証明してはいるが……。

はたして、この彼を指して「清らかな天使様です」と説ける牧師や神父が一体何人いるだろう？

ともすれば暗転しそうな視界に、彼を映しながら竜姫は思う。

手近な机を杖代わりに立ち、冷えた身体をガタガタ震わせる彼女に、ルードは自分のマントを肩へ羽織らせ、ポンと軽く背を叩く。

この寒い中、ワイシャツ一枚にズボンだけという出で立ちで、かの因縁の相手に向き直る。

クラウスはクラウスで、裸体に大きな一枚布を複雑に巻き付けただけに見える、いつもの寒々しい格好で、仁王立ちしている。

バチバチと、今にも火花が散りそうな視線を互いにぶつけ合う二人。

ルードは、冷酷な青い瞳から放たれる視線から、竜姫を背に庇う様に立ち位置を調整しながら、一步、前へと踏み出す。

その足元で、久遠は、今にも倒れそうな青白い顔をした竜姫の前に立ち、九本の尾を扇状に広げ、尾と尾の間に妖気の膜を張って作った簡易結界を、竜姫の盾にする。

「……まだ正式に契約を結んでいない以上、今、奴を殺す訳にはいかない……。スキを見てこの場から逃げるぞ。久遠、竜姫を連れて走れるか？」

——クラウスが天窓を、周囲の壁ごと破って突っ込んで来た時……。その騒音に紛れてルードが久遠の耳元で囁いた。

「不可能ではないが、少々厳しいな……。」

久遠の背は、ピンと立っても竜姫の腰程までしかない。

……まあ、子狐とはいえ妖怪だから力はある。啞えるなり背に乗せるなりして運べない事はないが、竜姫の状態がこうも悪いと、乱暴な扱いがためられる。

「……分かった、なら俺が竜姫を抱えて行くから、お前は俺の後をついて来い。……できるな？」

問われて、コクリと頷いた久遠の頭を撫で、ルードは、

「じゃ、それまで竜姫を頼んだぞ？」

と、ニヤリと悪戯っぽく笑う。

久遠は、仇敵を前にしながら、余裕たっぷりに微笑むルードの態度に驚きながらも、

「……そんな事はお前に言われるまでもない。」
憎まれ口を返す。

「……心配するな。奴の攻撃をしばらく凌ぐ程度の術ならば、ここでもある程度使いこなせる。……お前はあの天使の相手に集中しろ。」

昨日までの余裕の無さからはとうてい信じられない、自信に満ちた笑みを見せるルードに、この場の命運全てを委ねる意思を伝える。竜姫を見上げれば、辛そうな顔をしながらも、一つ頷き、強い意志を込めた瞳でルードを送り出す彼女がいる。

——運命の歯車が、刻の鼓動を奏で、二人の時代ときが廻りだす——その音が、確かに久遠の耳には聞こえていた。

「よお、俺的には三百年ぶりの再会なんだが……、ご機嫌麗しくないようだな、天使様？」

片手をあげて愛想笑いを貼り付け、サービスだとも言う様に、ウィंकまでしてみせながら、ルードは軽い挨拶の言葉を口にした。「……よ、ようやく見つけたぞ、サハリエル……。こ、今度こそ、封印などと生温い事では済まさん！ 後ろの魔女共々、滅ぼしてくれる……！」

唾を泡にして、周囲にそれを汚く撒き散らしながらクラウドスが叫

ぶ。

顔を怒りに赤く染め、人を指差しわめく彼に対し、一方のルードは落ち着き払って、

「……封印が生温い、ね……。だったらあの時に一息に滅ぼしてくれていれば、三百年も苦しむ必要はなかっただろうに……。まあ、今となっちゃどっちでも良い話だな。あん時死なずに済んだおかげで、俺は今もこうして生きてる。」

頭から今にも白い湯気が吹き出しそうなクラウドに皮肉をぶつける。

「おかげで竜姫に会えたし、村の連中の仇をとる機会も得られそうだし。……三百年前、俺が奪った命への贖罪も――。」

ほんの、二、三步。脚に力を込めて地面を蹴れば手の届く場所に立つ、憎き敵に、ルードは静かに語りかける。

「……お前は生温いと言うがな、……。一応元人間――しかも常人――の感覚からすれば永遠に近い時を、一人、苦しみ続けるってのは、地獄の釜でゆでダコにされるよりキツイんだぜ？ ……少なくとも地獄では孤独を味わってる暇なんか無いだろうからな。」

「ふん、大いなる神に背きし悪魔めが、心にも無い戯言をほざきおって！ ……安心しろ、お前がこれから逝く先は地獄等ではない！

神の御光に貫かれた後の結末は完全なる消滅だ！ お前の様に血に汚れた存在が、神に祝福されし地上に在る事は断じて許されん！

！！」

スラリと、久遠や竜姫の目にはもう、毎度お馴染み、恒例行事のクラウドスの神剣抜刀の瞬間。剣の切っ先を向けられたルードも、さして動揺も見せずに話を続ける。

「……血で汚れた、ね。まあ確かに、俺のこの手は血に塗れているさ。何人もの人間を、この手にかけてきたからな。だが、今この場に

いる血に汚れた存在は、俺だけではないだろう？

なあ、クラウドス。」

肩をすくめ、首を傾げてルードは言った。

「……ああ、心配せずとも一緒に消し去ってやるさ。お前の後ろに

隠れている魔女も、その使い魔共々な!!」

底冷えのする程、冷たく冷酷な低い声音。

容赦ない殺気を、弱った少女に向けるクラウドに、ルードは、彼の本質を冷静に見極めようと、次の一手を投げる。

「……彼女は巫女だ。何の罪も犯していない少女を、お前は殺すのか？ 三百年前、俺の村を焼き払い、罪もない人々の命を奪ったように？」

ルードの反論に、クラウドは笑った。

おかしくて笑った訳ではない。人を見下し、貶める為の凶悪な笑みだ。

「何の罪も犯していない、だと？ 戯けた事を言うな！ その小娘は、大いなる神に背いた魔物を代々神として崇め、この神聖なる場所へ魔物を連れ込み穢した、立派な罪人だ！ その上、お前の封印を解き、しかも自ら血を与え、魔物に力を貸している大罪人!!!」剣の切っ先を、ルードから竜姫へと移し、クラウドはその罪状を叩き付けるように叫んだ。「……あの村とて、悪魔をかくまった罪深き人間の集まりじゃないか。それを滅ぼして何が悪い？」

本当に、これっぽっちも悪い事をしたとは思っていないのだろう。クラウドは当たり前だという表情で、あっさり答えた。

「……あの村は、ごく普通の人間達が暮らしていた。当然、皆常人。悪魔の存在に気付ける者などいなかった。しかもあの時悪魔はお前との戦いで傷つき弱って、……その為に、自分の気配を極力抑えていた。……天使のお前が、見つけ出すのに苦労する程に、な。悪魔と知らず、弱った病人を看病してただけの彼らを、それでもお前は罪だと言うのか？」

「……悪魔など、所詮は人を惑わす存在だ。最初からそれと名乗って現われる悪魔はいないだろう？ 知らなかったからと言って逃れられる罪は無い！」

腹の中で煮えくり返る怒りをも凍り付かせる、クールな笑みを無理やり貼り付けながら、ルードは問いの答えを黙って聞き流し、

「……では、島原の一件でのお前の行為は罪にならないのか？」

最後の問いを投げかける。

「大いなる神の教えを知らぬ、憐れな民人を導いた事が、讃えられこそすれ、何故罪に問われねばならぬ？」

悪びれる事なく、天使は答える。

「……その、お前が説く教えは、無闇な争いを禁じているはずだろう。……にもかかわらず、無用な争いを、しかも無謀な戦を先導した事は、罪に問われないのかと聞いている。」

ルードは、飄々と言い逃れをするクラウスに尚も追いすがる。

「……無用な争いではない。大いなる神を退けんとする蛮族との戦は聖戦だ。罪は我に無く、神に刃を向けた彼らにある。」

彼にかかれば、この地上で暮らす異教徒は全て罪人になってしまうようだ。

呆れながらも、ルードは諦める事なく、問い続ける。

「では、多勢に無勢で勝ち目のない戦いに民を誘い、その全てを死なせた罪は？」

「あれは大いなる方を、神を信じぬ愚か者共からお守りし、罪深き人間達を神の裁きにかけるための戦い。勝ち目がないからと言って我らを裏切る者は真っ先に地獄へ堕ちていっただろうが、他は皆、最期まで勇敢に戦った。死した魂は天へと昇り、神の祝福を受けたはずだ。」

自信満々で微笑む天使を見て、ルードは深いため息をついた。

「……は、ねえ。お前、その目で確かめる事はしなかったのか？」

その、大いなる神の僕であるお前を信じて戦い、命を落とした者の魂を、何故お前はその手で天へと導いてやらなかった？」

死した魂を神の御元へ送り届けるのも天使の仕事だ。

「我には、お前の封印を守る役目があった。危険な魔物を置いて地上を離れる訳にはいかない！」

「……俺の封印は中級三隊の天使が施したモノだ。そう易々と解けるモノじゃない。魂を天へ送って行くほんの数日間くらい留守にし

たからって、何の問題も無かったはずだろう？」

言い訳じみたクラウドの答えに、ルードは厳しく突っ込む。

「わ、分からないじゃないか、そんな事！ 現にその小娘はいとも容易く、お前の封印を解いてしまったではないか！」

ムキになって反論するクラウド。

「竜姫が例外なんだよ。……お前にだって分かるだろう？ お前がどうとも出来なかった俺の封印を解き、お前が手も足も出なかった化け物をこうして抑え込んでいる力が、いわゆる『魔』に属する類いのものじゃないって事くらい。それをお前は、お前の主の前に跪かなかったという、ただそれだけの理由で、彼女を滅ぼすのか？」

そう、問い掛けるルードの姿は、久遠の目に眩しく映った。堂々としたその後ろ姿は、彼の主と、とてもよく似ていて……、昨夜の忠告の効果がこうも早く、しかも顕著に表れたのが、嬉しいやら悔しいやらで身悶えしたくなる。

「大いなる神に背く者は、いかなる者であろうと、我らの敵に他ならない。まやかしの言葉で我を籠絡しようとは、笑止千万！」

……この天使にとって、異教徒の人間など、皆、魔物のごとく倒すべき敵でしかないようだ。

「……まるでお堅い役所のマニュアルみたいな答えだな。もう少しくらい考え方に柔軟性をもたせてもいいんじゃないか？」

「悪魔の甘言を聞く耳は、あいにく持ち合わせてはおらんのだよ。」
言い切る天使を前に、ルードは後ろを振り返り、

「なら仕方ないな。どうあっても戦うと言うなら、こっちも黙って殺される訳にはいかないぞ。久遠、竜姫、覚悟はいいな？」

そう問う紅い魔性の瞳は、太陽よりも強い輝きを宿していた。

無言で頷く二人に、心配するなどでも言いたげな笑みを浮かべ、ルードは何もない宙空から、一振りの抜き身の剣を取り出して見せた。

姿形はクラウドの物と酷似しているが、柄の部分には蛇が巻き付いたような意匠が施され、鰐にはコウモリの羽があしらわれている。

ルードはクラウドに向き直り、剣を構えて立つ。

「……こんな日が来るなんて、三百年前はおろか、ついさっきまでは考えもしなかったんだが……、生きようと思えるって、結構いいもんだな——。」

「何を戯けた事を！ 今すぐこの手でお前を殺して、我の手柄にしてくれる！」

両者は互いに殺気に満ちた目で睨み合い、同時に地面を蹴った。

その瞬間は、人の目に映るには早すぎて……。

竜姫は息を飲んだまま、立ち尽くしていた。

妖怪である久遠の目には、はっきり映ったその瞬間。

だが、久遠もまた、竜姫同様、息を飲んだまま立ち尽くしていた。

あまりに異質な彼の力に、驚嘆の目差しを向けたまま……。

堕ちた光と輝く紅と

ガキッと鈍い音がして、気付けば二人は宙で斬り結び、緊迫した鏖競り合いをしていた。

竜姫の目には、まるで瞬間移動でもしたかの様に映った光景が、久遠にはコマ送りで見えていた。

それでも立ちすくんでしまう訳は……もちろんルードだ。だが、それとて昨日とはまるで違う理由。昨日は、彼から漏れた、制御の利かない邪気の気配の強大さに驚き、気圧された。

だが今は。クラウス相手にかなりの殺気を放ちながらも、邪気の気配は欠片程も感じられない。むしろ、クラウスが抑制無しに撒き散らす殺気の方が余程恐ろしく思える。

ルードとて、手加減を加えている訳ではない。

そもそも、彼の気持ちからすれば、身を捨ててでも殺してやりたいところであろうが、その想いを殺して、相手を死なない程度に痛み付けるには、相当な精神力が必要だろう。

ましてや、相手はクラウス。適当に手を抜いて戦って、無事で済む相手では無い。当然、ルードもそれは重々承知の上だ。

そうである以上、本気で戦っているはず。

……にもかかわらず、ルードの意識が揺らぐ事なく、戦いに必要なだけの力をしっかり引き出して戦っている。

しかもこの、彼にとつて不利な時間と場所で、本人達二人はもちろん、竜姫や久遠ですらも口を挟む事の出来ない、一進一退の攻防を繰り広げているのだ。

……竜姫の血を飲んだとはいえ、それだけの理由では説明出来ない光景が、目の前にある。久遠は、廻り出した歯車が、二人の新たな導を引き寄せる音を聞いた様な気がした。

……目の前で確かに戦いが繰り広げられているのに――。間のコマが幾つも飛んだスライド写真を見ている様にしか現状を

把握出来ない。……竜姫は祈る様な想いで、時折剣のぶつかりあう音と共に散る火花と二つの人影の残像を目で追いながら、ジリジリと壁際へより、壁面を背でなぞる様に這って移動する。

一步、また一步。ルードとの斬り合いに夢中なクラウドに気付かれないように。クラウドを引きつけるルードの邪魔にならないように。

クラウドが天井にあけた大穴の下へと、慎重に、慎重に。

その様子を目の端で追いながら、ルードはそれと気取られぬ様、――襲い来る刃をかわし、己の剣で受け止め、弾き返しては間合いを調整し、スキを狙って切りかかり、反撃される前に、タイミングを計って間合いを取る――一連の動作を絶えず繰り返す。その心の中は、自分でも信じられない程に静まり返っていた。

力の手応えは感じているのに、悪魔や吸血鬼の存在を己の中に感じない。

剣を握る手も、地面を蹴る足も、脈打つ心臓も、全ては彼自身のもの。クラウドの剣筋を知り、次の一手を的確に読むのは、悪魔の頭脳。クラウドと互角にやり合える力を有した肉体は、吸血鬼の身体。

だがそこに、彼らの意識の存在が無い。

それらを支配し、操っているのは確かに彼、ルードヴィヒの意識。昨日まで、殺したくて殺したくて仕方なかった相手を前にして、これだけ冷静でいられるとは、正直、最初の一撃を交わすまで思ってもいなかった。

「おい、クラウド。俺は今、悪魔に取り憑かれてから初めて、カミサマって奴に感謝してるぜ。生かしておいてくれた事に……な。」

白目を真っ赤に充血させた天使を相手に、もう何度目かすら分からない鏖闘り合いの最中、ルードはニヤリと笑った。

「……おかげで、見つける事が出来た。俺でも出来る、有意義な生き方ってやつをな。」

天使や大天使が為す術もなく敗れ、下級三隊の長である権天使で

すら手も足も出なかった化け物だ。

だが、現在のコンディションでは、全力の半分も力を出せないはず。

今なら、大天使である自分の方が有利なはずなのに。

不利なはずの彼は、苦しさを一切見せず、それどころか余裕で笑って見せ、皮肉を含んだセリフを、鏢競り合いの真っ最中というタイミングで吐いた。

クラウスは、よく知るはずの相手が己の手の範疇から零れ落ちていく現実を直視するのが怖くて、それを見ない振りをしたまま、しやにむに剣を振るい続けるが、心眼を曇らせた剣など、所詮、ルードの敵ではなかった。

一閃。大きく振りかぶった剣を、横なぎに振り切る。ありったけの力を込めた一撃は、鈍い白に輝くクラウスの神剣の刃を真ん中から真っ二つに叩き折った。

「クラウス。お前、お偉い上司がついてるからって、あんまり調子に乗ってると、いつかきつと痛い目見るぜ？」

白い翼で悠々と宙を舞うクラウスに対し、単に跳び上がっているだけのルードは、徐々に彼の視界の下方へと落ちていきながら、折れた剣の柄を握り締めたまま、まだ放心しているクラウスに、忠告めいた言葉を残し、地面へ降り立った。

手にした剣をマジックさながらの早業で消し去り、膝のバネをクッションに、身軽く着地すると、文字通り目にも留まらぬ戦いに目を凝らしたまま立ち尽くした竜姫を横抱きに持ち上げ、再び宙へと大きく跳躍する。

天井の大穴を抜け、林を跳び越え、学園の塀さえも跳び超えて。

ハッと我に返った天使が振り向く頃には、竜姫はルードに抱えられたまま、久遠共々、学園の裏山の土手に転がり、安堵のため息を三人揃ってついていた。

竜姫は重度の貧血で青白い顔をしていたし、ルードも荒い呼吸を繰り返している。

学園の敷地外の場所で、力の制限が緩んだ久遠は、クラウドの追撃をかわすため、三人をギリギリ覆い隠せる程度の小さな結界を張った。

「……ルード、お前、調子はどうか？」

確認の為の、久遠の問いに、

「……さすがに少し疲れたが、問題はない。むしろ気分は最高だ。」
ひらひらと、あげた手のひらを振りながら、ルードは穏やかに笑って答えた。

「今が夜なら、もう文句はねーってくらい、いい気分だ。」

寝転がったまま、眩しいはずの空を見上げて彼は、腹に乗せた竜姫の上半身を片手で抱いたまま、半分独り言のように呟いた。

竜姫は、起き上がる気力も体力も乏しい上、ルードの腕の中が予想以上に居心地が良くて、動くに動けないままに、先ほど噛み締めた悔しさを反芻しながら呟いた。

「ダメだなあ、私。」

ため息と共に吐き出された彼女のセリフに、久遠とルードは思わず顔を見合わせた。

「……？」

互いに、彼女のセリフの真意を探り合うも、やはり浮かぶのは疑問符ばかり。

頭上を白い物体が、物凄いスピードでどこかへ飛んで行くのを、他人事のように見送りながら、二人は、取りあえず竜姫の体調が復調するのを待つ事で合意し、ルードも消耗した体力を取り戻すべく、瞳を閉じて仮眠する事に決めた。

久遠は、暖を取るための火を、狐火に頼り、青く光る小さな炎を彼らの傍らに発生させ、自分は見張りのつもりで土手から学園を見下ろした。

まだ、初めてここを訪れてから三か月程。赤レンガで壁面を統一したお洒落な建物。二時間目の終業を告げるチャイムが、久遠の心に空しく響いた。

新たな導が果たして何処へ続いているのだろう。希望と不安とが、久遠の脳裏をよぎる。

——どう転ぶにしろ、全ては竜姫と、ルード次第で、未来は大きく変わるだろう。

それも、目まぐるしいスピードで。

久遠は、休憩時間に賑わう校舎を眺めながら、塀の中に暮らす彼らと、今こうして塀の外にいる自分達の間にある、薄くて透明な、けれども広く高い、硬質ガラスのような壁の存在を、普段以上に感じていた——。

心に秘めたモノ。

山中にカラスの鳴き声が幾重にも重なって響き渡り、またこだまが返る。

時折、とまり木の枝を争う羽音があちらこちらで聞こえる。

街へ餌を求め降りたカラスの群れが、次から次へと戻って来る空は、夕焼け色に染まり、南よりの東の空には、もうじき満ちるだろう月が、淡泊な白色から、夜闇に輝く黄金色へと色を変えながら、空の高い所へと昇っていく。

西の空には、沈む太陽に寄り添うように、宵の明星が光っている。

「……さて、どうする？」

葉の落ちた紅葉の木に背を預け、ルードが口を開いた。

闇が深まるごとに、輝きを増す紅い瞳で、眼下の学園を眺め、暗い中でも良く目立つ白いのが、学園上空をぐるぐると、もう何時間も飛び回っているのをため息混じりに苦笑する。

十二月。真冬の山中で、暗闇に火を灯して目立つ訳にもいかず、暖のかけらもない、肌が焼き切れそうな冷たい空気が、彼のセリフを白く染める。

一方で、ルードから借りたマントを羽織ってもまだ寒いと、竜姫はルードにしがみつく勢いでくっつき、少しでも暖を取ろうと必死になりながら、恨めしげに、眼下の白を睨む。

「——あんな調子じゃ、当分学園には戻れないわね……。かといって、この寒さで、一晚山の中で過ごせば、明日の朝には凍死してそうだし……。」

言いながら、竜姫はチラリと見ていてだけで寒くなるような薄着で涼しい顔をするルードを見、フカフカの毛皮をまとい、こちらも寒そうな顔を見せない久遠を見ながら呟く。

「……このまま凍え死ぬのは私だけみたいだけど……ね……。」

「おいおい、やめてくれよ。お前に死なれちゃ俺が困るんだからな。」

……寒いならもっとくっつけよ。ああ、そうだ。久遠を抱けば暖かいんじゃないか？」

言いながら、ルードは久遠を手招く。

ルードは、抱え込むようにしっかりと抱きすくめた竜姫ごと、貸していたマントで自分の体を包んだ。

「ちょ、ちよっと何を！」

さすがに慌てて逃げようとする竜姫に、

「……こうした方が、少しは暖かいだろう？」

心外だとしても言いたげな表情でルードは言った。

「久遠も……、そう睨むなよ……、」

無然とする久遠を手招き、

「仕方ないだろー、アイツのせいで学園内に戻れなくなっちゃったんだ、他に行くアテもねーし……。俺は別に真っ裸でその辺転がってたって死にやしないが、コイツは放つといったら風邪引くどころの話じゃ済まねーだろー!？」

きっちり手加減の加えられたコブラツイストを彼の頭に見舞いながら、ルードは言い訳がましく文句を言う。

「それでも一応責任は感じてんだよ……。竜姫が今こんななのは半分は血を吸った俺のせいだから……。だが、残りの半分、つーか、今こんな所にいなきゃならない原因を作ったのはあそこの白い奴だ。」

件の白いのを指差し、

「……なんであそこがバレたのかは分かんねーけど、過ぎた事とやかく言っても始まんねーだろ？」

と、少し彼らしくないセリフを口にした。

「……、？」

無言のまま、見上げる竜姫の瞳から、ルードは照れたような顔をしながら、ふいっと視線を逸らし、

「……お前の、受け売りだけだな。」

ぽそっとこぼした。

「ルード……。」

「……で、だ。このままここでいつまでもこうしてる訳にはいかねーし……。一つ、俺から提案があるんだが……。」

ゴホンとわざとらしい咳払いで誤魔化しながら、チラチラと紅い瞳を動かして、竜姫と久遠の返答を伺うように盗み見る。

「……たった一日で、随分前向きな事が言える様になったじゃないか？ この野郎。」

ほのかに後悔の色を滲ませ、悔しそうな顔をしながらも、彼の変化を好感を持って受け入れ、せめてもの反撃とばかりに憎まれ口を叩く久遠。

「……あー、俺が思うに……だな、」

半眼で睨む久遠に、口元を引きつらせながらも、ルードは持論を展開した。

「……俺たちがこうしていつまでも気配を隠したままいれば、遅かれ早かれ奴がキレて、所構わず暴れ出す様な予感がするんだよ。」

「……確かに、ありえない話じゃないわね……。」

「当然そんな事になれば、あそこにいる連中は大変だ。……できる事なら奴をあそこから遠ざけたい。」

久遠は、静かに彼の言葉に耳を傾けながら、じっと、その紅い瞳をまるで見定めるかのよいに覗き込む。

「……俺を、豊生神宮へ連れてってくれ。」

「ええっ、今から!？」

驚く竜姫に、

「多喜と稲穂に会わせてくれ。」

と、ルードは真剣な表情で頼み込む。

「……俺が気配を晒せば、奴はすぐすっ飛んで来るだろうから、一刻も早くここを離れなきゃならない。でなけりゃここで大惨事が起こっちゃうから……。けど、今のままじゃ、奴とやり合ってもまた逃げなきゃならない。でもそれじゃあまた同じ事の繰り返しだろ？」

ルードの言葉に、久遠は竜姫と視線を交わし、それを認めるように頷いた。それを受け、ルードは、

「……こんな短期間のうちに何度も、奴と戦うのに必要なだけの量の血を吸っちゃったら、お前の血が枯れちまう。次に戦うなら、今度は確実に奴の息の根を止めなきゃ意味がねえ。」

そう、確信を持って言った。

「……試験前の大事な時期に悪いとは思うんだが、どっちにしろ、あんな調子じゃ試験どころじゃないだろ？」

「別に試験なんかどうでもいいんだけど……。さすがに黙って失踪したら騒ぎになりそうで……。」

「なら、ここから術を飛ばして、一時的に竜姫に関する記憶を眠らせる。」

と、彼女の懸念に答えたルードに、

「……分かった。いいだろう。」

そう、先に頷いたのは、竜姫ではなく、久遠の方だった。

「正直この事態、ボクの手に余る。お前に覚悟があるならば、早いとこ姐さんの判断を仰ぐのが得策だろう。……ただし、お前が望む答えが姐さん達から返るとは限らんぞ。」

……まだ幼いながらに、己の感情を抑制した神の顔で、久遠は言った。

「……分かっているさ。俺だって、タダで力を貸して貰おうなんて都合の良い事は考えてねーし。」

牙を見せ、カラリと笑うルード。

「……なら、早く山を降りて街へ行かなくちゃ……。田舎の終電は早いよ！ 急がないと電車が終わっちゃう！」

神である久遠の判断だ。

巫女である竜姫はそれに従うべく、ポケットの財布の中を確認する。

「……ねえ、ルード。今更な事聞いてもいい？」

ひい、ふう、みい。札の枚数を数えながら、ふと浮かんだ疑問。

「？ 何だ？」

「ルードの姿って、常人の目にも見えるんだっけ？」

上から下までルードの格好を眺めながら、竜姫が尋ねる。

「そりゃ、目眩ましを使わなけりゃ、普通に見えるだろ。身体のは普通に人間のものだ、吸血鬼になったからって、実体は変わらざる訳だからな。」

藪から棒に何を聞くのかと思えば、と、問いの意図に首を傾げるルードに、竜姫は肩を落とす。

「……なら、服屋にも寄った方がいいわね。その格好じゃ、変に目立つから……。」

ポケットから携帯を取り出し、時間を確認する。

「四時半か……、急がないと、店も電車も終わっちゃう！……久遠、先に行って多喜に、事情を簡単に説明しておいてくれない？」
凍えてかじかんだ身体。竜姫は、ルードの肩を借りて立ち上がる。

「まだ、動くにはキツイだろ？……ほら、つかまれよ。抱えてつてやるから——。」

寒さに紅く染まった手を取り、フラつく竜姫を支えるルード。

「街へ着いたら降ろしてよね？……こんなの、街中でやったら目立ってしまうが……。」

手以上に紅く頬を染めた竜姫が念を押す。

「わーかったから、ほら急ぐんだろ？」

マントを竜姫の身体に巻き付けて、スカートの裾をカバーしつつ、あつという間の早業で彼女を抱え上げ、世に言う『お姫様抱っこ』スタイルにて横抱きに。

「ちょ、わざわざこんな抱き方しなくても！荷物的に抱えてつてくれても構わないんだけど！？」
さすがに慌てる竜姫。

「あのなー、山を降りるたって、フツーに歩いて間に合う訳ないだろ？……ちょっと荒っぽくなるが、全力で走って行けば一キロ三分で稼げる。……そんなスピードで跳んでく中、妙な抱き方してみろ、舌噛むのが早いかな、どっかぶつかる方が早いかな、はたまた凍えるの

が先か――。だから、嫌でも何でもしばらくは黙って我慢してろ。」と、ルードは彼女の訴えをキレイに流した上で、いつの間に取り出したのか、小さなガラスの小瓶を久遠に投げた。

「久遠、悪いが学園の風上に回って、中の粉を風に乗せて撒いてきてくれないか？」

小瓶の中にはキラキラ光る紅い砂粒が、瓶一杯に詰まっている。

投げられたそれを口に咥え、

「……これは？」

「魔法の粉葉だ。学園の連中の記憶を弄るためのな。……頼むから、今は葉の詳細に関しては聞かないでくれよ？」

「……人体に不都合がないなら、構わないが――。」

「それは心配ない。こないだ竜姫にやった、目眩ましの葉よりも軽い呪いだからな。副作用に多少個人差があるにしても、せいぜいが試験用の暗記に四苦八苦しやすくなる程度だ。特に問題は無いさ。」と、自信を持って保証するルードを信じ、

「……ならボクは、そのまま神社へ戻る。ルード、竜姫を頼んだぞ。」

そう言い残して、独り山の斜面を駆けて行った。

「……戻るって。いくら妖の獣だとはいえ、走って帰れる距離なのか？」

彼の後ろ姿を見送りながらルードは怪訝な顔をする。

「……まあ、久遠は人に視えない分、直線距離を走って行けるからね。一キロ三分を保ったまま走り続けられるなら、ルードでも半日あれば着けるだろうけど……。ルードは人に視られちゃうから、下手に街中を駆けてく訳にはいかないでしょ……。」

「山を降りたらフツーにしてなきゃマズいつてか？」

「そういう事。」

頷く竜姫に、

「……俺の中の常識は三百年前のフランスの下っ端農民の物なんだが。」

困った様子で打ち明ける。

「……正直、今のこの国の通貨の価値とか、社会の仕組みなんかサッパリだ。言葉だけはサハリエルのおかげで何とかなってるが、……文字に関しては読めるかどうか怪しいところで……。」

「その辺は私が何とかフォローするから、ルードはとにかくはぐれず私について来てくれればいいよ。」

だが竜姫とてこの調子では、ルードの助け無しには歩けまい。

「久々の外でしょう？ ……まあ、最初は浦島太郎状態かもしれないけど……、一緒に行こうよ。一緒に歩こう？」

「……誰だ？ 浦島太郎って。」

「ああ、日本の童話……昔話の中に出て来る主人公の名前だよ。苛められてたカメを助けたお礼に、海の中のお城……竜宮城に招かれるんだけどね。お城でもてなしを受けて、三日後、家へ戻ってみたら、地上では三百年経っていたっていう、そういうお話。」

「……なるほど、三百年の時を跳び越えちまった存在……か……。」
少し、寂しそうな表情をするルードに竜姫は囁いた。

「心配しなくても、独りで放っぽり出したりしないから。大丈夫、ちゃんと最後までつきあうから……。」

身を包む暖かさを手放したくなくて。

腕の中の温もりを失くしたくなくて。

竜姫は秘めた想いを胸に。

ルードは秘めた決意を胸に。迫る刻に追われるように、ルードは地面を蹴った――。

大切なモノ。

いつしか太陽は山の向こうに隠れ、背後の月は刻々と明るさを増して来ている。

山の木々を跳び越え、葉が落ちて白い枝が目立つ森を眼下に見下ろしながら、ルードは空中で体制を上手く整え、百数十メートルの距離を、跳躍一つで済ませる。

なるほど、これなら一キロ三分というのも納得だ。

……荷物的に背負われていたら今頃自分は彼の背で何を思っていただろう。

この激しい上下運動に伴う衝撃は、ルードの気遣いによってかなりの軽減がなされている今の状況下でもまだ厳しいものがある。

……竜姫は、自分の身をちゃんと気遣ってくれたルードに心の中で礼を言い、また安易な文句を口にした自分を反省した。

一つ、また一つと、闇に塗り潰されていく空に浮かび上がる星。

山を一つ半も越えた頃。数えるほどしかなかったそれが、空全体に広がる頃、見渡す限り木の海だった眼下の景色にも、星明かりに似た街の明かりが、網にかかったホタルイカの群れのように広がるのが見えて来た。

「街の明かり……、見えて来たね……。」

どうやら、空が完全な闇に飲まれる前には街に入れそうだとホッと呟きながら、竜姫は、街の向こうの西の空、地平線近くに僅かに残された太陽の残り香を眺める。

「……さて、どうする？」

少し、速度を緩めてルードが問う。

「ひとまず、街外れの山道に降りるが、俺のこの格好は目立つんだろう？ ……目眩ましを使えば問題はねーけど……俺としてはあんまり長時間術を使ったまま歩き回りたくねーんだよね……。今日はもう絶対に、力の制御を誤る訳にいかねーから。」

それが、彼にとってどれ程大変なことなのか。それを知る竜姫は、申し訳なさそうに切り出した。

「……うーん、田舎の小さな街だから、街外れから街の中心部まで歩いてても一時間かからないし……、バスかタクシーを拾えば二十分もあれば駅前まで行けるからさ、そこまでなんとかできないかな？ 駅前まで行けば服も買えるし、トイレかなんかで着替えちゃえば後はもう目眩ましなんか必要ないでしょう？」

彼女の言葉に、少し考え込みながらも、

「まあ、その位なら何とか……。」

ルードは頷き、明かりが集まる場所から少し離れた場所で足を止めた。

「じゃあ決まり！ ……とにかくまずはこの山道から、あっちに見えてるバス通りに出なくっちゃ。」

そつと地面に降ろしてもらいながら竜姫は、茂みの向こうを指差して言った。

「……田舎だからね……、バスの本数も多分かなり少ないと思うんだ……。もし、バスがなかったら、ちよつと懐が痛むけど、タクシー拾うね。」

……ルードの負担を考えても、バスよりタクシーの方が楽だろう。そう思いながら、ルードに肩を借りつつ、人気のない山道を下り、時折、地元ナンバーの軽自動車は何台か通り過ぎるだけの通りに出ると、何か誘っているかのような立て看板が二人を出迎えた。

「大谷タクシー……、」

その一方で、山あいを縫うように走る通りを右端から左端まで、視力の届く範囲を見回すも、手近にバス停は見当たらない。もう少し山を下ればあるのかもしれないが……。

「今はお金より、時間の方が惜しい時だし……、」

ポケットの携帯を取り出し、電波状況を確認すると……

「こんな山裾でもアンテナ三本立ってるなんて……。」

竜姫は複雑な表情をする。

正直、タクシー料金はやはり中学生の懐には痛すぎるのだ。バスがあるなら、ぜひともバスで行きたかった竜姫だが……。

「うう、もう、仕方ない……、非常事態だし……覚悟を決めるしか……。」

竜姫は、今月分の小遣いの振り込みが、つい先日あったばかりだった事に感謝しつつ、携帯のキーを叩く。

「……あ、もしもし、すいませんー」

看板に書かれた番号に電話をする竜姫の隣りで、ルードはじっとこれから行く先の街を見つめていた。

山へと続く道を逆上れば、今しがた越えて来た山の中を学園方面へ続く道へと繋がっている。

その道に背を向けて、ルードは、山を下っていく道の先の明かりを眩しそうに眺めて呟いた。

「すごいな……。」

ぼんやりした灯の明かりしか知らなかったルードの目には、田舎町のまばらな街灯の明かりですら、きらびやかに映っていた。

「ルード、すぐ来てくれるって！……で、ルード、悪いんだけど……。」

「ん、ああ……、目眩まししてくれってか？」

「それなんだけど、三十分ずっと術を使い続けるのと、一人の記憶をちよっと弄るの、どっちが楽？」

紅い瞳を、伺うように覗き込みながら、竜姫が尋ねる。

「タクシーなら、駅近くまで、他人に見られる心配なしに行ける。」

「……運転手を除いては、ね。」

「……おい、いいのか？俺にそんなポンポン軽く術を使わせても……？」

呆れたようなルードの言葉に、

「……軽くはないわよ。ルードに無理させて、今調子を崩されたら大変なもの。なるべくなら使わずに済む方がいいでしょう？」

と反論した竜姫に彼は、頭を抱え、ため息までついて顔をしかめた。

「バカ、そういう意味じゃない。……本来、人に害をなし悪行を行う為の術を、俺が使っているのを黙って見過ごしていいのかって聞いているんだ。」

……その気になればすぐにでも術に堕とせる紅い瞳を見上げる竜姫の瞳と視線を重ねながら、彼は言った。

「それと。お前は俺を甘く見過ぎてないか？ ……ここはもう学園の外なんだぜ？ しかも今は夜。さすがに今朝までみたいに、ちょっと小技をサービスした位じゃ、俺的には痛くも痒くもないんだ。……それでも、まあこの先、小技以上の力を要する場面に出くわしまつたらヤバイから、加減しているだけなんだからな？」

まるで説得でもしているかのように、竜姫に説いて聞かせるルード。「ルード、バカって言う方がバカなんだよ？ 力なんて使いようでどうとできるものじゃない。それとも何、あんたの力は悪行にしか使えない決まりでもあるの？ ……違うでしょう？ だったら、あんた自身が悪行を働こうと思わない限りは、折角ある力なんだから、使えるものなら使わなきゃ勿体ないじゃない？」

ルードは、目を見開き——それから、目をぱちくりと瞬かせた。

……何か、とても眩しいものでも見つけたみたいに。

やがて、彼は柔らかく穏やかな笑みの中、静かに目を閉じ、「……そうだな。この力が俺の支配下にある限りは、俺が使いたいように使える。なら、今までさんざん振り回されてきた分、役立てなきゃな……。」

辺りも暗くなり、周囲の見通しも悪くなる中、夜目の利くルードの目に、道沿いをこっちへ近付いて来る一对の眩しい明かりを見ながら笑った。

明かりは、かなりのスピードで迫り、二人の前で止まった。キツとブレーキが踏まれ、同時に後部座席のドアが片方、自動で開かれた。

竜姫は、ルードの手を引いて車に乗り込もうと背を屈める。が、運転席のウィンドーが下へとスライドし、半分程開いた中か

ら、五十代前後と思しき男性が顔を出し、不審な物を見る目で二人を見た。

……まあ、当然だろう。まだそう遅い時間ではないとはいえ、辺りも暗くなつた山中に、女子中学生が、おかしな格好をした超絶美形の男を連れているのだから。

「……君、中学生だね？ その制服、片桐学園のだろうか？ それが、平日のこんな時間に、こんな所で何をしている？」

問い質そうとする運転手に、ルードは愛想笑いを浮かべながら近づく。

「やー、ちよつと複雑な事情がありましたね？」

にこにこしながら、こちらを窺う運転手と視線を重ね、

「ちよーつと悪いんだけどさ？」

パチツ、とわざとらしいウイंकをして見せる。

「……えー、あ、はい。すいません、お客さん、どちらまで行かれますか？」

すると、新たに目醒めたかのように態度が改まり、お決まりのセリフでルードに行き先を尋ねた。問われたルードは、

「う……それは俺に聞かれてもなあ……。」

助けを求めて竜姫を見た。

「駅前のショッピングセンターまでお願いします！」

竜姫はルードを座席に押し込みながら目的地を告げた。

ルードに続いて、竜姫が乗り込んだのを確認した運転手は、ドアを閉め、ハンドルを切った。

そう道幅のないこの道で、何度か前進とバックを繰り返し、Ｕターンすると、アクセルを踏み込み、明かり溢れる街中を目指して車は走りだす。

車窓を流れて行く街の景色を眺め、ルードは改めて自分の『浦島太郎』ぶりを実感する。住宅街を抜け、商店の立ち並ぶ通りに入つた途端、溢れる人と車と、街灯や車のライトや看板のネオンサインの洪水が、ルードの目に飛び込んで来た。

どんなに忙しく瞳を動かしても、流れて行く景色の全てを見る事は不可能で……。

時代も、国も越えて、……見た事も無い物が溢れる街は、ルードの常識で計れる物など、一つもありはしなかった。

ただ一つ、分かる事は……。

「豊かな街なんだな……。」

店頭に並べられた沢山の品物。……それが一体何なのかはよく分からないが。

「……そうね。ルードの生まれ育った環境と比べれば、きっとすごく恵まれてると思う。でもね、これでもここは田舎町なの。」

「……何か、すごく複雑な気分だ。」

街の賑やかさに興奮する一方で、寂しそうな表情をするルード。

「あの学園の中の狭い場所でも、何となくあった違和感が、ここに来てハッキリ感じるようになった……。だけど、そんな風に感じられるって事は……。俺は今、紛れもなくルードヴィヒなんだって実感できるんだ……。本能だけの獣や、何もかも、世界の全てを知り尽くした悪魔が、こんな事で哀愁なんか感じるわけじゃないからな……。」

暖房の利いた暖かな車内で、ルードは呟くように言った。

「俺は生きてる……。俺はこの異世界みたいな場所で、これからもずっと……。」

物に溢れた豊かな時代で。

繋がれた手の温もりが、揺らぐ心を支える、唯一の確かなものだと、ルードにはそう思えて。握った手を、ギュッと解けないように、大切に。大切に、包み込むように握り締める。

手の中の温もりが、今の自分にとっては全てなのだから……。

彼は、いつの間にか自分の中で、天使への復讐が占める心の割合が急激に居場所を失いつつあることに気付かぬまま、ただただ、手の中の温もりに縋っていた――。

始まりの歌

……都心で、十両編成やそれ以上に長い列車ばかりを普段目にし
て、その景色に慣れている者にとって、こういう田舎を走る列車が
たった一両、トコトコ走って行く風景を見つけると、何となく新鮮
に感じてしまう。

……これまで、乗り物と言えば馬車しかなく、それとて貴族の乗
り物であって、自分には無縁な物であったルードにしてみれば、新
鮮どころか初物である。

ローカル線にありがちなボックス席に、向かい合わせに座った彼
は、まるで幼子のように、両手を窓に貼り付け、食い入るように窓
の外の景色を眺めている。

あの後——……タクシーから降りた後で——、ショッピングセン
ターの多目的トイレにルードを押し込み、竜姫は、彼と自分用の服
を一式、適当に選んで買い込んだ。

……取りあえず、彼の分の着替えを渡し、とにかくまずは着替え
てもらう。

紺のGパンと、黒いパーカーに、紺のダッフルコート。着替えに
苦労する類いのものではないから、……まあ大丈夫だろう。

——待つ事数分。

出て来た彼の姿を上から下まで眺め……、

「ルード、コートのボタンが掛け違いになってる……。」

竜姫は、後ろ襟に埋もれたパーカーのフードと併せて、彼の着替え
の仕上げを整える。

「あと、これ。人が多くいる所ではこれをかけて。……綺麗だけど、
やっぱりその紅い瞳は目立つから……。」

竜姫は、サングラスを渡して言った。

「じゃあ、ここで少し待ってて。すぐ着替えるから。」

ルードに荷物を預けて、今度は竜姫が、今しがたルードが出て来た

トイレとへ入って行った。

「……おー。」

今まで着ていた衣服を詰めたビニール袋を手にも、ルードは少し疲れたように返事をした。

外の寒さが嘘のように暖かな店内。

吸血鬼の身体は、気温の変化に鈍くなっていて、寒かろうが暑かろうが、生命活動に支障をきたす事はない。

……それでも、ついさっきまで、肌を切り裂くような冷たい風を押し退けて跳んでいた彼の耳は紅く染まっていた。

それが今は。真新しい、暖かく着心地の良い衣服を身にまとい、そよとも風の吹かない暖かな室内にいて。

……軽快な音楽が、BGMとしてスピーカーから流れて来る。知らない曲。もちろん歌っている歌手も分からない。

けれど、そのメロディが妙に耳に残って離れない。きっと、これは。この曲は……始まりの曲。根拠なんてない。歌詞だって半分以上聞き流している。

たまた、リズムとメロディだけが、ルードの心に浸透していく。でも、それが心を踊らせ、また次の一步を踏み出すための力を引き出してくれる。

「ルード、お待ちせ！」

制服を脱ぎ、Pコートに黒のパンツを合わせた竜姫が、トイレから出て来た。

「……なあ、この曲、何という曲なのか知ってるか？」

「え、このBGM？ ……うーん、確か“RED”っていう名前のバンドの『緋色の絆』って曲だったと思うけど……。ごめん、私、芸能関係詳しくないから、もしかしたら違うかもしれない。」

「緋色の、絆……。」

曲のタイトルを、舌の上で転がし、ルードは黙り込んでしまった。

——それから。二人は駅へと向かった。幸いにも、列車はそう待たずに来た。一両しかない車内はそこそこ空いていた。

左右に五列並んだ座席はボックス席になっており、八対あるうちの六席までが先客で埋まっていた。

手近な席を選んで座るまで、ブツブツと、曲のタイトルを繰り返して呟いていたルード。

しかし、電車が動きだし、ホームから滑り出すと、完全に闇に染まった窓に張り付いて動かなくなった。

……気持ちは分かるのだが。見た目、高校生位の彼が、こうも真剣に窓の外ばかり見ているというのもおかしい光景だ。

しかも、端から見れば、街を離れ、山間を縫って走る列車の外は、この暗闇の中、たまに過ぎて行く信号の明かり位しか見る物などないのだ。

彼の持つ瞳は、夜闇に特化したものだから、きっと彼には自分達には見えないものも、鮮明に見えているのだろうが……。

「ルード、楽しい？」

チラチラと奇異の視線が集まるのを感じながらも、竜姫はそれを見つめて尋ねた。

「そうだな……。さっきから、木しかねえ……。景色としては単調でつまんねーんだけど……。やっぱりこのスピード感はたまんねーな。」

嬉しそうにルードは言う。

「頑張れば俺だって、この程度のスピードで走る事はできるけど……。」

時代が違っても、やはり男の子って、こういうものなのかしらん……？

ワクワクしながら目を輝かせるその姿は、秋葉原のオタクに通じるモノが見え隠れする。

「ルード、もうすぐ乗換え駅だから……。」

竜姫は、しきりに携帯の時計を気にしながら言った。

「次の駅で、寝台車の切符を買わないと……。」

財布の中身を確かめ、

「あと、夕飯のお弁当も……。」

今はまだ沢山いる野口英世が、明日の朝には二人にまで減る事は確実で。

乗換えに使える時間もかなり厳しい。

ターミナル駅の、一番端のホームに到着した列車から、竜姫はルードを引きずる勢いで飛び出し、一番向こうのホームまで続く、長い連絡通路へ上がる階段へ足をかけようとした所でルードに止められた。

「待て、そこまで急がなきゃ間に合わないのか？　こんなの駆け上がったらお前、倒れるぞ？　今のお前は、軽度じゃ済まない貧血を起こしてるんだからな？　……竜姫、その自覚はあるか？」

凶星をバッチリ射抜いた問いに、竜姫が表情を曇らせる。

「……でも、あと五分以内に切符とお弁当買って、あっちの一番遠い所に停まってる電車に乗らなきゃいけないのよ？　乗り遅れたら今日はもう野宿するしかないの。絶対、乗り遅れる訳にはいかないわ！」

瞳だけは強く、階段の先を見上げながら。しかし、その内心とは裏腹に、言う事を聞いてくれない自分の身体に、悔しそうな表情をしながら訴える。

「何だよ、お前の隣りに今誰が居るのか忘れたのか？」

必死な竜姫に対し、ルードはあっけらかんと答えた。

「……え!？」

ポカンとする竜姫を、ルードはひょいっ、と抱き上げる。人目のなかったさつきでさえ恥ずかしかったのに。ルードは照れもせず、公衆の面前で軽々と竜姫を抱き上げた。

「る、るるる、ルウドおおお!？」

「ほら、これなら速いだろ？」

顔を真っ赤に染めて慌てる竜姫を面白そうに見下ろしながら、ルードは、

「心配しなくても、正体を疑われるような事はしねーよ。」

と、本来二、三步で済ませられるものを、一段一段律義に踏み締め
て駆け上がる。

一歩進むごとに周囲の視線が次から次へと刺さるのも気にせずに、
だ。

サングラスで、あの一番印象的な瞳は隠されているのだが、それ
でも彼の美形オーラは老若男女問わず皆の興味を引きつける。

そんな彼にお姫様抱っこなんかされている竜姫には、容赦ない嫉
妬の視線が痛いくらいに注がれるのだ。

それはもう、恥ずかしいなんて次元はどうに通り越している。

「竜姫、切符ってのはどこへ行けば買えるんだ？」

人々が、それぞれ目的のホームへと急ぎ行き交う連絡通路を半分程
進んだ、中央改札付近で立ち止まり、ルードは辺りを見回しながら
言った。

ここまで来るのに、竜姫の携帯の時計は一度もその表示を変えるこ
とはなかった。

「ルード、取りあえず降ろして？ このままじゃ切符なんか買えな
いよ……。」

改札前に並ぶ弁当屋の前へ彼を誘導し、

「待ってて。切符買ってくるから、ルードはここで食べたいお弁当
を選んでいて。」

さっそくショーウィンドウの中に陳列された色とりどりの弁当に
目が釘付けになる彼にそう言い残し、竜姫は、改札横のみどりの窓
口へと入っていった。

一人残されたルードは、サングラスの奥で光る紅い瞳をキラキラ
輝かせた。

グラサン越しで少し色あせて映る視界に飛び込んでくる、色彩に
あふれ、きれいに盛り付けられた旨そうな弁当の数々。

「すげー、何だか良く分かんねーけど……こりゃ何なんだ？ 赤く
て小さいツブツブ……。綺麗……。だけど、見方を変えるとちよつと
グロテスクっぽくも見える……。。」

興味津津にショーウィンドウを覗き込むルードに、売り子の女性が声を掛けた。

「そちらのお弁当、当駅の一番人気なんですよ。日本海で採れた海の幸をふんだんに使った、海鮮丼になっておりまして……、」
店員の説明に、

「あー、そっか。これ魚なのか……。俺、海とは無縁な場所で育ったもんで、こういうの良く分かんないんで……。コレ、この赤いツブツブのやつって何なんですか？」

と、見本を指差し尋ねる。

「そちらはイクラになりますね。他にウニ、カニ、エビ等が入っております。」

「……名前聞いても分かんねーや……。」「

……悪魔、サハリエルの記憶を探ればほぼ確実に、情報は出て来るだろうが……。自分で得た訳でもない記憶などあっても面白くはない。

「……となると、やっぱり食べてみたくなるんだよねあ。」

むむっ、と、弁当と睨めっこしながら考え込むルードに、店員は、

「……お客様、ご旅行ですか？ 私、この辺詳しいんですけど、もし良かったらご案内しましょうか？ もう、あと五分で仕事あがりなんですけど……。」

「あ、結構です！ 急いでいるんで！」

上目遣いにかわいさアピールしつつ、下手に出て、下心満載のバイト店員の口上に、無理やり割って入りながら、竜姫が口を挟んだ。
ジロリとその女性店員を睨み付けながら、

「私、牛肉弁当で。ルードは？ どれ食べるの？」

と、問い掛ける竜姫の声音は、妙にドスの利いた迫力あるもので……。

「あ、……の、コレ……。」「

しきりに勧められた海鮮丼を指差しつつ、ルードは無意識に唾を飲み込んだ。

「……じゃあそれを、一つずつよろしく。急いであるから、早くね？」
笑う竜姫の目は、決して笑ってなくて。

ルードは彼女に会って初めて、本気で彼女を怖いと、そう思っていた。

ホントの魔性は……。

上質な牛肉の細切れを、砂糖醤油で煮詰めたものを、ご飯の上いっばいに敷き詰めた弁当は、旨そうな香りの湯気を立てている。

しかし、一面茶色一色で覆われた弁当は、赤や黄色に彩られ、豪華な魚介が乗ったルードの弁当と並べてみると、どうしても見劣りして見える気がする。

何となく、ピリピリした雰囲気 of 竜姫を前に、ルードが困惑の表情を浮かべるのを見ながら、彼女は黙々と口を動かし、自分の食事を口に運ぶ。

ルードは、割り箸を手にしたものと困り切っていた。

見よう見まねで握ってみるが、細かい米粒や柔らかいイクラなど、うまく掴んで口に運ぶというのはなかなか、難しい作業であった。

……使い慣れない道具の、上手い使用法を尋ねようにも……、肝心の竜姫がこれでは……。

ボックス向かいに腰掛けた、若い男の二人組が竜姫に向ける視線の種類を見ると、彼らに頼るのも、得策ではないようだ。

そう広くもない座席に、肩を並べて座りながら、彼女の心の内が分からない。

「……なあ、さっきから何怒ってんだ？俺、何かマズいことでもしたか？」

せっかく美味しそうな弁当を前にしながら、もう何度目だろう、バツテンに交差した箸でやりにくそうに二、三粒乗せたイクラを、口目前で取り落とし、とうとうルードが口を開いた。

「……別に。それに、ルードの事を怒ってるんじゃないもん。」

ガツガツと、あまり上品とは言えない食べ方をしながら、竜姫は答えた。

「……じゃあ、何に腹立ててるんだよ。怒るの、良くないんだろ？言っておくけど今は昨日みたいに邪気は吸ってやれないぞ……」

まさかこんなところで制御を誤る訳にはいかねーからな。」

自分の弁当に視線を落とし、手掴みで食べたらずっぱりマズいだろうか等と考えながら、ルードは言った。

「……。」

……が、竜姫は押し黙ってしまった。

正直なところ、ルードにも少しながら腹を立てていたのだ。……ただし、彼の責任の及ばぬ事柄で。

……そもそものは、こうもムカつくとは思っていなかった。……ようは単なるやきもちで、自分の想いを自覚したばかりとは言え、まだ出会って数日なのに、あの程度で腹を立ててしまう程に、彼を好きになっていた事に竜姫は驚いていた。

だがしかし、これではまるで独占欲の強い嫉妬深い女に自分がなってしまったようで……。

「ねえ、君。隣りのカレとケンカでもしてるの？ 良かったらこっちに来て、俺たちと遊ばない？」

人畜無害な笑顔。今まで目には映っていても、視界になかった向かいの席に座る男達に、竜姫は初めて気付いたように顔を上げる。

「ほら、トランプあるよ？、お菓子も……、甘いもの、甘くないの、色々あるよ。」

ポテチやチョコ、酒のつまみ的なかくんやチーズたら等が入った袋を持ち上げ、誘う。

「君、名前は？ 年はいくつ？ どこまで行くの？」

馴々しく尋ねる男二人に、ルードはピクリと眉をひそめた。

「喉渴いてない？ 良かったら一緒に買いに行かない？ 奢ってあげるよ。」

男の一人が手を伸ばして竜姫の手を取り、

「いえ、結構ですので。お構いなく……。」

と、すげなく断るのを強引にその場から連れ出そうとする。

「いいじゃん、ついでに俺らとイイコトしようよ。」

そう言って立ち上がる男の顔には相変わらずニコニコ穏やかな笑み

が貼り付けられている。

しかし、金に染められた頭髮や、趣味の悪いGジャンと、似合っていない黒い革のズボンという服装からは、チンピラ風味が漂い、うさん臭さはてんこ盛り。

……竜姫は、こういう類いの人間に手を触れられる事が、こうも不快なものなのかと、文字通り肌で実感した。

同時に、改めて思い知る。

自分がどれだけルードを好きなのかを。そして、いつから彼を好きになっていたのかを。

「あの、困ります！」

グイグイ手を引っ張られ、手にした弁当を取り落としてしまった竜姫は、高かった弁当の無残な残骸を痛恨の極みという表情で見下ろす。

「うげっ、汚ねー！、ズボンについちまったじゃねーか。おいコラ、テメー、どうしてくれんだ？」

飛び散った米粒の、何粒かをズボンの裾にくっつけて、男はそれまでの笑みをかなぐり捨て、怒鳴り声をあげた。

「あーあ、高かったんだぜ？コレ。当然弁償してくれるんだよねえ？」

脅し付けるように怒鳴る男の隣りで、もう一人の男がニタニタと嫌な感じのする笑みを浮かべ、竜姫に詰め寄る。

「！べ、弁償ですって？冗談じゃないわ！こっちこそお弁当ダメにされたの弁償して欲しいくらいなのよ！？」

普段の妖相手に感じるものとは、まるで別物の恐怖を感じながらも、いつもの習慣で、弱さを隠して立ち向かう竜姫。

相手を睨みつけ、掴まれた腕を振りほどこうと抵抗する。しかし、男の力は強く、竜姫の力ではびくともしない。『力』を使えばどうともなるが、一般の常人相手に術を行使する事は禁じられている。

「へー、人の服汚しといて、そんなコト言っちゃうんだ？」

「そういう悪いコにはおしおきしないとねえ……。」

下卑た笑いを浮かべる男達。

コンパートメントに扉は無く、車両の中は廊下に響く音は全てのコンパートメントに筒抜けになる。

目立てない事情を抱え、下手に大声を出す訳にもいかず、竜姫は男達のいやらしい手が自分の身体に触れようと伸ばされるのを黙って見ているしかなかった。

悔しさと恐怖と屈辱と。

それでも、竜姫は泣きもせずただ、男達を睨み続けていた。今にも指が、胸の頂に触れようかという、その瞬間まで。

……しかし、いよいよかというその時に。彼女の目は見開かれた。
——大きく、丸く。黒い瞳のその先にあるものは……。

「ぐあっ!？」

「イテテテッ!!」

苦悶にしかめられた男達の顔ではなく。バスケットボールの様に男の頭を掴む、五本の指でもなく。……サングラスの奥に光る赤い瞳。

「竜姫。俺の弁当持って上へ上がってろ。」

ギリッ、と力のこもる手指の様子から見れば嘘みたいな笑顔を浮かべたルードの、真っ黒なサングラスをかけていても分かる、優しい瞳。

「クソッ、テメェ何をつ、」

悪態をつきながら、彼らはギリギリと締め付けるルードの手から逃れようと、竜姫へ伸ばしていた手を自分の頭部へと、その行く先を変更させる。

ルードは、その手が竜姫から離れるのを見届けた上で、

「竜姫。早く上へ。」

再度促した。

竜姫は、何か言いたそうに口を開いた——彼が今何を考えているのか……、何をしようとしているのか……、尋ねようとした——、が、言葉にならない。

代わりに彼女の口から飛び出たのは……。

「ルードのばか……。」

「……助けてやったのにバカ呼ばわりされるのは納得いかないが……今は流しといてやるから、とっとと上へ行け。」

束縛を解こうと悪戦苦闘するも、万力のごとき力で締め付ける指は、いくら足掻こうとも緩む事はなく、男達は苦し紛れにルードの手に、爪を立てた。

伸ばしっ放しのだらしなく汚ならしい爪は、ルードの白く綺麗な肌に、一筋の赤を加えた。

一雫の赤い水滴が、手の甲から手首へ伝い、腕からポタリと床へと落ちる。

ズブリとめり込んだ、黄色っぽい色の爪の先は、今は赤く――。

……それでも緩まぬ力と、動じる事のない瞳。

竜姫は、ここ数日で緩みきった涙腺が、もう後戻りできない程に弱ってしまった意思に反して浮かんでくる涙を、せめて彼の前では零すまいと、無言のまま梯子に手を掛けた。

手を掛け、足を掛け。まだベッドメイクもしていない、二階の寝台へと登る。金属パイプを溶接して作りつけた梯子は、竜姫の手をひんやり冷やす。

四段ある梯子の、一番高い段に足を掛けると、天井はすぐそこで、屈まなければ頭をぶつけてしまいそうだ。

……そして。あまり上等とはいえない寝台を前に、はたと気付く。

――土足で寝台に上るとは……。

こんな状況とはいえ、それでも気になる事は気にしてしまう。寝台に取り付けられた転落防止の為にある、申し訳程度の手すりに掴まり、身体の向きを反転させつつ、寝台に腰を下ろす。

そう高くもない場所に腰掛けて、足を下へ降ろすと足先はルードの目線よりも少し低い位にある。

竜姫は急いで靴を脱ぎ、それを下へと落として、足を寝台の上へ引き上げる。

どさつ、と、高いところから適当に放られた靴は、片方はひっくり返し、もう片方は向こうの座席の方まで転がって行った。

ルードは、竜姫が寝台へ上がったのを確認した上で、初めて力を緩め、男達を拘束から開放した。

「お前ら、肉やら農作物やらを食えるまでにするのにどれだけの労力がかかっていると思う？ ……まあ、この弁当に使われてる食材が何なのか、よく分かってねー俺も、正確な所は分かんねーけど……、でも俺だって元は農民のはしくれだからな、こういう光景ってのは見てて面白くないんだよ。しかもそれが、自分の連れにくだらねーちよっかいかけた挙句につまんねーイチャモンつけられた結果とあっちゃ、尚更な。」

血の滲む手の甲をペロリと舌を出して舐める。

それは、傷口の消毒というより、血で汚れた手の赤を舐め取ったような……。実際、血の赤が拭い去られた後には、血の出た跡どころか傷跡まで無くなっている。

しかも、その仕草がやけになまめかしくて。

男達は拘束を解かれたにもかかわらず、真っ暗な外ではなく、明るい車内を映す窓ガラスの中のルードの姿に、思わずゴクリと生唾を飲み、竦む足はその場に縫い止められたかの様に動かせない。

「……こういう、乱暴な手管は好きじゃないんだが、今は仕方が無い。やたらに術を使うのもヤバイし。お前らみたいな下衆にわざわざ丁寧な術なんかかけてやるってのも勿体ないからな。」

ガシッと、竜姫のいる寝台側に立つ男の肩を掴んでくるりとこちらを向け、ルードは自分の膝を、彼の腹にめり込ませた。

「うぐっ、」

息の詰まった苦しげな呻き声をあげながら、ルードに寄り掛かる様に倒れ込む男。

相方に加えられた暴力に、もう一人が反応するより早く、ルードの右手の拳が男の鳩尾を突いた。

がっくりと膝を折る男二人を軽々持ち上げ、ルードは、一人寝る

のが精一杯の座席に、その身体を二人無理やり重ねて横たえた。

「……全く、マジで勿体ない事しやがって。」

ルードは、その場で腰を落とし、男達を放り出したその手で、散らかった肉片や米粒を拾い集める。

「ルード、……ごめん、手伝う。」

そう言っ、降りて来ようとする竜姫に、ルードは半分も減っていない自分の弁当を彼女に押しつけ、

「ここはいいから、お前はこれでも食べてろ。」

と、そっぽを向いたまま言う。

「え、でも……これはルードの……。」

散々苦心した跡として、潰れたイクラが散乱した、すでに綺麗とは言えない状況の弁当。

「馬鹿野郎。お前まだ半分も食ってなかっただろ、自分の弁当。何度も言うが、お前は今貧血起こしてるんだぞ。キッチリ食って栄養補給して。とっとと回復して貰わなきゃ、俺が困るんだよ。」

箸を手渡ししながら、ルードは言う。

「それと。この列車を降りる時まで、そこから降りてくるなよ。」

一応眠らせはしたが、いつ目を覚ますか分からないからな、こいつら。」

不機嫌そうな表情をするルード。

「でもルード、これが食べたかったんじゃないの？」

尋ねる竜姫。

「別に、今じゃなくなっ、生きてる限りはまた食える機会はいくらでもあるだろう。……それに。その弁当、木の棒の使い方に慣れないと、食うのにえらく苦労するからな。まあ、あれだ。次の機会までに上達させておかないとな。」

「別に、無理して箸を使わなくても、スプーン使えばいいじゃない。」

「スプーン？ そんな物、ついてなかったぞ。」

「その、窓の所のテーブルに置いた袋の中。」

指差す竜姫に言われて、ルードが袋の中を覗く。

「……プリン？」

「デザートにと思って、駅の売店で買って来たの。……ちょうどスプーンも貰えるし、一石二鳥だと思ったから。」
そうして戻って来てみれば、ルードは店員に口説かれていた。

「……なあ、お前が怒ってた理由って……、もしかして……、」

その言葉の続きを聞きたくなくて、竜姫は、彼の言葉を遮る様に、

「……ぷ、プリン、ルードも食べるでしょ？」

と、叫んだ。

「食べる。……が、ふーん、へー、」

ニヤニヤと、さっきまでの不機嫌はどこへやら。

ヒョイと寝台の手すりに片手をかけ、梯子も使わず軽々自分の身体を上へ引つ張り上げる。一瞬で、目線の距離を縮めたルードは、ずずいと竜姫を壁際へと追い詰める。思わず怯む竜姫。後ずさるうにも、こんな狭い座席では逃げ場などあるはずもない。

「る、ルード……？」

シチュエーション的には先程と大差はない。

ルードは、寝台のカーテンを引き、外界からこの空間だけを切り離した。

薄い布地のカーテンが遮るのは視界のみ。それとてうつすら向この寝台が透けて見える。

だが、今ルードとこうして二人きりだという演出としては充分過ぎる程だった。

一人寝るのがやつの場所で。

吐息が肌にかかるほど近くにある、綺麗過ぎる顔。

ルードはプリンの包装を破り、スプーンで一掬いした分をもったいぶって口に運ぶ。相変わらず口元はにやついたまま。

何も言えずに固まる竜姫に、ルードは、

「甘いな、これ。」

二口目を口に含み、それを飲み込まないままで、竜姫と唇を重ね合

わせた。

「……んっ、」

口移しに、ルードは竜姫の口にプリンを押し込む。口を塞がれて、どうしようもなく、竜姫はそれを飲み込んだ。

口に残る甘い味。こうして舌と舌とが触れ合っている、嫌だとは思わない。

昨夜とは違い、プリンを押しつけるという使命だけを果たして、早々に離れた温もりは、何故か竜姫に寂しさを覚えさせた――。

絡み合う想い

ガタン、ゴトン。

列車の車輪がレールの継ぎ目の上を過ぎる度に立てる音。一定のリズムを刻むようなそれと、壁につけた背から伝わる振動。

ドクン、と。

微妙に乱れた鼓動が、それと重なり合い、竜姫の頭の冷静な思考の邪魔をする。

「ほら、さっさと食わねーと、また口移しで無理矢理にでも食べさせるぞ。」

ルードは、何故だかとても上機嫌である。ついさっきまでの不機嫌さを一体どこへやったのかと、思わず問い詰めたくなる程に、だ。

とても楽しそうに笑うルードは、コンビニ仕様の手のひらサイズの小さなプラスチック容器に入ったプリンを、不似合いなサイズの白いプラスチックスプーンで、カップの端についたカスまで不器用に取って食べようとしながら、

「……安心しろ。お前がそれ全部食うのを見届けたら俺は下へ行く。奴らがいつ目を覚ますか分からないからな、また良からぬ事を企まないとも限らねーし。一晚見張ってやるから、竜姫は気にせず眠れ。」

と、気遣うように言い、のぼせた竜姫に、

「だからとっとと食え、」

と言わんばかりの瞳を向ける。

もともと、海鮮をふんだんに使った美味そうな弁当だ。多少盛り付けが荒らされているとはいえ、赤や黄の色彩は残っているし、見た目はどうあれ、味にも変わりはない。

そもそも、腹はそこそこながらも減っているのだから、食べたくない訳はない。

だが、ルードが一度箸をつけた弁当を、その本人の前で、しかも

彼にじっくり観察されながら食べられるのか、といえば……、限り無くNOに近いYESで……。

実際にはかなりの思い切りが必要だった。

心の葛藤に悩む竜姫に対し、空っぽになったプリンカップを持て余し、何となく弄くり回し、弄びながら、そんな彼女の反応を見て、わざとらしくニヤリと笑った。

いつもの事ながら、余裕なルードに悔しさを覚える竜姫。巫女である竜姫だが、恋愛御法度という規律は、教義にも家訓にも無い。

まあ、修行中ははじめとして浮ついた話題などには触れないようにしていたけれど。こういった事に対する免疫が、全く無い彼女に、ルードに打ち勝つ術を見出だすのは至難の技だった。

……とはいえ、ルードとて、特別経験値が高い訳ではない。何しろ、初恋を相手に伝えないまま散らしたそのすぐ後に魔物と化した挙句に正気を失い、封印されたのだから。

ルードヴィヒ自身、モテるタイプではなかったし、村だってそうしょっちゅう色恋沙汰で浮ついていられる様な余裕は無かった。

……時折、比較的年の頃の近い同性の友人達と、冗談混じりに、あまり上品とはいえない下ネタで盛り上がるのがせいぜいで。

けれど、その程度のレベル差でも、魔物の血が作り出した美がその差をグンと広げ、彼が本来持つて生まれた性格が、その魅力をさらに底上げする事で、竜姫から見れば自分よりかなり高い位置に彼がいるように感じてしまうのだ。

しかし、それはあくまで竜姫の側の視点で見、感じた想いであり、見解である。

余裕の水面下で、今ここに久遠がない事に内心感謝しながら、それでもドキドキする心臓に、ルードは冷や汗を堪えながら、笑う。ここでまた、下手に怒らせて機嫌を損ねたら、大変だ。不機嫌なままに、彼女の実家の敷居を跨いで、家の主の心証を悪くしてはいささかマズい。

けれども、戸惑う彼女をすぐ隣りに置いて、ついからかいたくな

る。

いつまでも、このまま彼女の姿を目に映していたくて。隙あらば、彼女に触れたくて。無意識に、熱っぽく潤む瞳で竜姫を見つめる。

そんなルードの視線を浴びて、何となく気まずい感じのする沈黙に耐えきれなくなった竜姫は、諦めた様に、白飯に数粒のイクラを乗せた箸を口に運び、噛み締めた。

プチッ、と弾けて広がる醤油混じりの潮味が、ご飯の甘みと相まって、至福の旨味を奏でる。

山育ちの竜姫には、久々の味と食感である。口に広がる味に、ついつい頬が緩み、それに伴い表情までも緩む。

程よい塩味しおみに、冷えた体が熱を欲し、胃が、そのためのエネルギーとなる食物を強く要求する。

みょうばんの苦みも薄く、甘いウニ。弾力に満ちて食べごたえのあるカニ。最初の一口を乗り越えた後は、もう瞬く間にそれらは竜姫の口へと消えていき、全てはあっという間に彼女の腹へと収まってしまった。

気味の良い食べっぷりに、クスクス笑うルードを見て、ハッと我にかえった竜姫が、ちよっぴりの後悔に顔を赤らめても、もう遅い。「貸せよ、捨てて来てやるから、それ。」

手を差し出しながら、肩の震えを必死に堪えるルードは、

「たしか、車両の連結部の所にあった乗り口の脇に、屑入れがあったよな。」

列車に慌てて飛び乗った際に目にした景色を思い浮かべるように、瞳を宙に泳がせた。

さっきの凄みから、もしかしてこのまま成り行くままに流されるかもしれないと、密かに思っていた竜姫は、拍子抜けした気分で彼の台詞を聞いた。

半分は、ホッとしながら――…もしもあのまま迫られていたら。彼を拒めたかどうか、竜姫は自分に自信が持てなかった――。

半分は、がっかりしながら――…助けられて、体を労られて、

高ぶった熱を、抱き締めて落ち着けて欲しかったのに――。

ルードは、そんな竜姫の想いを知ってか知らずか、一度閉めたカーテンをあっさり開放し、梯子も使わず身軽に寝台を飛び降りた。

座席の下に畳まれて置かれた安っぽい寝具を引きだし、ルードはシーツを一枚と、毛布を二枚、空の弁当箱と引き換えるように竜姫に手渡した。手渡された物の内容に、物言いた気な竜姫に先じて、ルードがぴしゃりと言いつつ。

「何度も同じ事言わせるなよ？」

先手を打たれ、喉まで出かけた言葉を飲み込まざるを得なくなった竜姫は、迷子になりかけた台詞を形を変えて口にした。

「……あ、ありがとう。」

「これ捨てに行ったついでにトイレ行って来る。……たしか三号車にあるんだよな。」

キョロキョロと、どこかに案内図がないかと辺りを見回しながら、ルードが言った。

「じゃ、ちよつと行って来る。お前は適当に寝ろよ？」

……今すぐ寝ろとは言わないあたり、やはり竜姫の体にかなり気を遣っているようだ。ルードは、下からカーテンの裾を掴み、静かに引いた。

……外から竜姫を隠すように。大切なものを、大事にしまい込むかの様に……。

ルードは、足音を忍ばせて、そつとその場を離れる。

気絶したまま、まだ起きる気配が無い事を、男達の前に立ち、確認し、大丈夫だと判断した上で、ルードはコンパートメントから廊下へ出た。それぞれのコンパートメントから感じる幾つもの人の気配に対し、まるで人気の無い廊下を、走る列車の進行方向に逆らう様に歩き出した。己の運命と決別し、新たな道へと進む。その決意を、確かめるかの様に……。

「全ては明日次第……か。」

いやに火照る身体に、つい苦笑いしながら、

「……少なくとも、明日までは自制しなければ……。叶わぬであろう望みが更に遠くなってしまう。」

そう、一人呟いた。

「……俺の命。無駄に終わらせる以外に、有効な使い道があるのなら。この力が、誰かの役に立つのなら。」

呪わしい過去も、正面から受け止められる様になるだろう。

「リズ、……貴女の幸せを奪った俺の、この想い。貴女は許してくれますか……？」

遠い過去となってしまったかつての友人——初恋の女性——を想い、暗いばかりの窓の外、夜空を硝子越しに見上げ、ルードは祈る様に呟く。

かつて信じていた神には届かぬであろう祈りでも、この土地でならば、誰かが耳を傾けてくれる様な気がして。ルードは祈る。

「俺に、犯した罪を償う機会を下さい。俺に、彼女を支え、この先も生き続ける事を許してください。」

彼の祈りに応えるかの様に、一筋の光が夜空を翔けた。

「流れ星……？」

土地によっては凶事の前触れとされるそれも、ここでは三回願いを唱えれば、願いが叶うと、ラッキーアイテムの様な迷信があるらしい。

ルードは、一瞬で消えてしまった光の残像に、それでも想いを込めた言葉を贈った。

——彼女が、もうこれ以上、不必要に傷つく事のないように——。数知れず瞬く星に。ルードは願った。

過去の為ではなく、未来の為に。

自分の為ではなく、竜姫の為に。

ルードは夜空の向こうまで見透かす様な瞳で空を見上げ、挑戦するかのような視線を投げた。

星達は、変わらず瞬き続ける。

ルードは、止めていた足を再び踏み出し、三号車へと歩き出した

!

その一方で……。

学園から、山を越え谷を越え、街を駆け抜け、川を渡り。琵琶湖すらも通り越して。西の空に見送った日が、東の空を白々と染め始めるまで。

金の毛皮に包まれたその姿は、確かに狐である久遠の体躯は、闇の中、視えざる金色の矢のように大地を駆けるそれは、豹のようなしなやかな四つ足が、力強く大地を蹴りつけるも、躍動感はそのまに、重さを感じさせない軽やかなもので。頭から九つの尾までしなる背中ではチーターの早駆けを見ている様だ。

山から山へ。起伏の多い道程を、険しい崖も、渦巻く激流も、久遠の行く手を阻む障害にはなり得ない。

真夜中でも人通りの絶えない街中では、屋根から屋根へと足音も無くヒヨヒヨイ渡って歩く。ふと通りすがった公園で、イチヤつくカップルを目撃しては、

「……つい二人きりにしちゃったけど、あいつ、竜姫に手を出したりしてないだろうな。」

と心配してみたり。高い山に囲まれた谷底に深く降り積もった雪が、月光を浴びて、淡く白く輝く様を見ては、

「綺麗だけど……寒々しい景色だな。竜姫、身体は大丈夫かなあ……。」

と案じてみたり。流れる星を見つけ、

「ルード……。何か考えがあるようだったが……。あの力、暴走すれば一大事だが、正しい方向に向けられれば……。あるいは……。」
と、ルードの明日を祈ってみたり。色々と、考えを巡らせながら、ゆっくり東から西へと廻る星の流れに逆らい、ひたすら社を目指して駆ける。

こんな風に、一人きりになったのは、何時以来だったのだろうか。ここ数年。久遠が生きてきた時の中ではまだまだほんの一部とし

か言えない様な、わずかな時間。いつも、社の住人に囲まれていた。それは、とても暖かくて。

だからこそ、今まで自分が過ごしてきた時が、冷たく凍り、乾いたものだったのだと分かる。人も、狐も、恒温動物で。外気の気温で体温が変化することはない。……まあ、妖である自分を、『動物』とくくって良いものかどうかは別にして、であるが……。

しかし、心は。敏感に反応し、形を変えるのだ。

苦しい、過酷な状況下では、心はささくれ立ってくる。漠然とした、目に見えない不安に満ちた状況下では、心は何も感じられなくなっていく。物に溢れ、豊かな暮らしに浸り、周りに目を向けなければだんだんと、人を思いやる心を失っていく。

愛に満ちた、暖かな場所にあれば、心は無限大の気力を生み出す事が出来る。

……と、切る様な冷たい空気を切り裂く、強い光が、久遠の視界を灼いた。

燃える火の球は、白く輝き。真っ暗だった空に光をぶちまけ、儼く光る星々の明かりを押し退けて。

再びの、主役登場と、意気揚々と東の空から南の空へと駆け上がる。その眩しさに、思わず目をすがめた久遠は、光の向こうに赤い鳥居を視認した。

一つ、山を越え、向こうにそびえる山の中腹に。

山は、そう高くはない。里山、と呼ぶのが相応しい位の山。辺りを囲む山並みと見比べてみればかわいいとすら思えるその山を、自分達は住家としている。

山の南側は盆地になっていて、家と田畑が碁盤の目のように、整然と並ぶ。

神のお膝元で育つ作物の出来はいつでも上々……なのだが、冬のこの時期では、田んぼは水を抜かれ、霜で真っ白になってしまっている。

畑に植わっているのも、ネギや白菜、大根ばかりで、他の季節と

比べれば、色彩に欠け、少々寂しい。

ビニールハウスもちろはら見えるが、あれは何を作っているのだろうか。

まだ日が出たばかりながら、朝の早い農家の人々はもうすでに畑に入り、それぞれの仕事に精を出している。

そんな様子を、山頂から眺め、久遠はホッとした気分になる。

ここを離れてまだ半年程。妖である自分の感覚からすれば本来、瞬きする程度の時間のはずが、何故だろう、とても久しぶりに帰って来た様な気持ちになる。

「……やっぱりここは、落ち着くなあ。」

一人呟いた久遠。

その背後に突如、禍々しい程の気配が現れたのはその時だった。げいん、と、痛みを伴う衝撃が、嫌な音と共に久遠を襲ったのは次の瞬間で。一体何事、と、振り返る間もなく、一対の拳が両のこめかみをロックオンする。

息つく暇もなく、ぐりぐり食い込む二つの拳。

そう、これはあれだ。梅干し。またの名をコブラツイストという……。頭蓋骨を潰してやろうかという勢いのそれに、久遠は涙目になりながら叫んだ。

「ギ、ギブ！ ギブギブギブ！ やめてえ、お願い！ 痛い、痛いってば！ ご、ごめん姐さん、ごめんなさいいい！！」

悲痛な彼の叫びは、周囲の山に反響し、山びことなって返る。幾重にも重なる悲鳴は、しかし、山のふもとで働く人間達には届かない。

今、この山で、妖怪である自分にこんな仕打ちが出来るのはただ一人。姐さん、と、久遠に呼ばれた女性は、ぐったりと力を失くした狐に蹴りをかまして笑った。

「……さて、どういう事か、説明して貰おうか？」

目を回して、説明どころではない久遠の腹を、爪先でちょいちょいつつきながら。彼女は言った。

「……覚悟は、もちろん出来てるんだよねえ？」

……久遠は、寒くなる背筋に震えながら、青ざめた顔をコクリと縦に振る。

チチチ、と。目覚めた小鳥達が一斉に飛び立った。彼らを、羨ましげに見送りながら、久遠はため息をつく。

「……竜姫、お願い。早く来て……。」

そう、切に願いながら……。

新たな緋の元で……。

うつすらと白む窓の外に琵琶湖を映し。明るさを増していくごとに、遠ざかる湖を背に、山の中へと線路は続く。

昇る太陽の前にそびえる富士山は、中腹辺りまで雪に覆われ白く染まり、荘厳な雰囲気醸し出している。

寝台列車を降りた駅のホームに、朝日が斜めに射し込んでくる。目覚めたばかりの竜姫の目にはそれは眩しすぎて。目を細め、後ろを振り向けば、ルードは眉間にシワを寄せてそっぽを向いている。朝の比較的早い時間だが、街へ向かう列車の発車する向かいのホームには、通勤・通学客が溢れている。げんなりしながらそれをながめるルードに、竜姫は、

「大丈夫、私たちが乗るのはあっちの電車だから。」

ちょうどホームへと滑り込んできた四両編成の洒落た列車ではなく、その一つ向こうのホームにさっきから停車している二両編成の時代を感じさせる趣きある車両を指差し、言った。

ホームはガラガラ。車内の人影もまばら。隣の喧騒が、まさに他人事。

そんな列車で、この忙しい朝の時間帯に、わざわざこちらに注意を向ける者はいない。唯一、車掌が「切符を拝見」しに来た以外は実に静かな旅。

一晩寝て起きて、竜姫の身体の調子も大分良くなった。……正直なところ、昨夜は眠れないかもしれないと思っていたのに。

それだけ、疲れていたらしい。まだ血が十分足りてはいないが、もう普通に動くくらいは平気なようだ。

「まだ、かかるのか？」

東南から、文字通り射るように注がれる陽光から、隠れる術もなく、ぐつたりとだらしなく手足を投げ出し座るルードが尋ねる。

「んー、電車はあと三駅だけなんだけど……。またそこからタクシ

ーで三十分。山道登って十分はかかるかな……」

昨夜一晚、宣言通り、一睡もしなかったらしいルードは、その答えに思わず呻き声を漏らした。ルードは、そんな己の状態を情けない思いながら、込み上げてくる吐き気と戦っていた。

昨日、あれだけ血を摂取した後だ。いくら日の下にいるにしろ、こうも体が不調を訴えるはずはない。

……そう、本来は。＞i3248—425<

一晚や二晩の徹夜ごとき、どうということはない。しかし、今日これからの事を考えると、緊張と不安とで、気が重くなる。

アナウンスが流れ、列車が止まる。コンクリを固めただけの簡素なホームが一つあるだけの小さな駅。ホームの隅には、掻いて退けた土や埃で黒く汚れた白い雪が積まれている。

一人、列車を待ってホームに立っていた客が、扉を開けて乗り込んでくる。開いたドアからは、冷たい空気が流れ込み、暖房の効いた暖かく緩んだ空気を一瞬で引き締める。

日に焼かれてぼうつとなった頭に、風は心地よく届き、ホームに集団で、忙しくなくコンクリを頻りにつつく雀を見やりながら表情を緩めるルード。

それを横目に見ながら、心の中でこっそり、ホッとため息をつきながら、

「ルード、もう次だから。もう少し辛抱して？」

竜姫は、彼の体調を伺うように言った。

命にかかわらないからといって、吸血鬼である彼を朝っぱらから、こうして太陽の下にいさせているのは、……それが本人が望んだ事のためとはいえ、何となく罪悪感が付きまとう。血をあげられれば少しは楽にしてあげられるかもしれない。

「悪いが血なら間に合ってる。……余計な気を回すな、少し日陰に居ればすぐに回復できる。」

……そう、心の中でチラリと思ってみただけなのに、ピンポイントを狙って釘を刺された。

「……言っておくが、俺は何もしてねーぞ？」

膨れながら、疑いの眼を向ける竜姫に、ルードは言った。

「……。」

——それは、考えてることが全部顔に出ているという事？

竜姫は、考え込むように黙り込んだ。そうホイホイ内面を外へ漏らしては巫女失格だ。そんなこと、知られたら『彼女』にしばき倒される。間違いない。開口一番に、

「半年間、何をしていたああ!？」

と怒鳴られ、人の範疇を越えたコブラツイストが待ち構える。竜姫は、既に被害者となった久遠の悲劇を知らぬままに、青ざめる。

急に狼狽えだした竜姫に、ルードは怪訝な顔をする。

アナウンスが降車駅を告げ、スピードを落とし始めた列車の中で、竜姫は、必死な顔でルードを問い詰める。

「ねえ、私ってそんなに分かりやすい？」

彼女の問いに、ルードは自分の失言に気づいて、しまったとばかりに手で顔を覆った。危険な魔物と対峙したとして、相手に自分の考えを易々と読まれてしまったては、命にかかわる。

「気を抜かなきゃ、その手のお前のコントロールは完璧だよ。……だから、そう深刻に気にするな。」

後ろから手を伸ばし、自動では開かないドアの取っ手を引いて開けながら、ルードはもう片方の手を竜姫の頭の上にポンと乗せた。

少し、くすぐったい気分には踊らされたように。二人は歩き始める。隣の駅とそう代わり映えのしない田舎の駅のホームで、大分高いところまで昇った太陽と、一人しかない駅員の、ここまでに買った切符の束を渡されて驚く視線を背に、駅を出る。

昔ながらの商店が並ぶ通りが一本、線路と平行して走る。線路と通りとを挟んで立ち並ぶ商店街は、まだシャッターが降りている。

人通りもまばらで、少し寂しい感じがする。

慣れ親しんだ町並みだが、駅前に、大きなショッピングセンターが、どーんと建っていた向こうの駅と比べると、うんと田舎じみて

見えるようで。

……まあ、事実田舎なのだが。店さえ開けば賑やかになって、とても素敵な町になることを知っている地元民としては、少し悔しい気もする。もう後小一時間もすれば店は開く。

けれど、今は時間が惜しい。竜姫は、ルードをタクシー乗り場へ引っ張って行く。財布はもうこれでスツカラカンになるのを承知で、行き先を告げる。

「豊生神宮までお願いします。」

タクシーは、踏み切りの無い線路を渡って東へ向かい、走り出した。商店街を抜けた先は、すぐ畑と田んぼが、正面に並ぶ山まで整然と並んでいる。

ルードは、畑に植わった作物を指差しながら、興味津々に尋ねた。「なあ、あれは何を作っているんだ？」

「あっちの畑に生えてる細長いのは長ネギ。隣のギザギザの葉っぱは大根。むこうは白菜。」

雑草を除き、霜でダメになった葉を間引き、野菜に防寒対策を施す農家の人々も、そろそろ一段落と、一人、二人と引き上げていく畑には、見知った顔が並んでいる。

竜姫は、なるべく顔を合わせぬように、畑を見ることなくルードの問いに答える。幼い頃から慣れ親しみ、見慣れた景色。光景は、改めて確認せずとも目に浮かぶ。

田畑を区切る畦道が、網の目のように張り巡らされている中の幾つかが、舗装されて車が通れるように整備されている。

ちょうど、大きな箱に小箱を幾つも詰めて仕切ったように。そして、大箱を幾つも敷き詰め、その隙間隙間を埋めるように所々、ポツポツと民家が点在する。

町の北側に作られた貯水池から畦道に添うように走る用水路では、雀や鳩がこの寒い中水浴びをしている。冷たい水の中で、翼をバタつかせ、水滴を弾き飛ばす。

順番待ちの雀が、何もない田んぼを眺める。ほんの一月前のたわわ

に実った黄金の稲穂を懐かしむように。

そこへ一羽のカラスが舞い降り、小鳥の群れを追い散らして我が物顔で水浴びを始めた。その向こうに建つ学校の校庭では生徒達がジャージ姿で集まっている。

体育の時間なのだろう。あの顔ぶれを見るに、どうやらあれば同級生達のようなだ。校舎はそう大きくもないが、広々した校庭では、準備体操の後のランニング中らしい。男女入り交じり走る。……半年前までは、あの中に普通にいたのに。

もう吹っ切った事ながら、少しばかり複雑な思いがふと心を過る。車は、そんな心情など知るよしもなく、軽快なスピードで走り過ぎる。高い建物もなく、遮るものなく広がるのどかな風景に、ルードも、どこか故郷の村と無意識の比較をしながら町を眺める。

「ここが、竜姫の生まれ育った場所なんだな……。」

おおよそ、犯罪はもちろん、ご近所同士のトラブル等とも無縁な、平和な町で。

「ほら、あの正面右手に、他より少し小さめの山が見えるでしょう。あれが、うちの神社よ。」

言われてみれば、確かに山の中腹辺りに、朱塗りの建物が集まっているのが見える。……しかし、気のせいだろうか？ 神社だと言うわりに、あの近辺にだけ、なにか黒いモノを感じるのは……？

ほのぼのとした空気が漂う周囲とは裏腹に、がぜんルードの緊張は増す。

一世一代の大勝負だ。ここで、負けるわけにはいかない。目の前に迫ったその時を改めて目にして、ルードはグッと拳を握りしめた。そう、いよいよ、だ。

——俺の過去と未来がここで決まる。生きるか死ぬか。さあ、いよいよだ。

タクシーは、山のふもとで停まり、ドアが開いた。舗装すらされていない登山道の入り口に、「豊生神宮」と書かれた石柱が立ち、少し奥まった先には石造りの鳥居がそびえている。

鳥居を潜った先には、丸太で段をつけた山道が続く。

季節柄、多くの立派な大木も今はほとんど皆葉を落とし、山は白々としているが、季節になればさぞかし辺りは幾つもの緑で覆われるのだろう。

茶色く朽ちた枯れ葉が、下の地面が見えないほどに撒かれた道に、点々と溶け残って凍った雪が、神社へ向かう者達の足を引っ張ろうと待ち構えている。

踏み荒らされた葉や雪を見ると、どうやら参拝客は結構いるらしい。

「この道を上がった先が、本殿よ。」

支払いを済ませてタクシーを降りた竜姫が、凍って滑りやすくなった道を、そうとは微塵も思わせない足取りで踏みしめる。

こここそが、己のテリトリーなのだと、一步鳥居を潜った瞬間に、竜姫は、改めて思い知る。拒絶され続け疲弊していた魂が、あるべき場所に戻り、本来の力を取り戻す。

まだ少し重かった足取りは明らかに軽くなり、山道を登っているにもかかわらず、足の運びが速くなる。

……おそらくは無自覚なのだろうが、表情からも今までルードが気づけなかった僅かな堅さが消え、柔らかな笑みが浮かんでいる。ここは、まさに神のお膝元。悪魔や吸血鬼が真っ昼間に訪ねるには本来は向かない場所だろう。

しかし、あの古い礼拝堂でいつも感じていた身体に来る不快な威圧感を、今ルードはまるで感じていなかった。

……ある程度力に制限がかかるであろう事は覚悟していたのに、鳥居を潜り神域へ入った今でも、昨日、クラウドとやり合ったあの時よりも力は溢れている。

昼日中でさえなければ、力の制限など無に等しいだろう程に、ここは、ルードにとっても居心地の良い場所のようだ。

魔物に堕ちた時点で、神は敵になったのだと、ずっと思っていたのに。もしかすると、自分は井の中の蛙だったのかもしれない。

そう、改めて突きつけられたようで。ルードは、少し複雑な想いにかられた。

……それに。山の上、ちょうどさっき見えた社の辺りから、断続的に感じる殺気も気になる。身体がどうこういう類いのものではないから、「魔物」である自分に向けられたものではないだろうが、しかし……。

これは明らかに、漠然と漂っているような類いのものではなく、自分達に向けられた殺気だ。と、なると……。これは……？

「……。」

幾つか考えつく理由は、どれもルードの気持ちを重くするものばかりで。門前払いこそされなかったが、やはりここからは厳しい闘いになりそうだ。

ルードは、一段一段、段を確実に踏みしめながら、全身にのし掛かる殺気の出所へと続く道のりを、竜姫の背を追うように登っていく。

「へえ、あれが噂の坊っちゃんかい？ ……成る程ねえ、確かにアレはちょいと厄介だねえ。」

呟く稲穂。

「色々気に食わない奴だけど。……でも、悪い奴じゃない。好きにはなれそうにないけど、助けてやりたいと思う。」

久遠は言った。

「ここへ来たいと言い出したのは彼、だったね？」

久遠に問う声。

「……はい、多喜様。」

「この、吹き込んだ新しい風が、追い風となるか……逆風となるか……。こんな短期間の内にこうも色々事が動くとは。千年生きてきて、初めてだよ。事は中々に、面白いことになりそうだねえ？」

鏡から聞こえる、破天荒な女帝の台詞に、久遠はため息をつきながらも、己で感じ取った動き出した運命の奏でる音を思い、眼下の二人を見つめる。

ほんの、数時間前に別れたばかりのはずの二人の心の距離は、見ればすぐに分かる程、あきらかに縮まっている。

若干、不機嫌そうな顔をする久遠の隣で、稲穂が握りしめた拳に息を吐きかける。

「ふふっ、まだ殴られ足りなかったかしら？ ……ねえ、久遠？」

忘れようとしても忘れられない、身体中をズキズキ苛む痛み。さんざんしばき倒されたばかりの彼は、我が身を守るため、心の中の雑多な感情を全て押し出し、心を無にする。

……少しだけ。ほんのちよつとだけ。ルードのこれからの運命を、案じながら――。

アネゴな神さん。

山の中、そこはとても静かだった。風の音。鳥の鳴く声。社のすぐ裏手に流れる川の水音。この部屋にいて、聞こえる物音はそれだけ。

そして、その音も、この場所の静けさを際立たせるための演出に他ならないようで……。

広い、広い板の間で。

ルードは一人、申し訳程度の薄っぺらな座布団一枚敷いたその上に、慣れない正座をして座っていた。

暖房器具など無い、冷えきった空気が、空間を占めるこの道場で、ルードは待っていた。居るだけで、自然と身も心も引き締まるような気がする中で、彼女が戻ってくるのを。

山を登り、二つ目の鳥居を潜った先で。一般の参拝客が参りする拝殿を有した本殿が、堂々としたその佇まいが姿を表した。

しかし、竜姫は、そこから裏へと続く小道を更に山の上へと登っていく。社の裏手にあったのは、こじんまりとした社務所と、平屋建ての自宅。そして、自宅より余程広い、この道場で。

社務所から鍵束を手に出てきた竜姫に、道場へと通されたのだ。彼女は、稲穂を呼んでくると言って部屋を出ていったのだが……。

「……遅いな。」

時計もない。この、周囲から切り離されたような場所で、果たして正確な時間感覚などあてになるのかどうか。

実際はまだ数分しか過ぎていないかもしれない。そわそわと、何だか落ち着かない気分になってきた頃。背後で、静かに引き戸が開く音がした。

……振り向いて、確認するまでもなく、それが彼女ではないことを悟る。ルードは、すっと立ち上がり、すぐさまその場に跪き、頭を垂れる。

これまで、礼を要する場面に縁の無かったルードは、必死に、昔見た騎士の仕草を真似て頭を下げた。

「……それが、お前の国の挨拶の仕方なのか？」

細く、しなやかな美脚。ルードの背後から右横を通して彼の前に立ち、上から見下ろし、威圧的な声音で尋ねた。

「……正式な礼儀作法等とは無縁な環境で育ちましたので。見よう見まねの礼です、これが正しい挨拶かどうか、俺には分かりません。何か無礼に当たることがあったならば、ご指摘下さい。謝罪致します。」

慣れない敬語で、固い挨拶を口にするルードの前で、かの皮とは、素足をぞんざいに投げ出して板の間に腰を下ろし、胡座をかいだ。

「……ああ、いい。そういう細かい事はアタシも苦手だね。敬語だとか、礼儀作法だとかは気にしなくて良いよ、取りあえず今は、ね。」

言われて、顔を上げたルードは、目の前の光景に、思わず己の目を疑った。

姐さん。久遠がそう呼んでいたが……。その呼び名に、これほどぴったりの女性がいるとは……。

派手な赤い色の着物の襟元は、これでもかと言わんばかりにはだけられ、胸元にはくっきり刻まれた胸の谷間が。

プツクリと肉厚な唇に塗られた真っ赤な紅は何だか艶かしいし、組まれた足の隙間からは、見てはいけない場所が垣間見えてしまいそうだし……。

何でか潤んで見える妖艶な瞳にかかる前髪は、燃えるような赤。

頭の後ろで一つにくくった長い髪は、毛先が床に無造作に投げ出され、所々ウェーブした毛がとぐろを巻いている。

細く長い指が五本くっついた手には、白く湯気の立つ湯飲みが握られていて。

彼女は、面白そうな目で、ルードを頭の前から足の先まで眺めた。一方のルードは、目のやり場に困って、視線を泳がせた。

「何だい、また随分と可愛い反応をするじゃないか。そうか、お前、まだ穢れ事を知らないんだな？」

クスリと笑って、彼女は言った。

「久遠の話じゃ、百戦錬磨の女たらしかと思っただけだ……。
うちの姫にした口づけ、お前にしても初めてだったのか。」

言われて、昨夜のアレを咄嗟に頭に浮かべてしまい、平常心が何処かへ光速でぶっ飛びそうなった。

「……おおまかな事情はヤツから聞いている。その件に関しては、感謝しているよ。」

そんなルードの内面を、知ってか知らずか、彼女は、浮かべた笑みを深めながら続ける。

「……あの、貴女は……、稲穂、様……ですよね？」

ドクバクと、物凄い速さで刻まれる鼓動。それは、幾つもの理由が交錯する胸の中ばかりでなく、全身で感じ取れるほど強く脈打つ。ルードは、強く強く、心の中、理性と平常心を握りしめて、目の前に悠々と座る女性に尋ねた。

「ん、そういえば自己紹介がまだだったね。そうさ、アタシが稲穂だよ。……詳しい事情は姫に聞いて知ってるんだって久遠からは報告を受けているが。自己紹介の続き、まだ聞かない？」

「個人的には、聞きたいと思うのですが……、今は、急ぎの用件があります。できるならば、本題に入りたいのですが。」

ルードは、座布団の上に座り直し、改めて姿勢を正して切り出した。「お前の仇敵を討つのに姫の力を借りたい……、と？」

心の中まで見透かすような視線で、ルードの紅い瞳を貫く。

「いいえ、違います。」

その射抜くような瞳をまっすぐ見返して、彼は答えた。

「……いえ、正確には少し違う、というか。」

ほう、と細められた稲穂の目からルードは少し目線を逸らし、目を伏せて言った。

「……では聞こうか。」

さすが、と言うべきなのか……。彼女の言葉には重みがある。威厳、というのだろうか。何か、上に立つものの迫力のようなものを感じる。

「そうだね、こういう大事な話ってのは人伝に聞いただけで済ますもんじゃない。本人から直接聞くのが筋ってもんだ。さあ、話してみろ。一応聞くだけは聞いてやろう。姫の必死の頼みだからね。」

「……ありがとうございます。」

ルードは、軽く頭を下げ、そして口を開いた。

「俺を、この神社の番犬として、置いて欲下さい。」

幾つもの言葉が頭の中でひらめき、雪崩うって口から出ていこうとする幾千の台詞を喉元に押し留め、単純明快な願いのみを口にする。

「番犬……。ね。で、その心は？」

少なくとも、表面上は笑んでいた表情から笑みを消し、稲穂は尋ねた。

「理由……。俺が、俺であるために。……。その為に必要な力を借りるための、その代償……。とか言えば聞こえは良い、……。けど……。正直、俺の勝手な希望です。」

ルードは、見定めるような稲穂の冷たい視線を真っ向から受け止め、想いを言の葉に乗せていく。

「……俺は、闘い、殺戮するための力ばかりに特化した異国の魔物です。事実、多くの人間の命を奪ってきました。今も、竜姫に貰った血の力が尽きれば、いつ暴走するとも分からない、不安定な化け物。そんなもの、この世に存在すべきでないと、つい三日前まで、そう思っていたんです。」

いつ暴走するやもしれぬとは、その様子からは到底思えない。

「けど、久遠の話を聞いて少し考え直してみようかと、そう思いました。」

訳を語るルードの表情は、それ程に、とても穏やかなものだった。

「竜姫も、力は使いようだと言ってくれた。……。だから。」

ルードは、瞳の奥にゆらりと妖光を湛えてみせ、あえて力の一部の制御を緩めた。とたん、ただ座って喋っているだけの彼の存在感が膨れ上がる。

「竜姫が、ここに居られない理由、聞きました。……俺なら、この地を脅かす人外全てを返り討ちにできます。」

……まごうことなき、強大な力の気配。稲穂は息を呑み、目を見張った。……話には聞いていたが、これ程とは。

確かにこれならば、この辺の有象無象が束になって大挙したとしても、彼には敵わないだろう。

しかし、稲穂は視線で心の中を射抜くかのような鋭い瞳で、紅く妖しく光る魅惑的な瞳の奥を睨み付けた。

「けど、俺が俺として力を暴走させずに使うためには、竜姫の協力が必要不可欠です。」

……敵の前で、弱気になるな。隙を見せるな。ハッタリでも何でも良いから強気で行け。と、そう叩き込んだのは、他でもない。稲穂であった。

己の経験から来る教訓だ。当然、自身の身体にしっかりと刻み込まれている。

「封印を解かれた今、俺を滅しようとする者が居ます。俺だけの問題で済めば良いのですが、残念ながら、そうはいかないようで……。放置すれば、まるで無関係な周囲にまで甚大な被害を及ぼしかねません。」

相手の力に圧されぬよう、腹に力を込める。

「……自らの復讐の為でなしに、天使殺しの重罪を犯すと？」

「ここに来る前に、奴と剣を交えました。……その場から退却するための、お遊びみたいな斬り合いだったんですがね。三百年を経て、俺自身として初めて奴と言葉を交わして……。正直、馬鹿らしくなりました。あんなくだらない奴を斬るのに、復讐なんて高潔な理由はいらない。復讐だなんてカッコつけて殺しても、きっと俺のこの心の内は晴れやしない。……だったら、もっと建設的な事をした方

が得でしょう？」

「その、お前が言う『建設的な事』が、神のイヌって訳かい？」

稲穂は、彼の真意を試すように、意地悪く言った。

「用心棒だなんて聞こえは良いけど、結局は汚れ仕事だ。……最近の言葉じゃ3Kって言うらしいがね。キツイ、汚ない、キケン。はつきり言って、建設的な仕事じゃあり得ない。」

……ルードの決意を切って捨てるかのような台詞。しかしルードは、余裕だ。

「俺にとっては、充分すぎるほど建設的です。今まで罪を重ねることしかしなかった力で、今度は人の役に立てるんですから。」
周囲を圧倒していた力を鞘に納め、ルードは静かに笑う。

「天使殺しの罪なんて、俺にとっては今さらです。これまで数えきれない程、罪を重ねてきたんですから。……汚れ仕事は、何時何処の国でも時代でも、大体が罪人の仕事ですからね。俺は気にしませんよ、そんなこと。神社を護ればこの地の人々の富をも守れる。竜姫の為にもなる。……人の役に立てて。必要とされて。それだけで、いつ、どうやって死のうか考えているより万倍マシですよ。」

稲穂の瞳を、恐れもなく直視出来る者は、種族問わず、そう多くはない。その中で、稲穂の瞳を見て笑う事のできる数少ない人物である竜姫が連れてきた、ルードヴィヒと名乗る人外。

彼もまた、稲穂の瞳を見て静かに微笑んでいる。色こそ異端の紅色をしているが、その瞳に曇りはなく、嘘がない。

だが、揺らめいた妖光と力は両刃の剣。

強い戦力の一として貴重な人材である事は確かだ。戦力に難のある今、彼の力は大変魅力的であるが……。

「……ルードヴィヒ。お前に、多喜様への目通りを許してやろう。」
ピシッと、扇子でルードを指して、稲穂が言った。

「豊生神宮、ニの神、稲穂は、お前の意思を汲み、お前の願いを聞き入れることを承知した。……三の神、久遠も、当代の一の神も、お前の意思を受け入れることを、既に承知している。だが、知って

の通り、当代の主祭神はまだヒヨッコでね。重大決定には……悪いが先代のお墨付きが要る。」

言いながら、稲穂は懷に手を入れ、竜胆を逆さにしたような形をした硝子細工を取り出した。取っ手から丸く膨らんだ胴まで、薄桃色がかった半透明の綺麗なガラス細工を一振り。二振り。

すると、銅の中に吊るされた欠片が周りの硝子に触れ、ちりん。ちりん。と高く綺麗な音を奏でた。

「姫、おいで。」

ルードの背後の引き戸が擦れる音。するすると扉が開けられる。

「……聞いてたね。さあ、姫、多喜様の所へ連れてってやりな。」ルードの頭上を飛び越して、稲穂の瞳は竜姫へと向けられた。

「急ぐのだろう。近道してっていいから、早く行きな。」

促しながら立ち上がり、無駄も隙もなく、ルードの傍らに屈み込み、女とは思えない低い声で、そっと耳打ちする。

「中々に面白いな、気に入ったよお前。……だが、うちの姫に何かあったその時は——」

フツと笑って言葉を切り——。稲穂は意味ありげな目配せだけを残して部屋を去っていった。

無理矢理エスケープ!!

くすくすと、わざわざ人を指差しながら、忍び笑う声。教室でも、廊下を歩いていても、寮の食堂でも……。

とにかく、何処へ行こうとも付きまとう不愉快な雑音に、誠人は我慢の限界に達しつつあった。

原因は、先日己の奇行にある。……が、それだけならもう、噂はたち消えていただろう。

日々積み重ねてきた信頼度は伊達じゃない。

……噂を煽る原因は、彼の頬にクッキリ浮き上がった赤い手形。

昨日、従妹にひっぱたかれてできた傷のせいだった。

一昨日辺りから、とにかく良いことがない。

テスト前だというのに、勉強が手につかず、ベットに大の字に寝転がったまま、イライラ、ソワソワと落ち着きなく寝返りを繰り返す。

「……何で、誰も竜姫の事を覚えてないんだ？」

頬の腫れた理由を説明するも、誰も彼もが決まって返してくる問い。

『神崎竜姫って、誰？』

『……そんな娘、いたっけ？』

……まだ転校してきて間もないとはいえ、それでももう三ヶ月は経つ。

どんなに目立たないタイプの人間だろうと、同じクラスの人間が、誰一人——クラスの担任も含めて——竜姫の名前すら知らないというのはどういう事か。

しかも、彼女自身の行方も知れない。

「……どういう事なんだ？」

ポツリと、独り言のつもりでそう、一人、天井に向けて呟いた台詞。

「……お前。記憶を消されてないのか？、奴の術に。」

その独り言に応える声が、自分以外誰も居ないはずの部屋の隅から返った。

「……っ!？」

何故か、聞き覚えのある気がする声。

急いで飛び起き、部屋中に視線を忙しく走らせる。

「っ、ということはっ、お前、やはりあの魔女と通じているのか!？」

フツと、周りの空気が歪んだ気がして。目の前に突然、この明るい部屋の中で尚、光り輝やく男が一人、姿を現した。

……輝く金髪。それも、地面にまで届く様な長髪。日本人にしては白っぽすぎる肌。……天使みたいな翼や輪っかをつけて、古代ローマ人みたいな服装で。腰に携えた剣にはキリストの神の御印が。

……それらには。見覚えが、あった。

「お……っ、お前っ……!」

そうだ、この男はあの夜の……。

「人間。大いなる御方に遣わされし大天使である、このクラウドをお前呼ばわりとは……、許しがたい、今すぐ神の裁きを下してやる! ……、と、言いたいところだが……。今は、お前に尋ねたい事がある。」

静かに抜いた剣の刃先を誠人の首元へ押し当て、

「答えろ。魔女は何処へ逃げた?」

視線だけで心臓を止められそうな、殺気を宿らせた蒼の瞳で彼を睨み付ける。

……ルードや竜姫であれば、またかと呆れこそすれ、この程度、脅しとも取らなかつただろう。

しかし、誠人は。

彼らとは違い、常人だ。……加えて、優等生であり続けてきた人間だった。……こういった、緊迫した修羅場に遭遇した経験など無に等しかった。

そんな彼にとっては、己の急所に突きつけられた剣の刃先や、射

殺されそうな視線等無くとも、彼から放たれる大天使たる強大かつ強力な存在感と威圧感だけで、十分な脅しであった。

「ヒイツ、」

反射的に上げた悲鳴は声にならず、喉の奥に詰まったような呼吸音だけが口から漏れる。

ピツタリと急所を捉えられ、動けない。

「さあ、答えろ。素直に言えば、先程の無礼は水に流してやろう。」男の顔に浮かぶ、狂気の笑み。

「……なっ、ま、魔女なんて非常識なもの、い、居るわけない……、だ、ろ？……、」

恐怖にどんどん血の気の引いていく顔を晒しながら、誠人はそう言いかけて……、途中で言葉を失くした。

目の前で、剣を突きつける存在。……天使だと名乗った男の背にあるのは一對の白い翼。頭上に浮かぶ、金の輪っか。

……格好だけなら、コスプレと片付けられたのに。なんの冗談か、男の足が地に着いていないのだ。……つまり、宙に浮いているのである。

ここは、自分の部屋だ。当然こんな男をワイヤーなんかで宙吊りにした覚えなど無いし、……そもそも、いくら視力が悪いからと言って、この至近距離で、そういった仕掛けを見逃すなど有り得ない。

……間違い無く、この男は自力で宙に浮いているのである。そんな有り得ないはずの存在が、目の前にある……。

「お、おま……、あ、いや、貴方は……、本当に……、天使？ ……、なら、魔女というのは？」

……一体、なんの事なのだろう？

「お前の血縁に、神崎竜姫と名乗る娘がいるだろう。そやつの事だ。」

問うた誠人は、返った答えに、
「……え、竜姫ちゃんが、……魔女？ まさか。彼女は普通の女の

子で……、」

まさか、と。そう思った。
しかし。

「下手な庇いだてをするな。本来、常人の目には映らぬ我を視、使い魔を従え、強力な魔術を行使するアレが、普通の人間な訳がなかろう。」

天使は、バツサリと切って捨てた。

「昨日と一昨日、この部屋に封印を施し、我のこの部屋への侵入を妨げたのは、あの小娘の仕業だろう？」

天使に言われて、思い出したように、誠人は、机脇のゴミ箱を見た。ゴミ箱の中の、一番奥の方にあるはずの、それ。

……竜姫に貰いはしたが、胡散臭いと、クシャクシャ丸めてさっさと捨ててしまった紙切れ。それが、本当にこのデタラメな存在に効いていたのだとすれば……。

「……、でも、使い魔って……、……そんなもの、見たことも無いし……、」

今まで、真剣に目を向けてこなかった竜姫の主張が、否応無く、彼の目の前で、事実として展開していく。

「当たり前だ。常人のお前に、あれが視える訳がなかろう。我とて、昨日今日にここへ降りた訳ではない。もう、数百年ここにいる、……が、お前はあの晩まで、一度たりとも我に気づかなかった。」

視えない、だけ……。

今、現実には居ない存在。それが実は居たのだとしたら。ただ、自分の瞳に映っていなかったただけだったとしたら。

……自分の見た世界が、万人共通のものだと、そうずっと思っていたことが、実は違うのだとしたら。

「……いるよ。神様はいる。神様だけじゃなく、魔物の類いもね。」

……竜姫は、そう言った。

それが、真実なのだとしたら。

「じゃあ……、本当に彼女は……、巫女……なのか……？ ……で

も……、魔女って……?」

「馬鹿者。大いなる御方に従わぬ異形を神と崇める者は魔女だ! 神の裁きを受けるべき存在だ!」

グツと、突きつけられた剣に力がこもり、刃先が肌を傷付ける。つつうーつ、と、赤い線が刻まれ、そこから血が流れ落ちた。

「か、神の裁きを……って、竜姫ちゃん、どうなるんだ?」

「殺すに決まっているだろう。」

冷たく言い放つ天使に誠人は、

「……っ、そんなんっ、」

苦い表情をする。

「本来なら、私の質問に応えぬお前も、今すぐ斬り捨ててやりたいが……、未だ結界の余波の残るこの場ではお前に危害を加えられん。」

……たいした傷ではないにしろ、この、首元の怪我は、この天使の基準では、危害の内に入らないらしい。

「やっぱり、竜姫は学園にいないんだな?、……何故?」

この、試験前の大事なときに学園に居ないのは何故か。……誰も彼女の事を覚えていないのは何故?

「……彼女は逃げたのだ。我から。」

「逃げた……?」

「だから、こうして尋ねている。奴の行き先を知らぬのか、と。」

天使は、冷徹な瞳を更に凍てつかせて問うた。

誠人に、抵抗する術などない。

「あの子が帰るなら……、実家の神社しかないかと……、」

誠人は答えた。

……自分の親に引き取られて約半年経ったがそれでも、彼女が帰るべき家としたのは、誠人の両親が待つ街の家ではなく、田舎の神社だった。

「それは、どこにある。」

重ねて尋ねられ、誠人は、

「な、長野と岐阜の県境近く……、の……、山に囲まれた。」

訳の分からない存在相手に、どう説明したものかと、一瞬迷ったものの、そう答えた。

が、やはり、

「それでは分らん。」

と。……そして天使は、

「お前。我を案内しろ。」

当然といった態度で要求した。

「え!?! ……、でも……、」

まさか、生徒会長を務める自分が、この時期に学園を離れるわけにはいかないだろう。

だが、

「今ここで、死にたいか？」

そんな、誠人の側の事情など一切歯牙にもかけず、天使は言い放った。

「……。」

剣を突きつけられて、そんな事を言われれば、誠人は頷かざるを得ない。だが、

「でも……、」

誠人は、机に置かれた時計を見て、

「こんな時間じゃ……、今日はもう電車が……、交通手段が無いんですが……? 到底歩いて行ける距離じゃないし……、」

と、しどろもどろに言い訳する。

時計は、九時を回っていた。……しかし。

天使は、ニヤリと、背筋が寒くなるような笑みを浮かべて、

「ふん。人間の造ったちゃんけな移動手段など無くとも我は困らん。我には大いなる御方に与えられし翼がある。」

ガシッ、と。誠人の首根っこを捕まえて、高校生男子の体重を軽々持ち上げて。

「さあ、行くぞ。」

まるで、これから夕食にでも出掛けるような気軽さで、天使は、寮の窓枠に足をかける。

「うっ、ぐっ、ぐるじ……、苦しいですっ！」

首根っこを捕まえられたままの誠人は、首を絞められ、涙目になりながら苦情を訴える。

煩いとはかりにクラウスは眉をひそめたが、青かった誠人の顔が赤く染まっているのを見て、彼を小脇に抱え直して、外へと飛び出した。

……時間は九時。季節は冬、十二月。誠人の服装はと言えば、部屋着のトレーナーとジーンズといった軽装で。

「うわああああ！！！」

宙空に突然放り出され、誠人は、恥も外聞もなしに悲鳴を上げた。骨身にしみる寒さ。不確かな状況にいる怖さ。……真剣に、泣きたくなってきた。

「さあ、どっちへ行けば良い？ 北か、南か？」

「……東へ。」

天使は、ほんの数時間前に、久遠が駆け抜けた同じ道のりを、それより少し高い目線で追いかける。

地上ですら凍える夜風を、より高い場所でモロに受け、誠人は、呼吸を詰まらせた。

……誠人は、己の命の危機をすぐそこに感じ、自分の不運を呪いながら。目的地に辿り着くまで、命が無事にあるよう祈ろうとして……、やめた。

この男が天使だと言うなら、今までずっと信じてきた神に祈ったところで、何が変わると言うのか。

……今更、ずっと否定し続けた存在に祈るのは、さすがに気が引ける。

誠人は、今までの自分の姿勢を振り返りつつ、少し神妙な面持ちで、眼下を流れてゆく景色を眺めながら、竜姫に叩かれた頬を、そっと撫でさすった。

頬は、寒さに当てられ、手形の赤より赤く染まっている。

と、夜空を流れ星が駆けていった。

普段なら、迷信の類い等信じない彼だが、今回ばかりは、何かの前触れのように……。それが、凶事の前触れでない事を願いながら、星の消えた夜空の一点を見つめたまま、誠人は、クラウドに抱えられて、豊生神宮へと、文字通り、飛んでいく。

……ある意味、今までに無かった新たな視点だ。

ここから、何が見えてくるのか。今は……。夜も更け、重たくなってくる目蓋を閉じてしまわぬように。

涙で歪む視界で、一点を睨み続けた――。

使命と、宿命と……本音と。

久々の、外界だった。……時間的にも、距離的にも、これが初めてだった。あの山の中。自分で結界を張った、あの時から。その結界から、こうも離れるのは……。

——と、

「は、何故……、ほんはひも必死に、彼女を追ふんれふか？」

……もう、齒の音の合わない段階をすっ飛ばした彼の言葉が、そんなことには我関せずといった様子で、ただただ地平線のその先を、険しい表情で睨み付けているだけのクラウドに問うた。

もう、重たくて。

それは、刻一刻と確かに重量を増していて。何が？ ……と、問われれば。目蓋が、重たくて……。

もう、一分一秒だって目を開けてはいられない。だが、今眠れば、確実に命はないだろう。

そして。今の誠人には、

「寝るんじゃないっ！！（バシッ！、）」

「殴ったね！？ 親父にもぶたれた事ないのに！！」

……等とノリ良く付き合ってくれる連れは居ない。……いや、一応連れは居るが……。今ここで自分が眠ってしまつて命の危機に直面したとて、気にかけてくれるかどうかは、かなり怪しい。

この極限状態で、ちょっと試してみようか等と考えられる、剛胆な性格を持ち合わせていない誠人は、自分で自分の頬を叩いて、眠気を飛ばしていた。

が、……はつきり言って、焼け石に水である。

それでも。眠れば死ぬのだ。

ギロリと、白い目で睨みつけられたからといって、引くわけにはいかない。問うた言葉が正確に相手に伝わったかどうか分からないが。いや、正しく伝わったとて、応えて貰えるかどうか……。

「ほれに、ほはいはは、ほうひへ俺を襲っはんへふは？」

それでも、誠人は、眠気を少しでも誤魔化そうと、一人、喋り続けた。クラウドは煩わしさに、眉をひそめたが、それでも初めて自分が人一人抱えていたことを思い出したらしい表情をする。

……天使は、霊体だ。意識的に触れようとしなければ、この世の全ては彼には関与しない。

こうして真冬の真夜中に、薄衣一枚で宙空を舞っても、『寒い』という感覚がないのだ。

布一枚でも平気な顔のできるクラウドから見れば、上から下までキッチリ布地に包まれた誠人が『寒い』だろうなどと思うはずもなく。

彼の様子に怪訝な表情をしながらも、

「あの娘は、危険極まりない魔物の封印を解き、その魔物を擁護していた。……魔物を滅さんとする我的前で奴に力を与え、そして、奴と共に逃げた。……魔女は許しがたい存在だが、所詮は小娘一人。我が直接手を下さずとも、いずれ大いなる御方が裁きの鉄槌を下されるだろう。だが、あの魔物を放っておくわけにはいかない。過去、幾百の集落を襲い、幾万もの人間を殺した大悪魔。……何としても、我的剣で討ち果たさねばならん。」

と、彼にしては珍しく律義に答えを返した。

「は、……魔物？　ほんはほと竜姫ひゃんは……？」

クラウドは……、できればかわり合いたくないタイプだが。せつかく会話の糸口ができたのだからと、誠人は重ねて問うた。

「奴は……、サハリエルは悪魔だが。今は吸血鬼でもある。あの小娘は、自ら奴に己の血を――力を――与えていた。」

「……？」

「かつて、我的剣の前に膝を折った、あの忌まわしき悪魔が取り憑いていた人間が、吸血鬼に咬まれたんだ。」

ギリッと、誠人を抱える腕に力がこもる。

「あれは、我的獲物だ。……たとえ格上の天使にだってくれてやる

ものか。」

誠人に聞かせる為というよりは、己の決意を自分で確かめるように。

「……もう二度と。」

低く低く、そう呟いた。

「サハリエル……、兄上……。」

天と地とを分ける、緩やかな弧を描く地平線の向こうまで見通さんと、蒼の瞳でそれを睨み。翼を、より一層忙しなく羽ばたかせる。

逸る心が、遠い過去の記憶を、次から次へと脳裏に焼き付けていく。

——かつて天獄に、かの偉大な月の天使ガブリエル様の元、優秀な天使として称えられていた天使が居た。

世界樹の卵から生まれたクラウドスの、双子の兄天使。……名を、サハリエルと言った。

明けの明星と宵の明星。

御使いであった者と、御使いと。……黎明の時代の大戦。以来、天にとって、双子は不吉だと忌まれる存在だった。

しかし彼は。

その優秀さから、どんどん昇格し、ついにはグリゴリの一団に加わり、人間を教育するため地上へ降りることを許された。

……同じ卵から生まれたはずなのに。その片割れの弟天使は、大した功績をあげるでもなく、ただただ他人の陰口を気にしてばかりの小天使でしかなかった。

真面目なだけが、唯一の取り柄であったクラウドスの目に、サハリエルはとてもまぶしく映ったのに……。

地上に降りた兄は、あろうことか天から堕とされた。人と交わり子を成して、天の智慧を人間に差し出した。あの、優秀だった兄が。

……双子の兄が堕ち、尚の事、かの双子と重ねて見られるようになったクラウドスは。天に居づらくて。

いつそのこと、兄を追って堕ちてしまおうかと思ったことは数知れず。

……サハリエルの討伐を命じられたのは、そんな折りだった。命令者は、神その人で。命令を預かり、伝えに来たのは――。

「宵の明星」。

「慈悲」、「正義」、「聖別」……。他にも多くの名を背負う、天獄のプリンス、ミカエルその人だった。

キラキラ光る白い六枚羽は、天使たるクラウドの瞳にも眩しいほど。神の御印のついた剣を差し出して。そして、彼は言った。

「私にもかつて、兄が居ました。……彼は愚かしくも大いなる御方に背き、多くの御使いを連れて堕ちました。私は、以来、彼を討ち果たす命を、大いなる御方より賜り、今もまだ、彼に静かなる終焉を与えるべく、かの堕天使を追っています。」

蜂蜜色に輝く、剣。聖なる光を刃に宿し、魔を打ち砕く力を凝縮した武器は、確かに、ミカエルの腰の物と同じもので。

「クラウド。神の命を伝えましょう。『悪しき魂を滅する力を与えよう。堕ちた魂を狩れ。悪魔となった兄、サハリエルを追うのだ。』

……見事討ち果たしたならば、主天使の位を授けよう。』……神は、貴方の事を気にかけて、憂いておられます。本来なら優秀な御使いである貴方が、心無い御使い達の言葉に堕ちていく様を。クラウド。

これは、神に賜りし試練なのです。貴方の強さを他の御使い達に示し、堂々と階^{きざはし}を上がって来なさいと、大いなる御方は仰せなのです。

――

創造主から命を賜り、天獄の英雄に励まされれば、ただの天使に過ぎないクラウドは頷かざるを得ない。

「……では。天使クラウド。行きなさい。」

天獄一の有名人に見送られ、そうして天から地上に初めて降り立ったのは……、もう一万年以上前の話だ。

それから、ずっと、クラウドは悪魔となったサハリエルを追い続けていた。

……しかし。

天使であったときから、サハリエルとクラウドの力の差は明らかなものだった。それは。堕ちて尚、変わることもなく、力の差は歴然と存在し、それは、クラウドに、サハリエルと刃を交える機会すら与えなかった。

……どころか、初めの頃は兄の所在さえまともに追えない体たらくだった。天使にとって絶対であるはずの神の力を失い、堕ちたはずの魂の輝きが。……どうしてだろう。何故か、以前にも増して光輝いているように見えて。

己の無力を思い知らされながら、感じるのは悔しさよりも嫉妬ばかり。裏切られた心に渦巻く闇に、蓋をして、見て見ぬ振りをしたまま。力が足りぬまま、感情任せに剣を振り回す。

神に賜った武器に宿る神の力に頼り、その絶大な力に自分の方が振り回されながら。……それでも、一万年の時は、クラウドの位を小天使から大天使へと昇らせた。

地上を西へ東へと飛び回る内、雑多な魔物を数多く討ち果たし、僅かずつながら、力をつけたクラウドは、あの日、初めて兄に膝をつかせたのだ。

……激しい斬り合いの中、消耗した剣が折れ、折れた剣先が偶然悪魔の胸を抉り、勝負はついたかと思われたのに。

イレギュラーとはいえ、手柄は手柄だ。ようやく苦勞が報われたのだと、そう思ったのに。

その後の不測の事態により、彼は、中級三隊によって討伐され、封印されてしまった。当然、出世話はパア。……どころかクラウドは、左遷されてしまった。

「ずっと、憎らしかったんだ、あの悪魔の事が。あれが、堕ちたと知った時から。」

どんなに真面目に神に仕えようとも。

——カナワナイ。

そう、思い知ったあの瞬間から。クラウドは。

「我は……、あれを我の手で廃し、あれを越えるのだ。神に従わぬ魂に、神の忠実な僕たる我の魂が劣るなど、そんなことがあったまるか!!」

心の眼を閉ざしたのだ。信じるのは、己が仕える主のみ。信条と食い違ふ事実は全て偽りと邪に染める色眼鏡で世界を眺めれば、歪な世界も、整然として見える。

それは、ピカソの絵画やピサの斜塔を芸術と捉える人の感性とはまるで真逆のもので。

……他人の意見に耳を傾けたりだとか、そんな余裕を持てるような広い心は、クラウスには無かった。

——お前、お偉い上司がついてるからって、あんまり調子に乗ってると、いつかきつと痛い目見るぜ?——

悪魔のほざいた戯れ言と。ルードの忠告も、彼の心には届いていなかった。そもそもが……、あんなもの、悪魔の——サハリエルの——言葉ですらない……。

堕ちた常人の魂など、それこそゴミ屑に等しいのだから。あの、2つの魂の輝きは、曇った瞳には映らない。

「おい、奴らの逃げた先はまだ着かぬのか?」

東の空が白く染まり始めた頃、ようやく地平線の向こうに、大きな湖が見えてきた。

「あの、湖の向こうの山を越えた先……、が、あの子の実家です。」

危うく、うとうとと微睡みかけたところへ声をかけられ、ビクリと目を開いた誠人が応える。

指差し、先を示そうと腕を持ち上げようとするが……

(——ダメだ……、もう……感覚もない——)

既に、瀕死の一手前といった状態では、もう言葉を発することすら厳しかった。半分以上夢心地の誠人の耳に残る、クラウスの言葉。

そして、魔物も存在するのだと言っていた、竜姫の台詞。
そして。

不意に、誠人の脳裏に、一つの記憶が閃いた。

紅い、色が。紅い瞳が。

あの日。

一日中、災難に苛まれ続けたあの日の、一番初めの災厄であった、制服行方不明事件のあのトイレの個室で。

妖しく輝く瞳を見た途端、意識が飛んで……、気付いた時には、制服と記憶が無くなっていた……。

あれが。あの、紅い瞳が。……吸血鬼、なのだとしたら。

あれを、……あの、見るからに人ならざる存在だった彼を、擁護するからには、何か訳があるのだろうか？

側にいるだけで恐ろしいと感じる、この天使が、これ程躍起になるような、そんな相手を。

竜姫は、何のために連れて逃げたと言うのだろうか。

血を、与えてまで。

もう、誠人の常識では測りきれない事ばかりで……。

（――そうだな……、もしこのまま無事にたどり着けたなら……、まず最初に謝って……、話を聞こう――）

眩しすぎる朝日も、誠人の冷えた身体を暖めるにはまだまだ役不足で。突き刺さるような水面に散らばる光を見下ろしながら。誠人は、目蓋を閉ざした――。

繋がる気持ち

「……、」

聞いてたのか？ ……等と尋ねるまでもなく。彼女の背中がそう
だと言っている。

ガサガサと、白く雪に覆われた枝葉を掻き分けながら。制服から
着替えたばかりの紅白の巫女衣装が雪に濡れるのも気にせず、ほと
んど道なき道、と表現すべき獣道を、竜姫は迷いなく突き進んでい
く。山の上へと。

「ねえルード、さっき稲穂に言ってた事……、本気なの？」

紅白の衣に良く映える長い艶やかな髪が、葉についた雪を掠め、
湿り気を帯び、艶やかさが更に増して見える。

紅と白と黒と。

同じ色使いでも、白と黒の割合の違いだけで、ルードとは大分印
象が違う。

眩しい太陽と。

儚い月光と。

「ああ、そのつもりさ。……お許しが出れば、の話ではあるけどな。」

山の中の木立の下は、葉の大部分が、足元に枯れ葉となって落ち
ているが、それでも、絡み合うように伸びた枝が、僅かながらも陽
光を遮ってくれる。

「——なんで……？」

「ん？」

「だって、ルード。こないだはクラウドに復讐する為の力が欲しい
って……、その為に、ここへ来たいんだって……、そう、言ってた
じゃない……。なのに、何で？、……いつの間にそんな話になっ
たの？」

僅かに、肩を震わせながら、竜姫はルードに尋ねた。

「……生きたいと。生きていたいと、そう思えたから。……そう、思わせてくれたから……かな。」

「――?……っ、」

確かに、この間まで、自分の命を軽んじている風であったルード。あのバカを倒した後の彼については、竜姫も気にはしていたが……。ふっ、と。後ろを振り返り、ルードの表情を見て。竜姫は言葉に詰まった。

慈しむような笑顔。今まで、見せたことの無いような……。どころか、しそうにもなかった表情を、竜姫に向けている。

……いわゆる『イケメン』というやつである彼のあの顔で、あんな表情をされて、平常心を保てる女性はそう多くは居ないだろう。ましてや彼に特別な想いを抱いていれば……。

「でっ、でも……!」

ぐらつきそうになる気持ちを、何とか立て直し、

「だったら何もここでじゃなくたって!!」

……しかし、言葉が感情的なものになるのまでは抑えきれず、竜姫は、叫ぶように言った。

「本当に生きたいと、そう思ったなら、他にも生き方はいくらでもあるはずでしょう?」

枝を避けた手に、必要以上の力がこもり、バキッと乾いた音と共に枝が折れた。

「血が要るならあげるよ、別に、それで見返り貰おうなんて思わない。」

手にした枝を、脇の茂みへ投げ捨てながら。竜姫は、もう一度ルードに向き直り。

「……それでも?」

そう、尋ねた。

「ああ。」

互いに、互いの瞳を見つめ合いながら。ルードは頷いた。

「俺は、魔物だ。意識はどうあれ、な。血を貰って力を抑えたところ

ろで、それは変わらない。年も取らないし、普通の人間に混じって普通の暮らしを……、なんて、俺には無理だ。」

そう言いながら、ルードはスッキリした表情をしている。

「だったら、居心地の良い場所で、自分のやりたい事して生きてく方がいいだろう？」

そんなルードを見ながら、竜姫は目を伏せた。

「……何にも、……、血をあげる以外、何もできないのに……、それなのに……？」

声を震わせ、竜姫は言った。

「昨日だって、ただ見ているだけしかできなくて……、そんなのはもう嫌だからって……あの日からずっと……そう思って……頑張ってきたつもりだったのに……結局……、せめてもの力になればと思ってここへ連れてきたのに……、これじゃあ立場が逆じゃない！！」

ずっと。

ずっと、心の内にあった想い。力の及ばぬ悔しさに。しかし、ルードは、今にも泣き出しそうにすら見える彼女を、

「俺の決めた道だ。俺の気持ちに、竜姫の事情は関係ないだろう？」
あえて突き放す。

「まあ、実現するには関係なしとは到底言えるわけもないが。なあ……本当に、そう思うのか、竜姫？」

……竜姫がルードに与えたものが、本当に血液だけ——その効力も含めて——だと。

軽く怒りを含んだ瞳で睨みながら、ルードは尋ね返した。

「俺は、お前からもっとずっと大切なものを沢山、貰ったつもりでいたんだけど……、違ったのか？」……自分の力に、いまいち自信を持ちきれない。

それは、彼女のトラウマなのだろう。
けれど。

「竜姫っ、ルードッ、マズイよっ！！」

と、藪の中ガサガサと、枝が身体を引っ搔くのも構わず駆けてきた久遠が叫んだ。

昨夜別れてそれきりだった久遠の、艶やかな金色の毛皮にいくつも、泥のついた足形がくっついていてのを見て、竜姫はふい、と目を逸らし。ルードは疑問符の浮かぶ瞳を向ける。が、久遠はそんな平和な反応をみせる二人に、もどかしそうな表情をしながら、衝撃の一言を発した。

「ヤバイよ、アイツが来てる!!」

アイツ、の一言に、ルードと竜姫は瞬時に互いの瞳を見交わし、そして久遠の瞳を見た。

「……ルード。」

「……俺じゃない。さっき一瞬だけ力の制御を緩めはしたが、あんな遠くで俺の気配を察知できるほどじゃなかったはずだ。」

「……連れがいるんだよ。」

「連れ……、って……?」

「アイツ、誠人を連れてる。」

「ええ!?!」

「もうあと五分も余裕はない! ルード。多喜様の祠はもうすぐそこだ。このままこの道を登って行けばすぐに分かるだろう。行け、行って多喜様の御墨付きを貰ってこい。それまで、僕と稲穂姐さんと……竜姫で奴を抑える!」

二人の瞳を交互に見ながら。

「……分かった。頼む。」

ルードは即座に答えた。そして。

「竜姫。」

揺れる竜姫の瞳を力強く見つめながら、ルードは言った。

「俺が、お前から貰った一番大切なものは、血なんかじゃない。」
ザクザクと、足元の雪を踏みしめながら、ルードは竜姫へと歩みよ
り――

「俺が貰った一番大切なものは……」

——そつと唇を寄せ……、

「……この気持ちだよ。」

そして、重ね合わせる。

「！」

「ああっ!!」

ほんの一瞬のキス。久遠は九本の尾を膨らませ、口をパカンと開けて叫んだ。

「こらっ、お前っ、何を！」

しかし。

「……何よ、いつも自分ばかり不意打ちで……、ずるいつ！」
と、竜姫はルードの襟元を掴んで締め上げる。

間近に迫るルードの綺麗に整った顔に怯みそうになりながらも、
竜姫は自分からルードの唇に口付けた。

「……それを言うなら、私だって……」

驚いたように紅い瞳を丸くするルード。顎が外れんばかりに口を
パツクリ開け、言葉も無い久遠。

「……これは、両想いと解釈していいのか？」

結ばれた、紅い絆。

「……たぶんね。」

「たぶんって……。なあ、竜姫。お前、もうちょい自分を信じる。
その心も、魂も、力も。どれ一つとして、俺や、あのバカ天使や……
他の誰にだって劣ってやしないんだから。身体は……まだ人間な
んだ、魔物と比べちゃ限界があって当然だろ？ 足りない分は、俺が
補ってやる。頼れ、……お前は一人で頑張ってる訳じゃないだろ？」

ルードは、そつと抱き締めて言う。ドクンと、力強く脈打つこの
心音は果たしてどちらのものか。

枝と枝の間から見える青い空に、白い翼を背負った天使が、見える。

「これを、持っていていけ。」

ルードが差し出したのは――

「剣？」

あの時、クラウドとの斬り合いに使っていたそれで。

「……まだ、体調は万全じゃないだろ？」

まだ白っぽい竜姫の頬を撫でた後で。その手を刃の前にかざして、

「これに……、俺の魔力を……」

鋭い刃で己の掌を貫き、鈍色に光る刀身を血で紅く染め抜いた。

たっぷり注がれた血は、しかし地面に落ちることなく、まるで剣に飲み込まれるように刀身から消えていく。

……だが。消えたのは、あくまで色だけで。溢れた血から感じた魔力の気配は消えること無く刀身を覆い尽くしている。

「持ってみて。」

渡されて、竜姫は重たそうな剣を受け取り――

「……っ、え、何これ……？」

柄の先から刃先まで重厚に造られた剣が、箸より軽いなんて。竜姫は試しにブンブン振り回してみろ。

……体育の授業で振ったテニスラケットよりよっぽど手に馴染む。「こういうタイプの剣だと……、フェンシングが似合うんじゃない？ 私、日本風の剣道の心得しかないんだけど……？」

……剣から感じる力は本物だ。だが、使い手の腕がへボくては……、宝の持ち腐れと言うか……。

「信じろ。」

だが、ルードは一言そう言って、竜姫の肩を叩いた。

「俺と、お前自身を。」

自信に満ち溢れた笑顔で、ルードは、

「すぐに行くから。」

と。颯爽と駆け出して行った。これから竜姫が案内するはずだった道を、山の上にある多喜の祠へと。

竜姫は剣の柄をグッと握りしめ――歯を食い縛る。空を見上げれば、もうすぐそこに災厄が迫っている。

やるべき事が。巫女として。そして、ルードを慕う一人の人間として、やるべき事が、ある。できることがある。力がある。――な

らば。

キッと、空を見上げて。竜姫は地面を蹴った。

襲来

「――あれか……」

遠目ながら、朱い鳥居が見える。もう、太陽は天の頂きに近くある。

天使の眩きに誠人は、閉ざしていた目蓋を僅かに持ち上げ、眼下に広がる景色を網膜に映した。

「……ああ、そうか……、着いたのか……。」

……どうやら、命だけは無事にある……が、だからといって、単純に喜べる状況ではまだない。

天使の翼が真白い光を湛え、放つ。その光は、優しく包み込むような類いのものとは程遠く――。鋭く突き刺すような殺気を極限まで凝縮したような、光でありながら闇と紙一重といった代物で……。膨れ上がる気配は、まるで質量を有しているかの様で。翼を羽ばたかせる度に、衝撃波にも似た突風が巻き起り、クラウドを始点に放射状に吹き荒れる。

と、社のある小山から何か……、が。

そう、視認し、それを誠人の脳が認識するより早く、神剣が抜かれ、飛んできた何かを叩き落としていて。

「!？」

その何かが矢だと理解するより早く、次から次へとそれは飛んでくる。あきらかにこちらへ向けて放たれているそれを、クラウドは悠々と打ち落としていく。

「……ふん、牽制のつもりか？」

と、鼻で笑い、

「こんなお遊びみたいな弓術で我が怯むとでも？」

飛来する矢の群れの中、更にスピードを上げて突っ込んでいく。たまらないのは誠人の方だ。

成る程、狙い変わらず矢を打ち落とすクラウドの剣技は素晴らしい

のかもしれないが。己を害する矢しか狙わないのでは、小脇に抱えられた誠人はまるきり無防備なままである。

……正直、まだかすり傷だけで済んでいる今の状況は奇跡としか思えない。視界は山の斜面へと急速に迫り――矢の雨がピタリと止んだ。そして。葉の落ちた裸の木とその枝が絡み合う、山の中から次に飛んできたのは――。

「クラウスっ、誠人くんを放しなさい!!」
良く見知った顔。

杉ばかりが植えられ、真冬のこの時期でも緑を保つ周囲の山に比べ、枝や雪の色でやや白っぽく見える背景の中で、やけに眩しく見える白い着物と紅い袴。束ねた長い黒髪をなびかせ、少女は、手にした剣を力一杯振り切った。

ニヤリと笑いながら、天使は、軽々とその刃をかわし、
「人間が、魔剣を振るうとは……、」

己の神剣で、竜姫の胸を狙い突きを繰り出しながら、

「墮落者め!!」

口汚く罵りの言葉を吐く。

……が、剣先が竜姫の身体へ届くより早く、飛んできた青い火の玉が、刃を弾いて攻撃の軌跡を狂わせる。

「させるかっ!!」

クルリと空中で宙返りしながら地面へ着地する竜姫の隙を庇うように、金色の狐が木々の枝を高速で伝いながら、火の玉を次から次へと繰り出す。

狐の尻から生える九本の尾。

……明らかに、現実的な生き物ではない。

神剣といえど実体のない火球を刀身で打ち落とすのは無理だ。クラウスはやむ無く射程外まで上空へと退避し、避ける。
が、

「おやおや、後ろががら空きだよ?」
背後から影が落ちた。

「悪いがこれは貰ってくよ？」

言うが早いのか、誠人は乱暴に身体を引っ張られ、抱えていたクラウスの腕から無理矢理引き抜かれた。

……戦いに、おそらく彼はお荷物だったのだろう。強引なやり口にも、特に引き留めようとか、余計な力が加わるような事もなく、無茶苦茶ではあるが、取りあえずクラウスから無事に解放された誠人は、クラウスに代わって自分を抱える人物の顔を見ようと視線を上向けて……すぐさま逸らした。

目にしたのは、瞳に毒になりそうな紅。

着物や口紅はともかく……。この、鮮やかな紅髪は、染料なんかではこの色は出せないだろう。今まで、こんな鮮烈な紅い髪色を見たことがない。

……人にあり得ない跳躍力をみせているこの状況からしてみると、おそらくこの女性も人間ではないのだろう。

「……おや、随分と身体が冷えてるね。」

あれだけ高く跳びながら、ふわりと身軽く着地した彼女は誠人を降ろしながら呟き――そして木々の枝を伝って飛び回る他の二人に向けて指示を飛ばす。

「竜姫!! 一旦戻れ!!」

「はいっ!!」

「久遠! 援護しろ!!」

「承知!!」

彼女の叫びが届くやいなや、彼らは瞬時に指示を実行に移す。竜姫は構えた剣を下ろして木から飛び降り、久遠は即座に新たな火球を幾つも作り、放つ。サツと駆け寄ってくる竜姫に、稲穂は、

「こいつ、一応命は無事だが……このまま放っておくのもまずいだろう。それに。この事態を、このガキがどれだけ呑み込めてるかは知らんが、懇切丁寧に事情説明してやってる暇や余裕もない。……どうする、竜姫？」

この場の最終責任者としての回答を求めた。

「……久遠を。久遠を下げて火で暖を。彼に事情を説明して貰います。……今、彼の目にはクラウドも、稲穂達も映っているようだから。」

「いいのか？ お前の身体が万全ではない今、あれは貴重な戦力だろう？」

「大丈夫。ルードに借りたこの剣がある。」

含みを多分に持たせた竜姫の言葉に、稲穂は一瞬興味津々な瞳をしたが、今はそんな場合ではないと、すぐさま厳しい問いかけの視線を投げる。

「大丈夫。」

手にした剣を握りしめ、竜姫は頷きながら言った。

……幼い頃から、戦う術を指南してきた稲穂に、それ以上の説明の言葉は要らなかった。

「久遠！！ 戻れ！」

その、稲穂の指示を合図に竜姫は再び駆け出す。

颯爽と森を駆け、驚異の身軽さで枝から枝へと跳び移りながら、上へ上へと駆け上がり、そして飛び出し、宙へ跳ぶ。

……見ただけでは、中学生の女の子の細腕では到底持ち上がりそうにない、重たそうな真剣を片手で軽々構え、無駄のない素早い動作で突きを繰り出す。

それを追うように、稲穂と呼ばれた紅髪の女性も、宙へと跳んだ。首から下げた、粗末なつくりの木製の小さな縦笛を口に啣え、ピィと吹く。

耳に突き刺さるような高い音が鳴り、その音に呼応するように、風が生まれ、叩きつけられた見えない刃が天使の翼から幾本もの羽根をむしりとった。

「くっ、」

青い空に、白い羽根を雪のように散らしながら、クラウドは、神剣で空を斬る。

神の威光を籠めた剣撃は、衝撃波となり、襲い来る二撃目のかま

いたちを迎え撃ち、両者の攻撃は相殺される。

「チッ、」

翼を持たない稲穂は、手近な枝へ降り、しなる足場をバネに空へと跳ぶ。ヒラリヒラリと、自前の翼で宙を好きに飛び回るクラウドを捉えるのは、風を操る能力を有する稲穂でも難しかった。

「……あれはやっかいだねえ。」

言いながら、チラリと教え子を見やり、

「それにしても……、あれで体調が万全じゃない……だなんて……信じられないね。」

苦笑を浮かべる。

高く高く。

久遠と稲穂の攻撃を避けて、空高く飛ぶクラウドと、同じ高さまで、跳んでいく。高く高く跳んで。ルードの魔力を籠めた刃を、クラウドに向けて降り下ろす。

大振りな攻撃は易々かわされるが、すかさず鋭く突いた一撃が、クラウドの脇腹を掠めた。衣装が裂け、ピツと赤い飛沫が衣を僅かながらに斑に染める。

……所詮、かすり傷だ。傷は次の瞬間には消え、刃は神剣に払われる。

だが、人間ごときの攻撃に傷を負ったクラウドのプライドはいたく傷ついたらしい。手加減なしの乱れ突きをを繰り返し、竜姫の身体を穴だらけにせんと、神速の攻撃を見舞う。

……昨日は、瞳に映すことすら叶わなかったクラウドの一挙手一投足が、まるでスローモーションの様に見える。

握った剣が、まるで意思を持っているかのように、竜姫をリードし、向けられた攻撃の全てを見事なまでに受け止める。

息つく間もないような、剣撃の嵐。

……少なくとも肉体は、ただの人間であるはずの、少女の思わぬ奮闘ぶりに、クラウドは戸惑い、畏れを抱いた。

ドクンと、心に嫌なものが――何かどす黒くて嫌な臭いのするタ

ール状の液体みたいなの……毒のようなものが——ゆっくりと広がり、侵食していく。

しかし、色眼鏡をかけ、曇りきった心眼を閉じたままのクラウドは、すぐさま己の感情を否定し、怒りで塗りつぶす。

「雷よ^{いかづち}——！」

バチバチッ、と、神剣を静電気が覆い、地上へと降下していく竜姫へ向けて撃ち下ろす。すると、刃からバリバリと空気を裂く音と共に稲妻が放たれ、竜姫の頭頂目掛けて墜ちていく。

竜姫は落ちながら体の向きを変え、地に背を向け空を睨み、走る稲光を剣で払い、雷撃を跳ね返す。

背中から落ちる格好になった竜姫を、稲穂が受け止め、地へ降ろす。

返った雷撃を避けるのに、竜姫の追撃のチャンスを逃し、今度はクラウドが舌打ちをした。

「……こんな。こんな力が……、こんな世界が、本当に……あったなんて……。」

地面に転がされたまま、手の届かない高い空の上の闘いを、じっと見上げるしかする事のない誠人は、無意識のうちに、そう、呟いていた。

「……お前、あれが視えているのか、……どこまで？」

戦闘から離脱してきた九尾の狐が、雪に湿った地面に寝転がる誠人の隣に腰を下ろし、そう訪ねてきた。

「……どこまでって訊かれると困るんだけど。……そうだな。俺をここまで運んできた、あの『天使』と、あの紅い髪の女の方は……視えてる。君も……。」

良く見知ったはずの少女は……、今はまるで見知らぬ別人に見えるのだけだ。

「……君は、……君たちは……、一体……？」

……尋ねなくとも、答えの予想はついたけれど。

「ボクは豊生神宮の三の神。名は、『久遠』。……あの紅髪の姐さ

んは『稲穂』様。この社の二の神だ。」

……やっぱり。

誠人は、自分の吐いた言葉をじっくり噛み締めながら、久遠の答えを聞いた。

——誰もない、あの場所で、君は一体何をする気なんだい？……たった一人で——

……一人じゃ、ない。

——また、カミサマ……かい？実際ににそんなものがあるのかどうか——なんて事を言い争うつもりはないけどさ、今、現実になんてものに振り回されるなんて不毛じゃないか。……竜姫ちゃんももう中学生なんだから、夢みたいな事ばかり言っていないで、きちんと現実を見た方がいい。田舎の寂れた神社を継ぐなんて馬鹿な事を言うのはやめて、うちに来た方がいい……——

神様は、居る。夢物語の中ではなく、この現実の世に。

……現実を視ずに、馬鹿なことを言っていたのは。

(……僕の方……みたいだな……。)

狐は、攻撃に使ったのとはまた少し違う様子の炎を灯した。青い炎が、誠人の身体を覆う。

しかし、熱による痛みはなく、ちろちろと体をくすぐる炎はむしろ暖かで心地よい。

冷風に当てられ続けた身体を、芯から暖めてくれる。

「……じゃあ、あの天使の言ってた魔物って……君の事？」

「……いや。」

久遠は狐火を操り冷えた誠人の身体を暖めながら、彼の問いを首を振って否定した。

「……まあ、奴にとっては奴の信じる『神』以外は全て『魔物』だ、……ボクも姐さんも、竜姫も。だけど、今、奴の言う魔物はボくらじゃない。……ボクらは、神だ。奴がどう言おうと。……でも彼は……確かに、魔物だ。今はまだ……。」

でも、と。久遠は笑う。

「すぐに来るさ。……悪魔であり、吸血鬼でもあるが。同時に、我が社の最強の守護神となって。あの天使を倒しに、な。」

……竜姫の心をも奪っていった事は許しがたいが……。もう、運命の齒車は誰にも止められない。

ルードの魔力を借り、クラウスと戦^やり合う竜姫の魂の輝きは、……きつと、彼にしか引き出せない。

「……神？魔物が？」

「ボクも姐さんも。元は人里を荒らしていた妖怪さ。……でも今は、この辺り一帯の豊穰を守る神だ。」

眉をひそめる誠人に久遠が言う。

「生あるものは変わる。変わっていきける。……良い方にも、悪い方にも。そうだろう？」

確かな、確証を持った言葉には重さがある。

「……見ろ。あれを、お前は悪しき魔物と……呼べるか？」

言われて見た空に。新たな影が飛び出した――。

多喜

祠は、久遠の言う通り、すぐに見つかった。決して豪華な造りではない。シンプルに、白木のみで造られた、小さな祠。

サイズ的には……そう、小学校の校庭の片隅にポツンと置かれた百葉箱程。小さな御社の正面には、格子状の扉があり、目の隙間から、安置されたご神体が見えた。

「……来たね。さあ、扉を開け。」

祠の中から声が聞こえ、その声音に同調するように祠の内部でうすばんやりとした光が明滅する。

空ではクラウドを相手に攻防を繰り返す竜姫達の姿が、木の枝と枝の間からちらちらと見え隠れしている。

見たところ善戦しているようだが、……のんびりとはしてられない。ルードは声の指示に従い、格子の木枠にそっと指を掛け、手前へ引いた。

キィ、と蝶番の軋む音。……扉の向こうにあったのは……一枚の鏡。

それも……これは姿を映すのに使うような類いの品ではなく……古来から占術や呪術に使われていたもの。

卑弥呼の時代、中国から渡ってきた『青銅の鏡』に良く似た造りのそれは、ルードの姿を鏡面に写し出すも、像がぼやけ、姿形ははっきりしない。

……が、ピカピカに磨き上げられた鏡面が、ポウツ、と、淡く光っている。何かの光を反射しているのではなく、確かに、鏡自身が光っている。

「久遠はともかく……稲穂のお眼鏡にかなうとは。大したもんだね、あんた。」

くっくくくつ、……と。こんな状況にもかかわらず、楽しげに笑いながら。鏡……いや、多喜は言った。

「で、うちで狛犬やりたいって事らしいけど。間違いないな？」

「……え、っと。狛犬……というのは？ 俺は……番犬として——用心棒として——ここに置いて欲しくて……。」

久遠や稲穂もそうだったが……。神と言うわりに、以外とくだけたしゃべり方をする。

……しかも、多喜の場合、相手は鏡だ。相手の表情を読めず、対応に戸惑いながらも、ルードは答えた。

「ん、ああ。日本の神社にはね、神を守護する役目を負う番犬が大抵、二匹、出雲から派遣されて来るんだよ。そいつを『狛犬』と呼ぶんだがね。アタシは元は大陸出身の神だし、稲穂も久遠も元々悪さばかりしてた妖だからねえ、出雲のお偉い神さん達が狛犬を貸してくれないんだ。……まあ、うちのは皆、かたっくるしいのは苦手だから、今までそんなもの欲しいと思ったことなかったんだが。……あの日だけはね、後悔したんだよ。」

「……竜姫の両親が亡くなった日、ですか？」

「……あの子には悪いことをした。あんな酷い死に方で親を失わせて……、辛い宿命を負わせてしまった。」

……表情こそ見えないが、声音に後悔の念が混じる。

「だからアタシはね、久遠に話を聞いた時点でお前を受け入れる決断をした。」

「！ じゃあ……！？」

ドクンと、その言葉に心臓が反射的に反応する。

「……アタシの出す条件を全て呑むなら……いいだろう——我が主より預かりし豊生神宮——その狛犬の椅子をお前に預けよう。」

「！ あ、ありがとうございます！！」

ルードは喜色満面、頭を深々下げた。

「待て。条件を呑むならと言っただろう。」

「……その、条件とは？」

「条件は二つ。……まず一つ。竜姫と契り、子を残す事。そして二つ目は……、アタシの魂を受け入れる事。」

言われて、ルードは思わず目を見開いた。

「……は？」

自分の耳を疑う。

……今、多喜は何と言った？

「貴方の魂を受け入れる……？」

いや、それはいい。……いや良くないが。説明もなく、どういう意味なのか良く分からない……が。しかし。

一つ目の条件。

……何と言った！？

「子を……、残せて……。」

魔物に堕ちる前は、十六の健全なオトコノコだったルードだ。……当然、それが何を意味しているのか、良く分かっている。

「……俺は魔物ですよ？ ……まあ身体の生理的な面に関しては人間だった頃と変わりませんから……行為自体は可能ですけど……、生まれてくる子は……まず普通の人間ではないでしょう。……それに何より……、竜姫はまだ……」

言いながら、……何故だろう、心の奥底で、ルードのものではない、別の記憶がチクチクと痛む気がする。

「今すぐとは言っていないだろう。竜姫がその気になってからで構わない。」

多喜はあっさり言うが……。

「でも……！ ……俺は！」

込み上げてくる、訳の分からない痛みに、心が乱される。

「分かっている。……その、魔物の血が欲しいんだよ。強い、力のある血がね。」

「！？」

「……どうしても、力ある巫女が要るんだよ。竜姫のために。」

「……竜姫の、ため？」

「あの子の伯母の話は聞いたろう？ ……アタシの守護が途絶えた今、普通の男と契れば、生まれてくるのは常人のみだ。……龍神の

子が、全ての能力を使いこなせるようになるまで、百年かかる。…
…その間、常人しか生まれなかったら？ あの子の伯母のように、
社など必要ないと…そう考える者が社を継いだら？ ……ここが、
廃社になってしまったら……あの子はどうなる？ ……人でなくな
ったあの子は？」

……かつて人でありながら、人でなくなった者。

今、この社を失えば、ルードは行き場を失う。居場所がないとい
うのは、とても惨めで……寂しく、辛いことだ。

「……力はあるでしょう、俺の血を引けば、子供は半魔物ですから。
ですが、『巫女』となれるような……、そういう力を持つとは限ら
ない……どころか、世を荒らす化け物が生まれてくるかもしれない
…！」

……叫びながら、ルードの脳裏に、覚えのない記憶がフラッシュ
バックする。……これは――。

「……うっ、くっ、」

ルードは心に渦巻く息苦しさに耐えきれず、膝をついた。

「……、サハリ……エル、」

今まで落ち着いていた制御が、脆くも崩れ去ろうとする。

「……やめろっ、出てくるな……!!」

ルードの意識を押し退けて、表に出てこようとする、もう一人の自
分を必死になって押さえつけようとするが――

「待て。そう無理に抑えるな。」

「……抑えなけりゃ、社どころかここらの人里が……っ！」

制され、ルードは苦しげに反論しようとするが――

「無理に抑えるから、暴走するんだよ。」

額に脂汗を浮かべる彼に、多喜は事も無げに言う。

「何もかも、自分の意思を力でねじ伏せられて……気分の良い者が
いるかい？ ……まあ、あんたの中の吸血鬼の意識とやらは自我が
ないようだから、そういうやり方でも通用するだろうけどね。その、
サハリエルとやらは元は高位の天使で……今も力ある堕天使なんだ

ろう？ 当然、プライドなんか高いだろうしねえ。」

「だからって、こいつの思い通りに動くわけにはいかない！」

……もう、これ以上は。

「だから、そう本人に直接言いなさい。言って……必要なら闘いなさい。戦って、勝って。」

「……戦う？ ……どうやって？」

「二つ目の条件を呑みなさい。……アタシの魂を受け入れ、力を得なさい。神の力を。……そしたらアタシが用意してやるよ。現実世界に影響の及ばない、バトルフィールドを。」

……事態は、差し迫っていた。もう、力の制御は限界寸前だ。血を貰うにも、竜姫は——。……クラウドも気になる。

YesかNoかの二択。……迷っている暇はなかった。

「でも、……そんなことしたらあんたは？ ……この社や竜姫や……久遠達は？」

それでも。ルードは問わずにはいられなかった。

「アタシはもう死んでる。今のアタシにできることはもう、これだけなんだよ。遅かれ早かれ……ここにこうして居ることすらできなくなる。だったら……今、出来ることをするだけさ。……この社の、主神として。」

竜姫に。……一言、断りを入れたかったけど。

「……、なら。」

それが叶わない今。後でなじられることを覚悟で、ルードは答えた。

「二つ目の条件、呑みます。」

「良く言った。」

鏡が、パリンとひとりでに割れ、輝きながら明滅を繰り返す光の玉が弾かれたようにこちらへ飛んできて……。ルードが必死に押さえる胸の中へと吸い込まれていった。

……その事実を飲み込むより早く、ルードの身体は一切の動きを止め——意識は己の内へと落ちていった——。

尚も続く戦いが繰り広げられる上空ではなく、雪と枯れ葉ばかり

の地面を見下ろしながら……。

悪魔・サハリエル

真っ暗な中を、下へ下へと墜ちていく。何も見えないし、何も聞こえない。何も感じない。……けれど、自分が墜ちているという事だけは分かる。

「！」

はっとしたように、目を開ける。

……すると。そこは……。

——白い薄靄のかかる幻想的な……あまり現実味を感じさせない——そんな場所だった。

墜ちても墜ちても変わらない景色。

「……？」

ふと、足に力を入れてみる。と。……立てた。しかし……ふわふわと宙に浮いているような……。……踏みしめているはずの地面ですら、——まるで舞台演出用のドライアイスの煙みたい——そんな不確かなものしかなくて……。

「……ここは……」

「やあ。……さて……何と挨拶したものかねえ……。……こうして対面するのは『はじめまして』……なんだけど……。……カタチはともかく、もう三百年ぶりの再会だから……。『お久しぶり』？ ……それとも……。……」

背後から突然声がして、ルードはビクリと後ろを振り向いた。

「！ お前は……。……」

……激しく、見覚えのある顔。今、まさに竜姫達と戦っているはずの天使と瓜二つなその顔に、ルードは条件反射的に眉間にシワを寄せた。

「ああ。あの可愛いクラウドの双子の兄でもある、僕が悪魔サハリエルだ。」

髪と瞳と羽の色が違うだけの、クラウドのそっくりさんは、かの

天使とは似ても似つかない、ふざけた口調で軽口を叩きながら、に
いっ、と、文字通りの悪魔の微笑を湛え、サハリエルはルードと同
じ紅い瞳を細めた。

……悪魔の、長い黒髪は、風もないのに何故だかそよそよとたな
びき、その艶をより強調する。

「あれが可愛いとはねえ……、あんたのその瞳、腐ってんじゃない
の？」

「まさか。ふふっ、だってさ、ああも盲目の愛に溺れ——自分の犯
してる罪にも気づかない——愚かな小天使……。おバカで笑えるだ
ろ？」

くすくすと笑いながら、悪魔は言った。

「……確かに、馬鹿な奴だ。でもアタシからしてみれば、笑えた
もんじゃないんだけどねえ？」

と、ルード達の頭上から声が降ってきた。

「ふふっ、貴女とは……間違はなく『はじめまして』、ですね。多
喜殿？」

ポンッ、と、紅い薔薇を一輪、手品よろしく出現させ、気障った
らしく花びらに口付け、ポイツと、靄だらけの中へと放った。

薔薇は、靄の中へ溶けるように消え失せたが……。

たちまちのうちにそこから紅い竜巻が立ち上ぼり、凄まじい強風
が、辺りの靄を残らず吹き飛ばしてしまった。

払われ、薄靄の無くなった空間は、まるで月も星もない真っ暗な
夜空に放り込まれたような……そんな場所だった。

そんな、ただただ暗いだけの場所でも、ルードの瞳には全てを見
透す能力が備わっていた。……当然、悪魔にも。そして多喜にも。

むしろ、視界を中途半端に遮っていた薄靄が晴れたおかげで、よ
り鮮明な画像が網膜に焼き付けられる。

互いに、相手の一挙手一投足まで見逃すまいと緊張感を高めつつ、
が、それをその欠片も表に出すことなく、彼らは会話を続ける。

「……何か、言いたいことがあるのだろうか？」

ズラリと牙の並ぶ口を開き、多喜は言った。

……その声は、鏡から発せられたものと確かに同じもののなのに、まるで別物で。ルードの背の何倍もある長い身体でぐるぐるとぐるを巻き、それでも尚余る身体を持ち上げ、高みから見下ろす様は、中々に迫力がある。

「……身体の主導権を、俺から奪い返したいのか？」

ルードは、悪魔より若干低い目線から睨み上げながら、低い声音で問い質した。

「べっつに〜？ そんなもんはいらないよ。」

多喜の威圧も、ルードの殺気もまるでこたえていないかのような口調で悪魔は答えた。

「いやね、正直なところ、ついこないだまでは、こんなクソ坊主に、このサハリエル様が抑え込まれるなんて、面白くなってねえ。」
相変わらず笑んだ表情を崩すことなく、悪魔は言う。

「……でも、ここ何日かは中々に面白かった。僕も長いこと生きてきたから……、色々退屈してたんだよ。ふふっ、そう、……君達を見ての方がよっぽど楽しかったから、しばらくは干渉を控えようかと思ってたところだったんだけどねえ……。」

「……それはそれは、アリガタイことで？」

ルードは皮肉な笑みを浮かべながら、

「……なら、何故さっき暴れた？」

鋭く切り込んだ。

「……僕からの忠告さ。」

へらへらと軽薄な笑みはそのままに。しかし、目元だけは鋭く、そして瞳に冷たい光を帯びながら——悪魔は答えた。

「ノアの箱船の話を知っているかい？」

唐突な問い。

「……聖書の中のアレだろ？ ——大洪水の話だ。」

……貧乏なアンセルム家では学校へは行かせて貰えず、難しいところまでは知らないが、毎週教会での礼拝は欠かしたことはなかつ

た。

そう、教会の神父の説教の中に、そんな話もあった。

「世の害悪を流し去る大洪水……。その害悪とされた者達の中に、我が妻と我が子も含まれていた。……というよりあれは……生まれた子を滅するのためのものだった。」

「！ お前は……まさかグリゴリの！？」

悪魔の言葉に、多喜は驚きに目を見張った。

「そう。楽園から追放された人の子に、当たり障りのない知識を与えるためだけに遣わされた天使団の一人。」

ニコニコと、感情の読めない笑みを浮かべて、悪魔はペロツと自分の出自を明かした。

「でもねえ……。」

背に負った漆黒の翼。そこからぶちっと羽を数本むしり、

「十ある知識や技術のうち、彼らに伝えることを許されたのは一にも満たない。」

一枚。また一枚。ポイポイ放って見せる。

「ねえ、だつてさあ。例えば未知の病で苦しんでる人が目の前にいたとして、だよ？ ……その治療法を知っていながらそれを教えもせず傍観するのは是とし、彼女を救おうと知識を与え助けた事を罪だと言う。……そんなのが神だなんて、笑っちゃうだろう？ ……もっと多くの実りを得られる技術を知っているのに、不作で飢える彼等の前で知らないふりしてニコニコ笑ってろってさ、……彼らにも、僕らにも、心や感情はある。……そんなことは出来るはずない。」

最後に残った一枚をグシャツと乱暴に握りつぶして、悪魔はそれでも表情は微笑んだまま。

「言葉を交わし、感情を交え、心をも通じ合わせれば……。当然、そこには縁が——絆が——生まれる。恋愛感情も……。また……。」「が、声音には自嘲するような色が見え隠れしている。」

「そして僕らは……、心から愛した女性との間に子を成したが……、

生まれた我が子は……—そうは呼びたくはないが——魔物どころか化け物だった……。僕は墮天し……彼女もまた、淫婦だと墮とされ……ノアの洪水に我が子共々呑み込まれておしまいさ。」

では、ルードの脳裏に浮かんだあの光景は……。

「！ だから……。……じゃあ……。やっぱり——。」

一人、呟いたルードの言葉を拾い、

「ふふっ、君の場合、僕よりはるかにヤバイとおもうよ？　こんなに歪になった魂じゃ……。何がどうなってもおかしくない。」

悪魔は言った。人差し指の先に、ポウツ、と白い光を浮かべ、それをつつきながら。——真ん丸い玉が、幾つもくつついたそれは……。「ふふふっ、使い捨てるつもりや身体から油断してた隙に出られなくなっちゃった上に、喰ったつもりがいつっかり魂を乗っ取られそうになっちゃったなんて……。僕としたことが……。……とんだ不手際だったけど。君もなかなか面白いこと考えるよね……。……僕の……。悪魔の魂に無理矢理くつついた君の魂に……。それを呪い汚のろそうと喰いつく吸血鬼の魂。もうこんなにも歪で穢れきった魂に、まさか神龍の魂を同化させようなんて。」

「……。それは。」

「そうだよ、これが今の僕たちの——君の——魂の姿さ。」
指先で、それを弄びながら悪魔は笑う。

「これじゃあコドモをツクル前に、君の方が消えちゃうだろうねえ……。」

わざとらしく肩を竦めて見せる悪魔を睨み付けながら、

「……。どういことだ？」

ルードは緊張に高鳴る鼓動を必死に抑えつける。

「悪魔の僕や、吸血鬼の穢れた魂は、清き神龍の魂とは対極にあるものだ。……。それを無理矢理くつつけるとなれば……。針がどう振り切れてもおかしくない。当然、反動も相当なものが返ってくる。……その全てに、脆弱なお前の精神が耐えきれるか？」

悪魔は、それまでの軽薄な態度を瞬時に引っ込め、切れ味鋭く問い

を投げ掛けた。

「……耐えきれず、中立を保つはずのお前の自我が消えれば、針の振り切れた魂は暴走する。……悪魔に神龍……力の塊みたいなそれが暴走すれば……世界は壊れる。この辺りの人里だけに留まらず……それこそノアの洪水の如くに全ては壊れるだろう。」

追い討ちをかけるかのように、さらに厳しい言葉を重ねる。

「……多喜殿。仮にも神龍である貴女が、どうしてこんなリスクな賭けに打って出ようとなど考えました？」

「悪魔よ。あんまり人間をなめくさってくれるなよ？」

ギロリと睨む悪魔の紅い瞳を、鼻で笑って見返し、多喜は言った。「いざ心を決め、覚悟を決めた人間の精神にかなう神も魔物もこの世に存在しない。運命も宿命も何もかも、打ち破っていく力が、人間にはある。……だからこそ、魔物は人を貶めようとし……、心の狭い一部の神は人を束縛したがる。」

誇らしげな笑みを浮かべる多喜。

「……無論、心の弱い人間というのもあるが。コイツなら大丈夫。アタシが保証するよ。」

そう、言い切る多喜の下で、ルードは、つい今しがた初めて言葉を交わしたばかりの相手にそんな太鼓判を押され、タラタラと冷や汗が顔を伝っていくのを感じた。

何だろう。どんどん話が大きく大袈裟になっていく……。

——でも。

ルードは改めて自分の心に問いかける。

——俺は……。俺が望むのは……生きること。欲しいのは……未来。——大切なものをこの手に取り戻す。

そして。新たな大切なものをこの手に掴み……守る。自分のため……そして竜姫のために。願いはただそれだけ。

……その願いを叶えるために背負うものの重さは、計り知れない。それは、事前にしてきた覚悟では到底足りない程に。

……それでも。

例え潰すだけでは飽きたらず地の底までねじ込まれそうな、重たいプレッシャーに耐えてでも、叶えたい願いなのがどうかを……。

「……俺は恩知らずなサイテー野郎に成り下がるつもりはさらさらない。自分の気持ちを裏切るような卑屈ヤローになるのもゴメンだ。」

ほんの数日。極々僅かな刻。その間に、ルードを繋ぎ止めた絆を断ち切る痛み堪比べれば、のし掛かるプレッシャー等、痒くもない。ルードは、改めて覚悟を決め、悪魔と対峙する。

「へえ。いい表情をするじゃないか。……でもねえ、消されるのを黙って見てるほどには広くないんだよね、僕の心は。」

サハリエルは、剣を手にながら言った。

……彼の手にした剣には見覚えがあった。……さっき竜姫に貸したはずの剣だ。それが、何故ここに？ ……まさか。

嫌な予感に顔をしかめ、ソワソワしだしたルードに、サハリエルは、

「……ここは僕たちの精神世界の中。現実世界とは別次元の世界だ。ここにある剣は君があの子に貸し与えた物とは別物だ。」

そう言って、意味深な笑みを浮かべた。

「ここで使えるのは純粹に己の――魂の――力のみ。そしてこの魔剣は元々僕の力。」

細かい細工まで確かにあれと同じ剣を掲げて見せる。

「ねえ、ルードヴィヒ。ただの人間の力しか持たない君は……悪魔である僕とどう戦う？」

嫌みなほどに美しく、そして醜悪な、悪魔の微笑み。

……その笑みを見たとき頭が認識するが早いか、プツン、と、テレビの画面が消えるように、ルードの視界が暗転した。

「闇を見透す力は僕と吸血鬼の力だ。……人間である君の力ではない。」

コツン、コツン、と、不安定な足場を悠々靴音高く近づく気配。ルードは、距離を取ろうと、後ろへ飛ばうとして――思うように

体が動かず、戸惑いから足をもつれさせ、ステンと尻餅をついた。

「高い身体能力は吸血鬼の力だ。……君の力じゃない。」

ヒュッと空を切る音がして、チキッと金属の冷たく鋭い気配がピタリと喉元を捉える。

「……ああ。多喜殿の援護は期待するなよ？ 多喜殿はこの場を用意するだけで精一杯なんだ。君の手助けをする余裕はない。」

クスクス笑いながら、悪魔は言った。

「ここで君を殺せば、全ての力は僕のものだ。」

刃の先が、皮膚に触れる。

「さあ、無力な人の子よ。……どうする？」

剣を振り上げ、悪魔は尋ねた。

触れていた刃先が肌と擦れ合い、ピツと一筋傷が刻まれ、僅かながらに血飛沫が飛んだ。……普段なら次の瞬間には消え去るはずの傷から、少ないながらも血が滲み出たまま、一向に治る気配がない。

……そう、驚異の治療能力もまた、人間の力ではない。……悪魔は、振り上げた刃を、容赦なく、ルードの身体へと振り下ろした――。

力を、手に。

「ぐあっ、」

情け容赦なく力一杯振り下ろされた刃は、肩口から脇腹まで届く裂傷をルードの身体へと刻み付けた。

切れ味の鋭い剣に、切られた瞬間の痛みを感じなかった。……が、次の瞬間には凄まじい激痛がルードを襲った。

どっと血が吹き出し、衣服を濡らす。ドクドクと、傷口が脈打ち熱を持つ。反射的に、傷口へ手を運ぼうとしたところを――第二撃が襲った。

二の腕に、骨が見えるほど深い傷を負わされ、ルードは堪らず悲鳴をあげた。……魔物に堕ちて以来、闘いの最中、これより酷い傷を負ったことも幾度となくある。

だが、魔物の優れた治癒能力がすぐさま回復させてくれていたため、痛みは傷を負った瞬間のものだけだった。

一瞬の痛みなど、幾らでも無視することができた。

……だが。人間のルードヴィヒは、ただの一般人に過ぎなかった。訓練を積んだ軍人などではない彼に、人としては重症の域の怪我の痛みは、それ相応のダメージをルードに与えた。

そして、さらに第三撃。腹を、横尻ぎに切られる。

「ぐっ、うっ、」

腹にダメージを受け、叫ぶことすら苦しくなる。

わずかでも動けば倍以上の痛みが怒濤のように押し寄せる。次から次へと振り下ろされる刃の嵐。

人外のスピードで繰り出されるそれから逃れる術は、今のルードにはない。後から後から刻まれる傷の痛みに呻きながら^{うずくま}踞るだけ。

「ほらほら、どうしたの？」

挑発するような悪魔の台詞にも、言葉を返すような余裕はない。それでも、ルードは見えてはいない茶色瞳で悪魔を睨み付けた。

……髪色も、今はかつての薄茶色に戻っている。

無数に刻まれた傷。そこから溢れだした大量の血は、とうに人間の致死量を越えている。本来なら……いまだに意識があるはずもない。だが、こうしてまだ生きているということとは。

——ここは、精神世界。現実世界とは別次元の世界。使えるのは己の魂の力のみ。……ならば、ここでルードが使える武器はただ一つ。自分の精神力のみ。この、想いが尽きぬ限りは、この世界で自分は死なない。

気を失いたくなるほどの苦痛に必死に耐えながら、ルードは勝機を探る。……ただ耐えるだけでは何も始まらない。

何か。力を。

「ぐうっ!？」

胸に、深々と刃が埋まった。

突き立てた剣をわざとグリグリ抉るように更に深く刃を沈めながら、

「やあ、随分しぶといねえ。すぐにも音をあげると思ったのに。結構頑張るじゃない。……でも、そろそろ分かるうよ。どうあがいても手の届かないものもあるんだって事をさ。」

悪魔は優しく諭すように言った。

身体の中へ中へと食い込む刃から、悪魔の力が注ぎ込まれる。……それは、毒のように内部から身体を溶かしていくような苦痛をルードに与えた。

「ぐっ、うううう、」

呻きながら。

ルードの頭に何かが閃いた。もう、痛みのせいで物事をまともに考える余裕もない。ルードは、思い付いたままに、両手で突き立てられた剣の刃を、刃で手のひらが切れるのも構わずしっかりと抱き込んだ。

「……? ……………!？」

何をするのかといぶかしむサハリエルをよそに、ルードは剣の刃

を、根元まで体内へと埋め、全身を廻る毒をあえて手放しに受け入れた。

全て、溶けてなくなりそうな感覚の中、ただ一つ、紅い一本の糸だけは決して見失わぬよう、しっかりと握りしめて。

意識ごと持っていかれそうな苦痛を、真実、命がけで耐える。毒がどれだけこの身体を灼こうとも、精神だけは。こちらから手放さない限りはどうにもできない。

……いや、この毒の元の力を圧倒することができたなら。……きつと――。

「!?!? ……おい? ……!!!!!!」

悪魔が不意に、戸惑いの声を発した。

ルードの身体に深々と突き刺さっていた剣が、まるで氷細工か何かのように溶けて消えていく。

「……、これは……!?!?」

青白い顔で弱々しい呼吸を繰り返していたルード。

が、剣が完全に溶けて消えた瞬間、力強い紅い瞳で悪魔を睨みさえ、溶けて消えたはずの魔剣をいつの間にか手に納め、力一杯、悪魔の胸を一気に貫き通した。

……それは、ほんの数瞬の間の出来事。

悪魔でさえも、血に濡れた魔剣が自らの背を突き破るまで、何が起きたか理解できなかったほどの早業。

痛みに顔をしかめながら視線を落とせば、散々切りつけてやったはずの傷のほとんどは消え、残る大きな傷もすでに塞がりかけている。

「……剣の力を……僕の魔力を取り込んだのか……! ……まさか……?」

復活したルードの視界に、悔しげな表情を浮かべる悪魔の顔が映る。「言っただろう。人間をなめるんじゃないよって。もしここが現実世界なら……人間のルードが、悪魔のお前に勝てるなんてありえなかっただろうが……ここは精神世界だ。心の強さが勝れば……人間も

悪魔にだって勝てる。」

それまで、黙って戦いの成り行きを眺めていた多喜が、得意気に言った。

「……そんなことは、とうの大昔から知っているさ。」

心臓を貫かれ、致命傷を負った悪魔の顔色は、徐々に回復していくルードのものと反比例して悪化していく。

唇の端から血をこぼしながら、悪魔は諦観の笑みを浮かべて静かに呟いた。

「何も考えず……ただ神に従い、その命を遂行するだけの人形だった僕らに、神の命に背き、墮天してでも助けたいと思わせる力を持っていた……。そんな彼らに……。……彼らと同じ人間である君に……。君の心に……。僕なんかかなうわけないことくらい、初めから分かっていたよ——。」

ガクツと膝からくずおれる。

「愛した人を——その魂すら——失って……。墮天使である僕は生まれ変わることもできず、死は消滅とイコール。……。僕が死ねば……。あの人達が存在したという記憶すら消えてなくなる……。生きることも、死ぬこともできずに、ただ何となく刻を過ぎてきたけど……。」

それでも、サハリエルは荒い呼吸の合間に絞り出すように喋り続けた。

「今なら。……。今なら僕は、僕の記憶と力の全てを君に託して消えることができる。」

突き立てられた刃を、今度は悪魔が握りしめた。

「……残るのは僕の力と記憶だけ。もう、君の意思に反して暴走したりはしない。……。もちろん、多喜殿の魂との融合に成功しなければ意味はないけれど。」

切った手のひらから血が滴り落ち、刀身を伝ってルードの手を赤く染める。

「……僕達は幸せにはなれなかったけど。……。君達は……。うまくい

くといいね……。」

……つい今しがた溶けて消えた剣のように、サハリエルの姿が溶けだし始める。溶けて、流れて。形を失くしていきながら、サハリエルを形作っていた光が、魔剣の刃に吸い込まれていく。

悪魔はどんどん溶け、魔剣はどんどん大きく、重たくなっていく。「――」。

最期に。ルードの耳元に囁き駆けて。

そして、悪魔が消え去った後には、到底構えることなど不可能となった剣が残り……。魔剣は光となって弾け、光のシャワーがルードの頭上から降り注いだ。

途端、失くしていた分の倍以上の力が溢れてきた。

「……悪魔の力を見事にものにしたね。」

多喜が、労るようにそつとルードの耳元まで顔を寄せ、囁いた。

「……何だかすごく、複雑な気分だけどな……。」

「ルード。まだ仕事は残ってる。」

多喜が鼻先で、サハリエルが出して弄んでいた光の玉を指し示した。……歪な形をしていたはずの魂。が、それがいつの間にか真ん丸い形のもので二つふよふよ浮かんでいる。

「悪魔の魂と完全に同化したからね。吸血鬼の魂が弾き出されたんだよ。……あれは元々呪い^{のろ}で作られた紛い物だからね。今のあんたなら、楽々取り込めるはずだ。」

多喜の言葉にルードが頷く。

……悪魔の力を得た今、魂の扱いは十八番と言ってもいい。ルードは光の玉の片方――自分の魂を――を素手で掴み、胸へとしまい込んだ。

そして。

小魚の踊り食いよろしく、暴れまくる、もう一方の光の玉をポイと自分の口に放りいれ、ゴクンと飲み込んだ。

しばらく胃の中で暴れる獲物に催す吐き気をジツとこらえて、獲物が力尽きるのを待つ。

……数分が過ぎ。

「落ち着いたかい？」

すっかり静かになった空間で、ルードは多喜と向き合った。

「……さあ、アタシの最後の仕事だ。」

多喜は、とぐろを解きほぐし、長い身体を優雅に流して美しい体軀から空間一杯に金の光を振り撒きながら言う。

「アタシを、剣で斬れ。」

その言葉を察していたかのように、ルードの手には元のサイズに戻った魔剣が握りしめられていた。

「アタシがあんたにやれるのは、アタシの記憶——知識と経験——と……。そしてあんたのその闇に染まった魂をある程度浄化してやることだけだ。……それも、さっき悪魔が言っていた通り、多大なリスクを背負うだろうが……。」

その荘厳とした姿に、空間の空気がピンと引き締まる。

「もちろん、お前はやるな？」

「……その為に、ここへ来たんです。」

グツと、痛いくらいに剣の柄を握りしめて。

ルードは長い胴体の腹に、その巨体からしてみれば爪楊枝みたいな剣の刃を突き立てた。……傷こそ小さいが、裂けた傷口から破裂した水道管の如くに鮮血が吹き出す。

流れ出る血に口を寄せ、滴る血を啜る。

……巫女である竜姫の比ではない。神である多喜の血は、魔物であるルードの魂に無数の針を突き立てる。

魂を碎かれるかのような苦痛と恐怖。聖と邪、光と闇との狭間で己を見失いそうになる心細さ。……それらは、疲弊しきったルードの精神を極限まで削り取っていく。

多喜は、身体を横たえ……血を啜るルードの後ろ姿を静かに見つめた。

苦しそうにしながらも、必死に耐える彼の姿を見て、多喜は心底この幸運に感謝していた。己の采配ミスから、途方もない宿命を負

わけてしまった竜姫に、こんなにも素晴らしい相方と巡り会わせてくれた運命。

……それを引き寄せた竜姫の心。

そして、このルードヴィヒという人物に。

……何も残さず消えるはずだった自分の、記憶を継いでくれる存在がある。――充分だった。

「竜姫……。いいのを捕まえたな。おかげで安心して逝ける……。」
だんだんと重たくなってくる目蓋を支えながら。

「ルードヴィヒ・アンセルム。わが豊生神宮の狛犬として……。竜姫の大切な相棒として……。楽しく生きろ。お前の、人生を……。」
意識も絶え絶えなルードの背中にそう呟いて。多喜はその瞳を永遠に閉ざした。

と、多喜の姿もまた、金の光となって溶け、光はルードの中へと消えていく。

……力の大津波が四方からルードの自我を攻め立てる。光と闇に両端から腕を引っ張られ、子供じゃないが泣きたくなくなる。

けれど、流されるわけにはいかないから。

ルードは、たった一本の命綱だけを頼りに、どうにもならない力の激流の中、耐えて、耐えて、耐え続けて。

……クラウドと今も戦いを続けているはずの竜姫達の無事をただただ祈りながら。ジッと、引きずられてしまわぬよう踏ん張って。

大量に増えた自分の物でない記憶に呑み込まれてしまわぬよう、心持ちを必死に整理して。

もう、力の暴走を恐れずに済む……。あと少しで手の届く素敵な未来に精一杯手を伸ばして。

この空間へ導いた多喜を亡くし、崩壊を始めた空間と同調して崩れそうになる心を繋ぎ止めて……。

ルードは、再び意識が何処かへと沈んでいくのを感じながら、ぐったりとその場にへたり込み……。瞳を閉じた――。

新たに……

「……っ、」

……ありえない、はずだ。こんなことが、あるはずはない。

荒い、呼吸。が、それ以上に、クラウドの心は――。

……神から賜った、あのミカエルも使う剣を手にした自分が、まさか、こんな……。

――キーン。

「クソッ、」

まただ。……また、弾かれた。

……いくら魔剣を手に行っているからといって。……例えそれが兄でもある墮天使サハリエルが愛用していた剣だとしても。

こんな。……色々と小賢しい魔術を操るとはいえ、所詮ただの小娘なのに。この大天使クラウド様が全力を尽くして戦っているというのに。……何故、まだこの小娘はこうしてまだこの世に生きている？

信じたくない、認めたくない。

けれど、どんなに自分を誤魔化してみても、目の前にいるこの少女が今だ生きて剣を手にと自分と互角の戦いを繰り返している現実はどう――。

「……っ、認める訳にくかつ!!」

信じたいたいものと。信じたくないものと。

その狭間でジレンマと戦いながら、クラウドは一人叫んだ。

が、……荒い呼吸を繰り返しているのは何もクラウドだけではなく。むしろ、何度も何度も宙への跳躍を繰り返している竜姫の消耗の方が余程深刻であった。

ルードが貸してくれた魔剣と、それにこめられた魔力のおかげで善戦してはいるが、人間の範疇を越えた運動量の分の負荷は、それとは思えないほど僅かなものながらに、しかし、時を経る毎に確実

に蓄積されている。

……そもそも昨日の一件で体調は戦闘など無茶どころでは済まないレベルだったはずの所を、この武器で穴埋めしている状況なのだ。幸いというか……。武器——魔剣——の力は穴を埋めてもまだ余りあっていた為、ここまで普段以上に動く事ができた。

……だけど。

「……そろそろ……キツくなってきた……。」

跳躍が次第に重たくなってくる。……稲穂の攻撃を避けて高く飛ぶクラウスに、跳躍が次第に届かなくなり始めた。

稲穂が風を操り、宙に留まりやすいよう援護してくれてはいるが……。

その、稲穂の表情も——……一見ただけでは分からない程度ながらも——苦々しいものへと変わりつつあった。

ちらつと後方を見やれば、誠人はぐったりと木の幹に寄りかかったままほとんど動かない。

側についている久遠の様子からするに、そう心配はいらなそうだが、久遠を戦闘に呼び戻すには……無理が、あった。

「……さすがに、そろそろ……やーばい……ね……、」

グッと、手にした剣の柄を一層強く握りしめながら、竜姫は剣の主が戻るその時を信じ、精一杯の力を足へ籠め、宙へと跳ぶ。

「クラウスっ、今のうちに覚悟しておきなさいよっ！」

上空の天使に向かって叫びながら。

「ルードが、戻ってくる前にね!!」

後ろから、稲穂の風が追い風となって、竜姫の背を押し、身体を空へと押し上げる。……しかし、その速度は明らかに落ちていた。

「覚悟しろはこちらの台詞だ!!」

竜姫の身体が、クラウスのいる高さまで届くより早く、今度こそとばかりに天使は、バチバチと火花の散る雷を手に握り、高く掲げた。
「!？」

まだ上昇が続いている最中の竜姫に、避ける術はない。

雷撃に向かっていく格好で、落ちてくる雷を、魔剣の刃で受け止める。途端、バチバチバチッ、と派手なスパーク音と共に、目を灼く様な光が、弾けた。

……こちらへ向かって来る攻撃へ突っ込んだ分の重みが、竜姫へのし掛かる。

まだまだ成長途中の少女の華奢な身体。……到底、耐えきれはすもなく。弾き返され、まるで爆風に吹き飛ばされでもしたかのように、地へと叩き返された。

「姫っ!!」

物凄いスピードで地面へと墜ちていく竜姫に、稲穂は宙空から青い顔で叫んだ。あんな勢いで地面へ叩きつけられては、命の保証はない。

が、今この状況では、何をしようと稲穂に彼女を救うことは不可能で。……ましてや後方待機中の久遠など当てにならない。

「姫っ、姫!!」

墜ちていく竜姫の姿が、一瞬の時を何十倍にも引き延ばしたスローモーションの様に見える。もどかしく腕を伸ばすが、……届くはずもなく。

悪夢のような絶望が、稲穂の脳裏に過る。

「……っ、」

ここ何代かの中で飛び抜けた霊視能力を持って生まれ、この自分相手に物怖じもせずニコニコ笑って後をついてきたかつての幼子は、稲穂のお気に入りだった。

「竜姫っ!! 誰かっ……、」

こんな時、人は神に祈るのだろうか。助けてくれ、と。

だが。……自分が、神なのに。こんなに必死に手を伸ばしても、届かない。もどかしくて、もどかしくて。

「竜姫っ!!」

……だから。そう、竜姫の名を呼ぶ声が耳に届いたとき、稲穂は、彼に、心底感謝した。

黒い翼を広げ、竜姫の元へと矢のように翔^かけ、地面へ激突する寸前で見事に彼女を抱き止めた、彼に――。

「……悪い、待たせたな。……大丈夫だったか？」

艶めく黒い翼。あの空の上の天使と色違いのそれで、ルードは竜姫を抱きにしたまま、静かに地面へと降り立った。

「……ルード、……それ……は？」

後を追うように地面へ降りた稲穂が、腹いせにかまいたちの三連撃を空へと放ちながら、こちらへと駆け寄って来るのを横目に見ながら、竜姫は彼の背の翼へ手を伸ばした。

「……手触りがある……、って事は……？」

羽を弄^もくられて少しくすぐったそうな表情をしながらも、ルードはその問いには答えず、

「……伝えなきゃならないことがある。」

竜姫と、稲穂に言った。

「……久遠は？」

「……あっちで誠人君について貰^{もら}ってる。」

そう言って竜姫の指した方をちらりと見やり、ルードは、

「話がある。」

と、竜姫を抱えたままスタスタとそちらへ歩き出した。

「ちょ、ちょっと……、クラウドは!？」

……ルードの表情を見れば、重大な話なのだろう事は察しできる。だがクラウドは、その大事な話し合いの間中、黙って待っていてくれるような親切的な相手ではない。しかし、

「……大丈夫。」

ルードは落ち着き払っている。

「見てな。」

そう言って、笑う。そして、ルードは口を開き、竜姫には意味不明な発音の言葉をつらつら並べ出した。

「……何を……？」

その瞳は、煌々と、紅く光り――。その、言の葉を紡ぎ終えた途

端、上空の天使が、ピタリと動かなくなる。

「え……、何？、今、何をしたの……？」

すぐさま上空から、天使の憤りの叫びと、数々の罵詈雑言が降ってきた。……が、当のクラウド自身は、空の上でピタリと縫い止められたようにその場から動かない。

「……ちよつと魔術をお見舞いしてやった。あんまり長くは保たないけど、まあ、話をする間くらいは足止めできるだろ。」

言いながら、少し早足に久遠の元へ歩み寄った。稲穂も、後に続く。「……ルードー。」

久遠は彼の名を呟きながら、スックと立ち上がり、その赤い瞳を見上げた。ルードは、竜姫を降ろしながら、久遠の傍らに横たわる青年に視線を向ける。

「……あ、……あの……、」

紅い瞳と目の合った誠人がどんな言葉を繋げば良いのか分からないまま泳ぐ瞳に、ルードは、

「……？ 竜姫、コイツ常人なんだよな ……なのに……視えてるのか？」

少し困った風に訊いた。

「……あの天使のせいで死にかけたからねえ。コイツも一応神崎の血縁だ。火事場の馬鹿力的なアレで奥底に眠ってた血が覚醒したらしい。」

稲穂が、ため息混じりに答える。

「……稲穂様……、……俺の話、察しはついてるんでしょう？ ……コイツの前で喋っても？」

「……むしろ聞かせてやれ。」

問いの答えは稲穂ではなく、久遠から返った。

稲穂も、その言葉に頷くのを見たルードは、改めて竜姫と正面から向き直り、その足元に跪いた。

稲穂は、すぐさま竜姫のすぐ後ろ——右ナナメ後ろ——に立ち位置を変え、久遠はさらにその左後ろへついた。

「我が名は、ルードヴィヒ・アンセルム。」

ルードは、立ち並ぶ彼らを見上げ、そう名乗りをあげた。

「先代一の神多喜様より、狛犬の任を賜り、私、ルードヴィヒ・アンセルムは、本日この時より、その任を承りたく存じますゆえに。」
小難しい言い回しもごく自然に、流暢な日本語を紡いでいく。

「当代一の神、竜姫様。二の神、稲穂様。三の神、久遠様に。絶対の忠誠を捧げ、隷属を誓い申し上げる。」

……それは。契約の儀。

稲穂が、懷から鈴を取り出し、竜姫に渡す。竜姫は、右手の鈴と、左手の剣とを持ち変えながら、ルードの前へ立った。

「……ルードヴィヒ、アンセルム。貴方に、新たな名を授けましょう。」

全ての感情を内へ押し込んで、巫女表情を浮かべて竜姫は言った。

「……^{しんぎ}晃希。」

告げられた名に、彼は眩しげな表情をした。

「豊生神宮、狛犬、晃希。」

鈴に通された紐を、彼の首にかけてやりながら、竜姫は、新たな彼の名を呼ぶ。

「豊生神宮、一の神、竜姫の名において命じます。狛犬として、社を守りなさい。」

手にした剣を彼に渡し、そして、命じる。

「晃希。あの、不屈き者を片付けて来なさい！」

「御意。」

『晃希』は一度頭を下げ、すぐさま立ち上がって踵を返した。タツと二、三步軽く駆け付けた所でバサリと背の翼を一杯に広げて空へと羽ばたく。黒い翼はルードの身体をフワリと宙へ持ち上げ、そのまま上空のクラウドの元へと誘う。

「……晃希、か。良い名じゃないか。」

稲穂が、竜姫の肩をポンと軽く叩きながら言う。

「『久遠』に『晃希』……、良いネーミングセンスをしてる。」

その横で、

「希望の光……。名前はカッコいいけどさ、……アイツにはちょっと勿体無い……。うつ、」

と、久遠がぼやくのを蹴りつけて黙らせる。

「多喜は……。」

少し沈んだ風な竜姫に、

「……私らは神だが。それでも、きっと感謝しながら逝ったんだろう。運命というやつに。」

稲穂は、彼女の肩を抱きながら空を見上げ、眩しげに目を細めながら、彼の背を眺めた。

「アタシも……。感謝しきりだよ。」

その言葉に、

「……色々色々、気に食わないことだらけだけど。」

久遠が少し寂しそうに呟いた。

「でも……。そうだね。そういう意味での感謝は……。ボクもしてるよ……。」

渋々ながらも、そう認めて。

「……悔しいけどね。」

久遠は苦笑しながら言う。

「……初めて会ったとき、彼、『人間だった頃の名』としてルードと、そう名乗ったけど……。二度目に会ったとき、『ルードヴィヒは死んだんだ』って言った。『自分に名はない』って……。」

過去の名を捨て、新たな名に。これは、儀式。昔から決まったしきたりなのだが。

「でも……。良かったのかな……?」

竜姫は自問する。

「やっと、自分に戻れたって……。『ルードヴィヒ』だって思える……。そう言ってた矢先にこんな……。」

迷う竜姫に、稲穂は容赦なく拳骨を見舞った。ゴンッ、という痛そうな音に、殴られたわけでもない久遠までもが身を竦める。

「あの子は、自分の過去を悔いながらも、きちんとそれと向き合い、受け止めていたじゃないか。言ってただろう？『生きたい』んだと。……彼なら、新たな名で再出発出来ることを喜ぶだろう。見ただろ？……嬉しそうな表情をしてたじゃないか。」

……痛みに――。目を潤ませる竜姫に、

「……それをお前がそんな表情をしていたら、彼は心から新たな名を受け入れられなくなるよ。……新たな門出だ。笑って、思いきり祝福してやりな。」

稲穂は言った。

「あれが片付いたら……。鹿か猪でも狩ってきてやる。宴を催そう。……多喜様の追悼と。新たな家人の歓迎パーティーを兼ねてな。そうだ、舍弟共に言いつけてキノコやら山菜やらを届けさせよう。……時季には少し遅いが、まあ探せばまだあるだろ。」

……稲穂は、この辺り一帯の野性動物の『スケ番』でもある。

「……アンタにも、相伴にあずからせてやろう。」

目の前の展開について来られていない様子の誠人は、

「は……。あ、」

と、曖昧な返事を返しながら、チラチラ盗み見るかのように竜姫を見る。

「……誠人君、巻き込んでおいて悪いんだけど、詳しい状況説明はもう少し待って？」

そう。あの、戦いが、終わるまで……。

誠人の視線に気付いた竜姫はそう言って、空にいる彼に視線を投げた。

最後の約束

……クラウドは、目の前で剣を構えた男に、心を凍りつかせた。

「お……前……っ、」

自分と同じように背に翼を背負い、同じ目線の高さに浮いたまま、彼は静かな瞳でクラウドを正面から、その視線でクラウドの、動揺に揺れる瞳を、射抜いた。

「……豊生神宮狛犬、晃希の名に於いて、大天使、クラウドに告ぐ。今すぐここから去^いね。さもなくば、社に害為す『敵』とみなし、狛犬としてお前を始末してくれよう。」

シャリン、と。胸元の鈴が揺れ、音をたてる。

とても小さな――耳をすませて聞かねば聞き逃してしまいそうな――そんな音が。晃希と、名を改めた彼の心に心地よく響く。ニツと笑い、

「……いいだろう？ 俺の新しい名前と肩書きだ。」

ふるふると細かに全身を震わせるクラウドに得意気に言う。

「サハリエルは死んだ。その魂も、記憶も。今はもう、俺のものだ。俺は。悪魔サハリエルでも、名もなき吸血鬼でもない。人間だったルードヴィヒでもない。俺は、豊生神宮の狛犬、晃希だ。」

「……う……嘘だ……、」

青ざめていく、顔。瞳は落ち着きなく動いて、クラウドの望む事実を発見しようとするが――。

「お前の兄貴から、お前への遺言を預かっている。」

クラウドの耳に、聞きたくもない単語が飛び込んできた。

「君は、君の好きなように生きなさい。」

……サハリエルの最期の、言葉。

「君は、君。何をするにも選ぶのは君自身。真の意味で君を動かせるのは……もちろん僕でもないし、お偉い上の天使様でもない。神ですらも、出来はしない。……それができるのはただ一人、君自身

だけだ。」

晃希の口から紡がれる、聞き覚えのある口調。

かつて、まだ兄が天使として天界にあった頃。何かにつけ、兄は囁んで含めるように自分に言って聞かせた。

「僕は、選んだんだ。大切なものを、一つだけ。その結果、僕は堕ちたけれど、その事を後悔したことはない。……その後、大切なものを守りきれなかったことは……ずっとずっと……後悔してきたけど。でもそれは、僕が選んだ道の結果だ。僕自身に起きたことに関しては誰のせいでもない、僕自身の責任だ。」

兄と同じ色彩を持ちながら、まるで似つかない姿の少年が紡ぐ、心地よくも不愉快なコトバ。

「……ねえクラウド。君の一番大事なものは何だい？」

「……黙れ——。」

優しいはずの言葉は、クラウドの心を激痛を伴い、深々と抉った。——大切なもの。天使にとっての一番なんて、かの偉大なる神以外にあるはずもない。

神より大切なものがあるだなんて、そんなのは御使いじゃない。

自分達を創った創造主は、御使いにとって絶対の存在なのだ。

「……悪魔めが。」

そう、そんなのは悪魔の考え方なのだ。——そんな天使の呟きに、晃希は呆れたようにため息をついた。

「なあ、お前が一番大事なものの、当ててやろうか？」

サハリエルの口調から一転、素の口調で晃希が言った。

「クラウド、お前さあ、何だかんだ言っつけて、実は神とかどうでもいいだろ。……お前が大事にしてるのは、お前自身だけ。……違うか？」

サハリエルから継いだ記憶。天使として生まれた時からのその中には、クラウドに関するものも、多くあった。

クラウドの過去。そこから見えてきた、クラウドという天使の真の本質は。

「全く、竜姫や久遠にや感謝しなきゃだぜ。あいつらに会えなきゃ俺は、お前なんかと心中するところだった。全く、誰も浮かばれねーような無意味な事を……な。」

自分本意な、ただの暴君。しかも、大した力もない、虎の威を借りる狐。虎の庇護下で、ぬくぬく過ごしているだけの、井の中の蛙。こんな下らない小物を。

「心配してたぜ、あいつ。」

双子に生まれた弟だからと。

「……もう一度、考え直そうとかいう思いはあるか？」

無駄と知りつつ、晃希は尋ねた。

「ない。」

案の定返ってきた答えに、

「ならば、お喋りはここまでだ。俺はお前を殺す。……容赦はしない。覚悟するんだな。」

冷たく言った。

……太陽は、天辺を過ぎ、西の空へとだいぶ傾き始めている。

晃希は、剣を構え直し、クラウスとの間合いをはかり……背の翼を操り、一気にクラウスの懐へと飛び込んだ。

迷いの無い、クラウスの命のみを狙う剣を携えて。

「クラウス。俺は、晃希だ。……お前を想うサハリエルの記憶はあれど……俺は、お前に向ける同情や憐れみなどから情けをかけてやるつもりはない。」

真っ直ぐ、心臓めがけて突きを繰り出す。

……金縛りの魔術の効果など、とうに切れているというのに、クラウスは鈍い動きで、身体を捻り、ギリギリのすれすれで攻撃をかわした。

すぐさま手首を返し、左へと難いでバランスを崩したクラウスのがら空きの胴へと刃を叩き込んだ。

「グッ……、」

飛び込んだ勢いを借りた第一撃と比べ、余力を流用した二撃目が

穿った傷は浅かった。

が、吸血鬼の臂力を持ってして加えられた攻撃に、クラウドは踏ん張りきれずに後方へ吹っ飛んだ。

クラウドはすぐさま翼をいっぱいに広げて空を掴み、体勢を整え直す、が、……晃希へと向き直り、神剣を掲げる――それより早く、晃希の魔剣が飛んできた。

吹っ飛んだクラウドを追うように。槍投げの槍のごとくに剣をぶん投げたのだ。

クラウドは慌ててそれを神剣で払い落とす。その間に、クラウドとの距離を詰めた晃希は、剣を持つ彼の手首に拳を落とし、クラウドの手から強制的に神剣を引き離す。

落ちていく神剣。

反射的に拾いに行こうとするクラウドの横っ面に、全力を込めた拳骨を、晃希は見舞った。……さすがに今度は踏み留まったクラウドだったが、……それが良くなかった。

晃希はこれでもかとはかりにクラウドの全身をとこと構わずタコ殴りに殴り付けた。……相手は天使である。どんなにぶん殴ろうが、打撲ごときでどうにかなることはあり得ない。

もちろん、そうと知りながら。剣を持たないクラウドの顔と言わず腹と言わず、背と言わず、殴って、殴って、殴りまくった。

殴られできた青あざも、色づいた端から消えていく。……にもかかわらず、クラウドの顔がパンパンに腫れ上がるほどに。

……無論、クラウドとて無抵抗のまま打ち据えられていたわけではない。拳の雨あられの合間を縫うように、己の拳を晃希の身体へと幾度も叩き込んでいた。

……だが。

……彼の身体は吸血鬼。打撲ごときでどうにかなることはあり得ないのは自分と同じ。……でも。

殴られる度、痛むのは……打ち据えられる身体ではなく……心。もう、崩れかけていたそれが、衝撃が加わる度、心を支える柱に脆

くもヒビが入り、ボロボロ欠片が剥がれ落ちていく。

必死に聞かない振りをして来たいくつもの言葉。心の奥底に封じ込めていたそれが、弱りきった心の壁を破って溢れ出す。

「……我の……大事な……ものの……」

どうしても、どうやっても。クラウドが、サハリエルにかなわなかった理由は……。

ガキツと鈍い音がして、晃希の拳がクラウドの顎にクリーンヒットした。

痛みに思考に火花が散った。身体がのけ反り、そこへトドメとばかりに腹を殴り飛ばされ、クラウドは神剣の後を追うように地面へ真っ逆さまに落とされる。

羽を広げ、落下スピードを緩めるも、広げた翼が枝にとられ、羽根がむしり取られる。…… おかげで地面への激突は免れたが――。

白い天使の翼は見るも無惨な状態と化した。所々血に濡れて赤く染まり、幾本か小枝が突き刺さり、羽根が抜け落ちた部分がやけに目立つ。

痛みに顔をしかめながらも、クラウドはすぐその地面に神剣が突き刺さっているのを見つけ、手にとって――抜こうと、した。

その背後で、バサリと羽音がして、艶やかで美しいままの黒い翼を持った晃希が地面へと降り立った。

「クラウド。まだ、その剣に頼るか？」

神剣の柄を握りしめながら、クラウドは、背後から投げ掛けられた問いに、ピクリと背を震わせた。

「……格闘家でもなしに、丸腰で戦いに挑もうなどと、馬鹿も良いところじゃないか。……ましてやお前相手では、どんなに殴り付けたって死にやしないのだから、尚更だ。」

自分に、言い聞かせるように。クラウドは、神剣を引き抜き、構えた。一方心の内では。握った剣が、やたらと重たく感じられて。

……晃希は、丸腰のまま。特に構えるでもなくただ立っているだけ。隙だらけな状態にも関わらず、彼は余裕たっぷりといった表情

をしている。

そんな彼の態度は、嫌でもクラウスに、サハリエルを意識させる。勝ちたかったのに。勝って、認められたかった。

兄は死んだのかもしれない。だが、その力を継いだ者ならすぐ目の前にいる。……ならば、同じ事ではないか。コイツさえ倒せば、兄を越えられる。

クラウスは、まるで無防備な晃希の心臓めがけて剣を突き出した。……たっぷりの、助走をつけて。

渾身の、一撃だった。まさか丸腰のまま隙だらけ、無防備な相手を相手に外すはずの無い、早さも正確さも申し分のない、芸術的な一撃。

神剣は、狙い変わらず、晃希の胸を突いた。刃先が食い込んだ肌から、一筋の紅が滴り落ちる。グッと、柄を握る手に手応えを掴み、クラウスは意気揚々と剣を押し込んだ。このまま、心臓を貫けばゲームセットだ。

クラウスは、一気に貫かんとし、はやる心と身体ごと剣へと乗せて、剣を押し出した。吸血鬼とはいえ、肉体自体は柔なものだ。ちよっと力を込めれば、容易く貫けてしまう。

クラウスは、勝利を確信し、崩壊しかけていた心に潤いが戻ってくるのを確かに感じたとき、その時思った――。

ググッと刃先が一センチばかり食い込んで――。

クラウスは、笑みを浮かべた。もう、瞳には刃の先しか映っていなかった。一見、絶体絶命のこの状況でまだ尚、飄々と涼しい表情を浮かべている晃希になど気付きもせず。

クラウスは、全力でもって刃を沈める。

……一瞬。パキン、と乾いた音がして。

晃希の身体を貫くはずだった刀身にヒビが入った。

クラウスが、我が目を疑う間も与えず、パンッ、と、実に軽く小気味良い音をたて、神剣は砕け散った。

「……………?!?!?!」

力の行き場を失い、バランスを崩し、晃希の胸へと倒れ込む格好となったクラウドの腹に、晃希は一分の情け容赦もなく膝を叩き込んだ。

サッカーボールのように少し身体を浮かせたクラウドの腹に、今度は拳をめり込ませ、夕焼け色に染まり始めた空へと放り上げる。

「っ、……………うっ、」

苦悶の表情を浮かべながら、クラウドは、空になった我が手を眺め、呆然とする。

「馬鹿なっ、神より賜りし剣がッ、砕け散るなど!!」

……昨日は、魔剣に押し負け折られた。折れた剣を繋ぎ合わせるのに、応急処置として、己の聖気を剣に注いだ。

そのせいで、剣の力や強度が前より落ちたのだとしても。

「柔らかな肉の身体を突いただけで砕け散るなど……………!! 何故っ!?!」

ボロボロの翼を広げ、宙から墜ちる事態を回避しつつ、クラウドは、歯軋りをした。…………いくら神剣とはいえ、あんなふうになってはもう、復活は望めない。

「さあ、もうお得意の武器はないぜ?」

夕焼け空の紅に良く映える、黒い翼を操り、再び空の上、クラウドと対峙しながら、紅い瞳で天使の蒼い瞳を捕らえて睨めつて晃希は言った。

「さあどうする、クラウド?」

「…………剣など、なくとも…………。」

クラウドは、両の手に雷を纏った。

片方の手を振りかざし。晃希へと雷を放つ。そうしておいて彼を牽制しつつ、もう一方の拳を繰り出す。

「…………ちっ、」

剣を持たない晃希は、舌打ちしつつ、舌を噛みそうな呪文を唱え、魔法で火球を生み出し、投げつける。

ダメージ等期待しない、ただ雷撃を相殺するためだけの攻撃。西

の空に赤く滲む太陽。

それを模した様な小さな火球は、晃希の狙い通り、網の目のようにスパークする雷に絡め取られる形で対し――火の粉を散らしつつ中で砕け――方々で小さな爆発を引き起こし、攻撃力を失わせていく。……しかし、バチバチと雷をまわりつかせた拳は、身体ごと避けざるを得ない。魔術を使った分、反応が遅れた。

それでも、ギリギリ避けたはずが、通り過ぎていった拳の軌跡からバチツと稲妻が走った。

放たれた稲妻は、晃希の身体を包み、ピリピリと痛みを伴う軽い麻痺を引き起こした。ビリビリ痺れる身体は、彼の動きを鈍らせる。

次に叩き込まれた雷撃のオマケつきの拳を、晃希は避けることができずにまともに食らった。……打たれたところから、文字通り電光石火の勢いで雷撃が体内を駆け巡り、晃希の内腑を灼いた。

「……っ、ぐあっ、」

サハリエルに食らった毒にも勝る痛みが晃希を襲う。……ここは、現実世界だ。食らったダメージは全て実際に晃季を痛め付ける。

初めてまともに食らわせた攻撃に、苦悶の表情を浮かべた晃季を見て、クラウスは、

「ははっ、なんだ、最初からこうしてれば良かったな。」

満足げな笑みを浮かべた。

動けない晃季を捕まえて、さっきのお返しとばかりに、殴って、殴って、殴り倒す。

……ただの打撲ならば何の事はない。だが、雷を纏った拳は、打つごとに電撃を晃季の身体に叩き込み、それが彼の身体を内部から灼いて、恐ろしい苦痛とダメージを加えた。

クラウスは、晃希にしてやられた通りに殴り飛ばして、晃希の身体を地面へと叩きつける。

痺れた身体では翼を広げることさえままならず、晃希は思いきり地面へ強く全身を打ち付けた。

息が詰まり、全身の骨が何本も砕ける音を聞いた。

……かろうじて意識を失わなかったのは、幸い土の柔らかい所へ墜ちたお陰だった。不幸中の幸いとは、こういうのを言うのだろう。

「晃希!!」

竜姫が、青い顔で駆け寄ってきた。

「馬鹿!! 何で自分から武器手放しちゃってるのよ!!」

竜姫は、晃希に意識があるのを見て少し安心したように息をついたが、すぐさま彼を怒鳴り付けた。

「……う……、ちょっと……、サハリエルとの最期の約束で……、さつき、まさに竜姫が同じ様に墜ちていく様を目の当たりにした晃希には、彼女の気持ちの痛いほど分かっていた。

「……クラウドスに。せめて自分が何してんのか位は分かせてから、……逝かせてやってくれって……。」

骨をバキバキ言わせながら、無理矢理起き上がり、晃希は言った。

「……でも、もう、そろそろいいだろう。散々水は向けてやったんだ。それでも、気づけないなら。」

晃希が投げ飛ばした剣を拾って来てくれたらしい久遠が、魔剣をくわえて駆けてくる。

「晃希……大丈夫なの?」

一応、尋ねてみるが……。聞くまでもなく、動きはぎこちないし、動く度にバキボキと全身至るところから不穏な音の聞こえる今、大丈夫であるはずはなかった。

「……晃希。」

「いい、大丈夫だ。」

「そのどこが!？」

「……ちやちやと奴を片付けられるくらいには大丈夫だ。」

「……どう見ても強がりにしか聞こえないんだけど?」

「……強がりでも何でも、やつを倒さなきゃ終わらない。」

「……晃希。」

「血は、要らない。」

「私なら大丈夫よ。」

「……さっきの台詞。そっくりそのまま返してやる。そのどこが大丈夫なんだ。青い顔しやがって。」

「っ、これはアンタが心配かけるからでしょ!？」

「……とにかく、血は要らん。」

よろめきながらも、剣を携え翼を広げた晃希の襟首を、竜姫は強引に引き倒した。

バキッと、世にも悲しい音が、徐々に暗くなり始めた山の中にこだまし、晃希はあえなく地面に張り付けられた。

「……っ、いってえ……っ、竜姫ッ、何しやがるっ、」

恨み言を吐く晃希の口を、竜姫は自分の唇で無理矢理塞いだ。晃希の口内に、血の味が広がる。驚いた晃希が竜姫を引き剥がしてみれば、唇を歯で傷つけたらしい。

「……………、分かった。」

晃希が、ついに折れた。

「直に日も沈む。……俺の全力を見せてやる。」

クルリと身体の上下を入れ換え、竜姫を自身の下へ組み敷いて晃希が言う。

「うん。」

端から見れば結構な体勢なのだが、竜姫はまるで頓着することなく、彼の言葉に素直に頷いた。

晃希は、多喜の二つ目の条件を思い、苦笑する。

腕を挿し入れ、背を少し持ち上げる。きっちり結い上げられた髪の毛の生え際、首筋をただけ、唇を寄せた。

トクトクと脈打つ頸動脈のすぐ脇へ、牙を埋め、血を啜り上げる。喉を通過し、腹へと収まった竜姫の血は、精神世界で消耗した分、魂の融合に費やした分も合わせ、全てのダメージを優しく洗い流していく。欠けた部分を、補いながら。

竜姫の血に導かれるように。まだまどろみの中にあった力も目覚めだす。

晃希が竜姫を解放した直後。

――山が、鳴動した……。――

運命の、『わかれ』導（みち）。

その気配に、誠人は身体が震え出すのを止めることができなかった。

太陽は、すでに半分以上山の向こうへとその身を沈め、東の空にはちらほらと星が、瞬き始めている。

山の中、陽の恵みは急速に途絶え、辺りの空気は急激に温度を下げている――が、この震えは、そんな寒さによるものではなかった。何もかもを圧倒して押し退け、我が物顔で全てを蹂躪していく。そんな、途方もない気配。

目に見える形などありはしないものだというのに、感じる重たいプレッシャーは、昨日クラウドから向けられたもの等とは比ぶべくもない。

押し潰されそうな程の質量を有したそれに、何の力も持たない誠人は、ただ震えているしかなかった。

……その、凄まじい気配を発している張本人が、竜姫を抱えてこちらへやって来る。後ろに九尾の狐を連れて。

剣を探しに行った久遠に代わり、付き添いに残っていた稲穂が、彼から竜姫を受け取る。

――クラウドが言っていた、何としてでも倒したい『魔物』。空の上で、天使を相手に、人ならざる黒い翼を持ち、戦っていた彼。

久遠は彼を『守護者』と称^よんだ。実際彼は竜姫を救った。

誠人の前で彼は『狛犬』となり、今、社に仇なす敵として、あの天使を廃そうとしている。

……もし。今後彼の居る前で、竜姫に、三日前に彼女に投げつけた言葉を再び口にしようものなら――。……恐ろしすぎる。誠人は事態が落ち着き次第ただちに、あの日、竜姫に頼まれた任務を火急の速やかに、かつ確実に遂行することを心に決めた。

が、晃希を含めた誰一人、この状況下で誠人に注意を向ける者は

なく、

「稲穂様。竜姫をお願いします。」

と、纏う気配の質からは思いもかけない程の丁寧さで頭を下げる晃希に、誠人は目を丸くした。

……自ら血を与え、力を与えた小娘、と。クラウドは言った。その言葉通り、彼女は戦いに傷付いた彼に、迷いも躊躇ためらいもなく、己の血を差し出し、これほどの力を引き出させた。

その彼女を見る彼の目は、彼を包む凶悪なほどの空気を一瞬忘れそうになるほど暖かく、優しい紅い瞳をしていた。

あの日、自分から制服一式を奪っていった時に見たものとは、まるで別物。

あれだけ顔の良い男にあんな顔をされたら、女性どころか男だってついホロツとほだされてしまいそうだ。

……野郎相手にドキドキ高鳴る自分の心臓に、誠人は、単なる気の迷いだと思いたかったが――。

「いや。これは、あれだ。吊り橋上の恋とか、そういうやつだ。」

そう、きつとそうなのだ。本当はこの恐ろしいプレッシャーに胸が高鳴っているだけで。そう、従妹のキスシーンだとかを垣間見ちゃって、ちよつと落ち着かない気分なだけ。

誠人は、そう自分に言い聞かせつつ、

「俺ですらまだなのに……。」

……と、少し焦点のズレた事柄に軽くショックも受けていた。

だが、現実には、そんな平和な思考を許すほどの余裕は皆無だった。

晃希が甘い表情を見せたのは、稲穂に竜姫を預けるまでのほんの僅かな間だけ。

彼は、竜姫を稲穂に預けると、すぐさま踵を返し、空へと――戦いへと――翼を広げ、飛んでいく。

久遠から自分の剣を、受け取って。そうして、再び誠人の手の及ばぬ場所へと向かう、その背を、竜姫は稲穂の腕の中から誇らしげな表情で見送る。

稲穂も、若干苦笑しながらも、暖かな瞳で二人を交互に眺めやり、激しく複雑に表情を歪める久遠の腹を容赦なく蹴っ飛ばす。

きゅーん、と、悲しげな呻きをあげ、金色の瞳を涙に潤ませる久遠。

「久遠。いい加減腹を決めな。……彼が、狎犬として成ったということは。――分かつているだろう？、多喜様の出した二つの条件を飲んだということだ。……姫も。もちろん、分かっているね？」

稲穂の問いに、竜姫は無言で頷いた。

「……それだけの決意を持って、彼はこの社に仕える導を――竜姫と共に生きる導を――選んだんだ。それを、つまらない嫉妬で砂をぶつけるような真似をして、踏みにじるような事は、この稲穂様が許さん。」

キッパリ言つてのける。

「わ、分かつてるよう……。」

九本の尾っぽを股の間に挟み込みつつ、久遠が答えた。

……誠人には、会話の意味の半分も理解できない。

空の上の戦いよりは近い場所で、手も届きそうなのに……。実際は、大分遠い。――おそらくそれは、長らくこの事実を直視せず、目を逸らしたまま、彼女を傷つけてきた分、開いた距離、なのだろう。

誠人は、もうあらかた闇に染まった空を見上げた。……あの天使は。まだ。……気づいていないのだろう。気づかないままに……。いや、気づこうともしないまま、醜態を晒している。

「……俺は……。ああはなりたくない……。」

きっと竜姫たちから見れば、今までの自分も、あれと五十歩百歩だったに違いない。

……誰も、理解者の居ないあの学園で。彼女が出会った彼。詳しい事情は分からないけれど。竜姫が彼に味方した理由が、ぼんやりながらも、分かったような気がする。

「……あの天使を倒したら……。きっと次の敵は俺と……家……な

んだろうな……。」

社を継ぐのは馬鹿なことだと言った自分と、ずっとそう思い続けてきた自分の母親。自分の常識を信じて疑わない者に、非常識な真実を認めさせること。

「……難しいな。」

身に覚えがある分、余計にそう思う。でも、自分はもう、知ってしまったから。……知ってしまった以上は。

元より責任感も強く、真面目な性格の誠人だ。生徒会長として得、積み重ねてきた信頼は伊達じゃない。

知らない振りをして、放り出す事など、彼には出来なかった。

「……あの。」

まだドキドキする心臓を、理性でねじ伏せ、誠人は前に立ち並ぶ彼らに声をかけた。

「あの、お願いが……あるんですけど……。」

その声に、三者三様の表情がこちらを振り返る。

「……ん、どうした？」

稲穂が尋ね返した。

「俺に、もっと詳しい事情を、教えていただけませんか……？」

刃の向かう、その先は……。

その瞬間、彼は戦慄を覚えた。

自分の攻撃に為す術もなく、無様に墜ちていった魔物に、胸のすくような想いだった。

散々、不愉快な戯れ言を吐いてはいたが……。所詮、この程度。

……神剣は……砕け散ったけれど。

だが、そんな物に頼らなくとも、自分はやれる。

——そんな自信が持てたことに気持ちが高揚する。墜ちたまま、何の反応もないことが、さらにクラウドを調子に乗せた。

「……これは……もしや……やったのか?……」

まさかあの一撃で倒せるなどとは露ほども思っていなかったのだ。もしそうなら……。

クラウドは、卑屈を絵に描いたような笑みを浮かべつつ、意気揚々と彼の様子を確かめに地上へ降りようと、翼をはばたかせた、まさにその時。

辺りを囲む山々が、突如顕れた恐るべき力と共鳴するかのように

——鳴動、……した。

そこに在るのは、ただ、力の気配、それだけ。他に何がある訳でもない……ただ、感覚的な『畏れ』を強制的に感情へ叩き込まれる——そんな視えない何かに——クラウドは、囚われたようにその場から動けなくなった。

……断じて、先程の様に魔術にはめられた訳ではない。これは——術などと高尚な形をとる以前の、ただ漠然と在るだけの力。本当に、ただそれだけのものなのに……。何だ、このデタラメ通り越して無茶苦茶もノンストップに通過した、もう反則じみた力は……!?!? 驚愕するクラウドの前に。

「……よう、クラウド。」

さつき散々のして叩き墜としたはずの紅い瞳の魔物が、悠々と剣

を構えて立った。……その仕草は、ついさつき見た。……見たはず、の、仕草が、今はまるで違って見えた。

木に引っかけた翼は痕もなく、夜闇の迫るなかでも艶やかにその存在感をアピールしているし、暗がりにも白く浮かぶ肌は傷一つない。……瞳は。闇を歓迎するように、爛々と紅く燃え。

そして。あの、恐ろしい気配をその身にまとい、魔力の気配に満ち充ちた剣を構える様は――。

ストーン、と。それを見たクラウスの顔から表情が剥がれ落ちた。

「……悪いが、時間切れだ。今度こそ本気で前を殺す。もう、容赦はしない。」

紛れもない、殺気。

クラウス以上に凍てついた表情が、彼の本気を物語る。

そして、前触れもなく、鋭敏に研ぎ澄ませた攻撃――相手を確実に殺すための攻撃――を剣にのせ、晃希は目にも止まらぬ速さで空を翔けた。

……クラウスの理性は、もう敵わないことを――敗北を――すぐに悟った。……たとえこの一撃をかわせたとしても、もう、運命から逃れる術はないのだと。

けれど、クラウスの感情は『生』と『勝利』にしがみついた。間一髪、ギリギリで攻撃を避けつつ、クラウスは雷パンチを繰り出した。

「食らえ！ 痺れて、墜ちろ！！」

このタイミングでは、打撃が間に合わないことは承知の上での攻撃だ。真に当たたいのは拳ではなく、それに纏わせた雷撃だ。

光速で飛ぶ雷撃を背後から飛ばされれば、避けようがない。少しでも掠めさえすれば効果の見込める攻撃。……一撃必殺でないけれど、確実にダメージを与えられたその攻撃を。

だから、クラウスは目を見開いて驚いた。

確かに飛んだ雷撃を、後ろを振り返りもせず、翼で払っただけで弾き返したのだから。

「……!？　っ、ばっ馬鹿な!？」

……翼とはいえ、あれだって生身の身体の一部なのだ。雷に触れれば感電するはず。

しかし、「何故」と考える間もなく、跳ね返された雷撃が我が身を襲う。咄嗟に翼で庇う……が、羽根はともかくも、血の通う、翼を支える軸に痺れが走り、身体が傾^{かし}いだ。

地上を背に夜空を仰いだクラウドの胸に、魔剣が降る。クラウドの視界を覆うように飛びながら、晃希が魔剣を突き出す。

——クラウドの手に、もう神剣はない。クラウドは、もう一振りの剣を宙空から取り出し、その刀身で重たい攻撃を受け止めた。

「……聖剣、か。」

それは、全ての天使が生まれ持つてより神から授かりし力。神から貰った借り物の力ではなく、己の持てる力を具現化した、真実自分の剣だ。

クラウドは、晃希の魔剣を払い退け、彼の下から逃れ出る。……衝撃波でも叩きつけて、間合いを稼ぎたいところだが……この、自分の聖剣に、そんな便利な小技を繰り出せる機能はない。

ただ、斬り合うしかできないつまらない剣。クラウドはそう嫌って……神剣を賜って以来、一度として抜いたことはなかった。

が、神剣を失った今、クラウドに残された武器はこれだけ。……かなり心許ないが——。

「……まあ、無いよりはマシだろう……。――」

クラウドは、キンキンカンカンと激しく魔剣と刀身をぶつけ合いながら思う。

それにしても。こっちは受けるだけで精一杯で、防戦一方なのに……。晃希の方は余裕顔。息一つ乱さず、汗の一滴すらなく淡々と、一歩避け損ねればあの世行きな攻撃を恐ろしいスピードで繰り出してくる……。

突いて、払って。……攻撃パターンは竜姫とまるきり一緒。……サハリエルの剣筋そのものの攻撃。それを越えるスピードとパワー。

……受け止めることを許された攻撃は、二割程度に過ぎなかった。クラウドの白い衣も、真白い翼も、みるみる間に血の赤に染まってく。

……感情が、どんなに勝利に執着しようとも。目の前で、こうもはっきりその力の差をさらけ出されては……さすがのクラウドにももう、反論の術を見出だせなかった。

「何故……、同じ卵から生まれたのに……、こんなにも違う……？」

「俺は、晃希だ。サハリエルじゃない。その答えを持つ者の一人はもういない。もう一人はお前だ、クラウド。その答えはお前の中にある。」

動揺するクラウドの呟きに、晃希は攻撃の手を僅かに緩めて言った。「だが……一つ、教えてやろう。俺から見たお前とあいつの違い。」

あいつは、お前と違って自分を客観的に見られる力を持っていた。」

「自分を……客観……的……に？」

「そうだ。全てを神に委ねていたお前と違い、自分の頭で考え行動し、それを振り返って反省することが出来た。」

人間より余程頑丈な天使の身体は、無数に突かれ、切り裂かれ、身体が血に染まりきってもまだ、生きていた。

白い衣は血を吸い尽くして重みを増し、ベツタリ身体に貼りついている。……吸いきれなくなった血が、ボタボタと地上へ降り注ぐ。

片や晃希と言えば、服こそ裂けたりほつれたりとボロボロだが、たまに掠める刃が傷をつけるも、すぐ治り、ダメージには至っていない……どころか、剣が彼に傷をつける度、彼から発せられる力の波に削られて、刃に刃やいばこぼれが生じる。それはもう、……まるで、発泡スチロールをヤスリで磨いているかのようにポロポロと。

面白いくらいに、自分の力が、彼の力によって削ぎ取られていく。

「我……は……、」

当然だろう。具現しているのはクラウドの力。そして自分はそれをつまらない力だと卑下してきたのだ。

周りから嘲笑ばかりを浴びせられ、クラウドは耳を塞ぎ、心を閉

ざした。唯一認めてくださった神を絶対と信じ、それを縁に己の心を守った。……けれど、知らず知らずのうちに彼は、自分で自分を認められなくなっていった。……兄との差を認めざるを得なくなった、その時から。

……虚ろな心を誤魔化すため、必死に虚勢を張って。空回りして。「……それではまるで……道化のようではないか……。」

血に汚れたクラウスの頬を、透明な滴が滴り落ちた。

「……今頃気づいたか？」

晃希は口許に笑みを滲ませながらも、冷徹な瞳でクラウスを睨み付けた。

「道化……、は……」

そうだ。それは悪魔の性である。

「我……は……天使……で……」

クラウスは、もう剣を振るう気も起きないといった表情のまま呟き、色を無くした。実際、剣を持った手を力なく下ろしたまま、構えようとすらしめない。

……空から、太陽の気配が完全に消えた。眼下の町に明かりが点り、夜空の星も息を吹き返したようにチカチカ瞬き始める。

……夜は、魔物の時間。もう、こうなってはクラウスには万に一つの打開策も残されてはいなかった。

晃希は、自分の宣言通り、動揺に揺れるクラウスにも容赦なく、トドメの一撃を心臓へ叩き込むべく、予備動作へ移る。剣をいっばいまで引き、そこから一気に突いて、心臓を抉る――。

一連の動作を頭でイメージしつつ、それを実行に移していく過程で、晃希は、見た。

チカチカ瞬く星の中。田舎で、街頭もまばら。真に迫る暗闇に光る沢山の、砂粒みたいな六等星まで道具なしに見える、天然プラネタリウム。

無数の星の、その中の一つが、異様な光を放つのを。

あの星の名は、「ルード」も知っていた。

あれは――。

しかし。

晃希が、その名を記憶の中から引き出してくる前に、その衝撃的な出来事は起こった。

「う……っ!？」

とすつ、と。やけに軽い音がして。次いで、クラウドが小さく呻いた。一瞬の後、辺りに血の豪雨が降り注いだ。

「……なっ!？」

クラウドの身体を貫く、一本の巨大な矢。……その矢には、見覚えがあった。これは、「サハリエル」の記憶。そうだ。あの星の名は……。

「……宵の、明星……」

晃希の呟きに、クラウドの身体がピクリと僅かに反応する。

その頭上へ、今沈んだばかりの太陽が天頂へ舞い戻ったかのような光が降ってきた。……かの天使が司るのは……太陽。

「……嘘……だろ？」

晃希は息を飲んだ。

稲穂は、

「こりゃ……、」

呟きながら、継ぐ言葉に詰まったまま、黙り込んだ。

久遠はぺたんと地面に尻をつけ、腰を抜かした。

誠人は、この事態をキリスト教信者として喜ぶべきか、昨夜のクラウドの所業に苦情を申し入れるか、一瞬迷ったが、取りあえず静観を決め込むことにした。

そして、竜姫は。

心配そうな表情で晃希を見上げるも、じっと、目を逸らす事なく、事態のなり行きを見守る。

彼を、信じて――。

ミカエルの審判

のどかな田舎町——日本の——それも神社——。時刻は、五時を少し回った頃。これ程そぐわないシチュエーションも無いだろう。著名な宗教画家が見れば、モデルに対しあまりにミスマッチな背景に目眩を起したかもしれない。

スポットライトのように天から降り注ぐ光の中、それより眩しい六枚の羽を有した天使が空から降りてくる。

決して、柔らかくない光をまともに浴びるクラウドは、手足の指一つ動かせない身体をブルブル震わせ、光を失いつつある瞳を見開いた。

ぱさりと優雅な仕草でクラウドの前に立つその姿の神々しさたるや、クラウドなど月とスッポンにも及ばない。

無条件にひざまづき、頭を垂れたくなる。

晃希は、腹に力を込め、精神力の全てをつぎ込み、かの天使を正面から睨み付けた。

「……我が名はミカエル。天の玉座の右に座するものである。」

天使は名乗った。笑みを浮かべるでもなく、淡々とした表情で。無論、頭など下げはしない。

「……何をしに来た。」

晃希の、低く問う声に、

「……この不甲斐ない天使を回収しに。」

表情同様、淡々とした声で天使は答えた。

……今まで散々、ギャンギャンうるさく吠えるクラウドと相對してきただけに、この応対の仕方に、「好感」でも「不快」でもない、何か物足りない印象を受けた。

……だが、相手は「宵の明星」なのだ。

クラウドみたいな下っ端相手ならばともかく、もし「彼」を下手に怒らせれば、「創造主」との全面抗争になりかねない。

……しくじる訳には、いかなかった。晃希はすべての記憶を総動員して頭をフル回転させる。

——クラウドスを回収……ということとは、あれを引き取ってくれると言うことか……？

と、

「——大天使クラウドス。」

ミカエルは、あっさりこちらへ背を向け、クラウドスに向き直った。一見、無防備な背が晒されているようだが……。

「……あの明けの明星をぶん殴ったってだけはあるな、やっば。」
晃希は、ヤケクソで笑みを浮かべながら、

「……まるで隙がない。」

半ば諦め混じりのため息と共に苦い表情でこぼした。

「まさか……そんな雑用に、まさかわざわざあんな大物が出張ってくる訳がない。大天使相手なら……権天使か、良くて能天使あたりが遣わされて来るのが普通だろ……。」

身体がジトツと汗ばんでくる。

「三百年前、俺を『封印』しに来たのは……中級三隊の天使達……だ……。」

今度は、確実に仕留める為に——。そう考えるのが妥当だろう……。だが……。

「ミ……カエ……！」

「大天使クラウドス。貴方を墮天の罪により、このミカエルが肅正致します。」

詰まった喉から絞り出すように、クラウドスが呟くのを遮り、死刑宣告を告げた。

ミカエルは、腰に携えた剣を——クラウドスの神剣とそっくり同じ剣を——鞘から抜き放った。

その無駄のない動作。刀身から溢れ出す神気の総量は、しかしそれとは別物。

同じでありながら、まるで違う。それを目の前で見せつけられ、

クラウドスは己の器をようやく自覚した。

……もう、何もかも遅すぎたが。

振り上げられた刀身から、創世の光が放たれる。光は、クラウドへと向けられる。

……光から創られ、光を糧とする天使。光の中、クラウドの傷はたちどころに癒され――は、しなかった。光は、癒しを与えるどころか逆に、クラウドの身体を灼き尽くしにかかった。……過ぎたる力は破滅の元である。

「グッ、ア、アアアアアアアッ!!!!」

クラウドの絶叫が辺りにこだまする。クラウドの身体が白く白く光り輝き、あまりの眩しさに直視できなくなる。

一人、ミカエルだけが淡々と、その姿を見届ける。クラウドの身体が真実光と化し、夜空に溶けて、消えていくのを。

……カタチを失くしたクラウドの胸から、矢がこぼれ落ちた。矢尻を下に落下し、地面に突き刺さる。

晃希は、眩む目を手で庇いながら、かつての仇敵が余りにあっけなく消される様を、複雑な思いで見つめていた。

……どうにもすすきりしない感情が、心の中にしこりを残す。けれど今は、感傷に浸ってられる状況ではなかった。

クラウドの、最後の一欠片まで見送ったミカエルが、改めてこちらへ振り返り、刃を向けた。

「……やっぱり本命は俺の命か？」

ダラダラ冷や汗が全身を伝い、心臓は激しく鼓動する。それを、無理矢理内に押し込め、理性と勇気と精神力をかき集めて蓋をして。

晃希は、何食わぬ表情を取り繕って言った。

「……目的は、俺だけか？」

クラウドは、自分だけでなく、久遠や竜姫までも殺そうとしていた。

「確かにあんたらの教義からすれば邪道なんだろうが……ここは、日本だ。」

ここでは、彼らこそが神なのだ。

「……俺はともかく、彼らは自分達の庭を荒らしに來た余所者を排除しただけだ。」

晃希は、竜姫達を庇おうと言い繕ってみるが、まるで微動だにしない彼の表情から何かを読み取るのは不可能だった。

晃希は、無駄と知りつつも、ギリギリとつい剣を握る手に力が籠ってしまふ。

「……神に従わぬ人の子の罪を裁くは私の仕事にあらず。最期の審判にて、神の定めし運命を授けることが我に与えられし使命。」
ミカエルは言った。

「……我に与えられしもう一つの使命は大天使の指導者。よって、神の命も果たせず罪を犯した天使の肅正を行った。が、我に、墮天使討伐の命は下されてはいない。我が兄を除いては……な。」

「なら……見逃してくれんのか？」

「……お前が、神の創りし人の子に害を為さん限りは。……だが、既に犯した罪は重い。それに伴う罰は受けて貰うが……命までは奪らん。もちろん次に少しでも間違いを起こしたなら、天は即刻、お前を消し去る決定を下すであろう。」

晃希は呆気にとられ、思わず剣を下ろした。

“「正義」と「慈愛」の天使”の称号もまた、伊達ではないということか……。

「お前に、天より罰を与えよう……。」

ミカエルは、スツと手をかざし、天から降ってきた一つの光の珠を受け止め、言った。

「！ それは……！？」

晃希は、それを見て目を見張った。そこにあるのは……

「これは、大天使クラウドの御霊。」

そう、悪魔の眼を持つ晃希には言われるまでもなく分かっていた。

「……！？ 今ッ、消されたはずじゃ……！？」

確かに、クラウドの霊体が光となって消えるのをこの瞳で見たのに

……？

「ええ、クラウドは一度光となって天へ還りました。……しかし、神のご意向で再び掬い上げられたのです。」

「……まさか、罰とは……、」

「一度浄化されたとはいえ、このまま天へ迎え入れることはできません。」

「……俺に、それを……引き取れ……と……？」

晃希は、目眩がするのを必死に堪えながら訊いた。

「……扱いについて、天は関与致しません。好きにお使いなさい。」

今まで一切動かなかった表情に、「天使の微笑」を浮かべたミカエルが言う。

「な……！！？　な……！！　な……、」

二の句の継げない晃希に、ミカエルはクラウドの魂を爪弾いた。

光の珠は放物線を描いて晃希の手元へ落ちる。

ミカエルは、有無を言わせぬ「天使の微笑」を浮かべたまま、その場からフツと消えた。

……天へ、戻ったのだ。

晃希は、押し付けられたそれを見下ろしながら、

「マジかよ……、」

竜姫達にどう説明したものかと、頭を抱えた。

一難去って、また一難……。

「はああアッ!？」

……これが、全ての事情を聞き終えた竜姫の第一声であった。

「何それッ? それってつまり、ていのいい厄介払いじゃないの!」

一同、社の道場の中、皆が並んで座るのに十分なサイズの円卓が置かれ、竜姫、稲穂、久遠、晃希、誠人がそれを囲む。

昨夜から何も口にしていない誠人の前には、晃希が用意したオートミールが置かれ、クラウスの魂は、卓の中心で、ふわふわと無責任に浮かんでいる。

誠人は、粥を吸いながらグルリとそれぞれの表情をうかがった。

向かいに座る稲穂は、どうしたものかと苦笑いしながら手にした杯から酒をあおっている……し、久遠も苦虫でも噛み潰したかのような洩面を浮かべている。竜姫も、稲穂の前に酒のつまみとして並べられたウィンナソーセージに刺さった爪楊枝とクラウスの魂とを見比べるその顔には、「ハリネズミにしてやりたい」と書かれているし。説明していた晃希もうんざりといった表情を浮かべている。

「……聖気を根こそぎ持ってかれてるからな、今のこいつは『人型』を保つことも出来ない。」

「――本音としては、箱詰めにして物置の一番奥の奥に押し込めておきたいんだけど……。」

ほこほこと湯気をたてる具たくさんシチューをつつきながら、竜姫は言った。

……これも、晃希が用意したものだ。少し味が薄い気もするが――。

「俺もそうしたい……が、そうもいかない。聖気の足りない魂は、外からそれを補おうとする。その時、外の雑多な気……特に邪気の類いに当てられちまうと……」

竜姫は、察して彼の言葉を継ぎ、

「神竜の魂の話と同じ理屈で、ただでさえ厄介なのが更に厄介にな

「っちゃうって訳ね？」

二人してため息をつき合った。

「……では、どうすればいい？」

稲穂が、視線を晃希に投げた。悪魔の記憶を継ぎ、多喜の記憶をも有した彼が、今この席では一番の知識人となっていた。

「幾つか案はあるが……。」

晃希は苦い表情のまま答える。

「一つは……俺が、サハリエルの魂同様、取り込んで、俺の魂と同化させる。」

久遠が、座り心地悪そうにモゾモゾ身体を揺すりながら、晃希に同情の瞳を向けた。

「二つ目……は……、」

晃希は一つ目以上に言い辛そうに口ごもりながらも、

「……ミカエルは浄化したとか言ってたが、天に見放された以上、こいつは墮天使——つまりは悪魔だ。俺の魔力を注げばすぐにでも復活する。だが、野放しには出来ない。首輪がいる。」

胸元の鈴をつまみ上げて見せながら言った。

「ええっ！？ まさかこいつを二匹目の狛犬にするの!？」

「……嫌なのは分かる。俺だってヤだ。だが、狛犬にすれば一応魂は社に縛られるし、神である竜姫や久遠、稲穂様の命令にも拘束力が働く。それに、……悪魔として格上の俺の魔力で復活したならこいつは俺の眷属——いわゆる下僕ってやつだから……俺の命令は絶対になる。」

稲穂が、笑みをひきつらせた。

「そして最後、三つ目。……学園の、俺が封印されてたあの旧礼拝堂に今度は、コイツを封印する。」

竜姫は、晃希の表情を窺いながら、

「何か、どれも晃希に酷過ぎない？」

そう尋ねた。

「まあ、俺への罰って名目だからな。」

「……晃希は、二つ目を採用したいんでしょう？」

「ああ。」

「え！？ 何で??」

誠人は驚いて尋ねた。

事情も良く知らないまま口を挟むのはどうかと思って、今まで黙って聞いていたが……。

「一番厄介そうなの？」

……キリスト教信者としては心苦しいが、あの天使に関しては誠人もかわり合いになりたくないと思う。

だが、一番被害を受けたであろう二人が、一番クラウドス側に有利な選択肢を選ぶとは……？

「だってそうだろ？ 封印してしまえばそれで厄介事は片付く訳だ。……魂の同化ってのは今いちピンと来ないが……、」

それでも、わざわざ復活させて余計な厄介事を背負い込むよりはマシなように思える。

「……晃希、稲穂。彼に事情話しちゃっても良い？」

「もうこれだけ色々見ちまつてるんだ、今さらだろう？」

「そうだねえ。知りたがっていたし……いいだろう。」

竜姫は、二人の承認を得た上で、

「あのね、誠人くん……。」

と、詳しい事情を話して聞かせる。

竜姫の両親が死んだ本当の理由。自分の宿命。晃希の事情。そして、今回の騒動についても。全て事細かに説明し、

「彼は、三百年封印されてる間中ずっと苦しみ続けていたの。」

と、竜姫は言った。

だから、『封印』という手段を選びたくないのだと。

誠人は、隣に座る彼を見ながら、自分の耳を疑った。

……村を潰し、親しい人々を殺した張本人を取り込みたくないのは分かった。——それはそうだろう。いくら力が増えるとはいえ、殺した側のリアルな記憶がセットでは……。

しかし……。

普通、酷い目に合わされたなら、相手も同じ目に合わせたいと思うだろう。その相手が仇敵だというなら尚更に。

それを、「自分がされて嫌なことは他人にしちゃいけません」と――小さな子供の駄文句じゃないが、人間ができ過ぎている様に思える。

「まあな。竜姫に会う前の俺ならまずそんなこと言わなかっただろうが……。ここ何日かで色々悟っちまったからなあ。」

そういう彼に、先程までの強大な力の気配は今は皆無。羽根もしまっている今、赤い瞳がなければ彼が人外などとは思えない。まあ、顔の造作に関しては……人間離れしているが……。

こうして見ると、クラウドのが余程邪悪だった気がする。

「ああ……、そうだ。お前にゃ謝んなきゃだったな……。悪かったな、あの日……。面倒ごとに巻き込んで……。」

ポリポリと決まり悪そうに頭をかきながら、晃希はペコリと頭を下げた。

謝られた誠人は、慌てた。

確かに、あの日は災難だったが、今それを謝られてしまったら、あの後自分が竜姫に対しやったこと全てをも今、謝らねばならなくなる。自分が間違ったことをしでかした自覚はあるが、今はまだその時ではない。

「……じゃあ……やっぱり復活させるんだ……。コレ……?」

誠人の言葉に一同の表情が一様にしかめられた。

「……明日。」

そうポツリと溢した晃希が、

「今日はもう色々ありすぎた。体力も精神力も何もかももう限界だ。これからクラウドの相手をするのは無理!!」

キッパリ宣言した。

「今日はもうメシ食って寝ようぜ!!」

その言葉に皆が一斉にうなずいた。

「でもこれ……ほっといて大丈夫？」

不安げに久遠が尋ねた。

「二、三日位なら俺の魔術で現状のまま留めておける。」

晃希は、牙で自分の右手人差し指の腹を傷つけて出した血で、さらさらと円卓に複雑怪奇な紋様を描き出し、左手で、卓に魂を押し付ける――と、血の赤黒い線が光を放ち、魔方陣から光の触手が伸び、クラウドの魂を拘束した。

「これでよし。さっ、とっとと休もうぜ。……血を吸ったばっかだけど……、さすがに今日はもう疲れた……。」

と、座布団を枕に横たわり、そのまま眠ってしまいそうな晃希に、
「ちよつと、ちゃんと部屋と布団用意してあげるから！」

竜姫が急いで立ち上がりとして立ちくらみを起こした。いつ背後へ回ったのか、誠人の目には留まらぬ早業でフラフラと倒れ込む身体を抱き止め、

「……俺がやる。場所だけ教えろ。」

と、有無を言わず抱えあげる。そして、

「……お前も来い。やり方教えろ。」

と。

「さて。じゃあアタシは風呂でも沸かしてこよう。山の上だ、夜は冷え込むからね……。」

稲穂が、ニヤリと何か企んでいそうな笑みを浮かべて立ち上がった。
「沸いたら。姫、先に入んな。」

と、竜姫に声をかけつつ、晃希の背をポンと軽く叩いて部屋を出ていった。

「……、……。」

さっきの説明。誠人に言わなかったことが、一つだけあった。

「？」

一瞬、不自然に固まった二人に、誠人が不思議そうな表情をする。

「……竜姫、後で話がある。」

晃希は、誠人の耳を気にして小声でそう告げた。

「……うん。」

話の内容に察しがつく分、竜姫は目を泳がせながら答える。
今日はまだ、……終わっていないのだ――。

一時の休息・交錯する思い

平屋建ての古風な日本風家屋。和室が二部屋、畳敷の居間が一部屋。台所・風呂・トイレが一つずつ。――シンプルな間取り。

誠人は両親が寝室に使っていた部屋へ通した。稲穂や久遠は神だ。彼らはそれぞれ自分の社を持っている。

「……だからって、いいのか？」

風呂上がりで暖まった身体を冷やさぬよう毛布を肩からはおりながら、晃希が微妙な表情をする。

八畳間の部屋に、布団が二つ。

「……今さっき事情を知ったばかりの誠人くんとアンタを、一つの部屋に二人きりで押し込めるわけにいかないもの。誠人くん、ただでさえクラウドス被害でまいつているのに……。」

「……話が、あるんでしょ？」

誠人の前では言えなかった話。

「ああ。多喜様の、二つ目の条件……。」

「うん、稲穂経由で話は聞いている。」

緊張や照れからか、少し視線を泳がせながら竜姫は言った。

「……今はまだ、無理だけど。あの先生のセリフは、ムカつくけど、事実だから。今の私じゃ責任とか何とかどうともできない事が多すぎるから。」

「分かってるよ、まだ先の話だ。」

軽いため息をつきながら、晃希は、竜姫の額にデコピンを食らわせた。

「イタッ！？ 何すんの……！」

「先の話ではあるが、リスクの大きい話だ。……最悪、生まれた子を俺達の手で封印しなきゃならないかもしれない。その、覚悟はあるか？」

実際の行為に対する覚悟なんか、今はいらない。そんなのは後か

らでどうとでもなる。

大切なのは――。

「何があっても、私は受け止めるよ。今はまだ、人間だし、未熟だけれど……。私も一応神でもあるのよ。」

泳がせていた瞳を、晃希の視線に合わせ、竜姫は言った。

「……そうだな。」

「……それに。」

眉間にシワを寄せ、こめかみを指でグリグリ揉みながら、

「クラウドを、ウチで養う苦勞を思えば、そんなの些細な問題に過ぎないじゃない。それに関しちゃ、杞憂に終わる可能性だって多々あるんだもの。でも、こっちは逃れられない日常の現実なのよ？」と、しかめっ面をする。

「……そうだな。」

目を逸らし、

「なあ竜姫。せめて今晩位、現実を忘れてとっと寝ないか？」

ヒクリと、口元をひきつらせながらの晃希の提案に、

「……そうね。そうしましょう。」

竜姫も素直にうなずいた。

「あ、言うの遅くなったけど……。」

さっさと布団へ入ろうとしていた竜姫の顎に手を添え、

「……これから。永遠に近い日々を共に過ごす我が主に。絶対の忠誠と……そして、変わらぬ愛を……。」

優しく口付けた。

――その頃隣室では。

「……神……か……。」

明かりを消した部屋。布団の中、ぬくぬく暖かにゴロゴロしながら、聞かされた途方もない話に、どう反応したものか、誠人は解らぬまま瞑目した。

「本当に……俺の常識なんて……世界の一部分しか見てなかったんだな……。」

昨日今日とたった二日で、一生分にも余る体験をした。そのどれ一つとして、自分の常識内に収まるものはなかったのだ。

今までずっと信じてきたはずの『神』でさえ。その、一番有名な御使いをこの瞳に収めたなどと三日前の自分に言ったとして……恐らく自分は鼻で笑ったに違いない。

「……もしもし、母さん？」

誠人は、自宅と繋いだケータイに話しかけた。

「俺……誠人だけど。ちよっと、話があるんだ……。」

そして、山の上では――。

「静かだねえ……。」

月見酒を楽しみながら、稲穂が、一帯の山々を見渡しながら言った。「満月ではないが……中々に良い夜だ。いつもならもうちっと騒がしいのに。」

「そりゃあ……。あれだけの力を解放して――あんなだけの勢いで脅せば……。先百年は間違はなくアイツにケンカふっかけようなんてバカはあらわれないよ。」

全く、彼の力は分かっているつもりで覚悟をしていたのに。思っていた境界線を、いともたやすく踏み越えた力に、全身の毛が逆立った。

「あれはねえ……。アタシでさえ背筋が寒くなったよ。心底、彼が味方で良かったと感謝した。あれが敵に回っていたなら……豊生神宮に未来は無^{あす}かったろうね――。」

さて、と。稲穂が立ち上がる。

「明日の宴に、何か獣を仕留めて来よう。久遠、お前ここ片付けとけ。」

昨夜、一晚中駆け通した久遠と違い、稲穂は晃希が来るまでの時間稼ぎに竜姫の戦いをサポートしていただけ。

神である彼女の身体は既に充分すぎるほど回復していた。

身軽く崖を飛び降りて行く彼女を見送り――。

「……明日から……クラウドも加わるのか……。」

そうなれば、百年と言わず、千年は安泰な気がする。

「僕達は……安泰どころか波乱万丈の毎日になりそうだけど……。」

あんなのに守られるなんて、悪夢だとしか思えない。でもまあ、自分は神だ。アイツが狛犬となるならば、立場は自分の方が上なのだ。

「……心から、同情するよ……晃希……。」

明かりの消えた家屋を見下ろしながら、久遠は呟いた。

「――戻ったか。」

白一色の世界。光に満ちたその空間で、一際光輝く玉座の前に、ミカエルが跪いた。

辺りには、ミカエルとも並び立てる高位の天使が奏でる神を讃える言の葉を唱う、美しい声が響く。

その中を、そのどれとして敵うことのない、至上の声がミカエルを迎えた。

「我らが主よ……。」

「あれらの処分、そなたに一任したが……。さて、ミカエルよ。アダムとイブ、その子孫たる人の子の『弁護者』たるそなたはどんな裁定を下した？」

「……大天使クラウドスは死罪とし、既に光に還して御座います。また、墮天使サハリエルにつきましても、あれを使い魔に陥とした魔女共々、邪教を祀る神殿ごと、封じて参りました。」

天使は、嘘をつけない。全ての天使の心は繋がっている。誰かが嘘をついたとて、すぐにそれは仲間の天使は察することができる。

……自分より高位の天使の心まではさすがに覗けないが。ミカエルは最高位の天使だが、まさか全知全能である神の前に、隠せるものなどない。

もちろん、それと知った上で彼は、のうのうと虚偽の報告を申し

上げたのだ。

「クッ、フフフッ……。クラウドにサハリエル討伐を命じたのも……そなただったな。我がそなたに与えし神剣の力を二つに割って下
げ渡してまで……。」

「……さあ、何の事でしょう？ 私はとんと存じ上げませんが……。」

ミカエルは、にこやかに微笑みながら答えた。

「まあ良いいさ……。下がちなさい、ミカエル。」

「……では。失礼いたします。」

パサリと、輝く六枚の白い翼を広げ、ミカエルは天の玉座を辞す。
地上へ降りている間にたまった仕事にパタパタ忙しく飛び回る
部下たちの元へ向かいながら、一人呟く。

「最期の審判、その日まで……。お前達は……我等兄弟とは違う
運命を……。掴むことが出来るか……。見せてもらおう。」

そして。

見事運命を味方につけることができたなら……。その時は……。ミ
カエルは、ニヤッ、と、天使らしくない笑みを浮かべた。

「君達に、祝福を贈ろう……。」

心から――。

誓いと約束と。

「父さん……母さん……。」

冬の日の出は遅い。盆地であれば、尚更に。

——朝の、五時。夏ならば気持ちの良い早朝となるのだが。辺りはまだ闇に包まれ、気温もひどく低い。山の頂となれば、余計に寒い。

月も山の向こうへ沈み、星明かりだけが頼りの真っ暗な山の中を、馴れた足取りで登ってきた彼女は、言われて見なければ気付けないような、小さな石碑の前に座り、手を合わせた。

「父さん。母さん。ねえ、新しい家族が増えたんだよ……。一人は……ちよつと……ううん、だいぶ……。困った奴なんだけど……。晃希は……。ね……。」

「おい、何やってんだ？」

と、後ろから、少し怒っている風な声が飛んできた。

「あ……。晃希……。」

「部屋にいないと思ったらこんなところに……。」

今朝、竜姫が彼の枕元に置いてきた、父の袴をしつかり着こなして。

「竜姫……お前さあ、自分の今の体調、ちゃんと理解^{わか}ってる？」

呆れたようにため息をつきながら、竜姫の隣に立つ。と、足下の小さな石碑に気づいて、ハツとし、口をつぐんだ。

「それ……。もしかして……？」

「ううん、ちゃんとしたお墓は、別にあるの。家のご先祖様から代々のが、社の裏手の奥の方にね……。」

気遣わしげな目をする晃希に、竜姫は山の中腹を指差した。

「でも……。父さんも母さんも……。もう、魂すら存在しない。彼岸に……。戻って来ることもない……。」

うっすら浮かんだ涙を気付かれない様、さりげなさを装い拭いながら。

「分かってるのよ……。だけど……」

届かぬと知りながらも、祈り、語りかけたくなった時。山を登り。社も、町も。全てを見渡せるこの場所で。

「……そうだな。確かに、目に視えるカタチとしてはもう、戻っては来られないだろう。」

晃希は、その場にしゃがみ込み、

「でもな、知っているか？魂ってのはな、『魂』と『魄』の二つでできてる。『魄』は肉体を、『魂』は精神をそれぞれ形作っている。」

受け継いだ記憶からの受け売り。

「うち、『魂』の方は……どんな魔物だろうと、『穢す』ことはできても、『消す』ことは出来ないんだ。俺はサハリエルの魂を取り込んだ。結果、俺はその力を自分の力とした……が、サハリエルの心は……記憶と共に……今も、ここにある。」

胸に手を当て、晃希は言った。

「魔物が、『食べる』為に求めるのは、『力』ある、己の力を増すことのできる『魄』だ。魂を喰らい、『力』である『魄』を取り込み己のものとしたとしても……『魂』はまだ生きている。片割れの『魄』を失い、魂魄としては不完全なカタチなために、霊体として具現したりはできないし、魔物に取り込まれたままでは輪廻にも戻れない。だが、『力』ある巫女であり、神の力をも有する竜姫の、心からの祈りならば、間違いなく、二人の精神に届いている。」

「……失われた『魄』を、俺の力で再生することは出来ない。でも、今の俺なら……魂を喰ったという魔物さえ見つければ、囚われた『魂』を引き剥がし、正常な輪廻へ戻してやることは可能だ。魂の傷を癒すのに時間はかかるだろうが……いずれは新たな転生ができるだろう。」

ぎゅっと、抱きしめて。

「お前の事だから……ずっと、泣くの我慢してきたんじゃないか？」

子供をあやすように、背中を軽く叩く。

「……当事者でもある稲穂様達の前じゃ、泣くに泣けなかったんだろう？」

……そう。多喜も稲穂も久遠も。後悔と自責の念にかられていた。もちろん、それに気付けない竜姫ではないし、そんな中、皆の気持ちも考えずに一人だけわんわん泣くなんてできる訳もない。

「久遠達の前じゃ泣けなくても、俺なら気にせず泣けるだろ？……俺は当事者じゃねえからな。それに、今を逃せばもう二度とこんな機会は巡ってこねーかもしれねーぜ。……なにしろ今日から実にユカイなのが加わる事になるからな……感傷に浸る暇さえきつと無くなるぜ？」

晃希はそう言って、竜姫の顔を自らの胸に抱え込んだ。

晃希の優しい言葉に、竜姫の涙腺から堰を切ったようにボロボロと涙がこぼれ落ち、喉から嗚咽が漏れ出した。

「千年……永いよな……。どんなに長く生きたって百年そこその人間にとっちゃ、三百年だって『永遠』みたいなもんだったが……その三倍以上だぜ？」

服が涙と鼻水に濡れるのも気にせず、晃希は静かに語り続ける。

「……確かに今の竜姫は神でもあり、巫女でもある。でも、神としてまだ覚醒しきっていない以上、神としてお前ができることは殆どない。……だからつい、あせっちゃまう……。」

ピクリと一瞬、身体を強張らせた竜姫に気付きながら、晃希は、優しく、優しく竜姫に言って聞かせる。

「……多喜が言ってたぜ？龍の子が一人前になるのは覚醒した後、百年も経ってからなんだって。いいか、神としての寿命は千年だ。でもな、竜姫。人間の、巫女・神崎竜姫の寿命は長くても百年なんだ。人間として、普通に楽しく人生満喫できる時間は、寿命に比べて遥かに短い。」

自分は、たった十六年しか満喫できなかったけど。

「今しか出来ないこと、沢山あるはずだろ？……まず、俺がいれ

ば、お前はこの社へ戻ってこれるはずだ。」

「む、無理だよう……。そ、そりゃあ、もう社を『襲われる』心配はないけど……、」

だが、伯母達を説得できなければ……

「……ああ、それならもう手は打ってあるぜ？　まあ、実際手を回したのは俺じゃなく、そいつだけだな……。」

晃希は、背後の木立を指していった。

「！」

……久々の実家だと油断したとはいえ——。

暗闇の影から現れた誠人の姿に、気配にまるで気付かなかった竜姫は、驚いた表情を彼に向けた——。

昨夜、疲れきった竜姫が眠ってしまった後で、ポスポスと襖を叩く音がして。

「……えーと、晃希……だっけ？……いるんだろ？」

と、ポスポスと潜めた声が廊下から聞こえてくる。

晃希は晃希で疲れてはいたが、大量に飲んだ血と、夜という時間帯のせいも手伝って、なかなか寝付けずにいた。

むくりと、面倒臭そうに起き上がり、竜姫を起こさぬよう、そろそろ襖を開けてみると、そこには寝間着姿の誠人が立っていて。

「……ちよつと、頼みたいことが……あるんだけど……少し、いいかな……？」

と、晃希を外へと連れ出した。

借り物の、中年男性向けの寝間着は、現役高校生の彼には余り似合っていないかったが……。部屋のタンスから拝借してきた上着——これもダサめで似合っていない——を羽織り、家の裏の木立へ彼を連れ込んだ。

「……おい、いいのか？　せっかく竜姫が気を遣ったってのに、俺なんかとこんな場所に二人だけなんて……。」

こうして並んで歩くと、随分と背の差があるのがあからさまに分かって余りいい気はしないのだが……。

晃希は、誠人の後頭部を不機嫌に睨み上げながら言った。

「……さっき、うちの母親に電話をした。明日・明後日は上手い具合に土日で休みだからね。ちょっと泊まり掛けのつもりでここへ来るよう言った。」

「待て。あんたの親って確か……。」

「そうだ。竜姫ちゃんがこの社を継ぐことを猛反対している。」

誠人は、内心ビクビクし通しなのを押し隠し、社の守護者たる彼に言った。

「力を、貸して欲しい——。」

驚く竜姫に、

「……昨夜、父さんも連れて、ここへ来るよう言った。今日の夕方までには到着するだろう。」

制服をキッチリ着込んだ彼は言った。

「……一応、説得してみて。駄目だったら……。彼に、協力してくれるよう、頼んだ。今回の一件で、俺も色々考えさせられたし、反省もした。……こないだの言葉は撤回する。何も知りもしないで酷い事を言った。……悪かった……。」

誠人は頭を下げた。

「……こうして、現実を目の前に突き付けられるまで、俺はそれに気付けなかった。多分それは、うちの家族も同じことだろう。本当なら、言葉で説明して、それで納得して貰えたらそれが一番良いんだけど……。恐らくはきつと難しいだろう。」

俯いたままの誠人に代わり、晃希が続ける。

「だから、その時は俺が、力を使う——。」

『——あの日、俺の記憶を弄った様に、俺の両親の心を……』

「俺が、術で記憶を書き換える。……もちろん、この件に関することだけだな。」

「……でも……誠人君、ホントに……いいの？」

竜姫が恐る恐る尋ねる。いくら『だけ』と言ったって、自分の肉親の記憶を弄られるなんて……。

「今、俺が竜姫ちゃんにしてあげられる事はこれだけだからね。俺には、彼のように君を守る力はないし、稲穂様達みたいに君を支えることも出来ない。社会的な権力もない。ナイナイ尽くしな状況は竜姫ちゃん以上だよ。」

それに。もし、今自分が彼女と同じ境遇で、同じ立場に立たされたとして。その想いを押し量ろうとして感じた恐怖は……できれば二度と感じたくない——、そんな、不確かな想像でさえこれ程なのだ。

それを、しっかり受け止め必死に歩く彼女の邪魔をしたくはなかったし、邪魔をする両親の姿も見たくはなかった。

「もう、竜姫ちゃんのためってよりは俺のためみたいなもんさ……。」

そう言って、誠人は苦笑いを浮かべた。

山の向こうから、朝日が顔を出す。太陽の光に、闇が、一気に塗り替えられていく。

眩しいほどの光に、辺りの山の緑が息を吹き返したように、黒から色とりどりの緑に色を変え、途端に小鳥が眠りから覚め、騒がしく鳴き始める。

「……さあ、もう行こうぜ。それより先に、もっと厄介な仕事を済ませておかなきゃならんからな。」

晃希の台詞に、うつ、と表情をひきつらせた竜姫はがっくり肩を落としつつも、観念したように立ち上がった。

「……朝御飯にしましょう。今日のハードスケジュールにも耐えるよう、思いっきり高カロリーなメニューにして。ガッツリいくわよ!!」

半ばヤケツパチに叫びながら、先頭切って山を駆け降りていく。

「コラッ、走るなッ!!」

晃希はたしなめるように叫んでから、一人石碑に向き直り、一礼しながら、小さく彼女の両親へ、挨拶の言葉を向けた。

「……竜姫を。この世に産み出してくれたこと。心から感謝します。俺は。……俺は。生涯かけて、彼女を愛し、守る。そして。貴殿方を見付けたその時は……責任持って、輪廻の輪へ御還し致します。どうか、その時まで——」

「晃希ー? 何してるのー?」

「ん、ああ、悪い。今行く!!」

晃希は、竜姫に叫び返し、石碑に背を向けた。

「俺が、彼女を守ること。認め、許していただきたい……。」「力はあるけど、縁の薄い自分の想いが、果たして届いているのかどうか……。うか……。」

けれど。

「必ず、見付けて、助けますから……。」「

晃希は呟き、心に誓った。彼らだって、恩人なのだから……。未来を拓く力がこの手にある限り。救える力がある限りは。

「安らかな……。眠りを——。」

その為に。

晃希は、竜姫に気付かれない様、ピイと控えめな口笛を吹いた。誘われるように飛んできたカラスの耳に何事かを呟き、空へ放った——。

最後の一欠片（ワンピース）

「おや、随分と似合ってるじゃないか。それは……正寛まやひろのか……。
少しサイズが合っていないようだが……。」

狩ってきた鹿を丸々ドスンと勝手口の前に降ろしながら、稲穂は顎に手を当て、言った。

「うん、色々落ち着いたら、ちゃんと晃希用の服も新調しないとね……。」

一昨日買った服は、ブラウスとの一戦でボロボロになってしまったし……。

「そんな高いやつじゃなかったとはいえ……。」

買ってまだ一日しか着ていない服が、もうダメになるなんて。

厳しい女子中学生のお財布事情からすれば結構イタイ。

……晃希に非はないが、もうしばらくは、父の衣裳で我慢して貰わねばならない。

竜姫は、ため息をつきつつも、

「稲穂、それ、後で鍋にしましょう。」

朝食用のニジマスの腹に塩をすりこみながら言った。

「ああ。今日も寒そうだしな。鍋なら皆で囲める。……後で捌いておこう。」

そんな会話を平然と交わす彼らの後ろで、

「……かってきたって……、スーパーであんなの売ってたっけ……？」

丸ごと一頭の牡鹿を怖々眺めながら、誠人がポソリと呟いた。

牛や豚や鶏肉ならば、全国どこのスーパーでも売っている。猪肉や鹿肉も、店を選べば、売っているのかもしれない。……が。まさか、こんな丸ごと一頭のままに売る店など……。

「姐さんに狩れない動物なんて、この山には居ないよ。今は冬だからね、冬眠している熊を探すのは骨が折れるから、今回は鹿にした

んだ。」

後ろから、久遠が言った。

「まだ冬も始まったばかりだ。秋にたらふく食いだめした分、脂ものって旨いぞ。」

「……く、熊……、」

「姐さんはこの山の妖を仕切ってるんだ、熊くらい、片手で一捻りさ。夕方までには木の実や山菜なんかも届くはずだよ。」

今、竜姫が調理している魚も、今朝早く、この辺りの山々で暮らす動物達が差し入れに来てくれたものだ。

「この辺りに棲む妖の殆どは、それぞれ静かに暮らす、気の良い奴等だ。……まあ、野生で暮らしている以上、弱肉強食は自然の摂理だからな。中にはやんちゃの過ぎる奴もいるが。」

稲穂は、流しの下収納棚から包丁を手取る。

「……この辺りの連中は皆、多喜さまや初代に恩や義理のある連中ばかりだからね。この社に牙を向ける奴はいない。」

稲穂の台詞に久遠が、

「それに、この辺りの妖の九割は、姐さんの舎弟だ。……下手なことを企もうものなら、容赦なく制裁が加えられる。つまり、命知らずな無法者はいないってことさ。」

と、付け加える。

「あの日、社を襲ったのは、他のシマの連中だ。」

魚を焼く香ばしい匂いが漂う中、稲穂は、テーブルに砥石を置き包丁を研ぎながら言った。

「ああ、晃希。明日にでも『奴』と一緒に挨拶回りしてこい。一応、今朝方早く日の出る前にアタシが事情を説明しに回っというたが。」

奴、の一言に皆がウツと詰まるのを見ながら、稲穂が豪快に笑い飛ばした。

「運命は、定まった。新たな歯車は既にはまり、動き始めている。……聞いたよ、聡子達としこを呼んだんだろう？」

しゅんしゅんと、炊飯ジャーから蒸気があがる。

竜姫は、フライパンにといた鶏卵を流し入れ、熱で固まったそれを箸でくるくる器用に巻いていく。

「はい。……竜姫がこの場所で、暮らしていけるように——。」
問いに答えた晃希に稲穂は、

「そう、お前はもううちの狒犬として、歯車の一つに組み込まれ、既に動き出している。奴とて既にピースの一つだ。こういうのはな、一つでも欠ければ必ず、どこか噛み合わなくなってくるんだ。……逆に言えば、そうである以上、最初の一線さえ越えれば、案外ラクにハマるかもしれん。」

綺麗に巻かれただし巻き玉子と、程よく焦げ目のついた焼き魚に梅干しと海苔。

和食のスタンダードといった風な朝食だ。

「ごめん、もっとスタミナのつきそうなものと思ったんだけど……、食材が足りなくて……。」

竜姫は皿をテーブルに並べつつ謝った。

——並んだ皿は三人分。

「あれ、稲穂様達の分は？」

尋ねる誠人に、久遠は、

「山の麓の町の家には皆、神棚がある。毎朝、御供えしてくれる家も珍しくない。」

と、説明した。

「この土地を離れない限りは、それがアタシ達の力になる。……嗜好品として食事を楽しむことはあるが、神であるアタシたちには基本、食事は必要ないんだよ。」

ピカピカに研がれた包丁を片手に、鹿を担いで稲穂は、

「昨日から、色々貢いで貰った食料もある。アタシらはそっちをいただくから。アンタらはアンタらで食べな。二時間後、道場で——始めよう。……聡子らが来る前に済ませておかなきゃならんからな。」

「——
そう言って、久遠と外へ出ていった。」

「――食べようぜ。」

晃希が言った。

「スプーン使う？……魚、取ろうか？」

席につき、箸を手にした晃希の隣に座り、竜姫は細々と世話を焼く。魚の皿を引き寄せ、身をほぐして食べやすくした分を晃希の茶碗に乗せる。

晃希は、竜姫の箸と手の動きをじっと眺めながら、スプーンで、ほぐされた身を白飯と共に口へ入れる。程よい塩辛さと、ご飯の甘み。

「うん、塩加減もちょうどいい。美味しいよ。」

せっせと子供の世話を焼く母親……もとい姉の様にも見えるが、実年齢は元より外見年齢も少々ながら晃希の方が上。

美形の晃希と人並みの竜姫では、見た目も似ていない。

二人の服装も手伝って、パツと見、一昔前の箱入り坊っちゃんど使用人の娘の様にも見えるが――。

「ウツ、な、何だコレ!？」

梅干しを、手でつまんで口に放り入れた晃希は顔をしかめた。

「梅干しよ。日本に昔からある漬物でね、体に良いの。」

茶の葉を切らしていた為、白湯のまま湯呑みに注ぎ、竜姫は晃希に差し出した。

見た目はともかく、二人の醸し出す甘い空気は、紛れもなく恋人同士のそれだと分かる。

誠人は、雰囲気^{シイ}に飲まれないよう、黙々と箸を動かし、目の前の皿を空にしていく。――昨夜目撃した場面^{シーン}の衝撃も手伝って、油断していると、彼女いない歴が歳と同じな己の心に、わびしい秋風が吹き込んでくるのだ。

……一応、生徒会長を務める優等生であるからして、女の子からの受けは悪くない……のだが。一線を踏み越え、告白してくるような娘は一人としていなかった。

今まで特に、女の子と付き合いたいなどと思ったことのなかった

誠人だったが――。

「……こう見せつけられると……、彼女……欲しいなあ……。」

学園へ帰ったら、以前から要望の強かった、男女交際禁止の校則撤廃に乗り出す事を心に決めた。

――そして。

朝食を済ませ、それぞれコンディションを整え。

――二時間後。

……ごくり。

広くて静かな道場の中、唾を飲み込む音が、やけに耳に残る。

「心の準備はいいか……？」

晃希が、尋ねた。

皆、一様に堅い表情である一点に視線を集めている。誰もが頬や口の端を引きつらせ、眉間にはシワが寄っている。

部屋に漂う異様な緊張感に、晃希の顔にじんわり汗が滲んできく。

「……始めるぞ。」

竜姫は、赤黒い網に絡め捕られたクラウドの魂を前に、真剣な表情で立ち、言った晃希に頷いて見せた。

「……久遠、道場このへやに結界を張ってちょうだい。」

何せ、クラウドだ。もしも下手に暴れて、道場を壊されてはたまらない。久遠はすぐに察して頷いた。

「稲穂も……念のために、もう一重、山に結界を。」

稲穂も同様に頷く。

「誠人くんも。危ないから、少し下がっててちょうだい。」

稲穂から、晃希に渡したものと同じ鈴を受け取りながら、誠人を円卓から遠ざける。

晃希は床に、またしても複雑な紋様を、血で描いていく。

円卓に描かれたものとはまた違った陣。

外枠の円陣の中に五芒星を描き、分割された図形に、更に記号や文字を書き込み、魔方陣を完成させる。

晃希は魔剣を手に、陣の前へ立った。

「……やるぞ、いいな？」

もう一度、皆の表情を窺うように視線を巡らせて。

晃希は、剣を陣の描かれた床に突き立てた。

その瞬間。ぶわっと陣から閃光が迸り、同時に凄まじい魔力が晃希の持つ剣から溢れ出した。

溶けだし、收拾のつかなくなったソフトクリームのように、溶けて流れ落ちていく晃希の魔力は、残らず、陣へと呑み込まれていく。昨夜、あれだけ辺りを圧倒した晃希の魔力を、貪欲にさらう——だけでは飽きたらず、クラウスの魂を拘束していた血色の触手が、それから離れ、晃希の身体に巻き付き、直接魔力を吸い奪^とっていく。血によって描かれた線が、ドクドクと血管の様に脈打ち、そうして奪った晃希の魔力を、陣の中心部へと集め、その全てはクラウスの魂へと注がれていく。

弱々しく明滅を繰り返していたクラウスの魂は、晃希の魔力を浴びるように取り込みながら、次第に光を増し、どんどん強く、大きくなっていく。

ハアハアと、苦しげに肩で息をし、額に玉の汗を浮かべる晃希を尻目に、光の珠は次第に人型を成していく。

その、あらゆる意味で壮絶な光景に、皆が息を呑み、口を挟めずにいる間に、人型は翼を生やし、髪を伸ばし、頭に輪っかに乗せた。晃希は、その変化をじっと眺めていたが、ピクリと手の指先が動いたのを目に留めると、陣から剣を引き抜き、巻き付く触手を剣で斬り払い、少しよろめきながらも陣から飛び退いた。

……今にも膝をつきそうな顔色だが、晃希は油断なく、卓の上に立つクラウスの喉元に刃を突きつけ、

「我が血と魔力を受けし我が眷族よ。我が剣の前に跪け。」

紅い瞳に妖光と殺気を湛え、そう命じた。

身体から光が消え、確かな人の――いや、天使の型を取り戻したクラウドス。

目蓋がゆっくり持ち上がり、前と変わらぬ蒼い瞳が現れ、喉元に光る刃を眺めた。

ぐると、周りを見回し――。クラウドスは、ため息をついた。……深い、深い、何かを諦めたような、投げやりなため息を――。

「我……は……、」

ポツリと呟いて。……そして。

彼は、以外にもあっさりと剣の前に、膝を折った。文句の一つもなしに、従順を絵に描いたように……。

クラウド、改め――。

「……………」

服従の意を示すクラウド。それを見る晃希の表情に険が宿る。周りを囲む面々も、皆、腑に落ちない様子だ。

竜姫は、シャリン、と手にした鈴が鳴るのを聞きながら、晃希の隣に立つ。

「……クラウド。ここにおわすは豊生神宮一の神、竜姫様。並びに二の神、稲穂様。そして三の神、久遠様だ。」

晃希は、剣先をクラウドに向けたまま、

「そしてお前の主たるこの俺は、彼らとこの社を御守りする狛犬。この御三方は、俺が仕えるべき主。よって、我が眷族であるお前に命じる。本日この時より、お前もこの社の狛犬として、彼らに服従し、仕えよ。」

低く、感情を抑えた声音で告げる。

晃希は、鋭い視線を緩めぬまま、剣先だけをクラウドから外し、自分も竜姫の前に片膝を折り、

「豊生神宮、一の狛犬、晃希。この者の主として、我が主たる神より彼の者に、二の狛犬たる証を賜りたく、乞い願うものであります。」

と、頭を垂れた。

一步。竜姫は晃希の前に出る。跪くクラウドを上から見下ろす格好で、

「……………」

無言のまま、彼のつむじを眺めた。

このまま、晃希の時と同じ様に、新たな名を与え、手にした鈴を首に掛ければ、儀式は終わり、彼は新たな肩書きを得ることになる。

……しかし、それは名という呪と、鈴という呪具で彼の魂を縛るということ。

新たな名を与えることで、魂を社に繋ぎ、鈴つきの首輪で自我をも縛る。

晃希の様に、それを理解^{わか}った上で納得し、自ら望んでの事であれば良いが……。

「……駄目。今のまま、クラウドを狛犬として社に迎えることは出来ない。」

竜姫は、鈴をギュッと握りしめ、首を左右に振った。

「……だな。」

稲穂が頷き、

「……クラウド。お前、今何を思ってる？ ……らしくなさすぎて気味が悪いぞ？」

と、久遠も半眼で言った。

「狛犬の契約は、永遠の枷だ。……二度と外せなくはないが、外すとなれば、それなりの代償は要る。アタシらに頭を下げたくないとか、その使命や立場が気に食わないとか、その程度の事ならともかく……。全てを——己の意思や命までも——投げやりのままに無理矢理枷を嵌めれば、後で必ず反動が来る。」

渋い表情で稲穂が、

「……とは言え——、」

疲れきった表情をする晃希をチラリと見やり、

「このまま、晃希一人に手綱を任せきりにするのは……ちと酷だな。」

腕を組み、考え込む。

血を吸えば、晃希は回復するだろうが……昨日の今日だ。寝て起きて、栄養補給も済ませてだいぶ回復したとはいえ、またも晃希に血を与えるのはさすがに無理だ。幾らなんでも竜姫の身体が保たないだろう。

「今日はご丁寧にカウンセリングなんぞしてやる暇もないし……。さて、どうしたものか——。」

クラウドが暴れることを想定して築いた障壁。その結界が、外部

の音をも遮断し、ただでさえ静かな部屋は、苦しいほどの無音が支配している。

予想していたものとまるで違う空気に、気分が重たくなる。

外は今日も良い天気で、冬の冷えて澄んだ空気に、青々とした空が眩しい。

町は今日も賑やかに。休日な分、学校は静かだが、畑仕事に土日は関係ない。今日も朝早くから働く人々達が、昼も近くなり、畑から引き上げてくる。

殆ど遊び感覚で親の仕事を手伝っていた男の子達は泥だらけのまま揃って遊びに出掛け、少女達は、友人らと連れ立って、駅前の商店を覗きに行く。高校生ともなれば、二駅先の街まで足を伸ばそうという者もいた。

奥様方は庭先や道端に固まり井戸端会議に花を咲かせ、男達は男達で、将棋を指したり雀卓を囲んだり。

そうして、それぞれ思い思いの時間を過ごす。……ほのぼのとした、平和な時間を――。

……が、張られた結界の中は、どんよりと重たい雲に覆われ、今にも雨が降りそうな曇天で、どこかギスギスした時が流れている。もう少し。あとちょっとズレと軋みを修正できれば、上手く回っていきそうなのに……。

竜姫は、齒痒い想いを噛みしめる。

「……クラウドス。」

立ち上がり、晃希はその名を呼んだ。

「今、お前が一番に望むものは何だ？」

問いかけに応じ、クラウドスが顔を上げた。

「……死の、安寧を。」

その、変わらぬ蒼の瞳が写すのは、虚無。以前のような冷酷など微塵もない。ましてや威圧感や殺気など、かつてあったことすら疑いそうな程、何をも写してはいなかった。

「……逃げるのか？」

晃希は、あえて挑戦的な調子で言った。以前のクラウドであれば、まず間違いない乗ってきたであろう挑発に、しかしクラウドは、
「――我は元より出来損ないの天使。神にも見放され、堕ちて穢れた以上、もう、我に生きる意思はない。」

――と。

「目指すべき導^{しるべ}さえも失った今、我が望むは我が片割れに倣い、消え去ること。」

そう、淡々と答えた。

晃希は、大きくため息をつき――。

拳骨を、握りしめた。

バキッ、と不穏だが小気味の良い音が、室内にはじけ、晃希の怒号が轟く。

「この、自己中！自己満足野郎が――！」

ふざけるなッ、と。怒気もあらわに怒鳴り付ける。

「死にたい、だと？ ……ふざけるのもマジ大概にしろ！ その手でさんざん人を死に追いやって、多くの嘆きや悲しみ、怒りや憎しみを生み出してきたお前が、自分だけ消えて楽になろうってか？ そんなのは、俺が認めねえぞ。」

自分も、多くの命を奪ってきたが……その発端を作った一因は彼だ。

が、罪を犯したのは自分自身。理由はどうあれ、実際己を御しきれなかった自分の責任。だから、自分の罪を彼のせいにして擦り付けるような真似をするつもりはない。

しかし、彼自身が犯した罪すらも償わず、無責任にも死にたがるクラウドに、晃希は怒りを爆発させた。

「お前が消えたら、お前に傷つけられた者達――俺や……俺の家族……村の連中の無念はどうなる！？ どこへ向ければ良い？」

そう、たとえ命は費えても、魂は――精神^{ココロ}は――消えやしない。そして。負の念を抱えたままでは転生は叶わない。

ましてや負の念を抱え込み過ぎれば魂は穢れ、堕とされるか……

最悪、消滅することだって考えられる。

「……これは、お前の主としての命令だ。」

剣先を、再びクラウスの喉元に突きつけ、言う。

「死ぬことは、許さない。生きる。お前が死に追いやった者達全ての魂が、正常な輪廻に戻るまで。罪を償い、彼らの闇を完全に、浄化できるまでは。」

逆らうことを許さない。それは、絶対の命令。

「その時まで、お前はこの社で働くんだ。――狛犬として。」

クラウスの内に取り込まれた血と、それに付随する魔力を操り、クラウスの空虚な精神を縛る。

が、多くの魔力をクラウスの側に持っていかれている今、それを操る力はかなり削がれている。縛る縄は太く頑丈だが、それを制するリードは酷く脆い。

取り込まれた魔力は晃希のものだが、制する力でクラウスに押し負ければ、魔力はそのままクラウスのものになる。

魔物同士の契約など、力で制した者勝ちだ。一度でも晃希の下僕という枷から抜け、眷族という立場より解放されてしまえば、一巻の終わり。クラウスは制御を離れてしまうだろう。

「……その前に、――頼む。奴に、首輪を。後の事は、俺が全ての責任を負う。だから……、」

クラウスを見据え、振り返らぬままに、晃希は、背後に控える竜姫に懇願する。

「コイツに、新たな名を……。」

空虚なクラウス。だが、とどのつまりは生きる意味を見失っているだけなのだ。

「なら、そいつを与えてやれば良い……ってか。」

後方で、稲穂がため息をつきながら、腕を組む。

「言うのは簡単だがしかし、苛酷な導だ。それについては自業自得なんだろうが……。」

険しい表情の中でも、晃希を案じて問いかける。

「晃希。お前は、狛犬としての責任に加えて、二人分もの重荷を背負うことになる。……耐えきれぬのか？」

——その、重みに。

その問いに、晃希は、

「大丈夫。それ位、何て事ありませんよ、今の俺なら。」

と、とても自然で柔らかな笑みを浮かべて答えた。

「俺には、生きる理由がある。コイツと違って、幾つも……。そう、沢山の理由が。」

ピクリと、クラウスが身じろいだ。

「それに、俺は独りじゃない。その理由を知り、支えてくれる仲間も居る。——コイツとは違ってね。」

……ふるふると、肩が震え出す。

「何より、これからの未来に希望を沢山、見出す事ができる。……生きていくための糧となる、それを……。ね。うん、まさにコイツとは違ってさ。」

喉元の刃から、クラウスの視線が外れる。

キッと晃希を睨み付けるクラウスの空虚だった瞳に、小さいながらも灯が揺れた。

それを見留めた竜姫は、すかさず晃希の前に出た。

「クラウス。お前に新たな名を与える。」

晃希の術による拘束が緩まぬうちにと、忙しく鈴を首に掛けて言う。

「清士。豊生神宮二の狛犬、清士。豊生神宮一の神としてお前に命じる。狛犬として、この社を守りなさい。一の狛犬、晃希と共に——」

名と、鈴が、『清士』の魂を束縛する。

精神を縛る力より、遥かに強く、柔軟性にも富んだ呪縛に囚われる。

僅かに揺らいだ灯が、次第に力強さを増していく。

「——清士。」

新たな名で、晃希が配下となった彼の名を呼ぶ。

「お前はもう、天使ではない。墮天使でもない。……お前は、狛犬だ。」

剣を鞘に納め、晃希は改めて竜姫の前に跪く。

「我が願い、お聞き届け下さり、ありがとうございます。」

清士の瞳に揺らめく灯が不穏な気配を孕んでいる感じがして気になるが、一先ずはこれで儀式は済んだ。

誰からともなく、安堵のため息が漏れる。

……だが、その場の誰もが分かっていた。取りあえず所定の場所に歯車を設置するだけしたもの、まだ上手く噛み合っていないことを。

——今のままでは耳障りな不協和音が響くだけ。早いところ微調整してやらないと、いずれ歯車は崩壊する。周りをも、巻き込んで。

「さあ、まあ。取りあえずとは言え、一仕事済んだんだ。次の仕事にかかる前に、一休みしようや。」

不安な予兆を断ち切るように、稲穂がパンパン手を叩いて皆の注意を引き、提案した。

そろそろ誠人の両親も到着する頃だ。

「よし、決まりだ。久遠、しばらくコイツを見張っておけ。ついでにここも片付けておくといい。今日の夜は宴だ。支度をするのに邪魔だからな。」

ポンと、久遠の背を叩いて稲穂が言う。

……その顔には満面の笑み。

「ああ、晃希と姫はしっかり身体を休めておけよ。」

手伝いを申し出ようとした二人に爽やかに釘を刺し、

「お前はアタシにつき合え。」

と、誠人を呼んだ。

「頼んだ山菜やらが届く頃だ。荷物持ちを手伝え。」

その顔は、やっぱり満面の笑み。

……彼女の指示に不平を漏らす者、は……誰も居なかった――。

新たな季（とき）を告げる訪問者「1」

「……ここへ来るのは半年ぶりだったな。」

夕飯の買い出しに來た老若入り混じる主婦達が群れる、駅前のお店街の人ごみ。エプロンをつけたまま、ほとんど部屋着と変わらない格好で、わいわい賑わっているご婦人たちの波をかき分けながら、周りの景色に溶け込めていないスーツ姿の男が連れの女性に声をかけた。

年は、四十代後半か、五十代ほどだろうか。休日だというのに、しっかりアイロンのかかったシワ一つない、物の良さそうな背広を、キツチリと一部の隙もなく着こなしているし、髪も整髪剤まで使ってビシッと整えられている。

「そうね、優花^{ゆうか}達のお葬式以来だものね……。」

そして、彼に答えた連れの女性もまた、この場には似つかわしくない出で立ちをしていた。

まるで我が子の個人面談へ出向く、教育ママみたいな。頭の上に団子が一つ。きっちりまとめ上げられた髪に至る所に黒いピンが留めてある。

いかにもな眼鏡をかけ、紺のスーツで身を包み。小さなバックを小脇に抱え。高いヒールの靴音を響かせ歩く。

そんな異質な二人組を、奥様方はチラチラ盗み見る。そう広くもない、田舎町のこと。男の方とはともかく、彼女を知らない者はそう多くない。十数年前までの二十年間、ずっとこの町で暮らしていたのだから。

「変わらないわね——。ホントに、変わってないわ。この、大嫌いな空気。」

都会暮らしで人混みには慣れているが、こんな風に、芸能人でもないのに注目されるなんて、街ではありえない。

「敏子ちゃん？　敏子ちゃんだろ、あんた。」

と、肩を叩かれ振り返る。

「ああ、やっぱりそうだ。昨日、竜姫ちゃんが帰ってきたのを見て、家の旦那が言ってるね。良かった、じゃあ、戻って来ることにしたんだね？」

そこにいたのは、町内会の会長のおかみさんだった。

「違います。」

敏子は、そっけない返事を返した。彼女の家は、典型的なかかあ天下。会長とは名ばかりの旦那の尻を蹴っ飛ばし、実際に権力を握っているのはおかみさんなのだ。

世話焼きの、お節介で口うるさいオバサンで、妹の優花や姪の竜姫は好いていたようだが、敏子は彼女が苦手だった。

「……そう言わずに、さあ。せめて十年、竜姫ちゃんが成人するまでいい。それまで、あの神社を切り盛りしとくれよ。」

そう、優花と正寛の葬儀の席で、竜姫が神社を継ぐと言い張ったのを最後まで擁護したのも彼女だった。そのために、自分が竜姫を引き取って育ててもいいとまで言ってる。

彼女の二人の息子たちはとうに独り立ちし、長男は家の仕事を継いで農業に勤しみ、次男も家庭を持っている。もう一人育てるくらい、どうということはないからと。

しかし、実の伯母である自分がいるのに、他人に姪を押し付けるというのは世間体が良くないから、仕方なく竜姫を引き取ったのだ。「私は神社を継ぐ気はありません。私には、夫も子供も、仕事もあるんですから。」

煩わしさに、つい苛つきが声に出る。夫が止めたタクシーに逃げるように乗り込み、

「用事を済ませたらすぐに帰るんです。もう、構わないでください。運転手さん、出して。」

そう切って捨て、バックミラーに映る運転手に声をかける。

……が。タクシーの運転手とて、町の人間だ。町会長、――の奥さんには逆らえない。バンっ、と自動で閉まるのを待てないと乱

暴に閉じられたドアをボタン一つで再び開ける。

「悪いね、あの人には逆らえんよ。それに、私も同じ意見なんでね。」

何を、と、バックミラー越しに睨みつける敏子に運転手が謝った。

「……あの娘は私たちが引き取った。あの娘の親権を持つのは私達だ。」

と、不機嫌な顔で、敏子の夫が口を開いた。

「そして敏子は、私の妻だ。もう、神崎の人間ではない。その彼女が、望みもしないのに何故神崎の家を継がねばならん？」

不機嫌に彼は言った。

「それを言うなら、竜姫ちゃんだって、ここを離れることを望んではいなかっただろう！」

負けじと、おかみさんも言い返す。

「神社を継ぎたいんだって、あんなに必死だったじゃないか。」

「あの娘はまだ中学生で、子供だ。子ども一人、保護者もなしにそんな願いを聞き届ける訳にはいきませんから。」

しかし、彼は動じもせず、淡々と答えを返した。

「だから言っただろう、私が引き取って育てると。あの神社は、町の人間にはなくちゃならないもんなんだ。」

憤るおかみさんに、敏子は、

「だったら誰でも、やりたい人が好きにやったらいいじゃないの。

別に私はあの土地の所有権なんかいらないもの。売ればいいと思っただけど、色々面倒だし。いいわよ、ただであげるわ。」

そう言い捨てた。

「……ずいぶん罰当たりなことを言いますね。」
運転手が、非難の視線を向ける。

「あそこに祀られた竜神は、昔当たりを荒らしまわった荒魂あらみたまなのですよ。恩のある豊生様の血を受け継ぐ神崎の人間にしかあれは鎮められません。」

「何よ、百年前じゃあるまいし、この科学の時代にそんな迷信をま

だ信じているの？」

敏子は馬鹿にしたような視線を、運転手に返した。

「迷信だって？ 冗談じゃない。実際、この半年、農作物の育ち具合は悪くなる一方なんだよ。収穫量は激減してるし、作物の質だってがた落ちだ。手入れをさぼったわけでも、天候に恵まれなかったわけでもない。それでも、あの社が空っぽになってから、確実に何かが失われていってる。」

視えずとも。生まれてからずっと、この土地で育ったのだ。愛着あるこの場所に根付く何かを、何となくながらにも肌で感じることはできる人間だっているのだ。

「もう暮れも近い。正月もじきだ。だが今年は初詣もどうなるかと町の皆で案じていた。」

豊生神宮では、毎年正月の初もうでシーズンには賑やかに出店が立ち並ぶ。昨年の豊作を神に感謝しつつ、来年の豊作と、自分や家族、友人たちの安泰を祈るため、町中の人間が皆、足を運ぶ。

「今年は秋祭りもなかったからなあ。町の灯が消えちまったみたいで、なんだか味気ない秋だったよ。」

「そうしたらさ、ほら。」

ごそごそと、おかみさんが前掛けのポケットを探り、一枚の葉書を取り出した。

「竜姫ちゃんから手紙が来たのさ。せめて、初詣くらいはちゃんとやりたいからって。手伝ってくれないかってさ。」

「何、それは初耳だ。」

運転手はおかみさんを振り返り、彼女の持つ手紙を良く見ようと身を乗り出した。

「ああ、たしかにあの娘の字だな。全く、ホントによく出来た娘だよ。じゃあ、そのために帰ってきたのかねえ。……町じゃあの娘を見かけたって話は聞かないし、一人じゃ色々困っているんじゃないかい？」

半年も家を空けていたのだ。神社の境内なんかは町の人間で定期

的に掃除していたが、裏の方までは手が出せず、放置したまま。食糧の蓄えだってそうはないはずだ。

「どうせもうじき俺の勤務時間も終わる。奥さん、前開けるから、一緒に乗ってつてくれないかい。運賃は俺が持つからさ。」

そう言つて、彼は助手席のドアを開けた。

「ちよつと、何勝手に！」

噛みつく敏子に、運転手は、

「悪いね、これはこの町の事なんだ。『余所者』は口出ししないで貰いたい。」

そう、冷たく言った。

「なっ、」

言葉が、続かない。彼女の夫も、苦い表情を浮かべるが、目的地まで歩くには、距離がありすぎる。他のタクシーを捕まえるにしても、おかみさんを敵に回しては上手くないだろう。

「……これだから、嫌いなよ。」

忌々しげに呟く敏子を尻目に、おかみさんを乗せたタクシーは静かに走り出した。

昨日、竜姫達を通つたのと同じ道を、車は走っていく。途中通り過ぎた学校は、土曜日で休みのはずだが、地域住民に開放されている校庭では、子供達が元気にはしゃぎまわっている。

二十年位前までは確かに、敏子もあの中にいたのだ。たとえば、テレビで見知った都会に憧れ、田舎であるこの町に嫌気を覚えていたとしても。

煩わしい人付き合いもなく、色々便利な都会暮らしが、自分には性に合っているのだ。たとえここのように空気が澄んでいなくても、夜空に星が見られなくても。24時間営業のコンビニがいたる所に点在し、電車やバスだって、そう待たずとも次から次へとやって来る。最新の流行りの服や小物だってすぐ手に入る。そんな、便利な都会が。

何だって、こんな不便で煩わしい田舎に残りたがるのか、彼女に

は竜姫の気持ちは理解不能であった。

「それにしても、あの娘はともかくとして、何故誠人までもがここに来ているんだ？ 確かもうじき期末試験のはずだったと思うが。しかも私たちを呼びつけたのはあの子なんだろう？」

「それが、あの子言わないのよ。来てくれたら全部話すからって言うて。」

そう、もう一つ。敏子には理解できないことがあった。

何故、今まで自分たちの言いつけに逆らったことのない誠人が、突然こんな突飛な行動に打って出たのか。

「きつとあの娘が何か誠人を困らせるようなことをしたんだわ。そうでなきゃ、あの子がこんな事するはずないもの。」

とても真摯な誠人の言葉を、電話越しながらも直接聞いていたはずの敏子だが、それを否定するように呟いた——その時だった。

グラグラっ、と、走る車の中にも感じる大きな揺れ。運転手はあわててブレーキを踏む。車が止まると、揺れは尚一層ダイレクトに伝わってきた。

「地震かい？ こりゃ大きいねえ。」

おかみさんが不安げな声を出す。

「ラジオ、ラジオつけとくれ。これだけの揺れだ、すぐ地震速報が流れるだろう。」

頼まれるより前に、運転手はカーラジオのスイッチに手を伸ばしていた。

ガガっ、ピーっ、と雑音がスピーカーを震わせる。回転つまみを弄ってチューニングを調整すると、ザザッ、と雑音混じりのアナウンス音声割り込む。

「ああ、ちょうどいい。ニュース番組やってる。」

細かい微調整により、雑音が消え、クリアな音声スピーカーから流れてきた。

「つぎは、今日のお天気です。清水さん、お願いしまーす。」

「はい、本日の天気をお伝えいたします——。」

揺れが完全に収まるのを待つて、運転手は再び車を発車させた。

「今日は全国的に高気圧に覆われ、晴れるでしょう。ただ、大陸から強い寒気が流れ込みますので、大気の状態は不安定になります。内陸、山沿いでは夕方から夜にかけて大雪になる恐れがありますので、ご注意ください。各地の詳しいお天気です。全国的に晴れるでしょう。ただ、寒気の影響で気温は上がらず、寒い一日になりそうです。続いては中部地方のお天気です。日中は、各県よく晴れるでしょう……」

しかし、いくら待つてもラジオはのんきに天気予報を伝えていて、一向に地震速報が入らない。おかみさんはつまみに手を伸ばし、ほかの局へとチューニングを合わせる……が、

「——今日ご紹介する商品は、高性能高枝切りバサミ……、——次に溶いた卵を加え……、♪僕らを繋ぐ赤い糸……、——、最新の交通情報をお伝えいたします。関越道、花園^{はなぞのインター}IC付近で玉突き事故があり、その影響で二十キロの渋滞——」

通販番組、料理番組、音楽番組、渋滞速報……。どこの局でも、地震速報など流れてはいなかった。

「……どうということだい？」

と、再び強い揺れを感じて、運転手がブレーキを踏む。

「……中央自動車道では海老名^{えびなサービスエリア}SA入口付近で一キロの渋滞——」ラジオでは相変わらず渋滞情報を流している。地震速報など一向にやらない。

その時だった。ごうっ、と轟音と共に物凄い突風が、もうすぐ目の前に迫った神宮の山の方から吹きつけた。乾いた、冬の風——のはずが、車の中にいても分かるくらいにジトツと湿り気を帯びた生ぬるい風。それが何故だか、不安と焦燥を煽る。

「……竜姫ちゃんが心配だ」

運転手はすぐさまアクセルを踏み込み、神社の入り口の脇に車を停めた。

「何だろうね、何だか、嫌な感じがするよ——。」

おかみさんは、買い物袋を手に車を降り、山の頂を見上げた。

青く澄み渡った空。散らばる白い雲。夏に比べれば弱々しいが、日光はさんさんと降り注ぐ。いつもと変わらない、平穏そのものの空が、おかみさんの瞳には映っていた――。

新たな季を告げる訪問者「2」

その、覚えのありすぎる気配に、竜姫は息を飲み、そして身体を硬直させた。

「……どういう、ことなの？」

山の、裏方から尋常ではない揺れを感じ、駆けつけてみれば。

「悪い、ちよつとマズったらしい――。」

晃希は、竜姫を背に庇いつつ、剣を抜き放ちながら、歯切れ悪く言った。

「まさか、こんなに早く見つかるとは思ってもみなかつたんだよ……。」

目の前にいるのは、イノシシの様な容貌すがたをした黒い影。――とはいえ、イノシシに見えるのはその影の形だけ。普通のイノシシに比べて何倍もある巨大な体躯と、体を覆う瘴気と妖気は、獣のそれではない。

「タマシイ……、ヨコセ……。龍の、タマシイ……。力を、ヨコセ……。」

低く、しゃがれた声。唸るように、その化け物は人の言葉を操り、言った。ぶるるつ、と鼻を鳴らし、全身の毛を逆立て膨らませ、前足で地面をかき、剣を構える晃希を威嚇しながら。

「――ぐうおおおん、」

おおよそ獣の鳴き声とは思えない、身の毛のよだつような咆哮。それは、荒々しい風と、妖気とを纏い、周囲へ放たれた。

「竜姫っ！」

「姫っ！」

その気配を感じ取った稲穂と久遠も駆けつける。

「こいつはっ！」

「……ああ、優花と正寛の魂を喰らいやがった奴だね。だが、どうして今、ここへ？」

その姿を目にして、久遠が唸り、稲穂は苦々しい表情を浮かべつつ疑問を口にした。

恰好の餌食である魂が、社に戻った。それだけならば、この状況は当然と言えよう。しかし今は、晃希がいる。しかもつい昨夜、あの空恐ろしい気配を辺りに流布したばかりで、まさかあの力を感じ取りながら、昨日の今日で闘いを挑もうという命知らずな馬鹿がいたとは思わなかった。

「すいません、俺のミスです。」

晃希は、もう一度謝罪の言葉を口にした。

「今朝、使い魔を放ちました。竜姫の御両親の魂を救うため、その魂を喰らった妖を見つけ出すために。――まさか、こうも早く反応が返るとは思ってもみなかった。」

こいつは、『クラウド』と比べれば、子供を相手にするようなもの。――その程度の力しかない妖だ。普段ならば、目をつぶってでも倒せるような、敵。だが、今、晃希は――。

――と。パサリ、と、上空から翼を羽ばたかせる音がした。見上げれば、冷やかな蒼い瞳で見下ろす清士の姿。

そう、あれを復活させるために、かなりの力を消費してしまっていた。そしてこの後、まだ力を要する場面が確実に一つ、残っている。

「クソッ、何だってこう、ピンチになってばかりなんだ、俺っ！」
晃希は一人、毒づいた。

空を舞う元天使の狛犬。しかし彼は、社と神を襲う敵である妖と竜姫や晃希達とをただ眺めているだけ。戦いに加わろうなどという気配は微塵もない。

「――むしろ、俺の支配から抜ける絶好のチャンスとか思ってるだろ、絶対。」

下僕の立場で、主に直接手を出すことはできない。が、ここで、晃希がこの妖にノックアウトされれば、それは成る。

この状況で、今回ばかりはもう、竜姫も彼に血を与える事は出来

なかった。……これ以上血を失えば、冗談ではなく、命にかかわる。
「……焦るな、晃希。大丈夫だ、お前は一人じゃない。」

後ろから、稲穂が落ち着いた声を晃希に向けた。

「アタシも久遠もついている。こないだは数がいたからね、不覚をとったが、今日はこいつ一匹。三人がかりでかかれれば楽に倒せるだろう。」

稲穂は、余裕たっぷりと言い、晃希の前へ出る。

「決着がつくまで姫は下がってな。晃希、トドメとアフターケアはお前に任せる。アタシと久遠でこいつを弱らせる間、後ろで体力温存しておけ。久遠、狐火でこいつの動きを抑えろ。見てな、あの日の借りを倍にして返してやるから。」

晃希の横を通り過ぎるそのとき、さり気なく肩を叩き、妖艶な笑みを向けて言った。

狒犬である以上、主従である関係だが、しかし気安い雰囲気壊すことなくいてくれる。お互いフォローし合える、確かな絆に支えられた関係。それを、改めて再認識した晃希の心に、温かい物が溢れる。身体がキツイことには変わりないが、それは、晃希に確かな力を与えてくれた。

「いくぞ。」

艶やかな紅い衣が、翻る。

「我らが大事な主を喰らい、次代の主を傷つけたその罪、お前の命であがなわせてやろう。」

白く細い柔な脚が、自然のままの山の大地を蹴る。

「久遠っ、」

燃える、紅く長い髪が揺れる。チラつく、アカ。向けられた殺気に、化け物は鼻息荒く、稲穂へと突進を仕掛ける。

その足元の大地を、青白い業火が覆った。轟々と、涼やかな色の炎が、凄まじい熱をもって化け物の足を包み込む。

「ガアアアッ、」

痛みに苦悶の声を上げつつ、化け物は怒りに満ちた瞳で、眼前に迫

った稲穂を睨んだ。

燃える、大地。だが、同じ地面を駆ける稲穂の裸足の足には火傷一つ見当たらない。辺りの木々も、炎に当てられながらも焼かれてはいない。あくまで、化け物だけを標的にした炎なのだ。

久遠は、晃希の前に座り、力を行使する。化け狐としては標準装備といってもいい能力である、狐火。その妖狐の中でも特に強い力を持つ、九尾の狐。子狐とはいえ、この程度の炎を操るくらい寝てたつてできる。九本の尾を揺らめかせ、それでも油断なく敵を見据える。

足元に気を取られ、敵の動きが止まる。痛みに気がそれ、隙だらけになった敵の額を、稲穂は力一杯蹴り飛ばした。衝撃に顔をのけ反らせたイノシシの化け物は吹っ飛ばされ、斜面に生える草木を身体でなぎ倒しながら、背後の崖を転がり落ちた。

崖下へ、重たい身体が叩きつけられ、ズウウウン、と、重たい衝撃が地面に響く。……無論、この程度でくたばりやしない事は誰もが分かっていた。

——だから。その声に、一同は皆、約一名を除き、戦慄した。

「竜姫ちゃん！」

狛犬二人以外には、聞き覚えのある声だった。

「待って、ちょっと待ってくださいっ！　今そっちはっ……、」
追って、誠人の声がして、そして。

「待つのあなたよ、誠人。一体どういう事なの？　ちゃんと説明なさい！」

だいぶ遅れて、待ち人の声が届いた。

——最悪の、タイミングだった。

普通の獣では歯の立たない崖を、容易く駆け上ってきた妖を、遠目ながら目にとめた誠人の顔色が一気に青ざめる。

「だめですっ、山中さん、杉内さんっ！」

竜姫の姿をみとめ、駆け寄るおかみさんと運転手を必死に制止しようとするも、妖の姿も、稲穂と久遠の姿も視えていない彼等は構わ

ず竜姫に駆け寄る。

「だめ、お願い、来ないで！」

竜姫が、彼らに向けて必死の叫びを発した。

怒りに染まる、妖の瞳が、突然わらわらと現れ、こちらへ向かって来る人間たちへと、向けられる。

「……来るなっ、逃げろっ!!」

最悪の事態を予感し、晃希が警告を告げる。

そこで初めて、誠人以外の面々は、竜姫の隣に立つ男の存在に気づき、視線をそちらへ向ける。

「あんたら、死にたくなけりゃ、今すぐここから離れろ！」

振り向き、叫んだ彼の瞳は、日本人はおろか、人間にあるまじき、紅い色をしていた。

こんな時代だ。瞳の色くらい、カラコン等で、いくらでも変えられる。……だが、爛々ときらめく美しい瞳に宿った険が、造り物を越えた、『本物』の凄みを魅せる。そして、その手に握られた、異様な剣。その場にある異質な存在で、唯一目に視えるその姿に、皆の足が止まった。

「早くっ、逃げてっ」

彼らの、おそれを敏感に感じ取った妖は、その場に縫いとめようと勢いを増す炎を易々飛び越え、制止しようとした稲穂が動くより早く、新たな生き餌を求めて駆け出した。

車の中で感じた、あの嫌な空気が迫るのを、おかみさんは感じ取った。運転手は、知らず背筋に寒気が走るのを感じた。誠人は、迫る化け物がまとう瘴気と妖気に、為す術もなく固まる。清士は相も変わらず上空に留まり、妖が人間たちに襲いかかろうとするのをただ見下ろし。誠人の両親は、命の危機にも気付かず、異様な風体の少年に忌避の視線を向けた。

視えていたとしても。人の身体能力で、それを回避することは、不可能だった。山を駆ける能力に関してだけを言えば、ここにいる者達の中で飛びぬけて高い能力を有しているそれに、かろうじて追

いつくことが出来たのは、唯一、翼を広げ、翔^かけた晃希のみ。それも、ギリギリで間へと滑り込み、その身で化け物を押し留めるのが精一杯だった。

勢いづいた突進を、吸血鬼の膂力で止める。魔術を紡ぐ暇もなかった。化け物の巨体を止めるには、片手では足りない。剣で斬りつけるにも、もう間合いが足りない。斬るだけなら可能だろうが、突進の勢いを相殺するには至らないだろう。たとえ倒せたとしても、あの巨体が出れば、誠人達もただでは済むまい。晃希は、やむなく剣を捨て、化け物の前に身を投げ出した。突っ込んでくる肉の塊を、全身で受け止める。

パツ、と、辺りに紅が散った。

勢い分の衝撃が、相手の体軀に比べて遥かに小さな身体に叩き込まれる。翼を広げ、空を掴み、後ろへ押される力に抗う。ボタボタと、足元に血の紅を、散らしながら。

「晃希っ！」

竜姫が叫んだ。

吸血鬼の膂力は、見事、妖の足を止め、ギリギリで誠人達を守っていた。だが、丸腰、素手のままで身をさらした晃希の身体は。

化け物の身体を覆う体毛は、決して普通の獣のように柔らかなものではない。まるでハリネズミの針のようで、触れば肌はたちまち切り裂かれる。しかも、体を覆う瘴気が肌を灼き溶かしていく。そして、なによりも。その、豚の様な鼻の両脇に生えた、鋭く凶悪な二本の牙の片方が、深く、晃希の肩口に突き刺さっていた。

あつという間に晃希の全身は血の紅に染められる。晃希は、焼けつくような痛みに顔をしかめ、呻きながらも、炎を生み出す魔術の呪文を唱える。

ボツと、何もない中空に赤々と燃える炎が生まれ、化け物の腹を焼いた。……だがそれは、昨夜見たそれとは比べ物にならないほど弱々しいものだった。妖は、熱がり身をよじりはしたが、それだけだった。その足りない炎の勢いを補う様に、数泊の後、力強い青い

炎が化け物の全身を覆う。

全身を焼かれ、さすがに焦った化け物は、牙に突き刺さった晃希を跳ね飛ばし、誠人の鼻先を掠めて炎から逃れようと駆け出した。ざりっ、と、化け物の体毛が、とっさに顔をかばった誠人の腕を擦る。

「おい、大丈夫か？」

一番間近にその様子を見ていた誠人が、血で汚れるのも構わず、晃希を助け起こす。

誠人に対して変わらぬ間合いにしながら、彼とは違う世界を見る大人達は、突然目の前に現れ、血まみれになって跳ね跳んだ少年の背に生えた、人ではありえない黒い翼のみ、見とめた。

得体の知れないものを、躊躇なく抱き起こす誠人と、本気で心配している表情で駆けってくる竜姫。晃希は、自分を抱える腕から香る血の芳香にめまいを覚え、反射的に誠人の身体を軽く突き飛ばした。「ちよっつつ、あんた、ウチの息子に何するのよ！」

この異常事態の中、その行為にいち早く我に帰った敏子が耳に刺さる怒鳴り声をあげた。つかつかと誠人に歩み寄り、庇うように彼を抱き寄せる。

「ちよっと、怪我をしてるじゃないあなた。血が出てるわっ、どうしたの、これ？」

転げた晃希を竜姫が抱え、彼の傷の具合を確かめた。傷はすでにふさがりかけていたが、しかし、すでにかなりの量の血が流れてしまっていた。晃希の瞳の奥に、血に飢えた衝動が揺らめいている。

元々白い肌が更に白さを増し、紅い瞳は人ならざる紅を増している。苦しいはずだが、晃希は誠人を気にして起き上がり、

「……お前、あいつの瘡気をあびたのか？」

誠人の腕を診るため立ち上がった。誠人の手を取り、袖口をまくりあげて傷口を確かめる。無数の引っかけ傷に滲む血を見て、晃希は渋い顔をした。

「……奴の毛に触れたんだな。まずいな、このままだと血に混じっ

た瘴気が全身を巡る。早いところ血抜きしないとヤバイぜ。死ぬ事はないだろうが、それでも向こう一カ月はベッドから起き上がれなくなる。」

魔物の身体を持つ自分が瘴気を浴びたとて、せいぜいが肌を焼かれるくらいだ。これ程に弱ってさえいなければ痛くもかゆくもない。しかし、ごく普通の人間の身体には大いに毒になる。

「え、血抜き……、って……、どうすれば……？」

晃希の言葉に戸惑う誠人。そんな彼に、晃希が次の言葉を紡ごうとするのを遮り、敏子は、

「ちよっと、うちの子に触らないでよ、この化け物！」

と、晃希の身体を突き飛ばした。

……この場の状況がまるで視えていない敏子にとって、目の前にいる晃希のみが異形なのである。普通でないもの、ましてや人間ではないかもしれないものである時点で、彼女の物差しでは、晃希こそが嫌悪すべきもので。まさか、たった今、彼に命を救われたばかりとも知らずに、その言葉を放った。

——化け物、と。

誠人は、見た。晃希が、ひどく傷つき、辛く、悔しそうな表情をするのを。

そして、敏子は見た。その言葉を放った自分に、非難の視線を向け、そして、彼を庇うために差し出した腕を、息子が振り払う瞬間を。

おかみさんと、運転手は見た。青ざめ、緊迫した表情で空を仰ぐ竜姫を。

そして。竜姫は、見た。空の上、ただ眺めているだけだった清士が、ピクリとその言葉に反応したのを。更に、晃希が気づいて空を見上げた。つられて、誠人も、二人の視線の先を追い、それを見

た。
——パサリと、翼をたたみ、元天使の狛犬が今、地へと降り立った。

新たな季を告げる訪問者〔3〕

「化け物っ、」

その女は、言った。

もう、どうでも良くなったはずだった。誰が、誰に何を言われようとも。それが、たとえ自分に向けられた言葉だったとしても。

ましてや、他人事。それも、元は兄であったあの、自分を下僕へ貶めた憎き相手に向けられたものであれば、尚のこと。

なのに、何故だろう。この感情は、なんだ？

清士は、自問自答してみた。が、分からない。けれど、無性にもやもやムカムカして、落ち着かない。

さつきも、そうだった。やたらと自分との違いを得意げに語るあれに、何故だか苛ついた。――悔しい、等という感情は捨ててきたはずであるにも関わらず。

そもそも、悔しい、という感情は、自分に誇りを持てなければ感じるはずのない気持ちだ。至らない自分が齒がゆいと、そう思えなければ、そんな感情は生まれない。

更に言えば、その感情を、『彼』に対して抱いたのだとすれば、それは、少なからず自分はあるに関心を抱いているという事になる。そうでなければ、あれに勝とうが負けようがどうでもいいはずであんな風に比べられたからって、苛つく訳もなく。

――ましてや。自分を負かした相手が、罵られたから『悔しい』だなんて。まるで、自分があれを認めているみたいではないか。

そんな、自分の心に戸惑いを抱きながら、気づけばいつの間にか地面へ降り立ち、あれを「化け物」と罵った女の前に立っていた。

だが。――狛犬になったとはいえ、霊体のままの天使の姿は、彼女の眼には映らない。

敏子は、自分の手を振り払い、晃希の元へ駆け寄った息子を呆然と眺めていた。その彼は、何故だろう、こちらを見ながら、自分で

はなく、すこし左にずれた場所を凝視している。その顔色は、あまり良くはなくて。

「……竜姫ちゃん、どういうことだい？ 何が、起こってる？」

普通の人間ならば、命にかかわる程の出血を伴う怪我を負いながら、まだ起き上がろうとする、その彼に、躊躇いなく手を差し出す竜姫と誠人とを見て、意を決したように、おかみさんが尋ねた。

「……、」

答えようとして、――しかし竜姫は、一瞬ためらう様子を見せた。

「信じて、貰えないかもしれないけれど。今、すぐそこに、一匹の妖がいるんです。それは、俺や……人間の魂を喰らおうと、狙っています。」

代わりにそう答えたのは、誠人だった。

「この、彼は、社を守護する者。たった今、僕らを食い殺そうとした化け物を、身体を張って食いとめ、僕らの命を救ってくれたんです。――彼は、確かに人間ではありませんが、決して化け物なんかじゃ、ない。」

じくじくと、滲む血が、止まらない。瘴気が、身体を巡る。力が、抜けていく様な感覚。それでも、誠人は真剣に訴えた。

「――誠人君……」

そんな、彼の後押しを受けて、竜姫は言った。

「今、この場には、私が使える神々が、その化け物を追い払うために集っています。そして、彼、晃希は、この社の狛犬の一人。」

「彼らが、一時的に化け物をこの場から追い払ってくれました。……けれど、あの様子ではすぐまた戻ってくるでしょう。その時、僕らがいては足手まといになるだけです。この場は彼らに任せて、とにかくまずはこの場所を離れましょう。……とりあえず、道場にも籠っていれば大丈夫だよな？」

誠人が、竜姫に尋ねた。

「ええ、そうね。あそこにはまだ、さっきの結界の余波が残っているはずだから、万一こいつがそっちへ向かったとしても、建物の中

にまでは手出しできないはず——」

どんどん悪くなる、誠人の顔色を心配しながら、竜姫は答えた。が、それを遮るように、

「ちよつと、あんた、訳の分からない勝手な迷信話にうちの誠人を巻き込まないでくれる？ 誠人！ 馬鹿な事言ってお母さんたちを困らせるのはいい加減やめなさい！」

と、敏子が叫んだ。

「——馬鹿なことじゃない！ ……ああ、僕もついこないだまではそう思ってた。でも、そうじゃない。今、ここにある現実が、事実なんだ。母さん、——今なら、母さんにも見えるはずだ。」

自分より、余程濃く神崎の血を受け継いでいるのだ。……あの日の自分と同じく、命の危機にある今なら。心の曇りさえ払えれば、きつと。

「——そうか、……そうだ。お前も、一応その血を継いでいたんだったな。……なら。」

そう言って、晃希が、誠人の腕を取った。

「なら、……竜姫の血には及ばずとも、今、この場を乗り切るためなら——。」

傷自体はただの引っかけ傷のはずが、瘴気の毒気で炎症を起こしかけている傷を見ながら言う。

「——誠人。俺に、血をよこせ。……ついだ。毒血も全部抜いてやるから、俺に血を吸わせろ。」

「——は、え、……ええっ!？」

その言葉に誠人は、更に顔を青ざめさせた。

昨夜の吸血シーンは、まだまだ記憶に新しく、衝撃もまだ生々しく残っている。……あの時感じた、己の感情も。

「……心配するな。量なんか奪りやしねえよ。お前の言う通り、今の状況なら、一時的にも、ここにいる連中に、常人には視ることのかなわない光景を、俺の魔術で視せてやれる。……力さえ、戻ればな。」

晃希の方は、もう本当に淡々と、この状況を脱却する為の手段の一つとして語る。今、差し迫る、妖怪ではない、得体の知れない事態を防ぐためにも、と。

「……本来なら男の血なんか吸いたかないが、緊急事態だ。贅沢は言ってられねえ。」

微妙に泳ぐ誠人の瞳に、晃希は言った。

「それとな、一刻も早く毒血を抜かなきゃお前、マジで手遅れになるぜ?」

「――晃希。」

竜姫が、彼の名を呼んだ。

「――誠人君……。」

そして、誠人の名を。

「……なら、とっとと済ませろ。」

一つ、ため息をついて。誠人は、観念して、腕を差し出した。胸の動悸を、押し隠して。

「一つ、貸しにしといてやる。」

「助かる――っ、て、は? 貸しだあ? 何言ってる。ついでに毒血を抜いてやるんだ、それで相殺だろう?」

……それ以前に、あの化け物から命を救われているのだ。むしろ借りがあるのはこっちだと分かっている、誠人は、

「俺の血はそんなに安くないぜ?」

……自分で言ってる寒々しい台詞を吐いた。――案の定、竜姫からは憐みの視線を向けられた。心に、現実には吹く木枯らしよりも冷たい風が吹き込む一方で、体中の血が頭部に集結し、赤面した顔は火が出る程熱くなる。

「……おい、大丈夫か? まさかもう毒が回ってるのか、――随分早いな……。ほら、馬鹿言ってるねえでとっとと貸せ。」

誠人からすれば、泣きたくなるほどの恥。それを晃希は見事なまでに綺麗に流し、適当にまくられ、弛んで落ちかけた袖を肘の先までまくりあげる。

高三男子にしては細く白い腕は、冬だというのに彼の几帳面な性格から綺麗に無駄毛の剃られた腕に滲む血の赤を、まずは軽く舐め上げた。

「えっ、……あっ？」

そうして、誠人が驚く隙に、気づけばあっさりと牙が肌の下へと埋め込まれていた。じわじわ滲むだけだった血が、その傷口からドツと溢れ出す。晃希は、傷口へと強く吸いつき、瘴気を含んで苦味のある血を飲み下していく。

そもそもが、炎症を起こし始めていた傷だ。そこをさらに傷つけられ、強く吸われているのだから、結構な痛みがあった。……とはいえ、目の前の晃希に比べれば、何て事の無い傷だ。誠人はあえて平静な表情を取り繕いつつ、吸いつく晃希をさすがに直視はできなくて、何となく視線を泳がせる。

だが、晃希が血を飲み下していく毎に、身体に蔓延^{はび}っていた倦怠感は確実に薄れてきている。お陰で、血を吸われることへの嫌悪感を抱かず済んでいる事もまた、確かで。ふと、見れば。昨夜程顕著ではないものの、晃希の様子もまた、変わりつつあった。

白い服についた赤い血は、未だ生々しいが、それよりも一層鮮烈な紅い色と、瞳が合った。ニヤリと不敵に笑って、晃希はもう一度、傷からあふれ出た血をぺろりと舐めた後で、指の腹で傷口を拭いた。すると、牙の後は勿論、化け物につけられた引っかけ傷まで綺麗に消えてなくなる。

「――あ……、」

後にはただ、流れた血がこびり付いてるだけで。それが無ければ、傷など元から無かったよう。

「――なるほど、薄いとはいえ、やっぱり多喜様の加護を受けていた血だな。さすがに神を宿した竜姫のものに比べれば劣るが……。」
指についた血を舐め、口周りについた血もササッと舐め取る。

「晃希――。」

彼の瞳から、飢えた灯が消えたのを見て、竜姫は安堵のため息をつ

いた。……少し、複雑な表情はしていたが。

「……助かったよ、——今なら、いける。」

ポンと肩を叩かれ、誠人は、わざとらしく咳払いをし、

「……う……、いや、こちらこそ……その……、助かったっていうか。……だいぶ楽になった。」

と、視線を泳がせたまま言った。そして、晃希の耳元で、

「——あー、あの……、さっきのは忘れてくれると助かる……んだけど……。」

ポソツと囁くように呟いた。と、不意に晃希の肩がふるふると僅かに痙攣し出した。口元を手で覆い隠している。

誠人の台詞を聞いていなかった竜姫は、

「ちよ、ちよっと晃希、どうしたの？」

と尋ねるが、

「あつ、こらっ、笑うなよ！」

誠人は血濡れた服の襟元を思わず掴み上げた。晃希は、笑いを堪え切れずに嘔き出した。

「ふっ、竜姫も随分な変わり者だと思ったけど——、お前も中々面白い奴だな……。パツと見は真面目なだけのつまんねーヤツかと思ってたのに……」

「——きゅ、……吸血……鬼……？」

けらけらと騒いでいる——その、背後から聞こえた怯えた声に、竜姫と誠人が振り返る。晃希は、表情を青ざめさせた敏子を、正面から見据えた。

敏子は、その視線に射抜かれ、そろそろと後ずさろうとして——その隣で真剣な眼差しをこちらへ向ける息子と目が合い、咄嗟に、動くことができなくなった。

「……傷が、消えてる——。じゃあ、本当にこの彼は……。」

吸血という、背徳的な——許されざる行為を目の当たりにしたおかみさん達も、さすがに息を飲んだ。だが、当人達のあっけらかんとした軽い空気につられ、それ以上陰悪な雰囲気になる事はなく。

「……ええ。俺は、人間ではありません。……視せて差し上げましょう。普段、あなた方が決して視る事の出来ない世界を——。」
笑みを引っ込め、晃希は真面目な表情で言った。

「そして……視えなくとも、確かに存在している者達の姿を——。」
左手を握りしめたその手の甲に、右手人差し指を滑らせる。指の腹を傷つけ出した血で小さな魔法陣を描き、呪文を唱える。ピツと爪で手の甲を傷つける。

プクツと膨れるようにあふれた血に、右手をかざし、尚も呪文を唱え続けると、あふれた血が、玉のように固まり、フワツと傷口から浮いた。ちょうど、真珠ほどの大きさの、紅い紅い粒を、晃希は人差し指と親指とで摘まんだ。

液体であるはずのそれは、質量を備え、本当に紅い真珠のように、晃希の左の掌へ転がされる。晃希は、その粒をギュツと握り締め、さらに術を重ねていく。次に開かれた彼の掌に、あの紅い珠は無く、紅い色をした錠剤が四粒、乗っていた。

——血を媒介にした、魔術。

「あ……、もしかして、あれも……。」

竜姫は思いついて、納得したように頷いた。

学園を後にしたあの晩の、あの時の紅い粒子くすりも、クラウドの眼を眩ます為にと貰ったあのカプセルも、おそらくは。——どうりで詳細を話したがらなかったはずだ。

血を吸われる、というのも中々に背徳的なイメージが付きまとうが、しかし受身側である以上、それは単なる被虐趣味程度で片付けられる。……だが。血を飲む、ということは、それ以上に精神的嫌悪を伴うものだ。

——晃希の、血だ。自分は今もう、今さら別に気にしないが……。

竜姫は、チラリと窺うような視線を一同に向ける。

「大丈夫、心配するな、竜姫。」

晃希は、そんな竜姫の前で、再び拳を握りしめた。パキツと、その手の中から鈍い音がして。彼は、粉々に砕いた粒子を、風に乗せ

て辺りに撒いた。フワツと、紅い霧が舞い、辺りに霧散して行く。風下にいる、おかみさん達、そして誠人の両親たちの方へと。

サワワ、と、風が吹き抜ける音がして。足元の枯葉が、風にあおられカサカサと乾いた音を立てる。粉っぽい空気に、思わず目を閉じた彼らの耳に、

「グウオオオオン、」

と、身の毛のよだつような咆哮が届いた。

ハツとして眼を開けた敏子の眼に、今まで視界に無かったものが映る。まず、目の前に立つ、白い羽を背に背負い、頭頂に光る輪を乗せた、一人の男の姿。――それは、聖書にある、いわゆる天使そのものの出で立ち。

「晃希っ、気をつけろっ！ そっちへ行ったぞ！」

そう、人語を操り叫んでいるのは、九本もの尾を持った異形の狐。

「誠人っ、そこ退いてろ！」

もう一人、その背後から、色鮮やかな紅い髪をした艶やかな女性が、到底人間が駆けられるはずもない崖を軽々駆け昇ってくる。

それよりなにより。彼らの前を、図体があり得ないほど大きな、イノシシの様な容貌をした化け物が、こちらへ向かって突進してくるではないか。

晃希は、すぐさまさつき放り出した剣を取りに駆けだし、誠人は素早く、

「早くっ、とにかくここを離れましょう！」

と、立ちすくむ大人達をせきたてた。

晃希は、剣を手に、化け物へ向かって走る。誠人に促され、ハツと我に帰ったおかみさん達は、しかし、目の前の光景から、目を背けることが出来なかった。

青い炎が、縦横無尽に駆け、化け物を追い、高い笛の音に呼応して生まれる風の刃がその身体を薙ぐ。パサリと、黒い翼を広げた晃希の身体がふわりと宙に浮き、向かってきた妖の鼻面へ剣を叩きつけた。

「グウオオオオオンッ、オオオオン！」

パツと血飛沫が弾け、バタバタっ、と血の滴が落ちた。

「あの、化け物と闘っている彼らこそが、この社の神々。稲穂と、久遠。風と、大地の恵みを司る、豊穰の神々です。」

竜姫は、戦局に目を向けたまま、振り返りもせずに告げた。

「――この社の主神である多喜は、半年前の騒動の折、この世を去りました。」

言いながら、竜姫は印を結ぶ。

「――今、この社における主神は……、」

台詞を切り、瞑目して、竜姫は小さく神呪を唱えた。ズザザッ、と、すぐ脇に立つ木の枝に降り積もっていた雪が、突如崩れて落ちてきた。落ちながら、白い氷の粒は見る見るうちに融け、透明な水となって、伸ばされた竜姫の掌へ落ちる。

それなりの重量があったはずの雪の塊だった水は、まるで水あめみたいにとろりと竜姫の腕へ絡み、纏わりついた。

「この、私――。」

くるりとこちらを振り向き、粘度を増した水に包まれた手で、宙をなでる。すると、まるでそこに視えない壁があるかのように、掌から水がこぼれおち、透明な水のカーテンが描き出されていく。――ただの人間である彼らと、人のくびきから外れた存在とを別つかように、それは、壁となる。

「っ、竜姫ちゃん？」

誠人が伸ばした手は、水の障壁に阻まれ、向こうへ抜ける事を許しては貰えなかった。

「そこで、見ていて下さい。」

彼女が、水を払うように腕を一振りすると、纏わりついていた水は、あっさり無数の水滴となって落ち、地面に水たまりを作る。竜姫は、空を仰ぎ見た。陽が傾き始めた、空を。

あの日とは違う。あの日の様な重たい雨雲は無く、晴れ渡った空に浮かぶ太陽が、眩しい。あの日の辛い記憶を、今日この日、新し

い記憶に塗り替えるために。

竜姫は、とっておきの、秘術のための印を結ぶ。全神経を集中させ、神呪を唱える。それに呼応するように、キンと、冷たく澄んでいた空気が、更に清浄さを増し、化け物の咆哮に混じる嫌な空気が端から排除される。日だまりにわずかにあった柔らかな空気も、硬く透き通った空気へと挿げ替えられていく。

ドクン、と。心臓の鼓動が一つ、高く、胸の中にこだました。ドクン、ドクンと、脈打つ心臓の拍動に沿うように。ゴウツ、と、清らかな空気が竜姫へと引き寄せられ、彼女を中心に渦巻き始める。

まるで、小さな竜巻のような暴風に吹き飛ばされた雪の粉が、風に融け、風の渦に共に巻き込まれていく。それは、太陽の光を浴びてキラキラと輝き、雪解けの水が、まるで水龍がとぐろを巻いているようにも見えた。実際、風に弄ばれていた水滴は次第に集まり、形を成し、そして――。

「山に棲まう水の精よ、神龍の名において命ずる。平穏を乱せし邪悪なる物を縛し、洗い清めよ！」

竜姫の叫びに、渦巻いていた水流が、むくりと頭をもたげた。そこには、確かに龍の頭があり、一瞬の間を置いて、それは化け物へと牙をむいた。

一筋、矢のように水の体躯が翔^かけ、長い身体が化け物の身体へと巻きつき、グツと締め上げる。

化け物の針のような体毛も、水の身体には効果は無い。体躯を取り巻く瘴気も、清らかな水に弾かれるどころか、体毛の奥まで滲みる水滴に清められ、無効化されていく。

「――「竜姫っ！！」」

三人分の叫びが、重なり、響く。

動きを鈍らせた隙を見逃さず、久遠は、狐火を操り、炎蛇^{えんじや}生み、化け物の四足へ巻きつけ、拘束を更に強固なものとする。――炎はじりじりと体毛を焼く……が、化け物の厚く丈夫な皮膚に阻まれ、決定的なダメージは与えられない。

動きの止まった化け物に、稲穂が風の刃を浴びせるが、体の表面を切り裂くばかりで、やはり決定打にはなりえない。稲穂は、それを見るとすぐに自分からの攻撃を諦め、竜姫の水龍と久遠の炎蛇とを援護し始めた。

水龍を操る竜姫は、動けない。清士はと言えば、ただ突っ立ったままで。苦しみ、悶える化け物の前に立ち、剣を構えたのは、やはり晃希であった。

——だが。この場の誰も気づけていない事を、唯一見抜いていた者が、唯一人、居た。清士は、スツと目を細めて、彼を見た。背後では、畏れを抱きながらも、何某かの期待を込めた視線が二つ、自分を通り越して晃希を見つめる。その一方で、いかにも「天使」らしい姿をしている自分に向けられる視線はなく。敏子たちが見詰めるのは、ただ、凶悪な化け物の姿だけ。

誠人は、歯がゆそうに戦いの成り行きを、壁の向こうから眺めていたが、剣を手に立つ晃希の姿をみとめ、ホッと肩の力を抜いた。昨夜の圧倒的な強さを目の当たりにした彼にすれば、血を吸い回復した晃希が、あの化け物に負けようなどとは微塵も思っていないようだった。

——しかし。清士には、分かっていた。どんなに飄々と、平気な顔をして立っていたとしても。幾重にも重ねた絆で繋がった彼には、晃希の身体の状態など、手に取るように分かった。

血を吸い、一見回復したかのように見えるが——。実際は、血と共に摂取した瘴気の毒気に体を蝕まれ、本当なら立っていることすら厳しい状態のはず。……もちろん、通常ならば、いくら身体に瘴気を取り込んだとしても、ダメージなど喰らいはしないだろうが、自分に魔力の大半を奪われ、先程の怪我であれだけ血を流して、貴重な残りの体力魔力をも失った身体では、もう瘴気に抵抗する余力すら残っていないはず。

無論、あれがあの子の——神の力を宿した力にあふれた聖なる血であれば、結果は違っただろうが。……唯人に比べればマシとはい

え、力の弱い血をほんの僅か口にただけでは——……回復するどころではない。

良いじゃないか——。清士は心の中で思った。あの程度の化け物、片手で祓える。このまま放っておけば、あいつは勝手にやられ、自分はあれの枷から抜け出すことができる。そうしたら……。

——そうしたら、我は……？

死のうと、——死にたいと、そう思っていた。もう、生きる意味もない。生きたいとも思わない……と、そう——。

だが、自分を通り越して、あれに向けられた期待の視線に、モヤモヤしていた胸のうちの感情が、はつきりとした形を取り始めているのだ。——悔しい。それはもう、誤魔化しようのない、確かな思い。

何故、どうして、いつも。ついさっき「化け物」として視られていたはずのあれが、こうしてその存在を認めてもらえるのか。——どうして、自分はあんなれないのか。

耳の内に、声が響いた。

——お前とは、違うから。——

何度も何度も、あいつが自分に投げかけた言葉。その度に、戯言と切り捨ててきた自分。だが、こうして見てみれば、確かに違う。

あの人に、そしてあいつにあって、自分にはない物は、きつと、沢山あって。——それが、悔しくて。自分だって、と、思う。

自分が、越えるべきものは、まだ、ここにある。決して、消え去ってなどいない。——ならば。もう、失くしたくはなかった。

晃希が、地面を蹴る。剣を掲げ、そして化け物の脳天めがけて刃を振り下ろす。

「グアアアッ！」

ガキつと、刃が骨に食い込む鈍い音がして、化け物が呻く。——が、そこから先へ、刃が進まない。晃希の表情が曇り、しかめられた顔の端を、冷たい汗が伝った。

化け物は、深く深く首を沈め、力一杯振りかぶった。その勢いに、

晃希は振り飛ばされる。痛みに怒り狂った化け物は全力で暴れ、トドメの一撃と油断し、緩んだ水龍と炎蛇の拘束を無理やり引きはがした。

何本もの木々をなぎ倒した挙句、太く丈夫な木の幹に叩きつけられ、息を詰まらせた晃希は、化け物が迫るのを目にしながら、動けずにいた。

「――っ、ちくしょうっ、やべえっ！」

なんとか立ち上がろうとするも、足に力が入らない。このままでは、本気でまずい。飛ばされた拍子に切った額から流れる血。その傷の上を、冷汗が幾筋も伝い、ピリピリと痛む。打ちつけた背はもう、痛いなんてもんじゃない。

それでも。背後の幹に体重を預け、足に負担をかけぬようそろそろと立ち上がり、迫る化け物に剣を向ける。――ここで死ぬわけには、いかないから。

歯を食いしばり、氣力を奮い立たせる。その後ろから、パサリと、場にそぐわない、軽い羽音がした。

視界の端を、サッと何か白い物が通り過ぎて。そして。突如。

「ウゴオオオオオオオオオオオ」

と、断末魔の叫びが響いた――。

そして、新たな運命は廻り出す

見れば、手に晃希の魔剣を携えた清士が、背負った白い翼をたたみ、ふわりと着地するところで。その、彼の前では頭と胴とを真っ二つに裂かれた化け物が、血の海に崩れ落ちていた。

「――お前……。」

いつの間にか奪われていた己の魔剣を手にする清士を見て、晃希は唖った。自分の力を具現した剣であるあれば、まさに魔力の塊。今、あの剣を形作る魔力をも彼に奪われてしまえば、もう、清士を抑えておける力も残っていない今の自分に勝ち目はない。

「――立て。まだ、仕事は残っているんだろう？ 何だ、偉そうなこと言っておきながら、いざとなったら何もできない役立たずなのか、お前は？」

清士は、嘲笑を浮かべながら――奪った剣を放って返した。くるくると危険に回転しながら飛んできた剣を、

「おいっ、ふざけた真似してんじゃねえ！」

と、悪態をつきつつ、間一髪でよけ、ガッと背後の木の幹に突き刺さったその柄を握った――その瞬間、晃希の表情が驚愕一色に染まった。

「――お前、これ……！？」

柄を握った瞬間、流れ込んできた大量の魔力。――魔剣を媒体に還されたのは、まぎれもなく元は自分のものだったはずの、清士の魔力だった。

その清士の背後で、ボロボロと、化け物の輪郭が粒子と化し崩れ始めた。崩れて風に溶けた化け物の邪気は、竜姫が術で生み出した清浄な空気に散らされ、消えていく。

「――早くしないと、化け物ごと消えるぞ。」

その台詞に、晃希は自分の耳を疑った。思わず自分の頬をつねりあげる。――ちゃんと、痛かった。

「……お前、なんかその辺で変なもん拾い食いとかしなかったか？魔剣をしまい、それから魔力を取り込み回復を試みつつ、晃希は言わずにはいられなかった。」

「それともどこかで頭でも打ったか、いや、それとも……？」

怒りに染まった表情をした清士が、つかつかと肩を怒らせながら晃希へと歩み寄る。ガッと、勢いに任せて着物の襟を掴み上げ、

「……黙れっ、我は天使だっ！ 天使が人や獣の食い物など口にする訳なからう！ もちろん頭も打っていない。我は至って正常だっ！」

天使であることを見せつけるかの様に白い翼をばさりと広げ、清士が吠えた。

「……たとえ天から見放されようとも、お前の血を受け悪魔の眷族になり下がったのだとしても——魂を、奴らに縛られたとしても。」

——我は、天使としてありたい……。」

怒鳴った後、小さく、ほとんど独白に似た呟きを口にしながら、清士は掴んだ襟を放し、代わりに右手を晃希の胸に当て、目を閉じた。ふと見ると、清士の白い翼の白が聖なる光に包まれ、それと同じ光が彼の右手に宿っている。光は、さらに晃希を包み込む。ふわりと柔らかく暖かい光は、ゆっくり優しく、晃希の身体を癒していく。

「！ お前これ……、癒しの力——！」

そう、それは天使の癒しの力。——魔物に堕ちれば失われるはずの、神から与えられし聖なる力。……魔物は驚異的な治癒能力を持つ。もちろん、悪魔も。——だがそれは、あくまで自分自身にのみ有効な力であり、その能力を人に分け与えたりすることはできないし、攻撃魔法は数あれど、治癒系の魔術など存在しない。

「——お前、天使の力を失ってないのか？」

「……これは、我の力ではない。」

晃希の問いに、清士は拗ねたようにプイッと顔をそむけた。

「あの時……、餞別せんべつだと言って、ミカエルさまに頂いた力だ。」

——ミカエルの、神剣に貫かれ、光となって消えるのだと、そう

思った時。その、最期の瞬間に言われた言葉。

——神が我らを生みだして後の今まで、堕ちた同胞は数知れず——。神に創られ、神の使徒として働く我らが住まう、天獄という名の狭い箱庭を飛び出して……。貴方は、どう生きますか？　どんな未来を望みますか……？——

「我が望むことなど、今も昔も変わらずただ一つだけ。兄を越える事、それだけだ。……サハリエルは死んだかも知れないが……まだ、その力と心を継いだお前がいる。——見てろ、今は無理だとしても、いつか、お前に参ったと言わせて我の前に跪かせてやる。」
だから、今、こんなつまらない事で死んで貰っては困るのだ。

「——いつか、その日が来るまでは……癪ではあるが……いいだろう、ここにいてやる。」

あくまで、彼らしく。偉そうに。——だが、自分でもらしくない事を言っている事を分かっているのだろう、……瞳を落ちつかないに宙に彷徨わせながら言う。

——はまった。

一番頑固で厄介な歯車が今、ピタッと所定の位置に収まった。これで、後は。

「最後は、俺の仕事だな。」

上から吊られていた緊張の糸がプツンと切れたようにへたり込む大人達をチラリと見やりながら、青い顔で駆けてくる竜姫と誠人、久遠と稲穂とを迎える。

「晃希っ、」

「おいっ、大丈夫か？」

清士は、うるさいのが来たとばかりに渋面を浮かべた。

「——ああ、悪い。ちよっとへま踏んだ。でももう、大丈夫だ。コイツのおかげでな。」

それを可笑しそうに見ながら、晃希は彼を指して言う。

「ふん、口だけ達者な間抜けが主では、我の沽券にかかわるからな。」

それに対し、減らず口を叩く清士。

「清士……、」

竜姫は、彼の表情を正面から見据え、彼の名を呼び、

「ありがとう、援^{たす}けてくれて……。」

腰に添えられていた彼の両の手を取る。そっと、それに自分の手を重ね、包み込むように。その温もりに、清士は、

——そういえば……こうして誰かと触れ合うなど……兄が堕ちて以来かもしれない……。

ふと、思った。さらに思い返してみれば、こうして自らの行いに對して礼を言われるなど、それこそいつ以来だったろうか？

——こういうのも、悪くない……、かもしれん。

だが、昨日の今日、さっきの今では、そう簡単に素直にはなれなかった。だから、

「ただの気まぐれだ。」

と、そっけなく言って、そっぽを向く。けれどその瞳にはもう、冷めた色は無く、生気に満ちた光に彩られていた。

「それより、早くしないと、本当に手遅れになるぞ。」

そっぽを向いたまま、清士が言う。

「……ああ、分かっている。……久遠、稲穂様。手を貸していただけますか？」

もう、化け物の身体はあらかた崩れて消え、もう原形を留めてはいなかった。ただ、黒っぽいグズグズした塊があるだけ。それすらも、時を経るごとにサラサラと溶けて消えていく。その中に、白く光る光の珠が二つ。常人にはもちろん、靈視能力を得た誠人にも、神を宿した巫女ながら、まだ人間である竜姫にさえも視る事の出来ないそれ。

霊体すらも形作ることの出来ない、不完全なカタチの魂を今、視る事の出来るものは、ただ四人だけ。久遠、稲穂、清士、そして清士。

「稲穂様、申し訳ありませんが、身代^{かたしろ}になっていただだけませんか？」

魂の取り扱いに長けた晃希と、悪魔に堕ちた清士のみが感じる事の出来る、魂に残る現世への未練。このまま強制的に送ることも不可能ではないが、ただでさえ不安定な魂をそんな風に扱えばどうなるか――。馬鹿でも分かるだろう。

本来ならば、魂は霊体の形を取り、自らで未練を果たそうとする――中には怨霊と化し、人に害をなして祓われる連中もいるが――。だが、魄^{はく}を失くした彼らは、独力でそれをなすのは不可能。何かに依り憑き、形を借りねばならないのだが、不完全な魂を身に降ろすには、足りない部分を補ってやれなければならない。本来、そういった事に長けた巫女であるが、今の竜姫にこれは荷が重すぎる。そして、久遠は。力は十分だが、人型ではない彼の身体は、人の魂の器には適していない。

「――無論だ。遠慮することはない、むしろこちらからお願いしたいくらいだ。」

稲穂は答えた。――これで、一つ。だが、魂はもう一つある。

「……不本意だが、滅多にない気まぐれをもう一度だけ起こしてやろう。」

むすつと渋い表情をしながら、清士が言った。

「我を使え。……後で貸しにツケといてやる。」

その言葉に、久遠は酔を飲んだような表情を浮かべ、ハッと空を仰ぎ見た。

「なっ、何の天変地異の前触れだ!? 大雨がつ、いや、槍が降るかもしれないぞ?」

「……前言撤回してやろうか、狐。」

清士は冷やかな目線で見下ろす視線で刺すように睨みつけ、低い声音でぼそりと呟いた。

「清士、今は時間が惜しい。頼む、協力してくれ。」

晃希が、軽く背を叩いて言った。

「ああ。久遠なら後でしばいておくから、今は力を貸しておくれよ。――これを逃したらアタシらはこれからずっと、深い後悔を抱えて

生きていかなきゃなくなる。」

稲穂は、臆面もなく頭を下げて言う。

——悪くない、と。そう思う。少し、心を傾ければ、傾けた分だけ確かに還ってくる。こんな確かな気持ちに向けられたのは……もしかして、初めてだったかも知れない。

そもそも、狛犬として魂を縛られた今ならば、一言命じればいいだけの事を、わざわざこうして頭を下げてまで「お願い」されているのだ。それは、陥とされても、確かに自分の人格を認められ、尊重されているという事。

清士は、心底、今自分が在るべき場所、自分の居場所がここなのだと理解し、納得した。まあ、まだ、晃希のように従順に仕える気にはならないが……。

「いいだろう。さすがにこのまま見殺しにしては、我も寝覚めが悪くてかなわんからな。」

清士は頷いた。

「……ならさっそく、始めるぞ。」

晃希は、ふわふわと頼りなく浮かぶ光の球を、そっと壊さぬように掌に掬い上げる。まず一つ、より白く美しく輝く魂を、稲穂の元へと運ぶ。

「——失礼します。」

晃希は、光の珠をそっと彼女の胸へ押しつけ、そのまま体内へと押し込み、埋め込んだ。珠の全てが収まりきったところで、彼女の胸に手をあてたまま、埋めた魂へと魔力を使い、働きかける。稲穂の神気をかき集め、仮の器を作り出し、それと魂とをなじませる。

その後ろで清士は、もう一つの魂を無造作に掴み上げた。悪魔に堕ち、晃希の魔力を継いだ彼は、自らの胸へ、晃希がしたのと同じようにそれを押し込んだ。

と、ふと、二人の面差しがぶれ、彼らのものでない、別人の顔が重なって視えた。今度は、竜姫にも、誠人にも、そして晃希の魔力で一時的に霊視能力を得たおかみさんや、敏子たちにもはっきりと

視える形で。

「叔父さん……、に……叔母さん？」

そう、その顔には見覚えがあった。

「あれは……優花ちゃんと正寛さんじゃないか——？」

驚いく声が、おかみさんの喉から絞り出された。

「こ、今度は何なの……？」

次から次へと、息を継ぐ間もなく立て続けに起こる異常事態に、敏子は息も絶え絶えに呟いた。

「……よく見ておけ。これが、お前が目をそむけ続けた現実。そして、お前が捨て去った世界だ。」

久遠は、竜姫達の傍を離れ、座り込む彼女の前に立ち、言い放った。
「あれは真正銘、半年前の騒動の際、我らが多喜様と、多喜様がお産みになった次代の神を守って、先程の化け物に魂を喰われ亡くなられた先代、優花様と正寛様の御霊である。」

「喰われたって……、あれは……事故じゃなかったのかい？」
おかみさんがこぼした。

「……言ったところで、誰が信じる？　こうして、現実を目の当たりにしながら尚、現実を見ようとする輩すらいるんだぞ？」

必死に、目をそむけようとする敏子を見て久遠が言った。

「久遠、ちょっといいか？」

優花と、正寛の魂を宿し、一時的に己の意識を眠らせた稲穂と清士とを連れた晃希が、そのすぐ後ろから声をかけた。

「その件について、そちらの方々にきちんとご説明なさいたいそう
だ。」

ぺこりと、正寛・清士が軽く会釈をした。

いつも居丈高で、傲岸不遜な清士にはありえない仕草。表情も、にこにこした人の好い微笑みを浮かべていて。

一方の優花・稲穂は、元の妖艶さと凄みは多少薄れているとはいえ、まとう雰囲気はじつによく似ていて。まさに、肝の据わった姉御肌といった感じだ。

「……おかみさん、それに……姉さん、義兄さん。」

それぞれの目を順繰りに、しっかりと見据えて、優花は口を開いた。その口から出てきた声は、稲穂のものではなく――。

「ああ、確かに優花ちゃんだ。このアタシが、優花ちゃんの声聞き間違える訳ない。」

目に涙を浮かべ、おかみさんが言った。

「過日の件ではご迷惑とご心配をおかけしました。」

優花は、礼儀作法の手本さながらの綺麗な礼をもって、おかみさんへ感謝と謝罪の意を示した。

「……そんなの、いいんだよ。それよりほら、あたしらなんかより竜姫ちゃんに言っておあげよ。……長くは、居られないんだろう？」

もう、本当に……逝っちゃうんだろう？」

優花は、その問いには答えなかった。しかし、彼女が浮かべた寂しげな笑みは、どんな言葉よりもその事実を伝えていた。

「あの娘の為にこそ……、私は真実を伝えねばなりません。」

そして、優花は語り始めた。多喜の寿命の事、多喜が産んだ次代の神の事、そして、それを狙って社を襲ってきた幾多の妖達と闘いを繰り広げたあの日の事を……。

「私達は、力及ばずあの化け物に喰われ、命を落としました――。」

そう、覚えている……。必死に自分たちを呼ぶ、娘の声。泥に埋もれていく、竜姫の姿――。厳しい現状の中に、一人残して逝くことが、たまらなく悔しくて。

「私が語れるのは、ここまでです。」

そう言って、優花は、自分の後ろでじっと聞き入る晃希の背を押し、自分の前に立たせた。

「あの日から、今日までの事は、きっとこの子の方がよほど詳しいはず。」

そう言って、ポンポン晃希の肩を叩き、

「……教えてちょうだい。あの日からの、あの娘の事を――。」
母の笑みを、晃希へと向けた。

「つ、そう言う事なら、俺より久遠の方が……。」

言いかける晃希の口を手でふさぎ、優花は笑みを浮かべたまま首を左右に振る。

「確かに、一緒にいた時間は、あの子のほうが長いかも知れないわ。でもね、あの娘の気持ちと現状を一番良く分かっているのは、あなたでしょう？」

有無を言わせないその表情には、見覚えがあった。——ああ、確かに親子なんだと、晃希は思った。

「それに今、あの娘や……稲穂様が一番信頼しているのはあなたの様だから。」

「分かりました……。そう、おっしゃるなら……。ご説明しましょう。」

そして、優花の話を継ぎ、その後の話を始める。竜姫の背負った運命を——。

最後の壁

これは、きつと夢。悪い夢を見ているのだ。早く、目を覚まさなくては――。

敏子は、滔々（とうとう）と語られる、嘘のような話を右から左へ聞き流しながら思った。すぎる様に、旦那のスーツの袖を掴む。その隣で、おかみさんは目を真っ赤にして号泣していた。その背を叩きながら、運転手も鼻を鳴らしている。

「――竜姫は今、巫女としても、神としても、重いものを背負っています。でも、だからこそ俺が、必ず彼女を守る。」

晃希は、力強くそう言った。

「これは、多喜様より賜った命であり、また、俺自身の望みであり、誓いでもある。だから、そのためにも、竜姫を、ここに住まわせてやって欲しい。」

「――母さん。」

誠人は、今にも心労から失神してしまいそうな母親の前にしゃがみ、その瞳をまっすぐ見据えて言った。

「今まで、信じてこなかった事を、いきなりこうして目の前に突きつけられて、ショックなのは分かる。でも、逃げても、目を逸らしても、これは確かな現実なんだよ。ねえ、目を逸らさないで。受け入れる事は無理でも、せめて、認めてあげる事はできない？」

――と。

「……そもそもが、信じるに値しない話だが、私には何より理解しがたい事実が一つある。誠人、お前は何故そうやってこの連中の肩を持つ？」

それまで、事態を傍観するだけだった人物が、重々しく口を開いた。「そもそも、どうしてこんな所にいる？ 今、学校は試験期間中のはずだろう？ 生徒会長であるお前がその学校を離れて何をしている？ 何だってこんなくだらない事に首を突っ込んだ？」

怒鳴っているわけではない。落ち着いた口調。——だからこそその凄みのある声音。

「……それは……」

誠人はチラリと背後の天使を見やり言葉を詰まらせた。見れば、晃希や竜姫、久遠も揃って彼を見る。

「ああ、我が道案内のために連れてきた。」

「あー、えーと。だから、いま晃希が言ってた通り、この二人が学園を離れたのを追いかけてようとした彼が、俺をここへ連れてきてたっていうか……まあ、そのまま巻き込まれた訳だけど……。」

少し、気まずそうに視線を泳がせたが、しかし、すぐに態度を改め、「でも、俺は真剣ですよ。確かに巻き込まれた形ではあったけれど、こうして関わって、真実を知った以上、俺はもう既に当事者の一人なんです。何より、俺の血の半分は確かに、彼らと繋がっている。その証拠に、こうして彼らを視る事ができている。けれど、俺にはそれ以上を成す力はありませんから。だからこそ、自分にできる事をする。」

そう、言っただけだ。

「父さん。貴方は、熱心なキリスト教信者ですよ。日曜の度、教会へ礼拝へ行くのを欠かしたことはないし、日々の祈りを怠ることも無い。その、貴方が熱心に信じる神の僕であった、この天使をも、貴方は否定するんですか？　自分で信じていたものを、貴方はそれを自分で否定するんですか？」

正直、天使としてあるまじき存在だった上、実際天からお払い箱になったとはいえ、彼は確かに天使だったのだ。その存在を否定するという事は、即ち彼が仕えていた神をも否定するという事。

「俺は、あることを彼に——晃希に頼んであるんです。彼は、人間ではありません。父さん、母さん、貴方達も見ていたでしょう？　彼が、魔術を操るのを。彼は、他人の記憶をいじることまでできるんです。」

息子の言葉に、敏子は耳を疑った。

「あなたっ、まさか!」

「――最終的に、貴方達が納得しないなら、最後手段として能力を行使することを、俺が許可しました。……だけでもちろん、できるならばそんな手に頼りたくはない。お願いです。現実を、見てください。」

そう必死に、真剣に訴える誠人に、救いの手を差し伸べたのは、おかみさんだった。

「あんたら、竜姫ちゃんだけでなく自分達の息子ですら信じられないのかい。」

呆れたように、彼女は言った。

「自分の目も耳も、これまで信じてきたはずの事すらも、息子も、何もかも信じられないなら、あんた達、この先何を信じて生きて行くんだい?」

おかみさんは、誠人の肩を叩き、

「大丈夫、アタシにまかせな。」

そして、晃希の紅い瞳を恐れる事無く見て笑い、

「あんたには礼を言わなくちゃね、この町に住む者として。そして、この町に住む人間の代表として。竜姫ちゃんを、そして先代と次代の我らが神を、さらには優花ちゃん達まで、皆、アンタが助けてくれたんだね。それに、あたし達の命も。」

「おかみさん、信じてくれるの?」

竜姫が、驚いたように言った。

「当り前だろう、何年この地に住んで、どれだけこの神様にお世話になってると思うんだい。まあ、恥ずかしながらこうして頭でしっかり理解したのはこれが初めてだがね……。でも、きっと本当はずっと前から知っていたことなんだろうね……。」

隣で、運転手のおじさんもうんうんと頷いている。

「もう何も心配する事はない。おかみさんを味方につけた、といことは、この町が、君達の味方なんだから。」

「この間はなんだかんだで押し切られちゃったけどね、今度こそは

負けないから。――うちの娘になんなさい。」

おかみさんは、優しく微笑んだ。

「さあ、そうときまったら早く帰ってダンナをせっついてこなくちゃ。ねえ、杉内さん、もうひとつ走り頼んでもいいかねえ？」

「……あなたに頼まれて断れる人間なんかこの町にはいませんよ。」
さっそく動き出そうとするおかみさんを、

「待ちなさい、私達はまだ承諾していない。無法な無茶を通すおつもりなら、訴えますよ？」

と、誠人の父親が呼び止めた。

「何だい、何か不都合があるのかい？」

「当然だ。そんな訳の分からない理由のために他に身寄りのない姪を放り出したなどと会社に知れたらどうなるか……！」

おかみさんが、カッと顔を赤く染め、反論しようと振り向く前に、バキッと、鈍い音が響いた。そして、振り向いたおかみさんが見たのは。

「父さん、それ以上言ったら本気で軽蔑するよ？」

痛そうに顔をしかめ、赤くなった右手をプラプラ振っている誠人と、その足元で尻もちをついた彼の父親の姿だった。その頬には殴られた跡が、はっきりくっきり赤く腫れあがっていた。

「ねえ、聞いてたでしょう。竜姫が、どれだけ辛く、重い宿命を背負っているのか。それでも、自分の為より他人の為に動こうとしているのに、貴方は自分の身の可愛さのためだけに、それを邪魔するの？」

そうして、誠人は疲れたように溜息をついた。

「――ごめん、竜姫ちゃん。本当に、ごめん。」

当事者になった今だからこそ、心に突き刺さる、両親の言葉の数々。改めて、自分の身に降りかかって初めて、本当に、あの時自分の吐いたセリフの痛みがよく分かった。

「――晃希も。手間を、かけさせる。」

誠人は、自分の力のなさを呪いながら、悔しげな表情できつく手

を握りしめ、言った。

「もういい。もう、これ以上何を言っても無駄だろう。……俺の両親ながら恥ずかしいけど、俺にはもう手立てがない。……頼む、力を、貸してくれ。」

——明け渡した身体の奥で。そう言って、頭を下げる誠人と、渋い表情をする晃希。それを信じられないものを見る目で眺める誠人の両親とを見比べ、清士は一人、小さくため息をついた。

正寛の魂の裏に沈めた意識で、今更ながらに、思った。人の忠告にも耳を貸さず、こうして意地を張って目をそらし続ける事が、どれだけ格好の悪い事なのか。こうして目の当たりにして改めて思い知る。

——そう、あそこにいるのは、ほんの少し前までの自分なのだ。
……ならば。

正寛の魂を一時的に内に押し込め清士は、煩悶する誠人達の脇をすり抜けて彼らの前に立つ。すらりと聖剣を抜き放ち、剣先を向け、更にそれよりよほど陰吞で冷やかな視線で二人を見下ろした。

「お前たち、そんなにも我に魂を喰われないか？」

光る、白銀。その美しい刃の先を直に向けられて、

「はっ、なっ、お前っ……!？」

誠人の父親は、清士を指差し、引きつった声を上げた。

それを見た清士は、瞳は冷徹な光を宿したまま、片頬だけ持ち上げてニヤリと笑んだ。

「ああ、あいつも言っていた通り、つい先日まで我は大いなる御方にお仕えする御使いの一人であり、こいつらの居た学園を守護していた天使だった——が、訳あって今は墮天使となってしまう訳だ
が。」

「——なっ、あ……、悪魔だど？　そ、そんなものいる訳が……。」「言いながら、彼は胸のあたりを探り、首にかけた十字架ロザリオを取り出し、掲げて見せ、

「いやっ、たっ、例えいたとしても、これがある限り、襲ってはこ

れまい!？」

乾いた笑い声を上げた。――が、残念ながらそれは、清士の失笑を買っただけで終わった。

「大いなる御方を信じると言いながら、本心では信じていない……。あの方は、己を信じぬ者、従わぬ者には酷く冷徹な御方だ。お前達の様な中途半端な信者に加護など与えるはずもない。お前達の薄汚れた魂、天の神の御許に召されるには適さぬが、我の最初の餌食には最適だ。お前たちが我に喰われたところで、神は何も思うまいよ。」

彼は、舌舐めずりして見せながら言う。

「さあ、どちらから先に我の糧になりたい？」

「……ひっ、」

――と、

「おいこら、何勝手なことやってやがる。」

完全に腰を抜かし、息を飲んだ二人の前に立ち、清士との間に晃希が割って入る。

「人を守る神の僕である狛犬のお前に人の魂なんぞ喰わせるわけないだろう。」

聖剣の前に、丸腰のまま立ちはだかり、晃希は言った。

しかし、その表情に、先程の化け物と対峙した時の様な緊張感は見受けられない。ただ、肩を竦め、

「――確かにこないだまでお前が仕えていた神の方は頓着しないだろうがな、うちの神様方はそうはいかないぜ？」

と、竜姫や久遠、そして今は優花の魂を宿した稲穂を見て言った。

「まあ、信じない者、心や魂の薄汚れた人間に特別な加護を与える事はないが。だからといって、罪なき人間を見殺しにするような真似はしない。――その代わり、神の意に沿わぬ振る舞いをして勘気を被れば、何代にも渡って祟られるがな。」

「当然だ。ボク達、神や妖の類ってのは、人がいなければ存在できないんだからね。むやみに人に手出しをするような輩を黙って見逃

すわけにはいかない。……でも、神様業だって、慈善事業な訳じゃないからね。それに、ボくらにだって感情はあるんだ。存在を否定されれば悲しいし、侮辱されれば怒りもする。」

久遠が応える。

「——だから……、お前が人の魂を喰らおうと言うのなら、ボくら

は黙って見過ごすわけにはいかない。だが——。」

と、すぐるような目を晃希に向ける誠人の両親をチラリと見やり、

「我らの存在を否定し、また、我が主への態度や行いを見るに、彼らに我らの加護など要らんだろう。わざわざ、かばってやる義理もないしな。」

と、冷たく言っただけだ。

「なっ……！」

ざっと、血の気の引いて行く音が聞こえそうな程に、彼らの顔から赤みが消え、青を通り越し、腐った粥のような白っぽい色へと変わっていく。

何せ、ここに居る者達の強さは、ついさっき目の当たりにしたばかりだ。どんなに信じたなくとも、こればかりは、辺りに生々しく残る戦いの跡——なぎ倒された木々が、それを許さない——全てが、夢なのだと思いこまない限りは——……だが、それすらも、誠人に殴られた頬の痛みが、これが現実なのだと言っていて——。

彼らに与えられた選択肢は、もう、事実を認めるか、認めず記憶操作を受けるかしかなくて。

「——っ、くっ、わっ、分かった。し、仕方ない。み、認めてやろう。だがっ、いいかっ、決して余計な事をそこらへ吹聴するんじゃないぞ！ いいな！？」

渋面を浮かべつつも、彼は叫んだ。

その瞬間、誠人はホッと胸をなでおろし、晃希も安堵のため息をついた。清士は冷めた目で一瞥をくると、再び身体を正寛へと明け渡してやった。久遠は、竜姫を見上げ、彼女はパッと笑みを浮かべた。

「よしっ、決まりだね。なら、邪魔者はさっさと退散することにするよ。明日また、来るから。」

おかみさんも、満足げな笑みを浮かべ、

「さあっ、杉内さん、よろしくたのむよ。」

と、彼の背を叩いた。そして、もう一度、優花たちを振り返り、

「――約束するよ。あんた達の娘は、アタシが責任もって育てる。安心して、……ゆっくり休むといい。」

瞳を潤ませながらも、おかみさんは最高の笑顔で言った。

「ありがとう。――よろしく、お願いします。」

それに応え、優花は、心からの笑みを浮かべて言った。

互いに、小さく頷き合った後、おかみさんは杉内さんと連れ立って、彼女らに背を向けて、山を降りて行った。

「父さん、母さん、僕らも行こう。……とりあえず、道場に。まだ、稲穂様に言いつけられたやりかけの仕事が残ってるんだ。暇なら手伝ってよ。」

悔しげな表情を浮かべる己の両親に、誠人が声をかける。

「ありがとう、分かってくれて。――良かったよ、実の親に記憶操作なんかかけずにすんだからね。ほら、行くよ。小言やなんかも向こうで聞くからさ。」

精神的ショックから、動きの鈍い親たちを連れて、誠人もその場を後にする。

「――あ、じゃあ俺も……。」

しかし、そう言っただけで彼の後に続こうとした晃希は、

「あっ、待って。」

と、竜姫に腕を掴まれ、その場へ留まる事になり、結果、その場には、竜姫と晃希、久遠、そして優花が憑いた稲穂と、正寛が憑いた清士とが残った。

「お願い、ここに居て。」

竜姫は、真剣な面持ちで、晃希に言った。

その様子を見ていた優花がクスリと笑う。その後ろで、正寛も、

清士では決してありえないような柔和な微笑みを浮かべている。

おもむろに、優花は二人に歩み寄り、両の腕で、二人を包み込むように抱きしめた。妖艶で豊満な稲穂の身体と、二人の身体とが必然的に密着する。竜姫も晃希も、思わず顔を赤らめながら、

「お、お母さん、何？」

「え、えとっ、あの！？」

と、慌てた声を上げる。――が、母の表情を見上げた竜姫は、なつかしい母の抱擁に静かに身を任せ、顔を伏せた。

「竜姫。」

優花は、娘の耳元へ囁きかける。

「人生を、思いつきり楽しみなさい。」

そして、

「貴方もね、晃希君。」

と、肩を震わせる娘に、何も言わず胸を貸していた少年に囁いた。

「ありがとう、娘を――そして私達を援けてくれて。本当に、感謝するわ。」

腕の力を緩め、二人を解放し、優花は言いながら、晃希の頭を撫でた。

「娘を、よろしくね？」

優花は微笑み、晃希の背を押した。――正寛の、方へ。

晃希は、彼の前に押し出される形で立ち、彼の姿を見上げた。――本来ならば、自分と同じか僅かに低い位の背丈であったはずの正寛だが、清士の身体に憑いている今は、自分の方が見上げねばならなかった。

表情こそ、柔和な微笑みを浮かべているのだが。――きっと、こういうシチュエーションでの義父と義息子むすこの対面というのは、どの時代でも世界でも、そうは変わらないものなのだろう。化け物との戦いで感じたものとはまるで別物の緊張感が、二人の間の空気を冷やしていく。

だが、彼らにとって、これは最初で最後の機会なのだ。辺りの空

気に吞まれ、台無しにすれば、もう取り返しのつかない場面^{シーン}。

「俺の名は、晃希。この社の狒犬として、竜姫に仕える身ではありませんが、——お願いです。俺に、彼女を——、竜姫をください。」
静かな山の中に、響いた言葉。

晃希は、意を決し、その場に跪いた。その後ろで、竜姫が再び顔を真っ赤に染めていた。その二人の姿を、優花は嬉しそうに微笑みながら見守る。

「——そうだね、普通の父親ならば……、娘が外人……どこか人外と結ばれたいなどと言ったなら、血相変えて大反対するところなのだろうね、きっと。どんなに立派で素敵な相手であろうと、娘を奪って行く男だ、ぶん殴ってやりたいって思うのが、世の一般的な父親だからね。」

正寛は、落ち着きのある、優しげな声音で、

「だが、私の娘も、どうやら人間、と呼ぶには少々語弊のある存在になってしまった。そもそもが、私の妻こそが、一般的な人間とは一線を画していた女性だったからね。——実際、口説くのはかなり苦労したんだ。そんな彼女との間に出来た娘だ、今さら何があっても驚きはしないが……。流石に、事が事だ。余程信頼のおける男でなければ、娘は預けられない。」

しかし、そうきっぱりと言ったのけた。

「君が、娘を本当に想ってくれている事は、さっきから見ている良く分かった。実際、随分世話になっているようだし、優花も言っていた通り、私たち自身、君に援けられた。——だが、今のままの君では、まだ、安心して娘を預ける事はできない。」

——と、そう。

別れ、そして――。

晃希は、愕然と正寛を見上げた。――無論、あっさりOKが出るなどとは思ってはいなかったが……。それこそ、一発殴られるくらい事は覚悟していたのだが。……まさか、こうもはっきりNOが突きつけられるとは思わなかった。

傷ついた瞳を伏せ、きつく手を握りしめる晃希に、正寛は、

「私は、見ていたよ。あの、化け物の中で……君の、闘いを。本来なら手こずるはずのないような妖一匹相手に追い詰められていたのを――。」

そう、静かに、諭すように言う。

「でもっ、お父さん、それはっ。ここ三日、立て続けにイレギュラーな闘いがあったからで……。晃希一人のせいじゃないっ――、」
竜姫が、悔しげに俯く晃希を庇うように言うのを、しかし晃希は、
「……竜姫、いい。」

と、遮った。

「――確かに俺が甘かったんだ。例えどんな事情があろうと、ああも毎度毎度ピンチに陥るなんて、俺の戦略ミス以外の何物でもない。」

だが、正寛は、

「いいや、私が言っているのはそんな事じゃない。」

そう言って、晃希の瞳のその奥までしっかりと捕まえる――そんな強い視線で彼を見た。

「どうも君は、辛い事も、苦しい事も皆、自分一人で背負いこんで、それを周りには悟らせない様に振る舞う癖があるようだからね。それも、事が重大になればなるほど、周囲に助けを求めたがらなくなる……。違ukai?」

正寛の問いに、晃希は首を左右に振る。

「君の事情は、この、彼が教えてくれたよ。……今まで、辛かった

ろう？」

正寛は徐に、晃希へ手を伸ばし、まるで自分の息子であるかのようになんてわしゃと遠慮なく髪を乱させながら、彼の頭を撫でた。

「それでも君は、自分や、過去の罪から逃げずにそれと向き合う事を選択した。それはとても勇気ある、素晴らしい選択だ。だが、それは今まで以上に辛く、苦しい道でもあるだろう。」

晃希は、もう一度首を左右に振った。

「いえ、それは、当然の罰ですから。」

「確かに、それはそうかも知れない。でもね、それを全部一人で背負おうとするのは、違う。」

正寛は言った。

「君は、この社の狎犬になったんだろう？ と、いうことは、竜姫達の部下ってことだ。いいかい？ 部下の不始末ってのは、上司の責任だ。例えばそれが、過去のものであってもね。君がこの社の一員になったのなら、君の罪は、皆で購うべきものだ。無論、稲穂様達もそれを承知で君を受け入れたはずだ。」

後ろで、優花が微笑み、頷いた。

「そうね。貴方も、聞いたでしょう？ 稲穂様だって、昔は手のつけられない暴れん坊の女番長だったんだから。当然、辺りの村人の恨みつらみも沢山買っていたのよ？ 当時の家のご先祖様も、多喜様も、それを承知でうちの社に彼女を迎え入れたの。」

トクン、と、晃希の胸の奥で音がした。

そう、そうだ。竜姫に聞いた話。そもそものが、多喜だって、人々に害を為していた時期が、確かにあったのだ。

「でも今は、もう、家には欠かせない、大切な神様の一人よ。」

——……焦るな、晃希。大丈夫だ、お前は一人じゃない。

よみがえ
甦る、稲穂の言葉。

「そう、君はもう一人じゃない。君がどんなに重い罪を背負っているのだとしても、皆で分け合えば、随分とそれは軽くなるはずだ。

……でもね。」

正寛は、晃希の反応に頷きながら言葉を継ぐ。

「君はもう、充分過ぎる程に分かっているだろうけど、神も、万能な存在じゃない。君の心の中を、——君の考えている事を、言葉なしに全てを悟るなんてことは不可能だ。」

晃希は、無言のまま頷いた。

「チームプレーに、何より大事なのはコミュニケーションだ。互いを分かり合えなければ、力を合わせるなんて不可能だからね。——分かるだろう？」

晃希は、頷く。この人が、何を言いたいのか、分かった気がして。

「君たちの行く道は、酷く辛く、険しいものだ。——今のままではきつと、お互い、相手の為の力になるどころか、かえって負担になってしまいうだろう。それではこの先、いつかきつと、やっていけなくなる時が来る。だから、今のままでは、娘を君に預ける訳にはいかない。」

晃希は、伏せていた目を上げ、正寛と視線を重ね合わせた。

「——すいません。もう一度、やり直させて下さい。」

そう言って、晃希はくるりと後ろを向く。晃希は、背後に佇んでいた竜姫の手を取り、正寛の前へ立つ。

「お願いです。俺と竜姫が共に、これからの生涯を歩んでいく事をお許してください。」

ぺこりと頭を下げ、晃希は言った。竜姫は、顔を再び赤らめながらも、

「お願い、お父さん。私には晃希が必要なの。」

晃希に倣い、頭を下げた。

そんな二人を、正寛は暖かな笑みを浮かべながら見下ろして、

「うん。」

満足げにうなずいた。

「分かっているよ。彼以外に、竜姫を預けられる男ひとなんかいないだろうって事はね。……だからこそ、彼の悪い癖だけは、どうしても直して貰わなきゃならなかった。」

人の良い笑みを浮かべながら話す、正寛の顔が、一瞬、揺らいで視えた。

「……っ！ お父……さん？」

ハッとして、竜姫が後ろを振り返ると、

「……残念。そろそろタイムリミットみたい。」

苦笑を浮かべる優花の姿も、徐々に薄らぎ、それに反比例するように、稲穂の気配が強まっていく。

「お母さんっ！」

「本当に、晃希君には感謝しなくちゃね。こうして、最後に竜姫ともう一度会って、話をする事ができて……、本当に良かった。」

「ああ。これで、安心して逝ける。」

「お父さんっ！」

「くれぐれも、娘をよろしく頼むよ、晃希君。」

最期に、そう言ってほほ笑み、正寛の顔が、完全にかき消え、清士の顔へと戻る。

「ふふっ、竜姫、いい男捕まえたじゃない。さすが私の娘よね。――

――仲良く、幸せにね。」

竜姫の耳元で囁き、

「じゃあね。」

軽く、――とても最後とは思えない程にあっさりと言って、優花もまた、消えていく。

「あっ、」

思わず手を伸ばす――その手を、優花は優しく握りしめながら――正寛の後を追う様に、旅立って行った。

「……逝ったか。これで、安らかに眠れるだろう。」

優花に身体を貸していた稲穂が、ポツリと呟いた。同じく、正寛に身体を貸していた清士は、何故かそっぽを向いたまま、渋い表情をしている。

「……さすが竜姫の御両親だな。」

わっ、と泣き崩れた竜姫に、晃希は静かに語りかけた。

「さて。これでさしあたっての懸案事項は全て片付いた。今夜は御馳走だ。ぱあっと飲んで食って騒いで、宴を楽しもう。」

わあわあと大泣きする竜姫の肩をポンと軽く叩き、稲穂が豪快に笑う。

「さて。アタシらは準備をしに行こう。ほれ、久遠、行くぞ。ああ、晃希。お前は責任もって、竜姫を泣き止ませてから来いよ。」

少し、意地の悪げな笑みを楽しそうに浮かべて、稲穂は久遠の首根っこを掴み、スタスタと、道場への最短距離である道なき道を軽い足取りで登って行く。

「おい、清士。お前も来い。」

呼ばれた清士は、翼を広げ、空へと舞い上がる。

後には、ただ、晃希と竜姫のみ。完全な静けさを取り戻した山中で、二人きりで――。

紅い絆で結ばれて

今日もまた、山の向こうへ消えていく、赤く燃えたぎる太陽が、黄昏時を告げる。

ここ何日か、こうして彼と夕日を眺める日が続いた。彼と出会ってからのはんの数日の間に、目まぐるしく動いた運命。まさに、激動の日々だった。

もう数年はあの学園で、久遠と二人、クラウド被害に悩みながらの生活が続くんだと、そう思っていたのに。

慣れ親しんだ、この町で。稲穂と久遠と、清士と。そして、晃希と。この先も、ずっと。暮らしていける事になった。

辛い時も、こうして、よりかかれる相手を見つけることが、できた。

ずっとずっと、気がかりだった両親も、安らかな眠りにつく事ができた。これでもう、どんな大雨が降ろうが、頭痛に悩まされる事は二度とないだろう。

「――落ち着いたか？」

眩しい程の赤に染まる景色の中、晃希の紅い瞳が、泣き腫らして赤くなった竜姫の目に映り込んだ。

「うん。……ありがとう、つきあってくれて。」

「そんなのは、いいさ。……悪いな、肩でも貸してやれば良かったんだが……。これじゃあ、なあ……。」

血の付いたボロボロの服をつまんで言う。

「それと……。もう一つ、謝らなくちゃな。俺、今朝お前に偉そうに『自分の体調自覚してるのか』なんて言ったのにさ。俺の方が分かってなかった――。」

正確に言えば、晃希は、自分の状況を把握していなかった訳ではない。ただ、自分の力量を見誤ったという事。

「もし、あの時。清土が気まぐれ起こしてなかったら、取り返しのつかない事になるところだった……。」

そして、その状況を、誰にも明かさず、一人自分の胸の中に仕舞い込んだ。

「ごめん。」

考えようによつては、竜姫達を信用していなかったとも取れる。

「私だって、晃希の強さに頼り過ぎてた。キツそうなの、分かったのに……、止めなかった。」

血に染まった服の上から、晃希の肩に触れる。

「だって、そうだよ。まだ、これから始まるんだもん。まだ、初めて会ってからやっと一週間なんだよ？　それで、何もかも分かり合おうなんて無理だよ。」

竜姫は言った。

「時間はたっぷりあるんだもん。焦らずに、さ。一緒に、ゆっくり……お互い知っていけばいいと思わない？」

目元の涙を拭いながら笑う。

「……そうだな。」

笑顔が、眩しくて。晃希は目を細めながらそう答えた。

「それにしても、運命なんて分からないものよね……。あの日、アイツが騒ぎを起こさなきゃ、私があの礼拝堂に足を踏み入れる事なんてなかったかもしれない。当然、晃希の封印なんて解く機会も無く、会う事も無かった……。」

「そりゃ困る。それじゃ俺は今でもまだ——この先もずっと——あそこで地獄より酷い状況に置かれたままで……。狂いそうになりながら、もがき苦しむだけ……。はっ、冗談でもゴメンだよ、そんなの。でも……まあ、確かに因果だな。アイツさえいなきゃ、俺はこんな風になる事は無かったかも知れない。でも……、代わりに竜姫に出会う事はなくて……、勿論力になるなんて不可能だった。」

服が土で汚れるのも構わず、晃希は身を投げ出し、身体を斜面に横たえ、暁の空を見上げた。空へ手を伸ばし、宙を拳の中につかみ

取る。

「多喜様にも竜姫の両親にもたくさん感謝されたけど……。そういう意味でなら俺は、アイツに感謝しなきゃならないかもな……。ちよつと不本意だけどさ。」

苦笑して見せる晃希の表情を見下ろしながら、竜姫は、

「そうね。でも、本人にそれを伝えようとは、さすがに思えないけど……。」

そう言つて、苦笑を返した。

「だな。」

晃希は、むくりと起き上がり、

「さて、そろそろ行くか？　俺も着替えたいし……。稲穂様達も待ってるだろう。」

言いながら立ち上がり、竜姫に手を差し出す。

「あつ、ごめん……。すぐ、新しい服出してあげるから……。」

ついでに、風呂も沸かそう。シャワーでも浴びて、暖まって、サッパリしよう。晃希の手を取り、立ち上がるのを手伝ってもらいながら、竜姫は思った。

夕日が、次第に夕闇に染まる中、連れ立って歩きながら。

あれこれ、考えを巡らせる。ご飯を食べて、布団を敷いて――。

「あつ、どうしよう。今日は伯母さん達もいるんだった！」

はたと思いついて、竜姫はしまったとばかりに手で額を押さえた――。

「ほれ、鹿肉は捌けたぞ。そっちはどうだ？」

血抜きまでしっかり施された、綺麗なピンク色をした肉を山盛りを持った皿を、片手で軽々支える稲穂が、誠人に声をかけた。

誠人の腰まであった、木の実やキノコ、山菜で築かれた山。それを、細々と仕分け、食べられる状態にまで下処理を施す。

その量を見ると、気の遠くなりそうな作業ではあったが、さっ

きまでと比べて人手が増えた分、山はだいぶ低くなっていた。

「もうすぐ、終わります！」

誠人は答えた。

「よし。じゃあそろそろ鍋を火にかけようか。姫ももう戻ってくる頃だろうしな。久遠、鍋に水汲んでこい。」

言われて、久遠が部屋を出て行く。

「ふむ。手も空いたし。アタシも手伝おう。」

誠人の隣に腰をおろし、稲穂が言った。

「――どうだい、弁解は上手くいったかい？」

その目の前で、ビクリと身体を強張らせた敏子達の表情を見て、

「……あまり上手くはいつてないようだね。」

小さく、ため息をついた。

「一応、こういう事になった経緯を、説明していたところなんですけど……。」

天使にさらわれ、ほとんど無理矢理に連れてこられた。そして、そこで思い知った現実。

「俺も、こうして巻き込まれてなければ、今もああやって竜姫ちゃんを困らせてたかもしれない。……そう考えると……ちよつと複雑な気分だけど。」

少し、苦笑をにじませながら、

「俺、明日には学園に帰ります。竜姫ちゃんの養子話に、俺は必要ないだろうし、これでも一応生徒会長なんで。テスト週間中にこれ以上学校を離れてるわけにはいきませんから。」

そう言った。

「……そうだ、お前、突然いなくなった事になってるんじゃないか？ 大丈夫なのか、いきなり戻っても？」

「それについては……、後で晃希に相談してみようかと。竜姫ちゃんの時みたいは、俺の件も何とか出来ないかどうか……。」

少し、皆の記憶を混乱させられればそれでいい。後は、自分で何とかする。

「それに、竜姫ちゃんも。こっちへ戻るにしても、手続きやなんかの都合で、一度は学園へ足を運ばなきゃならない。その辺の手回し役も必要でしょう？」

誠人は笑った。

「そうか。ならいいが。ああ、そうだ。これを……。」

稲穂は、懷から紅いお守り袋を取り出し、誠人へ差し出した。

「敏子らののは、晃希の術による一時的なものだからね、問題ないが……。お前のは完全に血が覚醒しちまつてる——それも、霊視能力だけが。そうになると、視えるだけで、霊なるものを退ける力のないお前は、悪霊やなんかの格好の餌食だ。だからこれを四六時中、肌身離さず持っとけ。これは、アタシらの神力を直接封じ込めた、特別製の守り袋だ。下手な連中は寄り付くことすらかなわん。」

「あ、ありがとうございます……。」

「それと、休み毎にちよくちよくおいで。雑魚位は自分で祓えるように特訓してやる。」

「へ!？」

「確かに血は薄れちゃいるがね、覚醒したならそれも不可能じゃない。」

その言葉に一瞬ひるんだ誠人だったが、さっき感じた、視えているだけで、何もできない歯がゆい自分を思い出し、

「——本当に？」

そう、問い返した。

「まあ、竜姫のはちよつと特殊だからね、ああはいかないが……。でもまあ、自衛位はかなうだろう。」

稲穂は答えた。

「なら、試験が終わったら、また来ます。正月の準備とかもあるんでしょう? 手伝いに来ます。」

「そうか、それは助かるよ。」

そう言って笑う稲穂に、誠人も笑みを返した。

はたと、久遠は困った表情を浮かべた。

稲穂に言われて出て来たまでにはいいが、四足で歩く自分に、どうやって鍋を運べと言うのか。鍋のありかは知っている。水場の場所ももちろん知ってる。

久遠は、九尾の狐。つまり、妖狐。妖狐の十八番と言えば、変化の術だろう。木の葉を頭に掛けて、どろん。人型に変化すればいいだけの話。

だが。久遠はまだ子狐。簡単そうに見えるが、あれで、齢を重ねたベテランのみが操れる、熟練の技なのだ。特に、人型に化けるにはかなりのレベルを要する。当然、久遠にはまだまだかなわぬ技なのだ。と、するならば。

「どうしよう……。」

と、背後の茂みから、ガサガサと不意に音した。はっとして振り返る。

「！ お前、どうしてこんな所に？」

道場への道すがら、はぐれたきり何処かへ姿を消していた、清士の姿がそこにあった。

「まあいい。ちよっと、手伝え。」

少々、気は進まないが、久遠はそう清士に命じた。子狐とはいえ、久遠はれっきとしたこの社の神。狛犬の枷に縛られた清士は、従わざるを得ない。

「鍋に水を汲むんだ。ついてこい。」

そう言って、先に歩きだした久遠の後に清士が続く。

命令こそ絶対だが、文句を言う位なら許されている。当然、不平の一つや二つあるものと思われたが、以外にも素直に従う清士を、久遠は不思議そうに振り返る。

「何だ、どうした？ どうもさっきかららしくないな。まあ、ボクとしてはありがたいけど……。」

だが、後からその反動が一気に来るなどという事態はお断りだ。

「何かあったなら言ってみろ。……まあ、強制はしないが……。」「久遠の申し出に、清士はフイッとそっぽを向いた。

特に何か返答を期待したわけでもないのだが、晃希、竜姫に次いで、因縁の深い相手のその態度に、何か面白くないものを感じる。

家の物置へと清士を案内し、棚の奥へしまいこまれた大きな土鍋を清士に持たせ、台所へ移動する。鍋一杯に水を汲むと、かなりの重量になるそれは、人外の力を持つ清士だからこそ涼しい顔で持ち歩ける代物で。

「姐さんてば、何だってボクに言いつけたんだ？」

人間が、一人で持つには重たすぎる鍋だが、大の男二人がかりでなら、問題なく運べる程度の重さ。……誠人達をよこせばよかったのに。

と、そこへ、

「久遠？ 何やってるの？」

後ろから、竜姫の声が彼の名を呼んだ。

「あ、竜姫。ちょっと鍋を取りに……。竜姫こそ、どうしたの？」

皆は道場の方にいるよ？ 行かないの？」

「うん、行くよ。でもその前に、晃希の着替えを出してあげなくちゃ……。ほら、このままじゃあんまりでしょ？ ついでにお風呂も沸かしてシャワーでも浴びたいなあ、って。」

言われて彼女の後ろを見てみれば、まださっきの血まみれの服を着たままの晃希がいる。

「すぐ行くから。先に行つてて？」

「ああ、うん。分かった。姐さんにも伝えとくよ。」

久遠は、裏口の扉を開け、言った。

「清士、行くぞ。」

清士は無言のままその後が続く。一度、チラリとこちらを振り返りしかし、すぐさま前へ向きなおり、久遠の後を追って行く。

「？」

何か、物言いたげな顔をしていたようにも思えたが――。

晃希と竜姫は互いに顔を見合わせた。

「なんか、さっきからおかしいわよね、清士。」

「さあな。妙な気まぐれ起こして自分でも面喰ってるんじゃないか？」

首をかしげながらも、そう片付け、

「まあいいさ。今はさっさと着替えて行こうぜ。あんまり皆を待たせ過ぎても悪いしさ。」

「あ、じゃあ先にお風呂入っちゃってくれる？ その間に私、着替え出しとくから。」

「ああ、じゃあそうするよ。頼むな。」

と、風呂場へ消える晃希の背を見送りながら、竜姫は今晚の寝床についてまだ思案していた。

「どうしよう。伯母さん達はお父さんたちの寝室……、誠人君には私の部屋を使ってもらうとしても……。」

自分と、晃希の寝床をどこにしようか。そんな事を考えながら、両親の寝部屋へ入る。タンスを開け、着替えを物色しながら――。

ほんの数歩。道場への道を歩きながら、夕闇に染まりゆく空を見上げ、清士は渋い表情を浮かべた。

頭に浮かぶのは、あの平和そうな顔をした男の顔。竜姫の父親だという、人間の残した言葉が、耳に残って離れない。晃希とのやり取りをする一方で、身体を貸していた自分だけに向けられた、彼の言葉。

「君にも、感謝しているよ――。」

初めて、かけられた感謝の言葉。そして――。

「あの子たちに課せられた運命は、あの子たちだけで立ち向かうには酷過ぎるものだ。きつと、君の持つ力は、あの子たちにとって貴重な助けになるだろう。」

一時的なものとはいえ、身体を共有したからこそ、清士の心と同調した正寛の心。

「晃希君が必死に隠した、彼の状態を唯一見抜いたのは君だ。そして、その彼を救ったのも、君だ。そして、こうして私に身体を貸してくれている。君は、間違いなく天使だ。」

その彼がくれた、清士が一番欲しかった言葉。

それが、どれだけ嬉しかったか。たかが人間――。そう思ってきた存在から贈られたその言葉に、清士は報いたいと、その時本気で思った。

けれど、いざとなると、どうしたらいいのか分からなくて。何となく気恥かしくて。一人になりたかった。

だから、鍋だけおいたら、どこかその辺をうろつくつもりで、清士は鍋を抱えて道場の敷居を跨いだのだが。

「姐さん、鍋を持って来たよ。」

久遠が稲穂に声をかけ、竜姫からの伝言を伝えた。

「そうか。……ふむ。こちらの準備は全て済んだし、後は主賓が来るのを待つばかりなんだが……。」

と、考え込む風を装った稲穂の視線が、清士を射抜いた。

「姫がくるまでちよいと暇だな。よし、清士。お前、なんか余興でもやって見せろ。」

「ええ??」

その台詞に、驚いた声を上げたのは久遠だった。清士も、不満げな表情を浮かべている。しかし稲穂は、

「文句は聞かん。命令だ、やれ。」

と、言い切った。

「ね、姐さん、それはいくらなんでも横暴ってもんじゃ……、」

あまりに理不尽な台詞に、流石の久遠もこれには少し同情するように言った。が、命令とあっては、清士に逆らう術はない。

「うるさい。いいから、歌って踊れ。」

――歌え、と言われても。自分が歌える歌など、一つしかない。清士は、仕方なく口を開き、『神』を讀える歌を諳んじる。あの、天

の玉座に流れる、賛美の歌を。

無論、本職の彼らには及ばないが、それでも、天使の歌う本物の讃美歌だ。余興、というには少々場違いだが、その歌声は、それまでだんまりを決め込んでいた敏子たちをも惹き付ける何かがあった。

明日には、もう、視えなくなるのだと聞いた。敏子は、ホッとする一方で、複雑な思いを抱いていた。視えないという事で、優花に感じていたコンプレックス。

視えない自分が悪いのではなく、存在しないものを視えるつもりになって喜んでいる妹こそがおかしいのだと、ずっとそう思っていたのに。

「視えないのは、多喜様の加護が薄れてきていたせいで、お前のせいじゃない。」

と、稲穂は言った。

「だが、視えないからというだけで、全てを否定し、優花や竜姫を傷つけてきたことは、お前の罪だ。」

自分と同じく、視えない世界を信じてきたはずの息子は、いとも容易くこの世界を受け入れた。

一方で、自分以上にこんな世界とは無縁で生きてきた旦那の方は、未だショックから抜け出せないでいる。目の前の光景を必死になっ
て見ないふりを通している。

それはそれで、滑稽に見えた。

旦那と、息子とを交互に見比べ、敏子はため息をついた。今、息子たちから見れば、自分は旦那と大差なく見えるのだろう。

敏子は、もう一度、深いため息をつき、旦那を放って息子の方へと歩みよった――。

「ん、この声は……清士か？　これは……讃美歌だな。それも、天

の玉座で謳われる……天使だけが謳う事を許された曲だ。」

シャワーを浴び、サッパリした晃希の元まで、その歌声は届いていた。血を洗い流し、土埃の付いた髪もザツとすすいで小奇麗になった身体をタオルで拭いながら呟く。

「晃希、入るよ？　——これ、着替え、ここに置くから。ごめん、またお父さんの服なんだけど……。」

と、脱衣所の扉が開き、竜姫が顔をのぞかせた。

「って、わっ、ごめん。もう出てたの？」

バスタオルで身体の大凡は覆われているものの、ほとんど真っ裸みたいな晃希の姿に、竜姫は慌てて扉を閉めた。そろそろと、ほんの僅かに扉を開け、腕だけ差し入れ、着替えを渡す。

「いや、いいけどさ。」

渡された袴をササっと身につけ、脱衣所を出る。扉の前で、真っ赤な顔をしている竜姫を見、苦笑を浮かべる。

「行こうぜ。」

明かりを消し、薄闇に染まった部屋の中。

「これ。清士が歌ってるの？」

その歌声に気付いた竜姫が尋ねた。

「ああ。あいつ……俺の血を入れたくせに、堕ちてない……。あいつは、今もまだ天使のままだ。」

清士は、ミカエルの餞別だと信じ切っていたようだが。この歌を、未だに忘れず歌えているという事は……。

「さて、お空の上のおえら方は一体何を企んでいるやら……。」

晃希は、小さく呟いた。

「にしても、何もなくアイツが一人で謳おうなんて思うはずもない。行こうぜ、ありゃたぶん稲穂様の意向だ。とっとと行かねーと、余計なとばっちりを食いそうだ。」

晃希は、竜姫の手を取り歩き出す。

自然に、繋がれた手。風呂あがりでほかほか暖かい、晃希の手の温もり。竜姫の心の奥で、何かが疼いた――。

「すいません、遅くなりました。」

晃希は、軽く頭を下げ、道場の敷居を跨いだ。後ろに続いた竜姫も、
「ごめん、待った？」

と、稲穂たちに声をかける。久遠は、心底ホッとした表情を浮かべ、
こちらを見た。

「ふむ。これで主寶も揃ったな。では、始めるか。よし、清士。歌
はもういい。晃希、その樽を持ってこい。今日の為に貢がせた、と
つときの上級品だ。旨いぞ。」

折りたたみ式の長机に、グラスを並べながら、稲穂が言った。

「ああ、姫と誠人は未成年だからな、そっちのリングジュースで我
慢しろ。」

「あ、俺もそっちでいいです……。」

晃希が言う。

「ん？ ああ、お前……？」

成程、見た目は未成年だが。

「お前は別に未成年じゃないだろ。というか、そもそも人間じゃない
いだろが。三百年も生きてきて、酒も呑めないのか？」

「い、いえ、呑めなくはないですが……、今は、ちょっと。」

チラリと竜姫を盗み見ながら、晃希が応えた。その、晃希の視線に、
彼の意図を察した誠人は感心した。

「何だ、折角の高級酒だぞ？　せめて乾杯の一杯くらいは呑め。」

しかし、稲穂はそう言って強引に晃希の盃に並々と酒を注いだ。

「ほれ、清士、お前も。」

「――我は、人間の食物など食さぬ……。」

「なんだ、付き合い悪いな。乾杯くらい付き合えよ。」

と、こちらにも強引に酒を注ぐ。

「敏子、お前酒は強かったろ？　遠慮しないでどんどん呑め。さあ、
行くぞ。晃希、お前音頭をとれ。」

さすがは女番長、こういう仕切りは十八番だ。稲穂の勢いに圧され、晃希は酒を注がれた盃を持ちあげ、口を開く。

「あー、えっと。か、乾杯！」

「かんぱーい！」

竜姫から、誠人から、久遠から、声が返る。

「おら、お前らも入れ。」

稲穂にせつつかれ、

「か、乾杯……。」

と、敏子達からも声が返り、

「T o a s t（乾杯）！」

清士のグラスが、竜姫達のグラスに触れ、カラン、と音を奏でる。

「さあ、遠慮なく飲んで、食べる。」

稲穂は、楽しそうに笑いながら言った。手にした盃を、グイッと一気にあおり、鍋の肉に箸を伸ばす。

「うん。よく煮えてて旨いぞ。ほら、姫。皿を貸しな。盛ってやろう。」

と、ネギやらキノコやらと一緒に、肉の柔らかさそうなところを選んで盛ってやる。

「晃希、どうだ？ 酒の味は。」

「俺の故郷じゃ、葡萄酒が主流だったから、こういう酒は初めて飲んだんで……、どう、と言われても……。でも、美味しいです。」

「……、不味くはない。」

チビチビ舐めるように呑みながら、清士が応える。

「――これは、確かになかなかの美酒だ。」

ポツリと呟いたのは、誠人の父。

この状況について、見ざる・聞かざる・言わざるを貫いてきた彼だったが、酒好きの彼の舌が、だんまりを決め込むことを拒否させる程に、その酒は美味かった。

「だろう？ ついでにアタシらの祝福付きだ。ご利益あるぞ？ ほら、もっと呑め。」

と、グラスに並々お代りを注ぐ。

そうして、徹底的にホスト役に徹する稲穂を見て、

「なんか……、稲穂様のテンションさっきからおかしくないか？」

と、晃希が竜姫の耳元で囁いた。

「嬉しいんだよ。」

が、その問いに答えたのは、竜姫ではなく久遠だった。

「半年前のあの日から、ずっと、意識だけの多喜様とたった二人だけで、社を守っていたのは、姐さんだから。優花様達も無事見送れたし、竜姫も無事ここへ落ち付ける事になった。同居人も増えて賑やかになる。……それが、嬉しいんだよ。」

狐の手で器用に盃を持ち、酒を楽しみながら、久遠は言った。

「僕も、嬉しい。……少し、癪だけど。」

箸の扱いに悪戦苦闘する晃希の口に、肉を運ぶ竜姫をチラリと見上げながら。

「——確かに。こうもあからさまだと、どこからつつこめばいいのか迷うよ。」

誠人が、久遠に同調して頷いた。

「さつき、稲穂様に言われてさ。冬休み、俺もここで修行することになったんだけどさ。その前に、晃希に頼みがあるんだけど。」

「頼み？」

聞き返してきた晃希に、誠人は件の懸念を切り出した。

「で、ちよつと協力して欲しいんだけど……。」

「ああ、そう言う事なら分かった。明日の朝までには薬を用意しておこう。」

と、晃希は頷いた。

「これで、貸し借りはチャラだからな。」

「え？」

「何だ、忘れたのか？ お前が言ったんだろ、貸し一つだって。」

晃希は、呆れたように誠人の腕を取った。

「ええ？」

——まさか、しっかり覚えているとは思わなかった。あの時点で、すでに貸しどころか借りがあったような物なのに。あの後聞いた話を思えば、貸しだなんてとんでもない。晃希の方こそ貸し三つ分はあるだろうに。随分と、律儀な奴だ。

「でも、大丈夫なの？　晃希。」

竜姫が、心配げに尋ねた。

「ん、ああ。清士から血と魔力を幾らかいただいたからな。そんならいなら大丈夫だろ。……まあ、補給できるならそれに越したことはないが。」

少し、悪戯っぽく晃希が応える。

「え、え!？」

と、靦面に慌てる誠人を見て、晃希は腹を抱えて笑う。

「馬鹿、冗談に決まってるだろ？　緊急事態でもないのに、そう何度も男の血なんか吸ってたまるか。」

いつの間にか注ぎ足されていた酒を、クイツと飲み干し、

「また変な客が襲ってきたりしなけりやどうって事はないよ。」

と、若干竜姫から視線を逸らしたまま言った。

「ふむ。まあ確かに今のままでも問題はないだろうが……。血なぞ吸わずとも、我が兄の——悪魔の力を完全に取り込んだ今のお前なら、他にも回復の手立てはあるだろう？」

後ろから、清士が余計なひと言をはさむ。

「「え?」」

すかさず、二つの声が問い返した。

「あつ、馬鹿っ!」

晃希が、珍しく慌てて止めようとするも、清士は顔色一つ変えず、シレつと答える。

「悪魔が、契約の際に望むものなど、相場は決まってるだろう？」

——ああ、魂の事ではないぞ?」

悪魔が、魂以外に求める報酬。それは——。

「ちよつとした回復なら、最後まで済ませずとも、接吻のみで十分

かなうはずだろう。」

両手で顔を覆う晃希を、竜姫が振り返る。

「――ああ、かなうさ。でもな、そうホイホイ気軽に出来るもんじやないだろ。」

そう、洩る晃希に、

「何だ、今さら。いいじゃないか、酔った勢いって事にしたって。」
と、いつの間にか盃から一升瓶に持ち替えて、すっかり出来上がった稲穂が声をかける。

「……うん、そうだねえ。酒のせいにするのはどうかと思うけど、でも、確かに今さらじゃない？　さんざん見せつけてくれてたくせに。」

誠人がうなずく。

「なっ、」

と、反論しようとした久遠は、稲穂に踏みつぶされ、言葉を封じられてしまう。肝心の、竜姫はと言えは。

少し、顔を赤らめてはいるものの、嫌がる素振りは微塵もない。むしろ、何か期待するような視線が刺さる。晃希は、堪らなくなつて道場の外へと逃走を図った。

「ああ、ちとからかいすぎたか？　まあいい、そのうち戻ってくるだろう。どうだ、誠人、清士、食ってるか？」

「はい、美味しいです。」

「……不味くは、ない。」

「そうか、肉はまだたくさんあるからな。どんどん食え。」

賑やかな宴は、続く。

その、壁一枚隔てた外で。すっかり暗くなり、冷え切った空気の中、晃希は高ぶった気持ちを落ち着けようと深呼吸を試みる。

「――人の気も知らないで……。」

何の為に、酒を控えようとしたのか。これでは分からないではない

か……。

「……晃希？」

と、不意に背後から聞こえた竜姫の声に、ビクツと飛び上って驚いた。

「えっ、わっ、わわっ、た、竜姫!？」

どくどくと高鳴る心臓。

「どうしてここに!？」

果たして、これは本当に、ただ驚いたせいなのか。晃希は、自分でも分からなかった。

「どうしてって、晃希が連れて来たんじゃない。」

竜姫は、しっかと繋がれた手に視線を落として言った。見れば、成程、確かに。

「何、何で今さらそんなに慌ててるのよ。」

訝しげに、竜姫が尋ねる。今まで、さんざん迫ってきたくせに。

「だって、さ。キスって、そう言う事の為の行為じゃないだろ?」

晃希は、情けない表情を見せ、言った。

「吸血行為は、ホントにその為だけのものだけど。キスは、違うだろ? もっと、大切にすべき事だろ? ……あんな風に乗せられてするのは、違う気がして……。」

「――私が、それでもいいって言っても?」

「え?」

「そんな風に、大切に思ってくれるのは、凄く嬉しいよ。でも、私はそんな細かいこと気にするより、もっと自分に素直になってくれたほうが嬉しいんだけど?」

何度も何度も迫られて。火照った気持ち。

「私は、晃希とキスがしたい。」

闇の中に光る、紅い瞳を真っ直ぐ見上げて、竜姫は言った。

「――キスだけで、済む保証はないぞ?」

晃希は、釘をさすように言った。

「それでも、いい。」

真っ直ぐに向けられる、その視線が愛しくて。返った返事に、晃希の心が一気に高ぶる。

「――待ったは聞かぬぞ。」

しっかりと、柔らかな竜姫の身体を抱きしめ、晃希は言った。頬に、手を滑らせ、顎に指をかける。

肌に触れる、晃希の指先。肌にかかる、晃希の吐息。全身に感じる、晃希の温もり。真っ暗やみの中、紅い瞳が迫る。

竜姫は、静かに目を閉じた。

そっと、唇が触れあい――、互いの温もりを感じ合う――。全てを委ね、全てを預けられて。

壁の向こうの喧騒さえ、静まり返るまで、二人は時を忘れ、いつまでもいつまでも、そこでそうしていた――。

絆、行き着く先は――。

「ただいま！」

パタパタと、ランドセルのフタを弾ませて、山道を駆けて来た少女が、玄関の引き戸を賑やかに開け、よく通る声で言った。

「こらっ、溜羽るう！ 扉は静かに開けなさいっていつも言ってるですよ！」

「あ、お母さん！ ねえ見て、国語のテストで百点とったの！」
薄茶色の瞳を輝かせながら、少女は、ランドセルからシワだらけの答案用紙を取り出し、母親に差し出した。

「溜羽、百点は偉いけど、答案用紙をこんなにしちゃダメじゃない。」

と、渋い顔をする母親に、少女は、

「ねえ、約束通り百点取ったんだから、今度の五月の連休は、誠人おじちゃん達と遊園地へ遊びに行ってもいいでしょう？」

「……仕方ないわねえ、美姫みぎちゃんや竜希君りゅうきと仲良くするのよ？」
「うん！」

少女は、嬉しそうに笑った。

「おかえり、溜羽。その様子じゃ母さんのお許しが出たんだな？」
再び玄関の扉が開き、豊作祈願の神事に使った道具を入れた段ボールを抱えた、紅い瞳の少年が、声をかけた。

「あ、お父さん！ ただいまっ！」

十も歳の違わないような相手を、少女は躊躇いもなく父と呼び、嬉しそうに答案を見せる。

「えへへっ、ちよつと、稲穂様にも見せてくる！」

言うが早いか、ランドセルを放り出し、山へと駆けて行く。

「あっ、こらっ、待ちなさい溜羽！ カバンくらい片してから行きなさい！」

慌てて母親が叫ぶが、当の少女はまるで聞いてはいない。

「もう、元気なのは良いんだけど、もうちょっと落ち着きつてものを覚えてくれないかしら……。あんな調子で、誠人君に迷惑かけなきゃいいんだけど。」

ため息をつく彼女に、

「ははっ、俺たちが忙しかった分、瑠羽の遊び相手をしてたのは清士だからな……。ある意味、当然の結果つつうか、行きつくところに行き着いたっていうか……。ま、しょっちゅうブチ切れちゃあ棒きれ振り回すようにならなかっただけ良いじゃないか、なあ竜姫。」

晃希は苦笑を返した。

「こんな俺でも、親父扱いしてくれるんだ。我が娘ながら、実に良く出来た子だよなあ。」

――あれから、二十年の時間が過ぎた。

人間の身体を持つ竜姫は、二十年分歳をとり、今年で三十三になる。子も出来た。もうじき、十歳になる、小学三年生の娘。

しかし、吸血鬼の身体を持つ晃希は、あの日から歳を取ることなく、あの日と同じ姿でここにある。

それでも、瑠羽は。晃希の血を受け継ぎ、ダンピールとして生まれてきた娘は、自分が何者であるのか理解し、自分の両親がどういう存在なのかも知っている。

無論、まだ難しい事情等は知らないが。それでも、多喜の望んだとおり、強い霊能力を有し、生まれてきた。

「そーいや、こないだ誠人が言ってたんだけどさ、あいつの息子……、竜希って言ったっけ？ あいつ、霊視能力があるんじゃないかって。――アイツめ、絶対あのがきを瑠羽とくっつけようと目論んでやるぜ？ くそ、あんなちんちくりんのがきにうちの可愛い瑠羽をやってたまるか！」

「……もう、晃希ってば。」

また始まった、と、竜姫は呆れたように笑う。

「分かってるでしょ？ ……瑠羽はダンピールよ。すべての事情を理解した上で付き合ってくれる相手は、そういない。嫉妬するのは構わないけど、あの子の恋路の邪魔だけはしないであげてよね？」

「分かってるさ……でもなあ、こう、複雑な気分が……、だなあ。」
渋い表情をする晃希に、

「ねえ、ところで晃希。今日、お医者さんに行って来たんだけど。」

「え？ いつの間に？ 言ってくれば車出したのに。それに医者って……、どうか具合でも悪かったのか？ 悪い、全然気付けなかった……。」

「ううん、ちょっとこないだから吐き気が治まらなかったからね、ちよっと診て貰いに行ってたの。そしたらね？」

竜姫は、幸せそうな笑みを浮かべた。

「――二人目、出来ちゃったみたい……。」

「――。」

ガコン、と。音がして。晃希は荷物を取り落とした。

「ええええええ！！？？」

――その叫びは、辺り一帯に響き渡ったという。

絆の、行き着く先は――。（後書き）

長々お付き合いくださり、ありがとうございました。

私の力不足により、ラスト、少々グダグダした感じがぬぐえないのですが……。

それでも、ここまで読み進めてくださったあなた。

本当にありがとうございます。

願わくば、ご感想など頂けましたら、うれしいです。さらに、ランキングタグをポチっとクリックしていただけたら、尚うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7211f/>

緋色の絆

2010年10月10日13時25分発行